VIRINA REKONSTRUO

女性改造

三月號

1923

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年三月一日發行大正十二年二月十五日印刷納本

第二卷第三號

良品廉價

ハリキン石鹸



ヒナも都も
おしなべて
ハリキン石鹸が
大評判になつて居ります。
品質が純良で値が廉く文化生活にピッタリ適合したものとして喜ばれて居ります。其上何處の土地、如何なる水に用つても泡立よく何とも云へぬよき心地がします。ハリキン石鹸を愛用する御家庭は皆さん御丈夫に常に元氣と和樂があふれて居ます。

五日間用石鹸進呈
ハリキン石鹸本舗 ハリキン化粧品株式會社 東京日本橋區馬喰町四丁目
良品廉價を以て好評なるハリキン石鹸五日間用下記へ御送附を乞ふ
氏名
住所
一枚ニ付一個

此ノ處ヲ切リ取リ二錢封入御送リ下サイ

文學博士　瀧精一著

文人畫概論

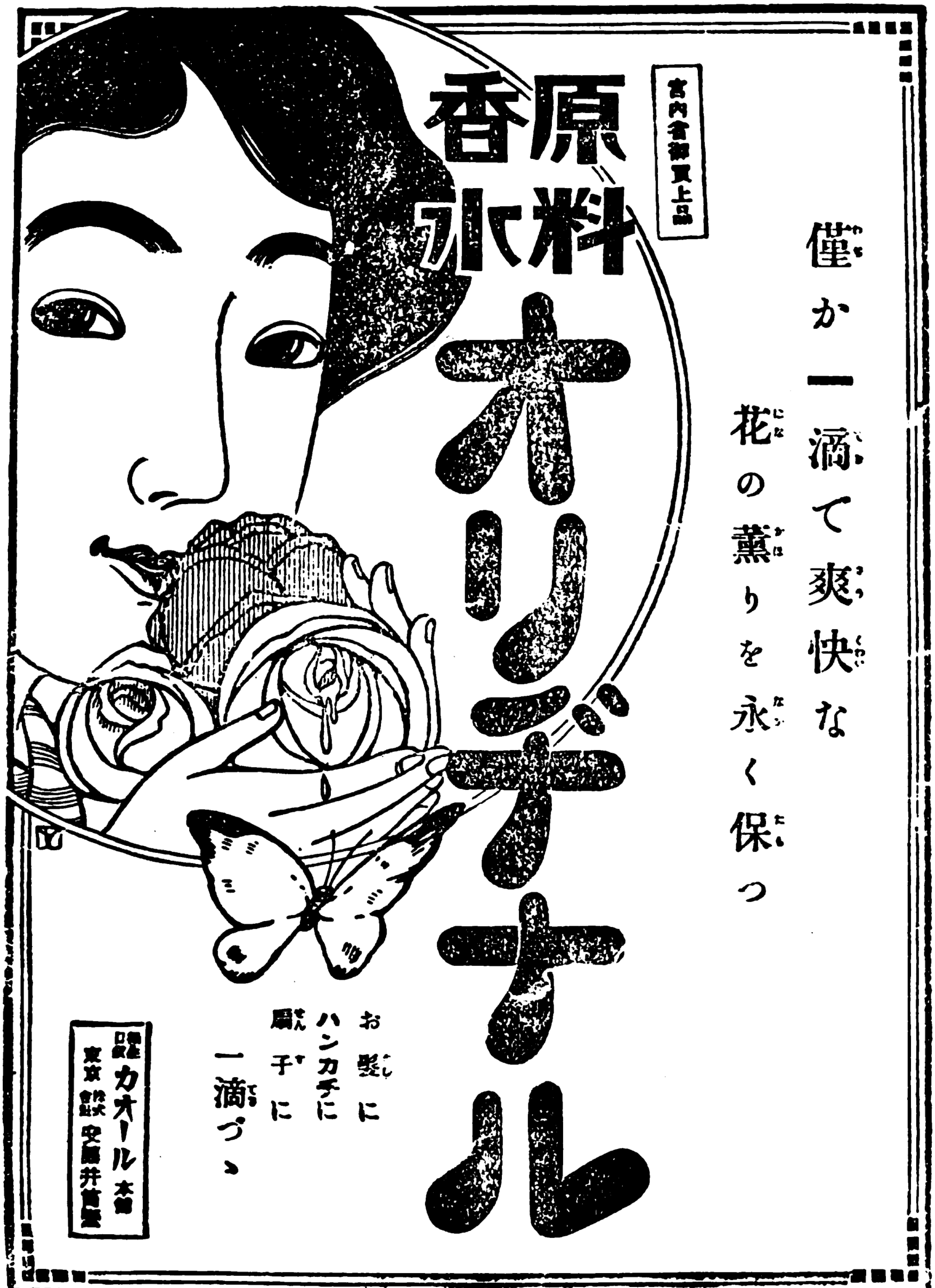
定價二圓　送料拾七錢　挿畫拾五葉　菊判上製

第六版

文人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一書だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陥を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、本書は實にその講演を基礎として(一)文人畫の起源(二)文人畫の流派化(三)文人畫の原理(四)文人畫と南畫(五)文人畫の精華(六)將來の文人畫を說いたものだ、挿畫も麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々が必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。



女性改造 三月號目次


宮内省御買上品
原料香水
オリザオール
僅か一滴で爽快な
花の薫りを永く保つ
お髪に
ハンカチに
扇子に
一滴づゝ
カオール本舗
東京 株式会社 安藤井筒堂



羊飼の女（ルノアル筆）

賀川豊彦著

空中征服

定價金貳圓貳拾錢

送料十七錢
四六判上製

忽二十版

著者自筆の八十二葉の繪入小説

機械文明、煙突文明を呪へる賀川大阪市長の大阪征伐の小説を見よ。滑稽で頤を解くべく、賀川氏自筆の畫賛は腹をかかへて笑はしむ。ユトピアにして現實であり、小説にして眞實がある。　とにかく一風變つた諷刺小説。

「死線」と對照して讀んで下さい、肩のこらぬ極めて輕く讀める小説ですが、讀後に必らず何等かの暗示と何等かの心臓の鼓動が迫つて參ります。

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二



卑しむべきものに就いて

倉田百三

六、或る種の贅澤に就いて

常識が普通に贅澤と呼ぶところのものにも種々の差別がある。贅澤とは一般の人よりもより豐富な物質的消費をさすのであるならば、それは種類の如何を問はず、社會主義的見地からの不公平、或ひは基督教的立場からの愛の不足に歸せしめる事が出來ると云ふ點に於て一種の罪惡である。併しそれはその事自身に於ては惡なる動機を含むでゐるものではない。しばらく個人的、心理的立脚地より考へて見れば、我々が自分の生活の欲望を出來得る限り解放追求せむとする時、その要件たる物質を出來る限り多く必要として來る事は自然である。殊に我々の精神生活を盛り、又生かす材料として物質を要求し

て來る事は當然である。我々の生活欲望の規模が大であり、精神生活の豐富さと洗錬さとの度が大であればある丈け、それを盛り、生かすための材料は豐富であり、且つ洗錬されたものである事を要する。此の意味に於て若し或る個人が一般の人よりも生活欲望の規模が大であり、その精神生活が豐富で且つ洗錬されてゐるならば、卽ちその人の人格が衆にすぐれてゐるならば、一般の人よりもより多くの物質の消費を必要としてくるのは當然である。此の意味の贅澤と雖も社會主義的或ひは基督教的立場からの批判を免れる事は出來ない。けれどもそれはそれ自身に於ては、卽ち他との關係以外に於ては、惡しきものではなく、まして卑しむべきものではない。寧ろ地上の我々の生活があまりに物質的に束縛せられたるものである事を嘆ずべきである。實際此の種の贅澤に於ては、當事者は常に物質的過剩の意識の中に住んで居るどころではなく、寧ろ常に甚だしき物質的缺乏の意識の中に住んで居るのである。しかも一般の人から贅澤として批難される時に彼れは二重の苦痛を感じなければならない。例へば一人の趣味のすぐれた婦人があるとする。彼女がしばらく他との關係及び物質的束縛を度外視して考へる時、自分を美しく飾り度いと願ふのは、それ自身に於て惡しき事でない許りでなく、むしろ願はなければならない事である。故に彼女が自分の個性の美を出來得る限り生かすために必要な衣裳や、裝身具を心に描き、此れを獲たいと願ふのは當然である。自分は此の事は天國に於ても許されなければならない事であると信じる。しかし乍ら實際に彼女が撰ぶ事の出來る範圍は自分が理想とする所の物質的範圍より比較にならぬ程狹く、自分が獲得し得る限界は猶更ら遙かに狹い。かくて彼女は自分の理想に比しては比較にならない程貧弱にして不適當なる衣裳と裝身具とを以て、せめて自分を飾つてゐるのである。彼女の心は不滿と缺乏とに滿ちて居る。然も一般の更らに物質的缺乏を告げて居る人々からは此れを贅澤として批難されるのである。我々は此の場合それがどの點に於て批難に價するかを明瞭に辨別しなければならない。批難に價するのは彼女が自分を飾らむとする欲望ではなく、その爲に必要な物質を獲むとする意志でもなく、彼女の實際に獲たる物質の量と質そのものでもない。それ等はむしろ善であり、當然であり、氣の毒で

ある。批難に價するのは彼女がそれを得る爲になさねばならない他人への愛と奉仕との懈怠、もしくは積極的に他人に負はしむる勞苦にある。卽ち他との關係に於て、惡となるのである。例へば自分が妹を贅澤であると云ふ故を以て批難する時に、彼女はそれが自ら感じて居る意識に對してあまりに相反である爲に、不思議な表情をする。彼女は常に物質的缺乏を感じ、自分が現在飾つて居るところの衣裳や裝身具は自分の趣味に適せざるものであつて、それを身につけて人の中に出る事を、殊に趣味のすぐれた人の前に出る事を恥ぢてゐるのである。それを自分が氣に入つて身につけてゐるのであると思はれる事を、それに依つて自分の趣味を測られる事を堪へ難い苦痛と思つて居るのである。しかも他人からも、兄からも、贅澤であると批難される時、彼女が意外に感じる心理は肯くことが出來る。それは彼女の得てゐる物質の量と質とに依るのでなく、それ丈けの物質さへも他人の勞苦を犧牲にせずしては得られない程我々の生活が物質的に束縛されてゐる處から生じる關係的な不德である。此の意味に於てはそれ自身批難に價する贅澤は物質の量及び質に依るのでなく、如何なる精神を以て、その物質の量と質とを要求するかの點になければならない。その精神が正しい時本質的に批難さるべき贅澤と云ふものは存在しない許りでなく、其處に存在するものは缺乏の意識のみであつて贅澤の意識ではない。此の意味に於ては贅澤と云ふものは何處にも存在しないと云つていゝ。又必ずしも或る精神生活の理想を盛る爲に必要なる物質でなくても、我々の無邪氣なる生活欲望を生かす爲の材料としての物質を如何に豐富に且つ撰擇して求めても、それ自身に於て罪惡ではない。例へば子供がその遊戲に必要な玩具その他の物質を要求するが如く、我々が眞に無邪氣に我々の「試み」や「遊び」をなさむが爲に必要なる物質を求むる事もそれ自身に於ては批難に價しない。バベルの塔を築かむとする試みがもし無邪氣な試みであるならば、それが如何に多くの物質的材料を要求しても、それ自身に於て批難に價しない。常識が一般に贅澤として批難するものゝ中にはかくの如き精神生活を盛る爲の物質的材料及び無邪氣なる生活欲望を生かす爲の物質的材料を豐富に且つ撰擇して獲得使用する事を意味して居るものも多いことを知らなければならない。併し乍ら此

等はそれ自身に於ては善なるもの、我々の生活內容そのものであつて、批難に價しないのであるが、只他との關係に於て經濟的に罪惡となるのである。凡そ經濟的罪惡は凡ゆる罪惡の中にてその他人の不幸を生み出す結果が大であるにも拘はらず、最も本質的に輕きものである。我々は結果の大小を以て罪惡そのもの〻質を計つてはならない。此の種の贅澤は實に同情すべき、少くとも許し易き罪惡である。此の種の贅澤に對して裁く心のあまりに鋭敏である者を自分は寧ろ吝であるとして卑しむ。か〻る人にはそれを裁く原因に嫉妬や、羨望や、其他の贅澤よりも一層低卑なる動機を含むのが常であるからである。併し乍ら贅澤には此の種のもの許りではなく、それ自身に於て批難さるべき贅澤がある。それは批難さるべき精神內容を生かす爲の物質的材料を豐富に且つ撰擇して獲得使用せんとする贅澤である。即ちそれに依つて眞價なきものが自己の價値を他人に印象せしめむとする虛榮心や、下賤にして醜惡なる欲望を滿足せしめんがため、或ひは物質を最もよく生かさんとする意志を缺いだ浪費より生ずる贅澤はそれ自身に批難に價する。此の種の贅澤こそ我々が最も正當に、從つて最も峻嚴に擯斥すべきものである。彼の所謂成金がその自己の功績に依らざる偶然に依つて獲得したる、或ひは落ち込んで來たる富を以て、出來得る限り自己の下賤なる趣味と醜惡なる欲望とを滿足せしめんが爲に、如何にも露骨にあくどく、出來得る限りの物質的材料を使用し且つ物質に伴ふ權力に依つて自己の人格の無價値を掩つて價値あるものの如く無理強ひに印象せしめんとする無智と圖々しさは翠賤すべきである。況して此の種の贅澤には一層本質的な罪惡、即ち他人の人格を物として取り扱ひ、物的價値を以て人格價値を蹂躙する事を伴ふのを常とするに於て猶更である。彼等が傲然と振舞ひ、すべての價値を金に換算する事が出來るかの如くに僭し、如何なる人格も利を以て誘ひ屈伏せしめ得るかの如く思ひ上がるのを見る時、誰れか輕蔑と反感とを感じないでゐられよう。それは彼等の占有する過剩な物質が他の民衆の缺乏の原因となると云ふ經濟的原因のみで批難に價するのではない。それ以上の本質的批難に價する。我々は彼の聖德太子の如き轉輪聖王や、堯舜やダビデの如き明君が如何に壯麗な宮殿の中に住んで居ても、これを本質的には批難しな

いゝロダンやゲーテの如き天才の趣味生活の所謂贅澤は勿論、玄宗や文左衛門の如き帝王らしき豪奢や、長者らしき風流や、更らにクレオパトラや楊貴妃の如き美人らしき驕奢や、更らに下つては俠客や、若旦那や町娘の伊達と粹より生ずる物質的撰り好みや、職人氣質より生ずる凝り性の乙と云ふが如き趣味に對しても、それ等が如何に物質的材料の豐富と撰擇とを要求しても、其處に盛りこまれ、生かされて居るところの精神内容が價値を持つてゐる時には本質的には此れを批難しない。出來得る限りは寛大に、鷹揚に、大目に見のがすこそ一種の高貴の德であつて、反對に吝臭く穿鑿的に詮議立てして、批難する心こそ寧ろ吝であると云はなければならない。けれども其處に何等の精神的價値が生かされないのみならず、下劣な、無作法な欲望が露骨に我々の認識を強制するが如くに現はれて居る贅澤は卑まないわけにゆかない。併し乍ら此れはまだ贅澤の最も賤しむべき種類のものではない。最も卑しむべき贅澤は、それ丈けの大なる規模も抱負もなく、物質的に貧窮であり乍ら、併も心中に於ては成金的贅澤を夢見て居る處の人格的の賤民が、平生は趣味あるものゝ所謂贅澤をも鵜の目して批難してをき乍ら、やゝ裕福となるや、その云ふに足らざる程の自己の裕福振りを他人に示さむ爲に、殊に自分より貧窮なるものにこれを誇らんが爲に爲す處の贅澤である。自分の知つて居る或る小官吏が或る會社に轉職して小金を貯め、やゝ「まはり」がよくなつた時、夫婦揃つて大島の羽織を着て、その羽織の裏を故意にめくつて見せ、又わざと車を連ねて貧しく暮らしてゐる鄕黨の小學教師の家を訪問し、その贅澤振りを見せつけたのを知つて居る。併も一方俥夫の賃金を苛酷に値切るが如きはその卑しさに於て成金の贅澤の比ではない氣がする。豐かならざる者が贅澤をなさんと欲して種々な無理を企て、あせつて居る姿程淺ましいものは少い。斯くの如くならば節約して暮し乍ら、心に餘裕ある者の方が如何に貴いか知れない。人格の品位を維持するに必要なる心の餘裕を保たむための節約は愛のための節約と共に實に貴い。かゝる贅澤者はかゝる節約者のために却つて憐憫せられるのである。かくの如き種類の贅澤者は心中に「美」に對する感覺を持つて居ないものであるが故に、彼等が「美」を求めるがために誤つて贅澤となれる人を批難する資格はな

いと云はなければならない。かくの如き種類の批難者が如何に世間に多いかを知らなければならない。贅澤の批難者が批難さるゝ贅澤者よりその心情に於てより卑しく、彼等の批難は只贅澤をなし得ざるがために生ずるに過ぎない場合が如何に多いかを思はなければならない。他人の贅澤を批難する資格あるものは己れが贅澤をなし得る境遇となつた時に、贅澤を爲さゞるものでなければならない。眞の意味の聖貧の人のみこの資格を持ち得る。しかも聖貧の人は自から貧しく慈し乍ら他人の贅澤を厳しく裁かないのを常とする。その嫉妬や、羨望や、樂欲より淨められたる心は、自ら囚縛せらるゝ惡なくして衆生に對し得るが故に、その凡ゆる多様なる生活の相は觀照と憐愍の對象となつて映じるのである。聖人が帝王や、長者や、女人や在俗の凡ゆる者と愛を以て結縁し得て併も此等から自己の誇りを傷けずして喜捨をうける事が出來たのはその爲めである。自分がかく云ふのは素より贅澤を正しきものとして肯定するのではない。凡ゆる贅澤は盡く罪過である。只その罪過にもそれが罪過である所以をなす原因と、その罪過の重さの度合とは多様である。そしてその原因と重さとの如何に關はらず、これを批難すると云ふ一つの行爲は別の原理に依つて評價されなければならないと云ふのである。

贅澤が卑しむべきものとなる特別の場合はそれが吝嗇と結合して現はれる場合である。贅澤はそれが物質に對する無執着と結合して居る場合には無欲の一つの現はれとして或る無邪氣さ、若しくは淨さをさへ示す事がある。此れに反して物質に對する意識的なる執着と結合して居る場合にはその贅澤を殊に卑しきものとなすものである。例へば一人の貴婦人があつて彼女はその服裝や、調度や、總てそれが自己に屬するもの、就中自己の虚榮心の滿足に役立つものには出來得る限り贅澤であり乍ら、他人に對しては、殊に召使や傭夫や等の身分低き者に對して著るしく物惜しみする場合の如きである。此の二つの相反する贅澤と吝嗇との結合は一つの卑しき心の二つの異なりたる現はれ方にすぎない。所謂贅澤なる人にはかゝる吝嗇なる人か思ひの外多いものである。眞の哲學家は盡く質素な人である。身分不相應な贅澤はそれが他の方面の

否尙と結合し、且つ不釣合な趣味を伴ふて居る時には實に卑しむべきものとなる。自分に相應しき服裝をして居れば、幾分に我々の愛を惹くに價する美くしき女が、只不釣合に贅澤な服裝をしてゐる丈けで、顰蹙せしむるものとなる場合は實に多い。物質は畢竟「こゝろ」を象徴化する手段に過ぎない。その「こゝろ」が美しきものでないならば、如何なる物質も用を爲さないのみならず、それは不釣合としての積極的な一つの醜である。素よりその「こゝろ」の美にも無限の段階がある。藥師寺の吉祥天の服裝の美くしさは、一人の小間使の服裝の美くしさよりも高いと云はなければならない。併し一人の小間使の小間使らしき美を現はせる服裝は、その忠實さと甲斐々々しさと、主人思ひの捧げた愛と、行儀良さとを最も良く現はした服裝は我々の愛を惹く丈けの充分な價を具へて居る。女運轉手や、女曲藝師の服裝でさへも、それがしつくりと釣合つて居る時には我々の愛を惹くに充分である。美はそれ〴〵の階段に於て皆美である。併し令孃らしく見せんとする小間使や、女優らしく見せんとする女曲藝師は我々をして顰蹙せしめずにはをかない。換言すれば物質はそれが「こころ」の役となれる限りに於て、效果を以て生かされたる限りに於て、卽ち精神的の價値の創造に役立ちたる限りに於て本質的には（他との關係以外に於ては）消費者に相應しいと云つていゝ。眞の意味の經濟的公平は各人がその生理的必需を保證されたる上に於て、その物質を生かし得る能力の度に從つて物質を與へられる事である。素より各人が此れを生かし得る最大限度迄物質を與へられる事は（天國に於ては此の事は可能でなければならない。）地上に於ては不可能であるが、その能力に比例して與へられる時、それは公平であつて、リップスも云ふ如く、或る人が或る人より、より多くの物質を與へられてもそれを何人よりも最もよく生かし得てゐる限りは贅澤ではない。素より如何にして、その能力を測るべきかの方法が發見されない限り、一般の制度としてはかゝる標準を用ゐる事は出來ないのであらう。併し我々が他人の物質的使用に對して、是非せんとする時には、此の標準を念頭に置いて評價しなければならない。併し乍らより高き精神的價値を生かすのに必ずしもより多量の物質を要するものではない。キリストの人格の美を生かすには、帝王の服裝は相應しくない。そ

ナ・リザの美を生かすにはサスキヤの服裝は相應しくない。併も前者は後者よりもより高き人格と美とをより乏しき物質的材料を以て生かしたものである。故に我々は出來得る限り少量の物質的材料を以て、出來得る限り高き段階の美を生かす事を理想とすべきである。此れを要するに凡ゆる贅澤は盡く罪過である事を免れないが、その罪過を特に卑しむべきものとなすものは、經濟的原因に非ずして、その贅澤に結合して現はれる他の心情の卑しさである。自分が此處に特に取り扱ふ事を目的としたのは此の種の贅澤である。卽ち虛榮心と僭冐と、無智と、最惡の場合は吝嗇と結合せる贅澤は高貴を願ふものゝ、潔癖を以て排斥しなければならないところのものである。

七、慳吝に就いて

慳吝は贅澤の反對である。人格を卑しくする點に於ては贅澤よりも一層厭ふべきものである。贅澤には積極的意義がある。併し慳吝は生命の價値を創造せんとする積極的な意圖なく、只消極的に働くのみであると云ふ點に於て、徹頭徹尾價値を有せざる不德である。慳吝は總て生命の價値を見出し得る處にその價値を否定せんとする心である。抑々生命はそれ自身積極的或る者である。故に總てのものを、其處に特別な抵抗なき限り、此れを積極的に見んとする事は凡ゆる見方の根本的約束でなければならない。故に我々は一つの人生の事象に對する時、出來得る限りはその中より價値を發見せんと努めなければならない。此れに反して出來る限り價値を否定せんとして、若しくは特に醜を發見せんとして臨むものは慳吝である。我々が白紙の如き何等の先入主なき心を以て對する時は、我々は人間の本能としておのづから積極的な見方をなすものである。見方が消極的であるといふ事はすでに不自然であつて何等かの成心ある證據である。此處に美と醜との混淆せる事象に對する時、我々は出來る限り美を生かし、その醜をも美と觀じ得る最善の努力を拂ふべきである。素よりかく云ふのはその美を不純なるまゝにて看過せよと云ふのではない。その批判はあく迄も峻嚴でなければならない。併し其處にす

毫でも美を逸し、或ひは我々の見方の深さに依つて美と成り得るものをも、醜として捨て去る事は單に我々にとつて損失であるのみならず、何者かに對する罪過である。例へば此處に一つの殺人があつたとする。此の時、それが殺人であるが故に罪惡であると云ふ見方のみをすれば、それは何處迄も罪惡である他はない。併し若しその殺人が決鬪に依るものであつて、彼れがその侮辱者からその純潔なる矜りを傷つけられた爲に、相手を倒したものであるならば、その殺人は假令罪惡である事は免れなくても、其處には自己の矜りを尊重する人格の善を發見する事が出來る。その善に依つてその罪惡を異りたる觀點から眺める事に依つて、その罪惡を幾何かの程度に於て赦し易きもの、神の憐れみを受け得るものとして取りなす事が出來る。凡ゆる罪惡はかゝる見方を以て辯護されなければならない。フランチエスカとポーロの姦淫や、石川五右衛門の偸盗や、ノラの文書僞造や、お七の放火や、此等は其處に善と美とを發見せむとする瞳を以て對する時には、如何に多くの我等の愛を惹き得るものを見出し得るであらうか。否、假令動機に於て善を含まざる過失或ひは罪惡より生じたる行爲と雖も、例へば「復活」や、「新生」の主人公の如き罪過の如きも、其後の淨めと償ひの態度をも合はせ見る時、其處に反つて人格の善を見出し得る場合もある。凡そ我々を感動せしめる人間的なる善と美とは寧ろかくの如き見方に依らずしては發見し得られないものである。天使らしきものの外の善と美とは多少とも罪過を含むでゐないものはないからである。素より我々は天使らしき善と美とを求めなければならない。人間らしき善と美とに對する時、それを天使らしき善と美に依つて測る事は素より必要であるが、其處に、天使らしからざる故のみを以て、善と美とを見出し能はざる事は隘である。かゝる見方こそ天使らしからざるものである。天使は自ら淨くしてしかも他人の罪過を赦し易きものでなければならないからである。他人の罪過を發見する時、出來得る限り此れを苛酷に裁き、黑く塗り立てむとする心は實に卑しむべきである。それはその人が己れもひそかにかゝる罪過を犯し、若しくは偶然犯さずにすむで居るにすぎない場合に於て、猶更らである。多くの場合かゝる隘容は又無恥と結びついて居ると云つていゝ。自分は他人の罪過を裁くに隘容なる

ことを自己の善行の條件とせずにはゐられない一切の善行者を卑しむ。

他人の罪過に就いて過酷なる場合のみならず、他人の名聲や、富貴や、才能や、美貌や總て他人の幸福に對して羨望し嫉妬し甚だしき呪咀する事は又吝である。此れは他人幸福を祝福する事が出來ないと云ふ點に於て吝であるのみならず、他人が幸福なる事に依つて自己の幸福がそれ自身に於て減ぜず、又他人が不幸となる事に依つて自分の幸福がそれ自身に於て増さないにも關らず、只他人の不幸を希望すると云ふ點に於て、全然消極的な吝である。自分が不幸である時に他人の幸福を祝する事が出來ず、他人が幸福である事が自分の損失であるかの如く、甚だしきは罪惡でもあるかの如く考へるのは隘である。自分が病氣である故を以て健康者が舞踊する事を咎め、自分が醜きが故に美人が飾る事を妬むのは吝である。總て他人の幸福を祝福せずして此れに「けちをつけ」やうとする心は卑しむべきである。かゝる隘吝なる人々に依つて醸さるゝ空氣は凡そ美なるもの、強きもの、大なるものの誕生と生長とに適せざるものであつて、その世界は健全なるものをして窒息せしめる。若し高貴を願ふ人格を持つ者が自ら幸福であるならば、前に述べた如くかゝる隘吝なる者に制肘さるゝ事なく、遠慮する事なく勇敢に自我の生長の爲に前進しなければならない。若し不幸であるならば、自分の不幸を勇ましく忍受し、此れを負ひ、その運命を生かす道を工夫しなければならない。かゝる人は他人が自分に對して遠慮する事を却つて悅ばず、憐れみをかけらる事を屑しとせず、況して他人の幸福を羨望し、嫉妬してゐるが如く見なさるゝ事を堪へ難き侮辱と感ずるのを常とする。自分は幸運にあつて同情に負けずして、前進し得る者を尊敬すると共に不運にあつて羨望に打ち克つて自己の誇りを保ち得るものを賞讃する。此の兩者とも人間性の克服である。共に英雄的である。而して後者はその逆境を忍受する點に於て一層同情に價する悲壯である。不幸なるものは羨望し、幸福なる者は遠慮する世界は創造と生長とを阻む隘吝と卑屈との濕地であつて、健全なるもの、公明なるものの住むべき、自由の太陽の照らす天地ではない。或種の思想家や、藝術家の如く、不幸な境遇にあつてその運命を生かさむとする處より生れたる思想や、作品にあらざれば、好意を

持ち得ず、偉大なるものは必ず苦痛と不幸の中より生れなければならないとなすが如きも慳吝と云はなければならない。自分は悲哀と不幸との逆境にあつていかにこの慳吝と闘つて來たであらう。苦痛を通しての幸福のみならず、天來の幸福は更らに價値あり、不幸との闘ひに於ける偉大のみならず、彼の太陽の如く光輝あるそれ自身積極的なる偉大は更に賞讃すべきである。ベートーフエンの音樂と共にモツアールトの音樂は偉大であり、キリストの生活と共に釋迦の生活は偉大である。順境も逆境も幸福も不幸も此れに處し此れを享くる心が高貴であるならば共に價値を持ち、偉大を生み得る。

他人の罪過や、幸福に對してのみならず、凡そ「積極的なるもの。」に對して好意を持たざる心の傾向は總べて慳吝である。祝祭や、儀式や、遊戯や、催しや、總べて人間の生活を豐富に、快活に、悦び多く、生き生きさせる處の一切の積極的なる企てはそれ自身に於いては尊重すべきものであつて、其處に特別の事情なき限りは、此等のものに對して積極的なる衝動を持つのが自然であり、此れを祝福する心を用意してゐなければならない。素より是等のものは他の一層重大なる或ひは急を要するものに對して處を譲らなければならない。併し乍らそれは價値の優先を譲るのではなく、發現の機會の優先を譲るのである。順序上先きにしなければならないものが、必ずしも價値が高いのではない。ましてそれ自身に於て輕んぜらるべき何等の性質を持つてゐるのではない。自分は彼の報徳教や、簡易生活の主張が此の順序の前後の問題以外に此等の積極的なるものそれ自身を排斥せむとする主張を含むでゐるならば、何處迄も此れに反對するものである。例へば婚禮や葬式の儀式を只冗費をはぶかむとする故を以て、出來る丈け簡單にし、或ひは省略するが如きはそれが止むを得ざる事情の下に深き愛情を以て爲さるゝ場合の外、自分は此れに贊成する事の出來ないものである。我々は出來得る限りは目出度く婚姻を祝し、厳かに葬式を送るべきである。我々が花嫁と花婿との交契の記念や、死者の靈魂を葬る爲めの儀式をさへ贅澤として排斥しなければならないとすれば、此の世界は如何に干乾びた慘めなものであらう。かゝる世界は只それ丈けを以て如何に生き甲斐なき、住むに價せぬ世界であるかを證據立てゝゐると云つていゝ。總て催しや、遊戯や、試みはそれぞ

我々の生活の欲望を盛り、生かしてゐるものである限り、それ自身積極的價値を持つてゐる。より高き生命價を有するものが、より高き價値を有するものであつて、それが物理的に或ひは因果的に條件的であるか否かに依つて、その價値を測る事は出來ない。我々は礎を築かずして座敷を造る事は出來ない。故に先づ礎を築かなければならないであらう。併しそれは座敷が礎よりも價値がない事を意味しない。總て實利的なるものは、遊戯的なるものより條件的なものであるけれども、その生命價は後者の方が高いと云はなければならない。總てそれ自身に於て價値あるものと、功利的見方より生ずる價値とは別種の價値である。リップスも云ふ如く、固有價値と利用價値とははつきりと區別されなければならない。苟も固有價値を有するものは如何にその享受の機會乏しく、且つ多くの費用と、深き鍛錬とを要し、遊戯的或ひは裝飾的なるものであつても此れを肯定せむと用意しなければならない。その用意を以つて人生の萬般の事象に對する時と、隘狹なる實用主義の瞳を以て對する時とは、その豐富さと自由さと無邪氣さとに於て如何に大なる懸隔を生ずるであらうか。又他人の動作や感情の現はれ方に對して、その積極的なるものに對する貶黜或ひは不機嫌の感情を持つ傾向は又隘狹である。快活なるものを輕薄と、無邪氣なるものを無作法と、矜恃を傲慢と、勇敢を粗暴と混同して、此等を嫌忌する事は隘狹である。自ら、憂鬱にして愼ましきもの、或ひは謙遜にして物靜かなるものを、その素質と趣味とから愛する事は素より差支へない。只その爲に他人の快活や、無邪氣や、勇敢や、矜恃を肯定する事が出來ないのは隘狹である。廣くして自由なる瞳を以て他人の人格に對する時、其處には實に限りなく多樣なる個性の特色があつて、それがそれ〴〵に美くしく、我々の愛と興味とを惹き、かくて我々の交友は倦む事なき新らしき感興と刺戟とを與へられるのである。そのそれ〴〵の持ち味に觸れる悅びは人生の幸福の最も深くして複雜なるものである。種々の缺點を具へ乍らも、その人格の本質が愛すべきものでありさへすれば、凡ゆる個性が我々の好意を惹き得るのである。或種の惡人が只四角四面にして隘狹なる人物よりも我々の愛を惹き得るのはその爲である。例へば此處に春の庭に翼を擴げたる孔雀があつて、その絢爛たる尾を人の前に誇り示

すが如き所作をなしたとする。其時我々は傲慢にして虚栄的なるものとして、嫌忌と輕蔑の情を以て、顔を反けなければならないであらうか。隘吝なるものは、恐らくかく爲し、或ひはそれを以て反省と教訓との材料となすかも知れない。併し我々は心から見惚れてその舞を美くしと眺めることも出來るのである。又その誇りを無邪氣なるものとして愛とユーモアとを以て受け入れる事も出來るのである。そして我々は後の態度を以て遙かに自然にして公けなるものと觀ずる。凡そ物の見方や考へ方の隘吝であると云ふこと程、人格の尊威を傷つけるものは少い。我々は驕奢であり、放逸であると云はれるよりも隘吝であると云はれる時、人格の矜りの傷つく事を感ずる。強き自我感情の痛みを感ずる。我々は特に隘吝を卑しむ東洋風の教養の傳統の血を受けてゐるものである。我々が英雄や豪傑をその多くの缺點や、罪過にも拘はらず、此れを愛するのはその爲である。凡そ隘吝の卑しむべきものとなる原因はその一切のものに對する消極的なる傾向にある。生命の價値に對して、本能の自由に對して、約言すれば凡そ自我感情の力の意識に關して消極的なる處に存する。卽ち畢竟自己の人格に對する矜りの缺乏に存する。隘吝の最も極端なるものはかの吝嗇である。吝嗇とは凡そ物の消費に對する極端なる消極主義である。物の消費は生命の欲望の解放を意味する。人格の力の發動を意味する。少くともその條件である。故に吝嗇は凡そ生命の欲望の、人格の力の發動に對する消極主義である。それは決して彼の多く利を獲て、是れを蓄積し出來得る限り此れを少しく消費せむと欲する守錢奴の貪欲と同一ではない。守錢奴はその所有を大ならしめる事に依つて、人格の價値を大なるものとして印象せしめむとする誤まれる自我感情より生ずるものである。故に彼等に於ては、その消費を吝むは、多く利を獲むとする事と共に、出來得る限り、所有を增大せむと欲する所より生ずる。此れに反して吝嗇とは徹頭徹尾消極的なるものであつて、それは只自我感情の力の缺乏である。大なる企業と冒險と、競爭とに依つて、多くの財を獲得し、又此れを消費せざらむが爲には如何なる罪惡も鬪爭も敢へて厭はざる守錢奴の勇氣の如きは吝嗇漢に望むべからざるものである。彼等は自己の所有に屬する極めて僅少なる財物を、所謂爪の先きに火をともす如くに、極め

て微蓄づゝ消費して、此れに執着するのみであつて、何等積極的に企つる事なきものである。多く儲けて、多く蓄ふるものゝ反對である。宵越しの金を使はざる江戶兒氣質の反對である。殊に此の吝嗇が快樂主義と結合する時その卑しさは一種特別な光景を呈する。彼等は出來る丈け少しく消費せむと欲するが故に、その享樂の材料となるものは、矮少、低卑、粗惡なものとならざるを得ない。彼等はかゝる材料に未練がましく、戀着し、哀願し、しかも出來る丈けの快樂を搾り出さむとするが故に、殆んど此れを嘗め、啜り、しやぶらむとするが如き陋態を呈する。彼等が人にかくれて、ひそかに耽溺して居る處の小さき陋室をのぞく時、我等は其處に人生と自我とに對する矜りの、爲めに、汚され盡くして居る光景を見るであらう。

八、大食若しくは貪慾に就いて

大食とは總て物的價値を、物的價値として、必要以上に追求する事である。卽ち人格價値を盛り、生かす爲めの手段として以外に、物的價値を追求する事である。人格價値は如何に追求しても追求し過ぎると云ふ事はない。故に人格價値の世界に於いては大食若しくは貪慾と云ふものは存在しない。併し物的價値の世界に於いては、それが人格價値の手段として以上に、そのものとして追求せらるゝ時、大食若しくは貪慾と云ふ一つの罪過が生じるのである。物的價値の基礎をなすものは總ゆる種類の快感である。精神的快感たると、官能的快感たるとを問はず、總て我々が快感を快感として求める事は大食の第一步である。抑々快感は慾求を豫想するものである。快感なるが故に慾求するのではなく、慾求が充足された結果として快感を生ずるのである。故に快感そのものを慾求の對象となす事は本末を顚倒せるものであつて、それは人格價値を目的とせざる行爲であるが故に、その慾求が充足された時我々の人格は毫末も高められないのである。然もそれのみに止まるならば、それはたゞ無意味（ノンセンス）であるに過ぎないが、それは最良の場合に於いても人格を弛緩せしめる。多くの場合

に於いては積極的に人格を破損するのである。大食の最も原本的なるものは官能的快感の過度の追求である。官能的快感は總て我々の生理的必需の充足に必然的に結合して生ずるのみならず、又我々の精神内容の象徴として絶體に必要なる感覺と結合して生ずる。此の種の官能的快感は我々の慾求の對象ではなく、我々の慾求の充足せられた時必然的に伴ふ結果であつて、我々は此れを避ける必要なく又避ける事の出來ないものである。たゞ此の種の官能的快感そのものを意欲の對象として追求する時に大食となるのである。例へば我々の食欲の充足には必然的に味覺の快感が結合する。此の時我々が此の味覺の快感を感じたからと云つて、それは大食ではない。併しその味覺の快感を得むが爲に、食を攝り、生理的必需即ち自然の食欲以上に貪り食ひ、例へば彼の十九世紀末のフランスの或る種の快樂主義者の如く、一度食欲が飽滿すれば吐劑を用ひて人爲的に空腹ならしめてまで美食を貪るが如きは大食の最も典型的なるものである。我々は又我々の精神的欲望、例へば美を表徴せむと欲する時必ず感覺的手段に依らざるを得ない。ゆゑに美が形象となつて現はれた時、その美が我々に與ふる精神的快感は感覺的快感と結合して居る。此の種の感覺的快感をも我々は避ける必要なく又避ける事は出來ない。併しその感覺的快感を目的として我々が美の表徴を求める時、それは大食の第一歩である。味覺の快感を貪らむとする美食や、觸覺の快感を貪らむとする好色や、精神的内容なき色彩、音響、香臭等の刺激を貪らむとする事等は總て此の種に屬する。此等は初めより不自然にして轉倒せる人功的なる意欲であつて、それ自身人格の弛緩を意味するものである。而して此の大食が度を過せば過す丈け、それは我々の人格的欲望を痲痺せしめる。此の種の快樂に耽る者は彼がより高き精神的欲望を缺乏してゐる事の證據として卑しむべきである。彼の散歩や、種々の運動はそれに伴ふ自然の美や、遊戯の天眞等の精神的要素を除去しても、猶それは精神全體を清新にし緊張せしめる意味に於てそれ自身に官能的快感以外の精神的要素を持つてゐる。併し食欲や色欲はそれが生理的必需でない場合は、精神的要素の弛緩若しくは痲痺を意味する。素より食欲や色欲も、それが快感を目的とする場合に於ても、その欲望が遂げら

るゝ迄の過程は食卓や衣裳等の美に依つて裝飾され得る。併しそれはその欲望そのものが、何等かの精神的美を盛り生かしてゐると云ふのとは別事である。或る男が或る女の肩に手を置いた時、それは男の愛と戀慕との精神的要素を盛り生かしてゐる象徵的動作でもあり得る。併し食卓や衣裳の美は只是れに附着してゐるのみであつて、食欲と色欲とは、其れ自身には何等の精神的要素をも生かしてゐるのではない。故にそれが生理的必需である場合は、快感を目的としてゐない欲望の充足として大食ではないけれども、官能的快感を目的として遂げらるゝ時には大食となる。食欲や色欲のみならず、例へば沐浴の場合に於て、我々が淸潔と、爽快との爲に沐浴し、或ひはその陶然たる精神的快感が未だ美感の程度を越えざる限りに於て沐浴する事は大食ではないが、その限りを越えて、特に官能的快感の爲に入湯する時は、大食であつて我々の精神はその爲に弛緩する。彼の快感を求めて故意に長風呂し、又人に肩を打たせ、或ひは按摩せしめて、只管肉體的弛緩の陶醉を味はむとする者を見る時、我々は特別に或る精神的弛緩の卑しむべき感を起さないわけにゆかない。官能的快感の追求を是認するものは、それが何等かの精神的價値を生かして居る場合か、若しくは生理的必需を充たして居るかの二つである。此れ以外の場合に於ける官能的快感の追求或は耽溺はすべて大食である。それは自己の人格の働らきを萎微せしめ、見るものをして卑しき感じを催さしめる。飢ゑて食ふ者、渇して飲む者は卑しき感じを與へない。併しこれは假令卑しむべきものでなくても、精神的要素を含まざるものとして我々に粗野の感じを與ふる事は免れない。故に我々は此の避くべからざる生理的必需を他人の耳目に觸れざる密室に於て充たし、若しくは他の精神的美を以て飾るのである。此れ我々の文化、カルチユアであつて、我々の精神が肉欲を支配してゐることの一つの現はれである。肉欲とは我々の肉體に直屬する精神的要素を含まざる、生理的必需及び官能的快感の欲求である。肉欲が精神を支配して居る時其處には野卑の感じが現はれる。肉欲の追求は如何にそれが生理的必需であつても、粗野の感じを免れないが、それが官能的快感を目的とし、併もその度が著るしい時には、甚だ卑しむべき觀を呈する。我々は彼の飽食暖衣し、快樂を貪つて逸居し、淫欲に

耽けり、精神的要求の稀薄なるものを自ら卑しむ。飢ゑて食ひ、渇して飲み、勞働し、純潔にして肉欲少きものを自ら尊ぶ。生理的必需さへも大なるものよりも、小なるものを尊ぶ傾向を持つて居る。食欲や色欲の強き事は下根なるものとして、我々は彼の仙人や天人を尊ぶのである。蓋し我々が人格の尊嚴を保つ上に於て、何等かの他のものに依屬せざるべからざる事は、その獨立性の薄弱を意味するものであつて、我々は出來得る限り他のものに束縛せられずして自足自立し得る事を人格の力として尊ぶのである。しかるに生理的必需が大である丈け、我々は物に依屬しなければならないからである。官能的快感の追求も亦それが大である丈け、我々は物に束縛されなければならない。生理的必需は我々が避くべからざるものであるが故に、その充足は我々の批難に價しない。けれども官能的快感の追求は、それが精神的内容を生かすための象徴としての用をなす場合の他に於ては、避くべきものであり又避け得るものあるが故に、我々の人格的批難に價する。官能的快感はそれ自身精神的要素を含まざるものであるが故に、その追求は必然的に精神的欲望の減退若しくは抑壓を意味する。多くの場合に於ては、人格價値を積極的に侵害し、蹂躙する。且つ官能的快感は物質の刺激に依つて惹起せらるゝ快感であるが故に、此れを追求する爲には必ず物質を所有若くは使用しなければならない。故にそれは物的價値の尊重となり、利の獲得を必要として來る。利とは物的價値の感情である。此處に於て官能的快感の大食は利の大食、卽ち貪欲とならないではゐられない。併しながら物的價値は我々の官能的快感の追求によつて生ずるばかりでなく、我々の生理的必需の充足及び精神内容を盛り生かすための手段として物質を必要とする所より生ずる。この要件として我々はある程度の利を求めないわけには行かない。この程度に於て利を求むることは決して大食ではない。大食とはその程度を越えて、利を求める事である。卽ち必要の範圍を越えて、利を利として求めることである。抑々物的價値が我々にとつて價値

である所以のものは、それが人格價値を盛るための材料として有用である爲めに過ぎない。我々がこの必要以外の利を求める事は無益であると云ふ許りでなく、それは生命の浪費として生命に對する尊重の念の缺乏を意味し、且つ多くの場合精神をして物質の下屬たらしむる事に依つて、人格の尊厳を傷けるものである。所謂、心を以て形の役となす事は、乃はち人格の物質に對する降服である。凡ゆる種類の貪慾はこれに屬する。それが財貨或は財貨の變態たる金銭に關する貪慾の場合は前述の守錢奴の例である。併し乍ら守錢奴の心理には又或る同情すべき點が含まれて居るかも知れない。彼等は人心の頼むべからざるを感じ、人間の愛に失望する時、如何なる場合に於ても、確實にして頼るべきものは財貨であつて此れを所有して居る限り、他人に對して自己の威厳を保つ事が出來ると思ふかも知れない。何となれば、如何なる場合に於ても、他人が財貨を尊重し、若しくは此れに屈從するが故に、他の如何なるものに依るよりも、確實に財貨の蓄積に依つて、自分の地位を確實にし、他人に對して威力あるものとしての誇りを保持する事が出來ると思へるからである。かくの如くして、彼れが他の如何なる人格價値を追求する事をも捨てゝ、只管財貨の蓄積に傾注するのは或る道理を含むでると云はなければならない。蓋し我々は自己の人格價値を他人の反應に依つて客觀的に具象化して認識せむと欲するが故に、我々が或る人格價値を具へても、必ずしも他人から尊敬と賞讃とを得ずして、却つて侮蔑と嘲笑とを受くる事が尠くないにも拘はらず、富は殆ど例外なく他人に對して威力を持ち得る事を見る時に、自己の人格の價値を後者に依つて確認せむとするに到るには無理からぬ點もあると云はなければならない。少くとも其處には彼をしてかくならしめし責任を我々の人格價値と物的價値との評價の不正確に頒たしめなければならない理由がある。若し人格價値ある處には必ず尊敬があり、物的價値が人格價値に仕へて居る度合に從つてのみ尊重があるならば、彼はかくの如き方法を撰ばなかつたかも知

れないからである。併し乍ら如何に同情すべき點があるとは云へ、それは依然として誤謬である。且つ人格價値を他人の反應に依らずして、自覺に依つて、確認し能はざる點に於て、すでに人格の矜りを缺いで居る。併もその必要以上な財貨を獲得する手段が、自己の人格を傷つける事を條件とし、その蓄積されたる財貨の使用が、自他の人格をして物に服從せしめる事を條件としてゐる點に於て、此の種の貪欲は卑しむべきものである。我々はかの豚を卑しむ。それは彼れが物を撰ばずして大食し、肥え太り、精神の働らきが遲鈍である爲である。財貨を人格價値の爲でなく、財貨なるが故に貪り蓄へむとする衝動は精神的要求の遲鈍もしくは痲痺を意味して居る。その物質的所有に脹れて、蟎の如く此れを使用する道を知らざる者は、遂に自ら鬱血して精神的滅亡を來さずには居られない。

併し乍ら大食には猶一つの特殊なるものがある。それは感情耽溺である。我々の喜怒哀樂等の感情には、その複雜にして多樣なる緊張と弛緩との交錯の間に特殊な快感を伴ふものである。感情耽溺は此の快感を目的として行爲するものである。此の快感は特にそれが「實」の意識を離れて無關心の狀態に於て觀照され得る時には、その快感は微妙な甘さを持つものである。此れは藝術上に於て、美的觀照の基礎を爲すものであつて、それが適當な態度に依つて處理さるゝ時には決して避くべきものではない。併し乍ら我々の實生活に於て、特に對人關係に於て、我々が此の種の快感を目的となす時、其處に必然的に生じ來るものは虛僞の感情とその表出とである。卽ち所謂芝居氣である。芝居に於ては初めより「實」ならざる事の約束の上に、適當なる態度を以て處理されたる此等の感情の表出も、實生活に於ては、それが「實」なる約束の上に立たざるべからざるが故に、總て虛僞となつて來る。卽ち怒る眞似をし、悲しむ眞似をし、愛する眞似をするのである。此等が純粹に自分一個の感情の享樂にのみ始終する時には、他人に害惡を與へないけれども、猶自己の生活の眞實なる生

長を妨げるものとして、その害は決して少くない。我々がかゝる感情の享樂に耽溺する習慣に陷る時、それは他人との面倒なる接觸を要せず、又他人に依つて毀たるゝ危險なきが故に、我々はその安逸なる空想の巣の中に生きるやうになる。而して自分が眞實にそれらの感情を起してゐるのか若しくは起してゐる眞似をして居るのかを辯別する能力も、甚だしきは意志も持たないやうになつて來る。例へば自分は人類を愛してゐると思つて興奮して涙ぐむ。併し一人の隣人をでも實行的意志を持つて愛してゐるのではない。自分はいざとなれば自殺すると思ふ。併し指一本切る勇氣はないのである。只さう思つて其處に生じて來る感情を享樂してゐるのにすぎない。その感情が「眞」であるか否かは反省しない。かくの如き狀態が自我の人格の生長にとつて有害である事は云ふ迄もない。自我の生長は自我の理想を設定し、自己が現實に於て實有して居るものと然らざるものとを嚴重に吟味し、此の理想を實有せむとして努力する事に依つて、初めて遂げられるのであるからである。感情耽溺の習慣程自我の生長を妨害するものは尠い。更らに此の耽溺が對人關係に於て爲さるゝ時には、その害は更らに甚だしい。此の場合に於ては、他人も同樣に感情耽溺家であるならば、それは幸福な場合には、一つの痴態にすぎないけれども、不幸な場合には、卽ち運命の威力が二人の上に落下した時には、其の痴態は忽ち現實の悲慘となつて報いられずには置かない。殊に相手の感情が眞實であつた場合に於ては、其の人は虛僞を以て他人を欺むき、此れを害うたのである。何等の害惡を他人に與へざる場合に於ても、芝居氣を以て他人に對して怒つて見せ、泣いて見せ戲れて見せる事はその人の人格の尊威を傷けずにはをかない。それは虛言であり僞善である。若しくは僞惡である。他人に對して惡意を持つてゐるものではないが、他人の運命を恐れざる點に於て罪惡である。その目的が官能的快感或ひは利でない點に於て、精神的傾向を具へてはゐるが、猶その目的が精神そのものにあらずして、精神作用に伴ふところの快感に

ある點に於て、又一種の大食である事を免れない。凡そ必要以上に感情の表出の過多なる事はそれ自身に高貴の德に反するものである。我々は東洋風の、若しくはストイック風の、內に充ちる感情を出來得る限り少しの象徴に依つて表出する事を、高貴の德に適ふものとして尊ぶものである。『表情澤山』と云ふ事はその感情が眞實である場合に於てもエーデルなものではない。まして虛僞なる感情を芝居氣を以て過剩に表出し、怒つて見せ、泣いて見せ、甘へて見せる事は卑しむべきである。總ての思はせ振りは此の意味に於て斥けられなければならない。殊に男女關係に於て、此の種の感情耽溺は最もしばしば行はれ、享樂の手段となり、卑しむべき大食となり易きものである。彼の遊戲戀愛と遊蕩と或る種の變態性慾とは此れである。遊戲戀愛に於ては、自他の運命を恐れず、戀愛の眞似事をして、其處に生ずる感情の快感を享樂するのであるが、それが運命の打擊に依つて、現實の悲慘に陷る時は、哀れむ可き痴態であるが、自己の運命は充分に守りつゝ、相手の運命に對しては、無關心に此の種の享樂に耽ける者は拔け目なき悧巧者として更らに卑しむ可きである。此の種の「決して損をしないところの快樂主義者」に對しては自分は特別に輕蔑を感ずるものである。更らに此の種の悧巧者同志の間に於て、互に運命の傷つかないやうに用心し乍ら、絕體に安全な雰圍氣の中に於て、凡ゆる芝居氣の、思はせ振りなる愛撫と嬌媚との祕術を盡くして、此の感情耽溺を享樂せむとする遊戲戀愛は最も卑しむべきである。次に遊蕩の心理も亦遊戲戀愛の一種であるが、只此れに肉欲の大食の結合したるものである。遊蕩兒は決して只肉欲のみを求めるものではない。それは女の色香、その醸し出す匂はしき空氣、その感情の甘さと潤ひ等の精神的要素に結合するところの快感を求めるのである。此の意味に於て蕩兒は彼の肉欲を求めて他を求めざる貪婪にして動物的なる好色家よりも、同情すべき者である。彼等の或者には優さしき、人情に富みたる、愛に感じ易き、涙脆き性格の者も尠くない。只彼等は柔軟であつて戰鬪を欲

き、若しくは磊落であつて愼重を缺いで居るのである。彼等の或者は可成り洗練されたる、而も精神的趣味を以て女を撰び、又卑しからざる態度を以て女に對し、惡意を持たずして愛撫し又保護するのである。素よりそれが遊蕩である於點にての卑しさを免れる事は不可能であるが、彼等の「遊」びに於ては其處に「粋」と「侠氣」と「鷹揚」等の尊ぶべきものと、「野暮」と「意氣地なし」と「隘吝」等の卑しむべきものとを可成り鋭敏な神經を以て感別する所謂垢拔けのした趣味が支配して居ることも事實である。此の「好き嫌ひ」は高貴を願ふ心の一種の現はれである。或る蕩兒は或る四角四面なる人よりも其他の點に於ては高貴な人格の持主である事もあり得る。女性の美と、其の特殊な感情の柔らかさとに愛を感ずる事は高貴の心と反するものではない。只特に此れを觀照せむとする欲望が、其他の倫理的なる意識を壓倒して追求さるゝ處に其の罪過が生ずるのである。觀照の欲望であるが故に、それは「實」の意識を離れて居る。故に遊戯的とならざるを得ない。只それが人格に對して行はれ、且つ觀照を以て初まり乍ら肉欲の一點に於て實感に落ちる處にその惡と卑しさが生ずる。女の色香や、その優さしき感情を觀照せむと意圖して女に對する事は、既でに人格を物として取扱つて居る惡である。然も此れに對して初めより芝居氣を以て、愛や誠の眞似事をして、相手の此れに對する反應を觀照し、享樂せむとする事は虚僞である。又自己の尊嚴を傷つける。如何に鷹揚にして瀟洒なる趣味を以て、秋の露よりも哀れな女の風情を鑑賞する者と雖も、その態度が既に相手の人格に對する侮辱を含み、且つ肉欲の一點に於ては觀照的態度を離れて醜き實感となるのである。遊蕩は結局感情耽溺と肉欲の大食との結合である。若しその感情が眞似事でなくして、眞實であるならば、假令相手が娼婦であつてもそれは戀愛であつて、遊蕩ではないからである。併も此等は遊蕩の最もよき例であつて、その惡質なるものは「粋」や「意氣地」や「鷹揚」等の道德を缺き女性に對する精神的趣味を持たず、感情耽溺の部分を離れて、只肉欲を貪

らむとする單なる好色に近いものである。好色は何等の精神的要素を含まざる狒々の貪婪であつて、最も卑しむべきものであり、自分は此れを遊蕩と區別する。併し乍ら今日の如き「茶屋」や「廓」の制度は蕩兒をして女の風情や感情の明暗を鑑賞し、「粹」と「意氣地」を尊ぶ道德の發達を困難ならしめて、單なる好色に終らしめるであらう。最後に一種の變態性欲に於ては、その痴態は直接に端的に肉欲と結合してゐるところの感情耽溺である。それは感情耽溺の一種ではあるが、殆ど肉欲の官能的快感を増大せしめむとする手段に過ぎないが故に、その感情耽溺としての精神的要素の最も稀薄なるものである。所謂マゾビスムスとサディスムスとに於てその虐待する事も、虐待される事も畢竟眞似事に過ぎない。彼等は虐めて見せ、泣いて見せてその實感でない處の感情に伴ふ特殊な快感を享樂するのである。それは惡意なき點に於て、殊に默認的合意に依る場合は、單なる痴態に過ぎないが、それが直接に肉欲と結合し、精神の常態を逸したる狂態である點に於て、此れに耽溺するものは凡ゆる大食の中にて最も卑しむべきものと云はなければならない。要するに總べての大食は人格の弛緩若しくは鈍痲より生ずる點に於てその撥を一にする。それは人格の尊威の念が缺乏し、その命令が嚴肅なる響きを以て、精神の全部に行き渡らない處より生ずる。人格の中樞が萎微して末梢が跋扈する處より生ずる。故にそれは感情の耽溺たると、官能的快感の大食たると、利の貪欲たるとを問はず、すべて人格をして物に下屬せしめ、精神をして肉欲に屈從せしめるところの卑しむべきものであつて、どの點に於ても、高貴を願ふものゝ克服しなければならないところのものである。

（つゞく）

卑しむべきものに就いて（二月號の正誤）

正誤表

頁	誤	正
嘘言に就いて		
五頁四行目	病氣を憎悪せしむ	憎惡
五頁終りより八行	病氣が憎悪した	憎惡
六頁三行目	卑しきもの、第一	卑しきものゝ第一
告げ口に就いて		
八頁七行目	棚の上にあげて、置い	上げて置い
八頁十行目	惡口者からとの事なの	その事を
或る種の謙遜に就いて		
九頁三行目	謙遜も亦	謙遜は又
九頁終りより六行目	謙遜にならざる	謙遜ならざる
十頁終りより二行目	元來の謙遜な	元來謙遜な
十一頁三行目	自から	自ら
同	すつきり	はつきり
十一頁四行目	きざであり	きさ

十一頁六行目	高貴德に反する	高貴の德に反する
十二頁三行目	謙謙し	謙遜し
裏切りに就いて		
十二頁後より七行目	自己が責任	自己に
十三頁五行目	刑罪を	刑罰を
同終りより四行目	人倫の關係のその	關係の中その
卑怯に就いて		
十六頁二行目	感傷を重んざる	重んずる
十六頁七行目	傳説と云ふ	傳説に云ふ
同	身延山その	身延山にその
十六頁終りより三行目	惡口に藉る	惡に藉る
同　終りより二行目	犧牲にして	犧牲にし
同　終りの行	關らずさ	關らず
十七頁二行目	官吏の如きも	如き
十七頁三行目	元氣のなき者亦	者も亦
十七頁七行目	正しきのゝで	正しきもので
同　八行目	他人が病氣が病氣なる	他人が病氣なる

かく多大の誤謬のあつたのは全く印刷者の手落ちであつたことを筆者と讀者に謝します（編輯係）

夢を見てゐる女性へ

長谷川如是閑

人間は生活に必要な道具にも、必ず裝飾を加へる。藝術品の初めは、日用品、衣服、武具等實際的生活に必要なものを美化するところから出立してゐる。これは、人間が生活の實際を或る程度まで、生活の享樂のために美化するといふ要求を持つてゐることを示す一例であるが、此の場合に、その裝飾が實用の目的を滅却するに至ると、その物品は當初の生活的の意義を失つて、單なる裝飾品として、全くその實用と違つた目的に專用されることゝなる。云ひ換れば、實用がその物品の目的でなく、美がその目的となる。さうなると、初めは誰れもがその物品を必要としたに反して、或る特別の生活者のみが、その美化した物品の享樂者となる。例へば、斧は凡ての生活者が必要とする道具であつたが、後に出來た黃金の斧は貴族や王樣のみの裝飾物となる。人間は實用の斧を必要とすると同じく、黃金の斧を必要とする。併し、實用の斧が、凡ての人の必要品であるに反し、裝飾の斧は貴族階級だけの必要品である。故に、人間に必然の要求といつても、黃金の斧のやうに、或種の生活者にのみ必然の必要であるといふ事物が、澤山にある譯である。

近代の婦人の要求が、その自覺から出立して居るとは屢々人のいふことであるが、一體自覺とはどういふ意味であるかそれは實用品の斧のやうな、誰れの生活にでも必要のものであるか又は、黃金の斧のやうに、特殊の生活をしてゐるものにだけ必要なものであるか、この問題の分るゝところによつて、婦人の生活の近代的進化が決定されるのである。それが黃金の斧を求むる運動であるならば、それは特殊の生活をしてゐるものだけの要求である。

實際日本の婦人界に、この半世紀以來起つた運動に就いて觀察してみると、その所謂自覺といふものに、どれだけの根

柢があつたか、それが日本の婦人の生活に持ち來した變化は、その影響を受けた婦人達の考へてゐるやうに重大なものであつたかどうか、それは聊か問題なのである。恰度婦人の頭髪が、所謂束髪になりいろ〱の格好のひさし髪になり、耳かくしになり、切髪になり、種々の變化を取り來たが、それが婦人の生活に對して、必ずしも重大の進化ではなかつたやうに、もつと精神的な方面に於ける婦人の生活の變化が、どれだけ人間としての婦人の地位をよりよくしたかを考へて見ねばならない。非常に婦人の地位が向上したと思ふ心理狀態そのものに、一種の錯誤がないであらうか。この事は婦人の心理及び婦人に對する男子の心理を考察してみると、いさゝか見當がつく、今日の婦人でも耳かくしに結つてゐる人々は比較的少数の若い婦人であるが私共はそれに結つてゐる婦人を見ると、唯彼の女が耳かくしに結つて居るといふだけで、その婦人に對して、一種の感じを持つ。昔風の島田髷に結つてゐる娘を見た時と、非常に異つた一種の感じを持つ。恐らくそれに結つて居る婦人自身も又、自分の頭髪を耳かくしに結つたといふことだけで、或る特殊の心理を持つに違ひない。彼女は、島田髷や銀杏返しといふやうな、又は普通の束髪といふやうな頭髪の結び方では、自分を表現することが出來ない、耳かくしといふ新らしい形式に於いて自己が表現されるといふ、滿足を感じてゐるに違ひない。

それを見た男子も、耳かくしと婦人の心理的要求とを結びつけて、それに結つてゐる婦人を、新らしい心理的要求を持つところの女性であると思ふ。其處に耳かくしの意味の全部がある。

ところが、右の心理は、婦人達の實際の生活にとつて、どれだけの根柢をもつてゐるかどうかを考へてみると、それはその婦人及び、その婦人に同感し得る男子に於いて、特に發達した感情生活だけにその根柢を持つものであることが思はれる。この感情生活は、その當の婦人にとつては、殆ど絶對的であつて、彼女がその感情の生活を壓迫されることは、恐らく、食物を減されるよりも苦痛であると、感ずるに違ひない。

頭髪又は、衣裳に於ける自分の好みを壓迫されるといふことが、いかに苦痛であるかは、多くの婦人が、生活の必要物を

飾しても、尙さういふものゝために努力する事情を考へて見れば明である。この心理は、女性にとつてそれ程絶對的であるが、併し、その根據は彼女の、生活の或る方面卽ち殊に彼女に於いて發達した感情の方面であることを拒むわけにゆかない。然らば耳かくしが、その感情の生活の滿足のために絶對的の要求であるといふことを以つて、たゞそれだけで、耳かくしが女性の生活の進化に絶對的條件であると認めることが出來るかどうかといへば、それは出來ない。

其處で女性に於いて殊に發達した、感情の生活は、決して女性そのものにとつても、人間そのものにとつても、輕くみるべきものでないが、併し、その感情の特殊の發達は、畢竟、それ自身では成り立たない所の享樂的性質のものであることを知らねばならない。その感情生活に於いて、婦人が非常にデリケートな發達を遂げるといふことは、婦人らしい傾向として彼女自身並びに男子によつて、希望されてゐることであるが、さればといつてその意味に於いてのみ、婦人の生活を考へなと、凡そ婦人の生活の向上とは、束髮が耳かくしにまで進化するやうなことを意味するものとなるのである。

近代に於ける日本の婦人の生活は、確かにこの意味に於いて進化した。

それが向上であるならば向上した。一言でいへば、婦人の享樂生活の要求は着々として滿されつゝある。敎育、學藝等が、婦人の間に、普及されたことは、著しいものである。從つて、婦人の生活の或る方面、例へば、知識に對する要求、藝術に對する理解、文化享樂の可能性等が一般に婦人の間に進んで來た。婦人の、言語、態度、趣味、感情は、驚くべき近代的色彩を帶びて來た。

三十年前に、西洋文明を猿眞似してゐた時代の婦人を、若し今日に連れて來たならば恐らく、凡ての婦人の笑ひの種となるであらう。殊にその時代の婦人が考へてゐたこと、その思想なり感情なりを、そのまゝ今日に於て又發表したならば、手を打つて笑はない若い婦人はなからう。その時分の眞面目は今では滑稽となり、悲劇が喜劇と映ずる。それ程の進化を、婦人の生活に持ち來したことを考へると、日本の婦人は、こゝ數年の間に著しく進歩したといふ他はない。

併し、この進歩が何を婦人の生活に持ち來したか、を考へてみなければならぬ。耳かくしや斷髮や強烈の色彩の衣裳や、未來派のやうな角度を以つた容姿(つくり)や動作や、さういふものがその全部であつただらうか、若しさうであるならば、それは、高島田や、振袖や、前屈みの內股の擧動や、と外觀は違つてゐるが元來同じやうなものが持ち來されたといふに止まつてゐる。が、それは、その外形の進化が重大なのではなく、さういふ表現を必要とした、內面的進化に意味があるのであると見ることも出來る。然し、その內面的進化の性質を考へてみると、それは正に、今云つた或る特殊の生活をしてゐる婦人の感情生活の進化である。

女性の心理に於ける、美の標準をさうまで變化さした彼女の、感情の生活は、たゞそれだけに於いて、近代婦人の人間的進化を認むべきものであらうか。實際現代の婦人が、その生活に於いて、憧れ求めなければならないものは、さういふ感情の生活だけであるだらうか。それを表現するのに、文金高髷ではいけない、切髮でなければならない、振袖ではいけない、はぎの出た洋裝でなければならないと、いふやうな感情の生活が、婦人の人間的生活の全部なのであるか。

一體今日の婦人は、婦人の生活の價値を、さういふデリケートな感情――野蠻人乃至感情の發達しない未開人には到底、別な生活であるところのさういふ文化的感情に置て、さういふものが、今日の婦人の求むべき生活の全部であると考へてゐるのだらうか。

卽ち今日の婦人は、黃金の斧を求める昔の貴族、王樣の要求と同じ要求に於いて生きねばならぬ人々なのであらうか。

この問題が、今日の婦人の地位を決する重大な鍵であることに、氣付かない人の案外に多いのは理由のあることである。ものを考へ、それを表現する能力を持つ人々は、今日までの社會組織に於いて、悉く黃金の斧を求めてゐる階級の人々である。彼等は、生活に於ける裝飾的要求を、絕對の生活要求と考へざるを得ない生活をしてゐる人々である。男子でも女子でも、社會の表に立つて、聲高く叫んでゐる人々は皆この種の階級に屬する人々である。彼等は、生活を求めて滿ち足りてゐる

る。そして生活以上のものを求めてゐる人々である。食物はその人々にとつては、たゞ腹を滿すものではなく、味覺の數萬年間の發達に應じて、衞生と沒交渉な滋味を持つところの、攝生以上の或るものである、水瓶はその人々にとつては、一日も缺くべからざる水を蓄へる器ではなく、その外面に施こしたくさ〴〵の彫刻や色彩を、賞玩すべき器である。かやうな、纖細な崇高な、感情の發達が、人間的生活を動物的生活から區別する要素であるといふので、その人々は、滋味のために攝生を顧みない食物と、彫刻及び色彩のために、水の容器たることを忘られた水瓶、さういふものに絶對的憧れを持つものである。人間の生活殊に婦人の生活はかういふ憧れに生きるところに人間的意味があるとする。

これは全く間違ひのない、さうして人間にとつて、尊い心持ちである。誰れもが人間、殊に女性にさういふ生活の培はるゝことを、悲しみ嫌ふには當らない。併し乍ら、現代に起つた、社會的動搖の一方面の現象としての、婦人の地位の進化は、惜しいことにはさういふ意味の生活に根柢したものではないのである。

時代も又、人間と同じく、若いものは働き老人は坐つて樂しむものである。一定の社會的安定が生んだ文化現象の上に起つた、人間の憧れが、如何なる時代に於いても、人間を生かす心の生活とは云はれない。さういふ心持ちに生きた人々は、富裕の生活に育まれた子供と同じく、凡ての人間の生活に望まれることではない。又その樣式が人間的生活の絶對的標準だとも云はれない。

若い人間が苦勞して、老人は享樂するといふ人生の役割は、若い時代の人々には享樂のそれ以外に重大の負擔のあることを思はせる。

今日が、文化の爛熟の時代を離れてゐることは、誰れもの眼にも疑はれない事實である。人間的感情の最もデリケートな發達は、文化爛熟の時代に於いて頂點に達する。其處では、男子すら、僅かな空氣の振動にもショクを感じ、目に見へないやうな色の變化に、快不快を感じ、感情は、その最も發達した作用で、生活の内容及び形式を決定し批判し、感知する。

男子が感情生活に於いて、それ程女性的に發達する位であるから、女子の感情の生活の、爛熟期に於ける、それはその銳さに於いても、その美しさに於いても、測り知られないものがあるに相違ない。

その世界で人間は、動物の見ることの出來ない美しい夢を見ることが出來るのである。さうしてそのやうな、纖細な感情の發達につれて、女子の生活に於ける人間的向上の運動が起る。

その時代の發達した文化樣式すら、彼女の感情を滿足させることは出來ない。何んの罪もない夫は、かやうな女性のために、ノラの良人の如くに蹂み躙られ、何の罪もない父は、マグダの父の如くに、罵しられる。其處に新らしい婦人の文化的運動が發生し、進展するのである。

この時期に於ける女性の運動は彼女の感情生活の不滿である。恰度發達した男子の文化的感情が彼を生んだ文化そのものを批判するやうに、彼女の生活が生んだ感情がその感情を生んだ生活を批判する。其處に彼女の批判の根柢が、道德的であるか、藝術的であるか、政治的であるか、いづれにしても、生きることそのことを、優越の感情に求めて、不思議にも生きることを閑却する。恰度孔子が「道理をきゝさへすれば死んでもいゝ」といつたやうに、生きること以上のものに生きることを求めた心理である。薪を割り木を伐ることのために鐵の斧を求めないで、貴族であらんがために黃金の斧を求める心理狀態である。この時代の革命婦人は、皆生きることにはこと缺がない人々であつて唯、空しく生きるのは退屈であるといふところから、その運動を起してゐるのである。「子を生む器械、衣裳をかける人形としての婦人の生活に不滿を感じて奮起した人々である。

それは確かに人間らしい運動に相違ない。併し、この近代的、婦人運動が、婦人生活に齎したものは、恰度昔の貴族の生活要求、今の商人の生活要求がその、貴族、商人の生活にもたらしたものと同じであつて、それは畢竟彼女の生活の文化的爛熟であり又、あらねばならなかつた。

然るに先きに云つた如く、現代は、その文化の爛熟の正に崩壞せんとする過程をとりつゝある。貴族も商人も、その生活の欲求に滿ち〳〵た擧句、それが畢竟自分の生活の頽廢であることを、發見しつゝある。薪を割らうとする時に、黃金の斧は鐵の斧程役立たぬことを發見させられるのである。生活組織の更新に當つては舊組織が生んだ黃金の斧は、その舊組織の裝飾物として、役立つたやうに、新しい生活に役立つことは不可能である。婦人の初期の運動が黃金の斧を求むる運動であつたために、現代的組織更新に於いて、その態度が行詰るといふことは蓋し止むを得ないことである。

現代に於ける、女性の地位の動搖は、恰度男子のそれと、同じ方向をとつてゐるのであつて、生活に滿ち足りた人間の感情の亢進とは、全く違つた、もつと、現實な生活に根ざす人間的要求であることは、屢々私が繰り返したとなので、茲には省略するが、要するに、男子の現代的文化を生んだ生活組織が、その機械的並びに物質的根柢の崩壞のために大いなる動搖に陷つてゐるのであつて、全體の動搖が、その組織の生んだ心の生活の不滿から發生したのとは、根本的に違ふのである。

前代のそれは、文化に飽滿した人間の欲望亢進であり、現代の運動は、その文化を根柢づける組織の崩壞に伴ふ新生活の建設である。從つて、現代の階級的組織に育てられた心理は、やゝもすれば、この現代的要求と反撥する。傳統的哲學者科學者、詩人、宗教家等が、貴族、地主、商人等と等しく、現代の運動を否認するのは、要するにさういふ事情に基づくのである。その人々は引括めて、崩壞しつゝある階級組織から生れた心と形とを持つた人々である。

婦人の世界に於いても又その通りである。生活が滿ち足りた人々は、哲學者、宗教家、貴族、商人と同じく、假令思想の上から現代の進化を、認めても氣分の上から其處に這入つて行かれない。で、さういふ人々は、依然として前代の道德的憧憬、藝術的憧憬、政治的憧憬のもとに、奮鬪するといふ運命にあり、さういふ態度をとる。

この頃女性の世界に流行してゐる、一種の感情的興奮にもとづく文化要求は、上述の次第で、畢竟貴族的、商人的、學者的要求であつて、現代婦人の社會的要求と甚しく喰違つたものであることを斷言しない譯に行かない。けれども學者、文

士詩人の類がこの感情興奮に油を注いで、女性を感傷的の世界に導くことも亦、現代的世相の一面を説明してゐる。それに、近代人の文化的興奮が、彼れを生活破壊に導いたと同じく爛熟文化の產兒である女性は、さういふ感情の世界に於いて亡びるのである。さうして、生きるか死ぬかの現實の生活に於いて鬪つてゐる、思想のない、藝術のない、文化のない女性が、同じ境遇の男子と手を携へて次の時代を建設するのである。

思想、藝術、文化のない女性とは、それらの尊い人間的生活と絕對に無緣の女性といふ意味ではなく、舊組織が產んだ固定した、爛熟した文化の寵兒でない女性、といふ意味である。其の女性等は、爛熟文化の影響に生きるに餘りに貧乏な生活、爛熟文化に害はれるには餘りに現實的な生活に生きてゐる人々である。生活が貧乏で、さうして現實的であることが、現代の女性をして、腐爛した文化を產んだ此の組織に反抗して起たしめた所以なのである。故に現代の女性の生きる世界は、爛熟文化が、空想的な女性の胸に描き出さしめた美しい夢の世界ではなく、此の、現に生きた人間である肉身の女性が、棲むべく餘儀なくされてゐる天地でなければならない。而して此の大地に現實に生きる爲めの奮鬪が、男性に於ても女性に於ても、痛切に要求されてゐるのが卽ち現代なのである。

この明白な事實を認め得ない人々は、畢竟、自分の周圍の人間を見ないで、自分の周圍の幻を見てゐる人々である。爛熟文化の寵兒は、幻を見て滅びて行く人々であるが、社會は、決してさういふ人々と共に滅びて行くものではなく、生活の現實の根柢を固く握つた人々によつて新しい生命を持つて生かされて行く。女性の自覺も、男性の自覺も、社會を生かすその生命を把持するところにある。それには先づ爛熟文化の幻から醒めることを前提とする。それは、美しい感情に生きる女性にとつて最も苦い經驗である。が現に社會の下層に無數の女性が、いや應なしに、さういふ苦い經驗によつて生爭をつてゐることを思へば、さうして、現代の社會はさういふ女性及びそれと同境遇にある男性とによつてゞなければ、決して生存の鍵を與へられないことを思へば、夢を見てゐる幸福の女性は、深く彼女自からを省みなければならないことを知るであらう。



自由戀愛につき

有島生馬

私は世間の出來事などに可なり冷淡な人間の一人であるため、もつと有態に云へば、社會の一隅に置かせて貰つてゐるに拘らず、醉生夢死を敢て辭さないほどの逸民であり、流行の社會問題などに就いても無智無識であり、從つて意見もないのである。責任を果さないやうな氣もするが、責任を果さうにもそれだけの能力がないのであるから、默つて他人の邪魔にならないやう心掛けてゐるのが分相應なのだらうと思つてゐる。

で新婦人協會がいつ婦人聯盟となり、その婦人聯盟がどの位の程度で婦人矯風會と姦通問題を中心に衝突し合つたか、それ等の事情も一向承知してゐなかつたのである。所が本誌前號で、婦人聯盟の再生と姦通運動といふ室伏氏の御意見を讀んで、婦人聯盟が姦通罪の廢止運動を起し、婦人矯風會はそれに對し、多年の主張から有妻姦處罰法案を固持し反抗挑戰した事情を審かにする機會を得たのである。男子の政爭と雖も兎角主義主張の不分明な日本の現在に於て、この位双方旗色鮮明な、然もそれが直接生活の重大問題にふれてゐるといふ喧嘩なのだから、喧嘩もし甲斐があり、見物も見甲斐があるといふべきである。

「姦通罪の撤廢」といふ文字を見ると私は古人に逢つたやうな氣がする。それは私にとつて決して新規な題目でないから

である。小著「美術の秋」中に採錄した「ブラッコと婦人問題」といふ一文は今から十年前（大正四年一月）に公けにしたものであるが、そのうちで私は姦通問題を主として論じ、姦通罪から一歩進んで、「結婚制度開放」「自由結合」などいふ一層根本的な問題に對し、多少私見も陳べ、讀者の注意を促した積りであつたが、この一文は僅か二三知人に批評されたのみで、一般世間からは全く顧られずに終つた。それは先づ當然な成行といふべきであつたらうが、この問題は早晩必ず吾吾を嚇かす最も重大な性質のものと信ずるので、今一度この機會に前言を繰返すことを許して貰ひたい。

「さうだ、これは實に大問題である」と私は十年前のその論文中にリユニオン●リイブルの事を指してかく大問題と呼んでゐる。リユニオン●リイブルを當時私は「自由結合」と譯すべきか、「自由戀愛」と譯すべきか疑つてゐた。「自由戀愛」の方が適譯らしいのであるが、「自由結婚」といふ從來の成語と混同し易い恐があつたからである。

私は言葉を續けて「一夫一妻主義といふものは殆ど基督敎の專賣品である。現に日本の如きも維新以來表面的にそれを摸倣したに過ぎない」と。これは細說するまでもなく、極めて明瞭な事實である。古來支那の習慣、敎養、法令をそのまま襲踏し來つた我國で、急に法文を以つて一夫一妻主義を强制しやうとした所で、その道德的觀念すら確立せしめ得なかつたのは止むを得ない譯である。

一夫一妻主義を極力提唱し來つたものは何んと云つても基督敎精神で、佛儒回三敎にはそんな掟はなかつた。特に聖書の文字通りを實踐しやうとした舊敎の敎義はその代表的なものである。歐米諸國がこの點に關し、極めて嚴格な法律を有するに至つたのも要するに、この敎義的精神を公權化したものと見るべきであらう。然るに我國のやうに慣習と宗敎とを全く異にする國民に向つて、一朝一夕にこの一夫一妻主義の繼受實行を企てゝも、原來、それは無理な註文だつたであらう。況して此法律は歐米人にとつてすら一種の僞善的表面的條文たるに過ぎない傾きあるもので、內實は彼等程盛んに姦通

を犯す國民にないかも知れない。彼等生活の內情はロマン・ロオランの云つた現代の姦通文學で識ることが出來る。西洋と東洋とは其點に於て名實を顚倒してゐたと見るべきものである。卑近な例でこれを評すれば、比較的堅氣な息子をつかまへて、放蕩な伯父さんが袴羽織で意見したやうな形になる。

「今彼等歐洲人が千年來の傳統である結婚制度の基礎を崩壞しやうといふのは、成程大問題に相違ない。然し一方からみれば、今日は其時が始りかゝつてゐる。私は基督敎の最後の運命と同樣にこの問題(自由戀愛)の將來を興味をもつて眺めつゝある者である。」

歐米人は今果して結婚制度の基礎を破壞しつゝあるものであるか、どうか。それは卽決し難い問題であらうが、世界中で最も急進的だつた露國インテリゲンチャの男女、或は最も流行の魁と見らるべき有閑階級の社交界、或は米國の自由主義な男女の生活などを少しく究める事が出來れば、私の所謂崩壞の意味は略ぼ通じるであらう。然しそれも面倒に思はれるならば、今云つたやうに近代の戯曲小說に表はれた男女の關係を考察するのが最も早道である。又基督敎の末路及びその最後に對しても十人十色で、全然見方は異ふ事はよく察せられるが、玆で私は單に社會的精神的制裁力の盛衰から考へて判斷したのである。

「兩性問題の成行は結婚制度と家庭制度に必ず甚大な影響を及ぼす。兩性の解放は家庭の解放であり、家庭の解放××××××××××する、今回の如き大戰爭の終局も、恐らく××を撤回し難いであらうが、目に小さく見えつゝある自由戀愛の波及すべき遠き將來は實に容易ならぬ見ものである。」私の見る所では何世紀か後のことは豫言の限りでないが、今後何十年かの間、男女の關係が、次第に自由戀愛的傾向を帶び行くことは疑を要さない現象のやうである。その程度に從つて、現在の結婚制度といふものは成立しなくなり、次いで家庭制度、家族制度も自ら滅亡して行く。××××××××××
××

にも可能になり、世界大戰もこれを實現し得なかつた、×××××××××××××可能性ありと云ふべきである。×××認めないと云ひながら、家族制度及び民族主義を認めるものも、×××認めながら、××××××××ものも、徹底的に云へば、共に不合理自家撞着である。唯物主觀と感傷主義とを半分半分煉り合せたり、神様に社會政策を手傳はせたりする連中の云ひ相な事である。即ち今日の結婚と家庭と民族と國家との組織聯絡は×××××××××××××××××××××××××××××××のものである。自由戀愛はかゝる改造の前提として考察される時、初めて重要な問題となり得るのである。

私をして云はしむれば、有妻姦處罰運動の如き原より遲過ぎる。又姦通罪撤廢運動の如きも、決して早過ぎるとは云へまい。なぜなら有妻姦の處罰はさておき、現に有夫姦の場合の如きも、これを刑法上の處分に訴へず、示談内濟にすることが常套手段として慣例のやうになつてゐる。最近に起つた幾つかの實例も、また吾々の記憶にある。又場合によつては、有夫姦有妻姦に對する一般輿論及び道德的批判も不利苛酷なものとは定つてゐない。却つて同情と聲援とが與へられたやうな時もある。かく道德的にすら×××××××××對して、×××××××××××××××自由人格主義の立場から決して望ましい事でない。

婦人矯風會のやうに有夫姦が既成の法律であるから、或は男女は貞操に於ても同權であるべき筈だからといふ理由で有妻姦處罰を主張するならば、それは單に表面的一片の形式論に過ぎない。現にそれを主張しつゝある人々ですら、斯法實施し得て妻帶者をそれによつてどれほどコントロオルすることが出來ると思つてゐるのであらうか。唯戶籍上庶子といふ奇妙な特權を消滅さすることは出來るであらうが、それは男性にとつては不利な場合もあり、有利な場合もある位のもので、寧ろより多く女性及び私生兒その人にとつての、不利益な删除といふべきであらう。又唯一人の既婚者にとつてやゝ有利

なこの條件は、多數の未婚者にとつて、結局不利な結果を齎すべきことも考慮せねばならぬ。

之に反し有夫姦處罰が婦人聯盟の主張する通り、全然撤廢されるならば、法律上妻たるものが解放され、刑法上男女同等の置位に立つ許りではない、それは一般妻帶者にとつて實に晴天の霹靂以上の驚愕狼狽であらう。男性の永い利己的絶對獨專の安眠ももう續けやうにも、續けられなくなる。例へば不貞の妻と明かに知りながら、これを懲役に處するは勿論、離緣することも、別居することも、名譽毀損の賠償を得ることも出來なくなる。又他人の兒女を出産せしめ、それを養育せねばならなくなる。これほど慘めな負擔が他に多くあるであらうか。然し女性は永い過去に於て、現在に於て、ほゞこれに齋しい法律及び慣習の重い軛の下に置かれて來たのである。さうして男性は女性の慘めな立場を決して顧慮することなく、先天的にかゝる義務を女性に強ゆる特權あるものと誤信して來た。今日漸く姦通罪撤廢運動の起り來つたのに對し、尙早と云へない所以である。

男性が女性に對し貞操上には先天的特權あるものと信じ、之を強制し來つた理由は、抑何んであつたか、亦その理由なるものは果して絶對的條件として、今後も通用すべきものであるか、一考を要する。

第一に繰返し高唱されるものは、母胎及び産兒の問題で、これに男女生理の差別、及び性慾と愛情との關係に於て、兩性間に相違ありといふことなどが附隨し論じられた。もし生理學者等の所說を、正當なものとするならば、男性の特權及び現在の慣習中のあるものは認容さるべきであらう。然し夫等の主張も虛心に解剖分拆すると、先天的といふより、寧ろ家族制度や經濟事情を前提とし、考へ馴れた批判に結局は落ちてゐることに氣付くのである。

例へば妻の姦通によつて獲た子を、夫が自ら稼いだ金で養育せねばならぬといへば、誰れしもそれは非常な恥辱と思ふに相違ない。然るに妻が妾の兒を庶子として、家庭内に養ふ慣習については左程驚くものがない。然しこの二つの場合相互

にどれほどの差違があるかと反問されゝば忽ち答に窮するのである。唯だ家族制度と經濟的優越の故に、男子にはこれが許され、女子にはこれが許され難いと云ふ外、明白な理由はない。然らば家族制度が變り、女子の經濟的獨立が出來る時代になればどうかといふ事にならざるを得ない。

　だから今後社會制度の動搖につれ、從來の有ゆる權威が見失はれ、道德觀念の、不統一が日に日に甚しくなるものとすれば、之等男女權利義務の觀念問題が一層懷疑的に取扱はるべきは明瞭のやうである。

　夫婦不可侵權の法律的保護の一方法として、今日姦通罪のある場合、處罰が實行されてゐる。然し法令以前姦通を罪惡視し、處罰しやうとしたものは、個人の復讐的感情であつたらう。さうしてその復讐は主として、比較的小數な男子の婦人、絕對獨專の立場から考へられたもので、姦通者の不義不正を矯正する公明正大な精神に出たものと云へないやうである。この利己的復讐の私權も社會的に公權化されて、次第に公正なものに進化したのであらう。然しこれが、一層深い人間の本能及び良心とどんな關係にあるか、それを斷定することは決して簡單容易な問題であるまい。樣々な動物についてみても、樣々な人種風俗についてみても、異つた時代時代についてみても、現社會の諸階級について考へてみても、姦通罪は全く一種の因襲的、慣習的な社會契約たるに過ぎない。それをある種の倫理學者もしくは宗敎家のやうに、凡ての人間が絕對に遵守せねばならぬ永遠不易な法理、所謂 la permanance juridique の一つであると論斷し、それをどこまでも演繹應用しやうとすることは先づ困難と云はねばなるまい。

　だから夫婦制度及び姦通は時代、人種、環境、——もう一つ階級を加へてもいゝ——によつて、樣々に規定され、時には全く相反した倫理と法律とが生れた。一夫一妻、一夫多妻、多夫一妻、夫等は各眞面目に考慮され、從つて姦通の場合にも種種相が表はれ、その處罰も或は重く或は輕く、或は無罪に規定された。今日吾々が姦通に對して感じる良心、判斷、恐怖、妬嫉も要するに、古來の規定と慣習によるもので、普通稱へられる先天的良心などいふ絕對らしい叫聲も嚴密にいへば、ある約束が必要になる。元來法律でも、道德でも、その悉くが自然法則を基準とするものと限られないし、ある社會的契約

が永い間遵守されゝば、それが自ら人間の心狀を支配し、樣々な良心をも創造する。「慣習によつて法律」といふ原理があるならば、「法律による慣習」といふ逆說も成立する譯がある。

一片の法令で人事現象の凡てを解決せんとすることに、滿足出來ない精神の所有者は、亦「良心のために」「良心によつて」といふ人道主義者、正義主義者の空漠な宣言に直ちに服從しやうとは思はないのである。況して正確嚴密な深い客觀的觀照を重じなれた精神にとつて、其は屢一嘲笑しか値しない場合が多い。卽ち良心のために、といふ代りに、慣習のために、法律のために、時代のために、方便のために、名聲のために、利己のために、さういつた方が遙かに適切な場合がない事はない。

かゝる意味で眞の藝術家は、時代の結論と對峙して立たねばならない。反抗するため、鬪爭するために存在せねばならない。××、道德、慣習その凡ては、その時代の廣い意味での制度である、契約である。藝術家は常にその制度に反對する。人民の先頭に立つ指導者の間に、原來二つの型があると私は思ふ。一つは制度に信頼し、制度を行はしめんとするもので、一つは制度を信頼せず、いかなるそれも常に無視せんとするのである。前者は政治家型であり、後者は藝術家型である。勿論政治家自身、藝術家自身の間にもこの二つの傾向はあり、宗敎家學者等の間にもこの傾向は附隨し得る。

さて夫婦制度に對し先づ懷疑的批評的な眼を向けたものは原來藝術家であつた。法律によつて罰せられ、宗敎によつて裁かれ、道德によつて呪はれた、男女の姦通に對し、同情し、辯解し許さうといふ役廻りを勤めたものは、古來詩人戯曲家のそれであつた。彼等は時代、信仰と法令とに反抗し、常に姦通者等の代辯となつた。近松、シエクスピア、ゲエテをその例に擧げただけでも、もう十分であらう。

結婚は一制度に過ぎず、戀愛は本能である。結婚不可侵を行爲的に保護しやうとした法律に對し、戀愛絕對自由を精神的に保護しやうとしたものは、藝術であつた。又藝術は獨り法律に對し戀愛を辯護した許りでなく、暴力に對し、金力に對し、權力に對し、虛僞に對し、その味方となることを怠らなかつた。然し藝術が今日までなし來つた所は、ある男、或はある女に對する卽ちある個人に對する辯護に過ぎなかつた。今日以後藝術は凡ての男、凡ての女、卽ち社會的に戀愛解放

の任に當らうとしてゐる。それが Vers l'union libre 」の提唱であり、運動である。

姦通處罰撤廢はこの運動の當然通過すべき、第一段として、さうして自由戀愛が××××××第一歩として、本統は重要問題なのである。

さはいへ自由戀愛の時代に到着するまでに、吾等はまだ遠い道程のこなたにあることを思ふものである。

ニコラ●セエルギユルといふ人に「愛の島」(ユウヌ・イル・ダムル)といふ本がある。ホルテイエといふ佛國飛行家が偶然太平洋南方にある、パムフィリ王國(le royaume de Pamphilie)へ行つて、自由戀愛郷の新組織に隨喜する有樣を說いたものであるが、私には到底そのやうな極度の平和と幸福が人間の境涯に與へられやうとは思はない。却つて結婚制度の殿存したがために、種々な悲劇が發生したと同樣、自由戀愛もそれに劣らぬ、或はそれ以上の悲劇を生み、人間は尙ほ多くの苦味を經驗せねばならぬものかも知れないと思ふ。

然し人間が自由戀愛により、××××××××××××××××××××××××××××相愛することが出來たとすれば、結婚がないために××××××××××××××××××××××××××××××××××現在の慣習と道念とが吾々を意識無意識のうちに堅く束縛して×××然しもし一切の社會的條件が變つて來れば、戀愛に對する心狀も次第に變遷すべきは當然とみるべきであらう。

ユウトピア夢物語は自他共に、興味少いからこれ位にして、婦人聯盟の主張により有夫姦處罰が撤廢されるとしたら、吾吾今日の實生活はそれがためどんな影響を蒙るであらうか。

前にも既に述べたやうに、それはある妻帶者等に反省の好機を與へる位のもので、婦人自身の態度には先つ動搖は起り得ないであらう。なぜなら夫婦關係を支配してゐるものは、現在に於て直接法律そのものより、社會的慣習、信念、事狀の方が遙かに強かるべきことも右に述べた通りである。

次に個人、例へば私なら私に、妻の姦通をどう見るかと云へば、いくら法律が姦通罪を認めなくなつたからと云つて、

直ぐそれを寛容するやうな事は到底堪え難いと思はれる。

それは矛盾ではないかと詰る人があるかも知れないが、さうした考へ方は餘り人間を機械視したものといふ外はない。一體人間に矛盾のあることは、車の片側に許り、荷物を積まないと同じことだと云つた哲人がある通り、到底免がれ得ないのである。又私の人格も理智のみで決して統一されないことも知つてゐるからである。私には感情があり、本能的愛慾があり、その上に遺傳性もあり、慣習傳統もあり、從つて嫉妬、憤怒、虚榮心、復讐心等もあるからである。さうして之等のものは屢々吾々の純眞な愛の防害になるものであることを自覺しながらも、それを脱離超越することが不可能のやうに思はれる、少くも現在の吾等日本人にとつてはさう思はれることがあやしまれてゐない。

有夫姦通罪撤廢は有妻姦通無罪と共に多夫多妻主義或は無數の姦通を奬勵する意味のものでない事は勿論明かである。少くも私はさう解釋する。又戀愛の自由人格主義は、外部的制裁によらない、愛情自身の親和力による戀愛の保證である。例へば今日刑法の保護で一夫一婦制がやつと守られてゐることを快としない人でも、それが自分等自身の愛情で確實に結合されるといふならば幾倍の幸福と滿足を感ずるか分らない譯である。

殊に近代の貞操觀念が前代と異なつて來た一理由として、肉體よりも精神の問題を重要視するに至つた傾向を擧げねばならぬ。嚴格な舊敎の如きも、精神上の姦通は止むを得ないものとして明かにこれを認め、極力肉の問題を監視しやうとした。然るに近代は肉の問題を單に性的現象として、二義的に取扱ひ、魂を以つて戀愛なり、人格なりの、一義的要素としやうとする。ドストエフスキィ等の創造した可憐無恥な人物がその一例である。

又適例といふ譯ではないが、偶然最近に讀んだから玆に擧げるのであるが、ブラアガの「戀女房」の女主人公は放蕩な夫の既往の金と代へた多數の情婦に對しては全く寛大で、それを許したに拘らず、從弟の妻君との關係に對しては、これを魂の取奪とし、生命を堵して、最後まで斷然たる解決を求めてやまないのである。

即ち法律的行爲の制裁が既に、その支配力を振ひ得ない範圍に入り込んで、現代の戀愛觀、貞操觀は解決を要求しつゝあるのである。姦通の處罰は××××××べきである。



女は支配する

生方敏郎

婦人にいろ〳〵の能力があるが、中でも或種の婦人は妙に人を支配する能力を持つてゐる。これは一寸考へると誠に意外なことで、日本なぞでは、女と云へば一も二もなく服從する動物のやうに考へてゐる人が多い。しかし、實際を見ると、さうでない。却つて女の方が男を支配してゐる。

歴史を讀むものは、誰も各國に君臨した女帝といふものが、多くの臣下を服從させ、巧みに使役して案外成績を擧げてゐるのを見るだらう。男の王にはたゞほんの王といふ名前だけの傀儡が多かつた。本當に王らしい王は、史上幾人も無い。男でさへ傀儡が多いのだから、女は尙ほ更らだらうと思ふと、案外さうでない。女帝は臣下を操ること手足のやうである。イギリスにもそんな女帝があつた。ロシャにもあつた。日本でも女帝は決して攝政關白の氣儘にされてはゐなかつた。何處の國でも女帝の時代に案外國權が張り文明が進むやうである。何かの弊害が一方にあるとしても、兎に角、社會の上下が生き生きしてゐる。

十八世紀に於けるフランスの宮廷婦人に就いて知るものは、如何に彼等が支配力を持つてゐたかを學んだであらう。だが、まあ、そんな歴史上の婦人の話なんか、私は何うでもいいんだ。今の婦人が支配力と、それから煽動力とを何の位持つてゐるかといふことを、自覺して貰へばいいんだ。昔の婦人すら多分に持つてゐた能力なんだから、今の婦人にそれらが缺けてゐるわけがない。否、大にその力は殖えてゐると思ふ。ただそれを婦人自身が知らずにゐては、その力を自他

の爲めに利用するに方り十分でない。金力と權力とは、今のところ何といつても男の所有だ。ところが今のままの資本主義の社會では、金力と權力とが無ければ何も出來ぬやうに見える。實際何も出來ない。男子にして金力か權力かを持たない男は、奴隷である。表面は教師とか官吏とか新聞記者とか樣々服裝のいい看板はあるけれども、要するに皆奴隷なのだ。働かねば食つて行けず、どころではない、節を賣らねば食つて行けず、又は働いても節を賣つても食べられず、といふ始末なのだ。現代語で云へばプロレタリアであつて、古い言葉だと奴隷だ。

この頃の人はプロレタリアを節約して單にプロ〱といふ。「我々プロにはそんな高い會費の會へは行かれぬ」などといふ。だが、以前にプロと一と口に云へばそれはプロスチチユートのことだつた。淫賣のことのみをプロといつたものだ「オイ、今夜蠣殻町へ行かないか」「うんプロを買ひにか」などと云つたものだ。大正の聖代になり、淫賣婦が失くなつたわけでもなからうが、プロといふお株は何時の間にやら無産階級のプロの方に奪はれてしまつた。

だが、無産階級のプロには、その名目だけでなしに、實質に於いても、可成プロスチテユートのプロと全く同質の屈辱を受けねばならぬ場合が多いやうだ。あの男も金さへあつたら、あんな下らぬマネはしないだらうに、と思はれる場合を吾人は幾らも見る。金が無く智慧がないプロは、プロせねばならぬ場合が多いらしい。

男にして金力なく權力なければ、全くのプロであること、前述の通りだ。金力と權力を所有しない點では日本の婦人ほど小綺麗に何も無い人間はなからう。その點で日本婦人は誰もみな全部プロである。侯爵夫人でも多額納税者夫人でも百年苦樂依二他人一である。プロである。プロレタリアのプロでもあれば、別の意味のプロでもある。自分に無資産で他人に扶養して貰ひ、住所迄も他人の指定通りの所に住む可く定められ、外出するにも交際するにも何一つ自由を持たない日本現代の婦人は、昔の婦人と同じくプロ生活を營むものである。

だが、プロはプロでも婦人のプロは男のプロより氣がきいてゐる。婦人のプロは九段坂の下に空つ風に吹かれて立ち、人の車の後押しなんかしないでもすむ。婦人のプロは侯爵夫人と號し立派な身裝をして立派な屋敷に住み、文明の與へるだけの幸福を享樂してゐる。

のみならず、プロにも女性プロは皆支配力と煽動力とを持つてゐる。男性プロはしきりに文化々々と文化にあこがれてゐるが、文化村をブラ〱散歩して、あの西洋館がいいの、あの西洋館のお勝手のこしらへ方が文化的だのと批評するだけの話しで、夫子自らは安いアメリカ屋の西洋館を買うだけの力さへも無く、買ふのはおろか借りるにも敷金が出來ず、況んや何等の文化的便安を享樂する機會を持たない。それ故、男性プロばかりだつた日には、住宅はいつ迄しても五千年以來南洋の島でくらした時分のままの宮柱などとしき立てた殿造りで、冬の寒さにあつては手がかじかんで仕事も何も出來な

い。

けれども支配力と煽動力とを持つ女性プロが文化村を去年の博覽會の時見て來て以來、世間に如何に西洋館が殖えたかは、人々のよく知るところである。

「日本家屋は少しも暖房設備が無くていけませんわ。家でも西洋館を建て増ししてファイアプレースを作るか、しつかりしたストーブを拵えつけるかしやうぢやありませんか」

斯う女性プロが發言すると、主人――！主人はブルジョアで金はいくらも持つてゐる――もその氣に成り、此冬からはストーブだ。おかげでストーブの通人に成るものさへある。

男性プロは精養軒の横手を通り、食慾をそそるその芳香に指をくはへて口惜しがるだけだが、女性プロは早速精養軒へ上つて先づ味ひ、歸ると電話で明治屋から材料を取つて西洋料理をこしらへる。

男性プロの文化に對して無力なことは前述の通りで、何事も指をくはへて見て過ぎるだけだが、男性ブルジョア――男性だけは餘計だつた、日本のブルジョアに女性は無い、たゞのブルジョア、そのブルジョアが昔歐化熱を起さうと企てたことがある。これは外國と條約改正をする必要上、日本ももつと文化國にならにやあいかん、といふ考へからきたらしい。しきりにダンスをやるやら英語をしやべくるやら、鹿鳴館の中はまるで精神病の病院の中のお祭りか何かの樣な騷ぎをやつたものだが、その文化熱は鹿鳴館の外へは幾干も出なかつた。そしてそれでおしまひになり、世は再び尊王攘夷の大昔に返つた。

ブルジョアが企ててさへ、失敗に終つた。男性は世を支配し世を風靡する力を持たない。

男性は文化といへば、まづ古いところでは憲法をこしらへる、議會を立てる、兵隊をこしらへる、勳章をこしらへる。さまぐ\のことをした。その中で、何とも敵とも人をうれしがらせたのは勳章くらゐなものだ。勳章ならピカぐ\光りもするし胸に飾つて大道を濶歩しても幅が利くし、質屋へ行けば金も貸す。田舍道を歩けば小學生徒がおぢぎをする。だが××××××とかいふものは何うだ。そんなものに口角泡を飛ばして氣に惱んでゐるものは、安月給の新聞記者と辯護士事務所の玄關番くらゐなものだ。内閣が非憲だとか違憲だとか云つたり樞密院がすべつたとか轉んだとか云つても、そんな非憲も違憲もよその小父さんの喧嘩と思ふだけの話で、國民は無感覺だ。本郷のお醫さんが代議士に成つたとて新聞では書くが、代議士にならずに首をくくても書くのは一つだ。讀者の方では、あんな當り前なことをして當り前な代議士なんかになつてくれるよりも、何か奇拔な方法で首でもくくつてくれた方がありがたい。衆議院で頭のはげた小父さんたちが畑を立てて議論してくれるよりも、あの中で闘牛か曲馬でもしてくれた方が、國民としては何れほど幸福か知れない。古い時分ブルジョアが持ち込んだ文化といへばまあこん

なもので、一つも國民に悦ばれてはゐない。あんな物が持ち込まれて、日本は田舍も東京も氣風が悪くなり、人間が下らなくなつた。

新らしい時代となつては、男性プロの方が、これは到底物質文化を持ち込むだけの資本は無いが、丸善の本なら高いとて知れたものだから、本から樣々の危險思想を持ち込んだ。危險なものは、活氣ある人間に必ず面白がられる筈なんだが、それも、男性では、何うも一般に流行らせるわけに行かない。ブルジョアが歐化熱を鹿鳴館以外いくらも宣傳し得なかつた樣に、男性プロも安い食堂に安い會費で集まる營養不良神經衰弱派の中に玩弄されるのみで、まだその危險思想で小鳥一羽擊ち落したこともない。彼等の危險思想は、ただ彼等に本の原價ほどの報酬を得させた位が關の山でだらう。男性プロの宣傳から、何にも新しいものが流行つて來てはゐない。

だが女性は實に多くいろ〳〵流行らせた。近年の中に、ことにここ五六年の中に髪は大抵都も鄙もおしなべてハイカラさんとなつてしまつた。國粹保存の本家本元、女性國粹會どいひたい位文化におくれた花柳界でさへも、近頃ハイカラさんが多くなつた。クリームだ、水白粉だ化粧液だ、何もかも新らしいものが流行つて行く。

活動寫眞の流行とてもプロ、ファンなぞがいくら騷いで流行せるものか女性が好けばこそ、そして女性ファンが見に行けばこそ男性ファンもついて行くのだ。

「みいちやん、活動へ連れてつてやらうか」

何が連れてつてやるだ。みいちやんが行けばこそ行くんだ。一人なら行きはしないくせに。ダンスも女性が好けばこその流行だ。

女性諸君は、この通り自分に煽動力と支配力を持つてゐるくせに、それを自覺してゐないものが多い。プロはプロでも女性プロは九段で立ん坊をしなければ生活出來ないプロぢやない。女性プロは支配力と煽動力との持主だ。決して男子のブルジョアを羨むな。

或女性達が近頃政治上の權力を得やうとして運動してゐると聞いたが、そんな事をせずとも、女性諸君は既に參政權以上のものを持つてゐるのだ。ただそれを自覺して適當に行使しさへすれば、天下は女性の天下なのである。ただ、若し、女性がその上に財産を得さへすれば、實に鬼に金棒である。さうした日には女性はブルジョア以上の權勢家となり、世界に君臨することであらう。

社會改造は恐らく今後女性の自覺と活動とに依つてなされるだらう。人間生活の革命は決して政治から初められるものではない。そんなものは薄つぺらなものだ。眞の生活革命は寢所から始まるだらう。衣食住から、嗜好から、寢物語りから。

ユートピアは男にとつては白晝夢だが、女性はその反對に晝寢の夢から理想國を作り出す。男の金力と權力とに永い間對抗して、少しもいぢけないで益々美しくなつたのは、この創造力を持つてゐるからだ。

プロレットカルトの話

平林初之輔

一

無産階級には知識は必要でないといふやうな說が從來屢々唱へられました。併しながら無産階級は將來の社會、將來の文明を維持して、人類の生活を現在よりも遙かに高めるべき使命をもつてゐる階級であります。して見れば、將來の文明を維持し、これを發達させてゆくべき無産階級には、今日の文明を維持してゐる有産階級より以上の知識が必要なわけであります。たとひ無産階級が政治的の鬪爭に於て有産階級を打ち破ることができたとしても、新しい社會の建設に必要な知識的の準備が缺けてゐたら、社會は退歩するよりほかはありません。最も廣い意識に於ける無産階級敎化の必要は社會の進化と共に進化した社會を維持するにはより高度の知識が必要であるといふ點に存するといつても差支へないと私は思ひます。

封建社會では、百姓町人には知識の必要はないとされてゐました。ところが、その百姓町人を中堅とするブルジョア社會は封建社會の學問知識を死學問として打ちすて、これに代るにブルジョアの獨立の學問知識を打ち樹て、政治上の覇權を握ると共に知識上の覇權をもその手にをさめました。具體的に言ひますと、封建社會の學問「知識といふものは主として文字を」讀み、詩文を解釋する訓詁の學に限られてゐました。實際生活に關係のある學問知識は全然顧みず、和漢の古典の解釋にのみ沒頭し、或る一句を解釋するのに一年の歲月を費して得々たる儒者さへもあつたのであります。

ところが新興平民はかやうな學問を死學問として打ち棄て、その代りに、理學、實學を盛んに唱道しました。慶應義塾の創立者福澤諭吉の如き人は新學問の先驅者でありまして、封建時代の死學問を熾んに非難し、當時に於ては實に過激な物質萬能論を唱へ、理學及び經濟學の必要を力說し、ひいて萬民平等の原則をかゝげ、楠正成の死は湯屋の三助の死と變りがないといふやうな奇拔な說を唱へて、世人を驚倒さ

せました。ヨーロッパでもそれと同じことで、フランス革命前の啓蒙學派の主張は學問知識を教會から奪つて理學、實學を高唱し、それが政治上の自由平等博愛の標語となつて、この標語をおしたてゝ、平民即ちブルジョア階級が、頭を擡げてきたのであります。明治初年及び十八世紀の啓蒙運動は、實に、封建社會の學問知識に對するブルジョア階級の獨立の學問知識の對抗運動であつたのであります。これを新しい言葉でいふとブルジョアカルトと言ふことが出來ます。日本の福澤諭吉などはブルジョアカルトの最も勇敢なチャンピオンだつたのであります。

二

かやうに封建社會の武士の學問知識に對してブルジョア階級が獨立の學問知識をもつて對抗して來たといふ事實は、ブルジョア社會に於てはじめて明確な獨立した階級を形造つた無産階級も、獨立の知識學問をもつてブルジョアの學問知識に對抗してゆかなければならぬではなからうかといふ暗示を與へます。ところがブルジョア階級は政治上に於ても自由平等といふ表看板をかゝげて內實は不自由不平等を極めてゐるやうに、學問知識の方面に於ても、國民教育とか普通教育とかあたかも萬民にえこひいきのない學問知識を標榜しながら內實は、ブルジョア階級だけに都合のよい學問知識を凡ての人に與へてゐるのであります。そこでぼんやり考へて見ると、その間の理屈がわかりませんが、無産階級の立場にたつて深く考へて見ると、這般の實情がすぐにわかつて來るのであります。それを一言で申しますと、資本萬能主義とでも申しませうか、とにかく、政府でも法律でも、經濟でも、苟くも實際生活に直接の關係をもつてゐる學問の分野では、資本の行動はすべて合法化され、合理化され、資本の支配に敵對するやうなことは凡て非法とされ、不合理とされてをります。そしてさういふ學問知識が凡ての人の頭の中へ容赦なくつめこまれてゐるのであります。たとへば資本家が勞働者を雇ふ場合には、資本家はこれ〳〵の賃銀で一日何時間づつ働いてくれといつて勞働者に條件を指定することができますが、その反對に勞働者が、資本家に向つて、これから君の工場で一日四時間づつはたらくから日給十圓づつ出して貰ひたいなどと言つたら、今日誰もこの勞働者を狂氣扱ひにします。しかし今日の社會をはなれて公平無私に考へて見れば、資本家が勞働者に勞働條件を指定するのも、反對に勞働者が資本家にこれを指定するのも同じことで、どちらがより以上に合理的だといふわけはありません。たゞ今日の社會では資本が萬能になつてゐるからこそ前者は合理的だとして世人が一向

怪ます、後者は狂人扱ひにされるのであります。

三

かやうに、ブルジョア社會に於ける學問知識は歪められ、着色されてゐるところから、これを排して、無産階級はブルジョア階級の與へられてくれる敎育文化に對抗して無産階級の獨立の敎育文化を打ち樹てねばならないといふ必要から最近に叫ばれたのがプロレツトカルトの運動であります。無産階級が知識的にブルジョアの勢力から獨立せねばならぬといふことは、從來各國の社會主義者や勞働運動家の認めてゐたところでありまして、社會主義者日曜學校とか勞働組合經營の各種の學校とかは、ヨーロッパやアメリカの先進國では夙に設けられてをりましたし、社會黨或は、勞働黨の中にもその綱領として無産階級敎育に關するプログラムをかゝげてゐるものも少しはありました。けれどもこの問題が、はじめて重大なものであるといふことが十分に認識されたのはロシャ革命の經驗の結果でありました。ロシャ革命は無産階級の運動に、色々の貴重な暗示や敎訓を與へましたが、プロレツトカルトもその中の重要なものゝ一つであります。何故かといふと、ロシャでは無産階級が政治上の支配階級となりましたが、ブルジョアカルトの傳統が深く民衆の頭に浸みこんでゐて、容易に新しい社會秩序に親しまなかつたのであります。その結果は反動革命派の煽動の餘地を生じ、無産階級革命の事業の進捗を大いに妨げました。

明治維新の時の事情も、それと同じでありまして、爲政者は、盛んに明治聖代の有難味を宣傳しましたが、農民などの中には却つて封建制度を慕ふものがあつて、反動派の陰謀煽動によりて農民一揆が各處に起りました。そこで敎育制度を根本から改正して、新しい秩序に適應させる必要があつたやうに、ロシャでも、無産階級革命によりて生じた新秩序に適應させるやうに從來の敎育制度を根本から改めなければならぬ必要が起りました。そこで日本やアメリカやイギリスのやうな資本主義國に於ける普通敎育にあたるものが、勞農ロシヤで唱道されたプロレツトカルトに外ならんのであります。前者は有産階級の利益を中心として敎育が按配せられ、後者は無産階級の社會秩序に適應するやうに敎育が按配せられてゐるのであります。

四

けれども、無産階級が政治的支配階級であるロシャと、有産階級が依然として經濟的にも政治的にも支配階級である日本やイギリスなどではプロレツトカルトも餘程趣きが異なつ

て來ます。何となれば、前者では無產階級が敎育の機關をその手中に握つてゐて、思ふまゝこれを操ることができますが、後者では、無產階級は敎育の機關をもつてをりません。卽ちプロレツトカルトの實施に非常な困難が伴つてゐるわけであります。そこで、資本主義の國では、プロレツトカルトの運動は、まづ第一に敎育の機關を無產階級が掌握するといふ方向へ集中せられなければならんのであります。そして敎育の機關を獲得するためには政治上に於ても無產階級は權利を獲得しなければなりません。ヨーロツパやアメリカの諸國では、前にも申しました通り、この目的のために勞働組合で學校を經營したり勞働階級のための日刊新聞が發行されたり演劇團が組織されたり、大規模な雜誌や書籍やパンフレツト等の刊行がありまして、無產階級の獨立敎育の手段が資本主義社會に於て許される限り凡ゆる方面から講じられて居りますが、日本では官憲の取締りが嚴しいために、わずかに、非常に抹殺された書籍、雜誌、パンフレツトや、一言言ふとすぐに解散になる講演會などによつて辛うじて無產階級の聲が叫ばれてゐるに過ぎません。それだけ日本の無產階級は他の國の無產階級よりもみじめな境遇にあるのであります。吾吾は今後この運動をもつと〳〵進めて、人類の進化を妨げてゐるブルジヨア階級の偏見を民衆の頭から驅逐し、現今の社會組織をありのまゝに理解して、やがて將來の社會建設の使命をもつてゐる無產階級大衆の一員としての健全な自覺に達しその使命の遂行を期しなければなりません。

言ひ忘れましたがプロレツトカルトといふのは大抵の諸姉は旣に御承知でせうが、日本では普通に無產階級敎化と呼んで居ります、敎化といふのは敎育と文化の兩方をさすのでありまして、敎育といふのは一つの過程であり、文化といふのはその所產でありまして、その兩者をさして敎化といつたのであります。以上はほんのプロレツトカルトの常識的に過ぎんのでありまして、最近の運動としてのプロレツトカルトはもつと特殊の意味をもつてゐるのでありますが、そのことは突然申し上げてもわかりにくいのですから、今はたゞこれだけにしてをきます。(一月三十一日)



婦人と禁慾生活

杉田直樹

禁斷(アスケーゼ)の生活！それは草木より美しい花を奪ふことと同じ生活である。トルストイやワイニンゲルの言に從つて絶對禁慾の生活を送ることは、生きた人間の此の世の生活といふ立場から謂ふときは全く無意味のことである。彼等の信條によれば人は生れ乍らの罪の子で性の問題は凡てとりも直さず罪の問題である。性慾の禁斷は卽ち罪より免れる唯一無二の方法であるといふのである。之は彼等の論理の歸結としては正しい考へかも知れぬが、その論斷の前提が既に宗教的思想より胚胎した迷信と言はねばならぬ。之に對して現行の社會的習俗は人間の心性と外境との進歩變化によつて徐々に馴致されて來た自然的發達の道の跡であつて、現世の人もその道を踏んで行つて、最も安全に大衆の幸福の堂に上り得る。此の道は野中の一本道が必ずしも直線的に作られぬ如く、その發達は必ずしも論理には關知しない。たゞ人間性に基いた實際の事實に立脚して人生を豐富にするやうに作られて、一たび出來上ればその牢固たる力は一遍の論では破り難い。今姑く某の習俗に從へば禁斷は絶對には要求されては居らない。唯結婚生活に入る前の若き人々にのみ禁斷が要求せられてゐる、特に婦人にはその上此の時期の禁斷の外に尙未亡人として夫の家に座してゐる間の禁斷、家婦として夫の不在を守る間の禁斷が要求せられてある。之は醫學的に生理上の必要から起つた習慣ではなくして、全く道義倫常の習俗的關係から生じたものであつて、今日その合理性を信ずる者と否とに拘はらず習俗は習俗の眼でもつて婦人の性的生活を監視してゐるの

である。從つて進つた思想の婦人でも現代に於て心ならずも禁斷生活を强ひられる機會が甚だ多いことのあるのは免かれない。

　男子の禁斷生活の事は玆に姑く省略して論じない。而して特に婦人の禁斷生活は屢々婦人の種々な神經疾患の原因となり得るとして世人から往々重視せられてゐるのである。婦人の獨身生活や婦人の職業自活問題やが、斯した見地から論評せられることも決して少なくはない、而して一面に禁斷生活の甚だ行はれ難いことの弱味に就ては之亦普く認容せられてゐる。プロイスの言に曰く、世に神より褒めらるべき者三あり、一は都會に住みて罪を犯すことなき未婚者、二は高貴の品を拾ひて之を所有主に返す貧しき者、三は己の餘財をひそかに他人に頒つ富める者と。斯くて婦人が、嚴なる禁斷生活を男子との關係から偏務的に習俗上强ひられることは、婦人解放を唱ふるものから常に其の第一聲として不都合なりと叫ばるゝ所である。此際果して婦人の禁斷生活が婦人の心身の自然的機能の上に如何の影響を與ふるものであるかは、一應醫學的に考究すべき問題であらうと思ふ。

　一般に性的禁斷生活の結果として來る病的症候とは如何なるものか。レーウェンフェルドに依れば二十四歲以下の男女が始めより絕對的禁斷生活を持續することは何等の害なし、二十四歲乃至三十六歲の男子が嚴なる禁斷生活を續ける時は平素壯健なる者でも全身の刺戟性亢進、性慾亢進、心氣性念慮、作業嫌厭、輕度眩暈發作の如き神經性症狀を發呈し、尙生來性遺傳的に體質性神經病性負因を有する者では、之が昂じて强迫觀念、憂鬱症、苦悶症、幻覺等の症狀を起すに至るものも少なくない。同年配の婦人では男子よりは多少よく禁斷生活に堪へ得るけれども、しかし生來性神經變質を有する者では往々このために歇私的里性又は神經衰弱症性症候を起すに至る者も亦僅少ではないと叙べられてある。今本文では種々な特殊の場合を擧げて婦人の禁斷症狀なるものを如何に精神病學的に考ふべきかといふことを極めて大まかに述べて見ようと思ふのであるが無論禁斷生活と一口に云つても少女期から何等の性的經驗もない中に社會や異性から隔絕した寺院などの生活に入つて了つた者と、中年で配偶者を喪つて已むなく寡婦生活を守つてゐる者などとでは、種々その禁斷の影響の異なるべきことは當然である。

　婦人の禁斷生活の結果たる症狀に就ては古來から醫家や哲學者から種々の記載が殘されてゐる。プラトンの說に從へば子宮は妊孕を餓ゑ望む一個の暴けき動物であつて若し婦人成長後永い間此の動物に滿足を與へないでゐると此動物は怒つて全身の臟器中を暴れ廻り遂には氣管を塞いで呼吸の道を絕

ち世の婦人を死に致すことさへあるといふ。此の說は中世を通じて十九世紀の終りまで或一部の人々には信ぜられてゐたのであるが、其後に尤もらしい新らしい醫學說が起つた。それは婦人が禁斷生活を續けると子宮内に女精(假定的のもの)が蓄積して遂に之が腐敗分解し全身の中毒症狀を起すに至るのであつて、此の所謂女精并に經血の停積が歇私垤里發作の主な原因となると主張するのであつた。しかし之は醫學的知識の發達により漸次人から信ぜられないやうになつたが、今日でも尚一般人、のみならず教養の足りない醫師の間でも、婦人の禁斷生活が其人の神經系に惡い影響を與へ、遂には之が歇私垤里性疾患の重要な一因となるといふ考へが、かなり廣く普及してゐるかのやうに思はれるのである。

併し習俗に從へば婦人が必然長い間禁斷生活を强ひられる實例が、男子の場合よりも遙かに多いのである。歐米は兎に角として我國に於ても、近頃は婦人獨立の種々の必要から教育事業や社會事業等に從事してゐる若い婦人達が、其の婚期を職務の爲めに未婚の儘に過して了ひ、加之其の社會上の地位や教養や、道義的の立場から無節制なこと、墮落的のことも出來ず、事實上嚴重な禁斷生活を持續して送つてゐる者が決して少なくないやうである。一般に認められる所によれば婦人は男子よりも禁斷生活に堪へ易いといふ特質がある。殊に眞に性的生活に未だ少しも觸れたことのない生えぬきの處女は、本當の性衝といふことを少しも解せず、又中には夫婦生活を營み乍らも尚性衝の甚だ淡い婦人が多數ある位である。從て吾々は婦人の禁斷生活其のものが必然婦人の中樞神經系に生理的害毒を與へるものとは考へない。少年より處女を立て通してしかも立派な學識立派な人格を以て一世に儀表となり少しも性格上にも病的な變化を認められない模範的の獨身婦人が、内外共に多數に見られてゐるではないか。

吾々が吾々の專門醫學の立場から禁斷生活を害ありとするのは要するに二つの方面にある。一は眞の禁斷生活にあらずしてそれが不滿生活である場合と、他は神經病的生來性素質を有する婦人が禁斷生活を餘儀なくする場合とである。現代のやうに女性の世間的活動の自由が許され、若い女性が性に關する書籍や雜誌記事を濫りに讀み舞踏會や運動會で異性と相接觸し、演劇や小說で性の絡まつた場面を興味を以てまざまざと見たり讀んだりし、その上いろ〳〵の會合や新聞紙上で性に關する社會上の出來事を廣く見聞してゐるときには、少女は早期から性的知識を得、之等の刺戟により既に性衝をさへ起すものもある。それが一方に家庭や學校の嚴重な監視と敎訓とのため又は道義的の自覺や種々の社會的制裁の顧慮やなどのため長い間禁斷の生活を强ひられると、屢々無益こ

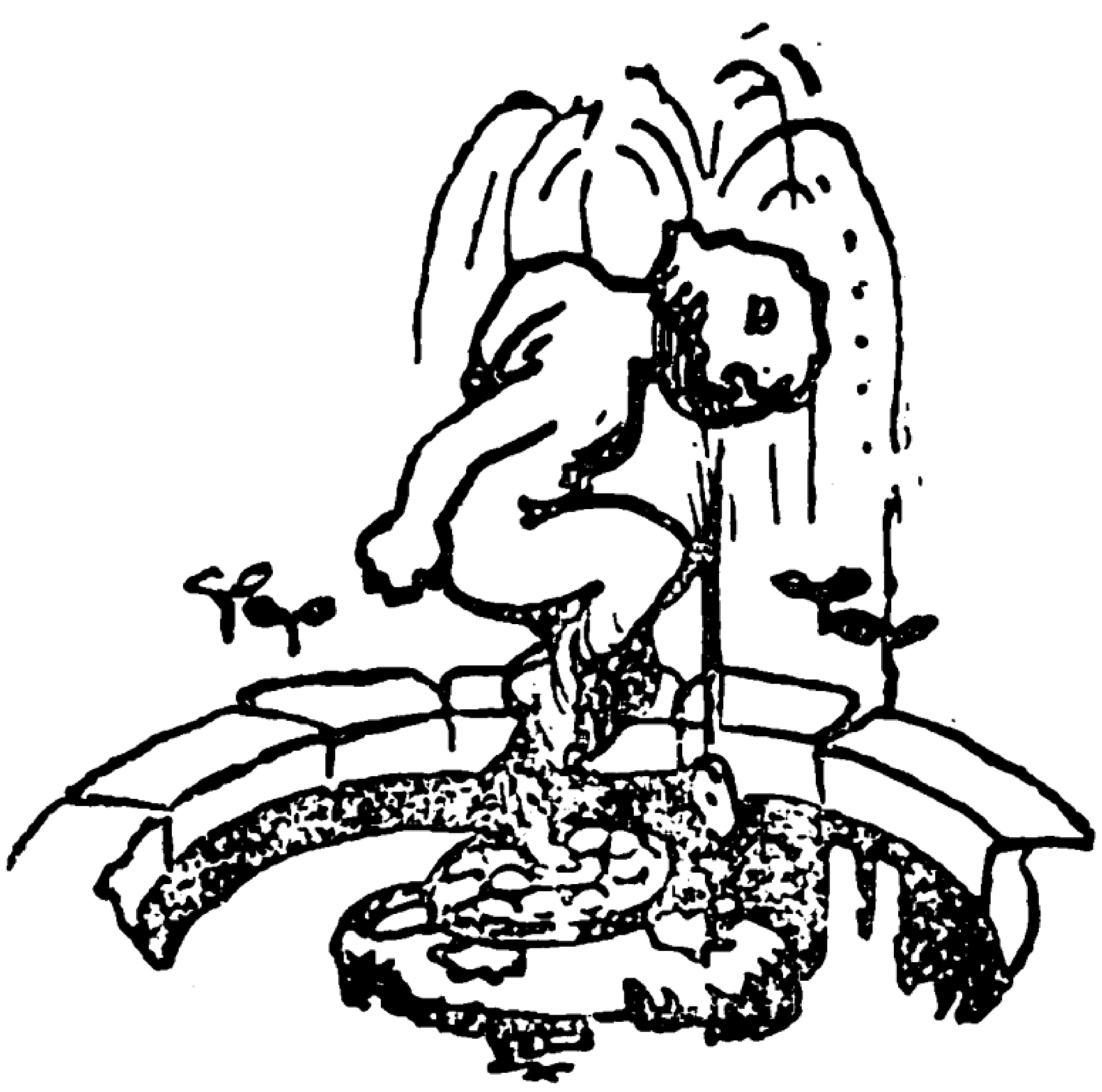
神經系が刺衝せられる結果として中樞神經系に一種の性的刺戟に對する感受性の病的異常亢進症を惹起し、それが屢々神經衰弱性症候又は歇私埡里（ヒステリー）性症候の内因を構成するに至ることがあるのである。それに反して前述の如く始めから心身健全に生ひ育ち性的刺衝を未だ深く經驗したことのない未婚の娘にとつては、單に禁斷のみが或神經病の原因として作用し得るものなりや否やは甚だしく疑はしいことである。老孃といふやうな言葉は種々な皮肉な意味を以て獨身の老婦人の性格上の缺陷や神經性病的異常を指示するのに慣用せられてゐるやうであるが、斯かる實例が若しありとしたら、それは禁斷生活そのもの﹅結果ではなくして寧ろ性的不滿生活の結果であらうと思はれる。何故なら老孃性格卽ち概して頑固な意地悪い虐待を好み同情心なく一種の偏狹な僻陋な性格の者は年若い獨身者や男子禁慾者などにはあまり見られぬことであり、而も老孃に共有な點は若き人々の性的事件に對して堪へ難き嫉妬と不堪症（イントレランス）とを有する點にあるといふことは、明かに老孃の心理上の特質が、永い間の性衝抑壓乃至性的不滿生活のために生じた精神的傾向の蓄積であつて、謂はゞ精神的に養成せられたる後天的規制的性格に外ならないものであることを物語るもので、決して之が生理的又は病理的に神經系の異常機能を發したことから起つた内發的自然的疾病現象とは考へられない。今日の婦人にとつては「結婚」といふ事の中には性的意義以外に生活の物質的幷に精神的滿足の保障の意味が含有せられてゐるのであるから、結婚を婦人の目的と看做すことは理論上にも實際上にも當然のことであつて、決して正常の婦人が之を厭ふ譯がない。從て斯くの如く婦人の生活上重大の意義ある結婚を斥けて婦人が未婚の儘獨立の職業生活に止まるといふことは、之は決してその婦人が性的享樂を放棄し家族的生活の滿悅を拒斥したといふ爲めではなくして恐らく自己の境遇上經濟上種々結婚生活の不安を感じたがためであつたらうと推定せざるを得ない。從つて獨身婦人が凡て、始めから性的刺衝に淡い人々であるといふことは斷言出來ないのである。寧ろ彼等は却つて己れが結婚生活に入り得ざる事に對して苦い堪へ難い感情を有し、常に己れが何等か性衝を起す度毎に不快な抑壓を經驗しなければならないのである。此の不快な無理な抑壓の氣分が長い間に老孃の快活さを奪ひその中樞神經系の刺戟感受性を病的に陥らせて了ふに至るのであらう。其上に尙獨立の職業婦人は常に其の身神を過勞せしめ勝であつて、自分の生計の事や身邊の毀譽に心勞をせなければならぬことが多く、習俗から變な監視を受けて

ゐるから、自然と同情親切等の自家生活の精神的餘裕より生ずる美しい情緒の發達を認められないやうになつて了ふのであらう。然らば老孃性格は禁斷生活その者の生理的結果ではなくして、不滿生活により養はれるたる心理的傾向に外ならない。未婚婦人ならずとも社會的孤立又は窘迫の間に不平不滿の念を抑壓しつゝ人となつた者にあつては男子でも女子でも、永い間には必ず此の種の偏狹な老孃的性格を釀成するに至ることは必然といふべきであらう。

現在結婚生活に在る婦人でも屢々長い期間禁斷生活を强ひられることがある。夫の長い間の旅行航海海外勤務などのため別居孤獨を餘儀なくされたり、又は夫の長い間の病氣のため同棲してゐても性的禁斷の月日を送るやうな機會が屢々あるのである。しかし之等の比較的長い間の不自然な生活が妻の心身の上にどんな影響を及ぼすかと云ふことは一概に論じて了ふことは出來ない。夫が神經病精神病の如き慢性疾患のために長い間禁斷の下に忙しい看護の月日を送り乍ら少しも心身の障礙を感じない婦人を吾々は既に多數實見してゐるのであるが、しかし又一方にはさう云ふ機會に歇私的里(ヒステリー)又は神經衰弱樣の神經性症狀を起し、或は苦悶神經症、强迫神經症又は慢性の憂鬱症、不機嫌症等を起し、性衝を感ずる毎に之等の症候が增し、夫の不在又は病臥中妻も亦不例異和の快からぬ日を過すといふやうな例も亦決して尠なくはない。而して之を仔細に一々の例に就て點檢して見ると斯かる禁斷性の神經症狀が起るか否かといふことは、その婦人の生來性の體質や神經病的遺傳負因の有無や性衝の量などのみに關するのではなくて、從前の夫婦同棲生活中の夫の妻に對する態度如何が甚いて此の症候の發現と否とに與つて著しく力ある如くに思はるゝのである。寡婦が夫の死沒後全く性的享樂を貞烈に放棄し得るや否やも亦同樣の見地から考察せられ得るのである。若い身體豐艶な婦人で今迄少しも性的不滿を感じたことのない者或は然らずとも神經病的素質を有してゐた者などは急に配偶者を失ふことに依て急性に歇私的里又は苦悶神經症に陷つて了ふ例が非常に多い。それには配偶を失つた悲哀の情緒、急激なる經濟的其他の境遇上の變化等も精神的原因として有力に參與してゐるではあらうが、大體に於て大多數の中年以後の寡婦は其の健康を害ふことなく禁斷生活に堪へて行くやうである。殊に夫が長い間病褥に在つて看護に疲れた果夫に先き立たれた妻はその病褥の間寡婦生活の豫備が既に積まれてある。而も遺兒の養育、家事の整理、亡夫の葬祭其の追憶等は或程度迄性衝を弱める力があるので、外部から

特に性衝を刺戟せられない限り後家は通せるものである、從て性衝の多い中年期までの寡婦の禁斷生活が一番堪へ難いものとの理由も玆に見出せるのである。

兎に角吾々は婦人の絶對的禁斷生活その者が中樞神經系にそれのみで害を與へるものとは考へない。つまり性衝の抑壓を重ぬることが甚だしく中樞神經系を過敏にするのであつてそれが所謂禁斷症狀として世人から誤認されてゐるのである。性衝の極めて淡い時期又は全くの始めから烈しい性衝を經驗したことのない少女が、そのまゝ何も知らずに禁斷生活に入つて了ふことは、餘り多くの害を惹起するものではない。若くして修道院に入つたものや若い尼僧や結婚して間もはく寡婦となつた若後家などが案外よくその單調な禁斷生活に堪へ而も何も著しい神經障礙を來さないのを見ても分る。たゞ禁斷症狀の恐るべきは性衝の豐かな婦人が境遇其他の上から强ひられて孤獨の生活に入る場合であつて、此の際神經病的遺傳負因を有する婦人にとつては、性的刺衝による性的發動を持續的に抑壓することが長い間には甚だしく其の全中樞神經系が外的精神的(特に性的)刺戟に對して過敏症に陷らしめ遂には何等かの偶發的誘因に繼發して劇しい神經症的暴發症狀を發呈せしむるに至り、且永い間の努力的に禁壓を持續することの精神的緊張によつて遂には偏狹なる性格的の傾向を釀成するに至るものである。つまり之等の禁斷症狀は生理的身體的の必發症候ではなくて、境遇と習慣と體質とに基因して精神的に意識的に釀成せられたる一の精神緊張に基く後天的の神經病的傾向に外ならない。





女よ美しくあれよ

植田壽藏

美しい婦人が、一人でも、此世に多く成る事を、深く希望する私は、凡ての婦人達が、自分は美しく成らうと思ふ事、其爲に、出來る限りの方法を盡して努力する事を望むのである。だが、美しく成りたいと思はない婦人が此世に一人でも有るか、私は、有り振れた、つまらない、希望などする必要の、丸で無いことを、今更らしく希望するのではないか。さうかも知れない。然し、美しく成りたいと思ふ心は、まだ、美しく成らうと思ふ決意ではない、私は實に、婦人達が、明らかに、この決心に立つことを望むのである。けれども、夫れも、矢張り、無用の希望かも知れない。凡ての婦人達が、明らかにこの決意を持て、朝起きる時、人を訪ふ時、音樂會へ行く爲に外出する時、クリイムと白粉と、小い刷毛と、銀色の小筐と、綠色の液體を持つ小壜とを鏡臺に並べ、シユウ〳〵音を立てる絹と、しつとりと垂れる縮緬と、煙の樣な薄物を集め、若くは、集めたいと思ふのは、それを實現する爲に、夫と兄と母親の前に、特異なる雄辯を振ふのは、取りも直さず、この努力、この決心の現れであらう。美しく成らうと思はないのではない。思ふ心を、外に表さない、表すことを憚るだけであるかも知れない。怖らく之れが事實であらう。この要求とそれを實現する爲の努力が、如何に痛切に、如何に熾烈であるかは、さう言ふことを、如何なる婦人からも、嘗て一度も聽いたことの無い私にも、極めて明瞭に、染み徹る程の確かさに於て、察することが出來る。同時に、婦人達の多くが、美しく成らうと思ふこと、その爲に種々の手段を盡すと言ふことを、深き、どうしても已むことの出來ない、強き要求であるにも拘らず、夫れが何ものか、「恥かしきこと」を含むもの、虛飾、女の弱點、と言ふ樣な心に、脅かされてゐるらしく見える。美しく成らうと思ふ心の影に、その純一なる働き

を妨げる、心と心との鬪ひがあるらしく見える。私の想像は間違ひであるか。若し間違つてゐるならば、許して頂きたい。婦人達を敬愛はし乍らも、然も平日多忙の故に、省察することを怠つてゐる爲に、「婦人」を誤解する不明を、どうぞ宥して頂きたい。だが、もし間違つてゐないとすれば、——例へ少數の婦人達にでも、私が右に言ふ樣な、心の鬪爭を經驗する人があるならば、私が、最初に言つた「希望」は無意味ではない。私はその婦人達に、この樣な、心の鬪爭を去ることを希望しなければならない。婦人は、婦人が美しく成らうと思ふ心を妨げ、脅かす、如何なる暗き心からも自由に、純一に、朗らかに、さうして高らかに美しく成らうと思ひ、その爲に彼女に許された限りの手段を盡すことを望まねばならない。美しくありたいと願ふ心を、恥かしきもの、虛飾、女の弱點であるかの樣に思ふのは、根柢的なる誤りであることを、はつきり自覺する樣に望まねばならない。明らかに、美しく成らうと思ふ決心に立つことを望むと言つたのはそこの意味である。さうして、夫れを、私がかくも望むのは、夫れが、女に對する神の意志なることを知るからである。

□

神と言つては、信じない人もあるかも知れない。だが、一切の世界、人類の底に働く、——無限なる世界現象、無限なる文化の根柢と成る、大いなる力、大いなる意志を否定する人はあるまい。誰れにも、夫れを否定することは出來ない。人間が生活する爲に、種々なる「仕事」勞働に從事するのも、道德も、一切の學問も、みな、この力、この意志の「現れ」である。一切の文化現象は、この意志が自分自身の力によつて、自分自身の姿を拵へて行く過程なのである。婦人が美しく成らうと思ふこと、美しく成ることは、凡ゆる藝術と共にこの意志の現れであると、私は思ふのである。私が思ふではない、實にさうなのである。

學問に力を注ぐことを恥る人があるか。それは無い。ある筈がない。善なる行爲を憚る人も無い。その樣な人はあつてはならぬ。さうして夫れが、ある筈もなく、あつてはならないと言ふのは、人間が、夫れを缺いては、正しき、若くは十分なる意味の人間たることが出來ないからである。知識を研くこと、道德をいそしむことは、人間が、右に言ふ「意志」の、「器」に——謂はゞ目に成り、腕に成り、手足に成つて、働くことである。世界の根柢と成る意志は、人間の目を通して、初めて自分自身を見、人間の手によつて、初めて自分の意志を實現するのである。人間が、人間らしくあると言ふことは、彼れがこの意志の器と成ることである。夫れ故に、人は、物ごとを知らねばゐられないのである。知識が單に、心持の好

い音のする金貨や、手ざはりの好い幣紙に換はるからではないのである。若し夫れのみに學問をすると言ふならば、夫れは、學問、知識の意味を、よく知らないからである。人に賞讃せられると言ふ理由のみから善行を積むと思ふのと等しく根本的なる、忌避すべき、誤りである。善き行ひをするのは、唯だ、夫れが、善き行であるからである。夫れを通して、人間が、人間たることが出來るのである。夫れが、人間たることの意味、人間の義務なるが故である。義務とは、何ものに對する義務であるか。彼れ自らに對する義務である。同時に彼れの隣人に對する義務である。彼れ及び彼れの隣人として現れた、「大いなる意志」に對する義務である。義務とは、單に借りたものを返へすことではない。人の人たる意味である。女が美しく成ると言ふのは、彼女の、人たるが爲の義務である。美術の製作が、美術家の義務である樣に。

□

生活の爲の勞働、學問、道德の樣に、藝術も、また、人間の根柢的なる意味の一つである。人間たること——「人間性」の、根本的なる要素なる點に於ては、「藝術」は、更に廣く言へば、「美の實現」は、勞働、學問、道德と全く同じ市民權を持つ。之等の中のどれよりも低きものでなく、またどれよりも高きものでもない。凡て、之等は、均しく「人間たること」の一面である。その中の一つが他のものを凌ぐものでなく、一つがどれよりも輕視せられるものではない。屢々、人がその誤りに陷る樣に、自分により多く興味あるものを擧げて、他のものを貶すは、大いなる、怖るべき偏見である。人間性の高貴なる實現に對して、文化の健やかなる發展に對して、之れ程危險なる謬見は無い。藝術的なる、直觀の立場を誇張して、理論の世界が抽象的であることを非難するものなどは、この偏見の一例である。藝術を、若くは美的なる生活方式を溺愛するが爲に、不倫なる行爲を顧みないものも、その例は少くは無い。藝術を過重するのは、藝術を知らないからである。世界に於ける藝術の正しき位置を理解しないからである。藝術そのものに取つても、苦しき現象なのである。

だが、その逆に、勞働、學問、道德の如きものを重視して、藝術を輕視することは、藝術を過重する者よりも、遙かに多數なる人々の、しかも容易に陷る誤りであるらしく見える。多くの人が、藝術は「娯樂」の具であると考へる。「面白きこと」、「愉快」、「享樂」——凡て斯う言ふ種類のことが、藝術の與へる經驗であり、人生の、「活動」に對する、單なる「慰藉」であり、「眞面目なる仕事」に對して、「鬱を散ずる行樂」であり、「須要缺くべからざるもの」に對する、「贅澤品」であり、人生の「第一義的なるもの」に屬しない「第二義のこと」「末

薬のこと」、重要視するには足らざることゝ考へるのである。結局考へ方の精粗と深淺に種々の差別は有るであらうが、この様な筋書の思想を抱く人は、極めて多數に上るらしく見える。さうして之れは、例へて言へば、地球は平面であつて天は圓く、太陽が地球の東から西へ動くと考へるよりも、まだ進歩しない考へなのである。無論、この小い論文は、何故にさうであるかを論證すべき餘裕を私に與へない。唯だ「藝術の觀照、若くは、美の經驗が、常に愉快なるものであると言ふ考へが、先づ第一に誤りであり、從て、夫れが、如何なる仕事よりも樂であり、欝散と成り、娯樂と成ると言ふ考へが、非常な間違ひであることを知るのは、この誤りを脱する上の、一つの近途であらう。

自分は單に寢るべき家と、寒さを防ぐ外套と、飢から免れる食物だけが必要である。藝術、――美、その様なものは自分には、全く交渉が無い、と叫ぶ人がゐるかも知れない。けれども、その聲は、まだ彼れが美を要求しない、と言ふことの證據には成らない。彼れのポケットは、今一錢の貯へもないかも知らぬ。けれども彼れの周圍には、輝く太陽と、青き空と、緑の森と、美しき鳥の歌がある。飢ゑてゐる盲人の前に、金貨と二つの眼を差し出した時、彼れがどちらを引たくるかを、神でない私達の中、誰れが決定することの出來る人であらう。

少數の、深く美を求めない人がゐるにはしても、美の意味を正しく理解してゐない多くの人が、ゐるにはしても、美が人間に對して深き意味を持つことを否定することは出來ない。

繰り返して言ふが、藝術の創作、藝術及び自然の觀照は、生活の爲の勞働の如く學問、道德の如く、人間に對して重要である。凡て、之れ第一義の活動である。人間性の、根柢的なる一面である。

□

婦人が美しく成らうと思ふのは、實に、この深き根柢に立つ、人間性の現れなのである。美的、藝術的活動の一面なのである。人間性の高貴なる一面の、一つの姿なのである。藝術の種類は多い。創作と觀照の方式は無限である。美が、人間を通して現れる形式は、無限に複雜である。婦人が、髪の形を様々に工夫するのも、美しく化粧するのも、光澤のある着物を選ぶのも、凡て、この美的、藝術的活動の一つの方式である。私は、彼女達の美しき努力の後ろに、純眞なるものゝ力、坐ろに襟を正さしめる、嚴肅なる意味が含まれることを知るのである。

それにも拘らず、彼女達が、さきにも言ふ様に、之れを恥らふかの様に察せられるのは何故であるか。夫れには様々の

理由があるであらうが、一つは、美とか、藝術とか、贅澤、奢侈、虚飾、枝葉事であると考へる樣な、久しきに亙る偏見が、婦人達にも染み込んでゐるからでもあらう。第二は、夫れが、怖らく、性的問題に、關聯する點があるからであらう。然し、私は、今その問題に立入ることを好まない。唯だ、明晰に區別して置くべきことは、婦人の美しい、若くは美しく成ることが、種々なる意味に於ける婦人の利益の機會、幸福の手段の如きものと成る故に、彼女が美しく成らうとすることに、深き意味があると言ふのでは、決して無いと言ふことである。之れは、極めて明晰に區別して、決して混同しない樣にして頂きたい。婦人の美しいことが、彼女に何の幸福を齎すか、齎さないか、良緣の機會と成るか、さう言ふことは私の問題でなく、又、私の、よくは知らないことである。私の言ふのは、婦人が美しく成らうとすることは、そのこと自身彼女が婦人たる上の、貴き意味なるが故に、それを實現する樣に力を注ぐべきであると言ふことである。誰れかゞ見る故に、他人に見せる爲のみに、美しくすると言ふのではない。唯だ、美しく成らうと思ふ爲に、美しきことが貴き故に、唯だその爲に、美しくするのであると、私は言ふのである。無論、自分の美しい姿を、他人に見せたいと思ふ心を、私は咎めようとはしない。唯だ、人が見て喝采し、賞讃し、羨む爲に、その勝利者の誇りを味ふ爲に、美しく成らうと思ふのは、美的には誤りであり、道德的には、卑しき欲望である。

□

私は、實に、この樣な意味で婦人達が、一人とも、さうして少しでも、美しく成らうと努力することを望む。彼女が美しき着物を着、髮を美しく結ひ、美しい面持をしてゐることを切に望む。またしても言ふが、美は人間の貴き意味の一面なるが故である。

然し、私は、言ふまでも無く、「美」と言ふ言葉を、嚴密に、美學の解釋する意味で用はねばならない。さうして美學の解釋に據れば「美」とは、(多くの婦人達が、さう言ふ樣に解釋してゐるのではないかとも疑はれる樣に)「高價」と言ふことと同じ意味ではない。「產出額の少い品」と言ふ意味でもない。確かに、絹物は概して木綿よりは美しい。銀匙は、アルミニユムの匙に比べて、價が少し高い許りではない、齒と舌に與へる觸覺が、より滑らかに、より柔らかく、より纖細である。けれども無論、價の高いものは、常により美しいとは決して限らない。のみならず、それ等の材料が、どういふ色と形を與へられるかによつて、又、それがどの樣に使用せられるかによつて、美醜の關係は無限に複雜に成る。厚い、大きい、黃色い、生溫い黃金の指輪に比べては、暗綠色の硝子を嵌めた細そりとした銀の指輪は、遙かに、淸麗であり、且つ靜冷である。その大いなる黃金の指輪が、竹筒の樣に、幾つも

指に喰付いてゐるのは、唯だ淺間しい許りである。

私は、婦人が化粧臺の前に坐つて、美しく化粧することには、嚴肅なる意味があると言つた。けれども「美しい」とは、(私は、玆で、特に婦人達の注意をお求めするが)、光澤の輝く着物と、シウ〳〵音のする帶と、芳香の高い、ヱエルとを身に着けることには、——身に着けることだけには限らない、かう言ふものゝ美は、概して言へば「感覺的なる美」と言ふものであつて「美」と言ふものゝ、廣い〳〵世界の、若くは、實に澤山な種類の、單に一部に過ぎぬのである。白い皮膚、艶かな黒い髮なども「感覺的なる美」を持つものとして見られることが多いのである。「美しき人」とは、更に、三日月の樣な眉と、大きく見張られた黒目と、細い高い鼻と、小い口と、流麗なる輪廓を持つ頰と、小い手、細い指、長い脛を持つ人のみを言ふのではない。決して、その樣な人達のみを、「美しき人」と限るのではない。それは、唯だ「古典的なる美」若しくは、もつと廣く「優美」と總稱するものゝ、しかも單なる一面であつて、之れも、また廣き美の領土の單に一部に過ぎないものである。

一體、どの樣な美が、まだ、この外に殘るのであるか。だが、この論文を書く爲に多くの時間を用ひることを許されてゐない私は、樣々な美の、大體の種類だけをでも數へて見ることが出來ない。唯だ、その中で、美學によつて「崇高美」と名付けられる一種の美を擧げる。然し、この美にも、また樣樣の小い分類がある。玆にはその中の、「氣高さ」と言ふ一つの崇高美を取出して見る。さうして、夫れを、凡ての婦人達が、洩れなく求むべき美であることを力說する。

□

氣高さと言ふのは、感覺的なる美に對して「精神的なる美」と言ふものゝ、一種であつて、感覺的の美や、優美の外の、美の重大なる一面である。之等の中の、どれが一層高き美であるか、——この殊に興味ある、また實に氣に懸る問題は、今迄の處では、まだ、明確に決定は出來てはゐない。唯、一つ明らかなことは、昔から、偉大なる美術、卓れたる作品と言はれるものゝ、凡てゞはないかも知らないが、極めて多くは、崇高なるものを、何等かの姿に於て、含むと言ふことである。換言すれば、人類の美的要求に取つては「崇高美」なるものが、極めて重要なる位置を、昔から占めて來たことである。氣高さと言ふのは、その「崇高美」の一面なのである。私は婦人達が、生來の容姿によつて、感覺的に美しく、もしくは優美である外に、或ひは、ある上に、崇高なる女、氣高き女たることを、實に、望むのである。

如何にして氣高き人であり得るか。夫れには、白粉と、クリイムと、香水と、美しき着物とは、不思議に効能が無い。若くは、薄い、氣高さを得ようと思ふ人は、その美がどこに現れるかを知らねばならぬ。それは、確かに、優美や感覺の美の樣に、額や鼻や顏の輪廓などの「形」にも現れる。然し、

わが婦人達の、懸命の努力と雖も、之等の「顔立」の形を改作することは出來ない。けれども、幸ひに、氣高さの美は最も普通に、表出として現れる。顔に於ては、目、眉、口、及びその運動に關聯する周圍、及び身體の動き得る部分に於て種々なる表現として現れるのである。目の開き方、物を見る見方、瞳の光、口のつむぎ方、頸の保ち方、身のこなし、足の運び方、その遲速、手の突き工合、膝に置き工合、さうして殊に、目覺ましく、言葉の使用に現れるのである。この表情と動作に宿る美は、白粉と美しき着物では如何ともすることが出來ない。唯だ、この表情と動作を喚び起す、そこに現れる、彼女の人格による外はない。最後は實に、この人格である。顔の形と、身長と、その他の外形が、みな、「生れ付き」であるやうに、この人格もまた先天的である。美しい姿を持てる人がある樣に、髪を結ふことが上手な人がある樣に、着こなしの上手な人がある樣に、物ごしの氣高い人がゐるのである。どちらの性質が豐かに賦與されるかは、唯だ、神の思召である。けれども、神は、總ての婦人達に、教養によつてその天性を發展せしむべき義務を命じて置いた。教養によつて高める餘地を殘して置いた。私は、そこに、大いなる希望の輝きが凡ての婦人達を待受けてゐると思ふ。如何にして氣高き女たり得るか。

□

私は、茲に、その方法の詳を考へて見る餘裕と、準備とを持たないことを殘り惜しく思ふ。唯だ、一言に盡せば、第一に、氣高きものと卑しきもの、區別を知らなければならない。卑しきものに堪へ難き心を得なければならない。崇高なるものに充されてゐる、自然と人と、種々なる藝術を味解することは、最も目覺ましき機緣であらう。

道德と美は、全然同じものであるとは言へない。然し、美は道德の象徵であると言はれる樣に、美と道德は、深き人間の祕底に於て、互に結び付いてゐる。若くは、多くの點に於て親密なる關係、一致する點を持てゐる。ことに、崇高美と道德との關係は深い。道德的に卓れたる品性は、美の立場から見る時に、殆ど常に、崇高なる人として現れるものである。本來、藝術を見ると言ふのは、唯だ、見る爲に見るのであつて、美しく成る目的の方法として見るのではない。道德的に善き行を勵むのも、夫れが唯だ、善き行ひである故にであつて、氣高き風采が得られるからでないことは言ふまでもない。唯だ、純粹に藝術に親しむ中に、德の爲に德を研いてゐる中に、自然と、「氣高さ」が現れ出でるのである。

「氣高さ」が「崇高美」全體でなく、また「崇高美」そのものが、精神的の美の全體で無いことは、さきにも言つた通りである。美しき顔や姿は「優美」の一面であると言つたが、その「優美」にも、精神の教養によつて克ち得るものは少くない。けれども今は唯だ一つの「氣高さ」に限つて見るが、氣高き人は眞に幸ひである。譬へ、彼女に、感覺的に美しき着物と

顔立と、姿が缺けるにはしても、彼女の表情と動作の中に、「崇高なるもの」の閃く人は幸ひである。無論、私はこの樣な意味で美しい婦人が、如何に男子の歡心を得るか否かを知らない。だが、その爲に、それを目的に、美しくありたいと思ふ婦人は、凡て、私の問題に入り來らない婦人達である。私が彼女達を幸であると言ふのは、古來の天才が殘して置いた、偉大なる美術と、質を均しくする美を所有するからである。ミレエのかいた百姓の女達は、粗末な布を冠り、質素な、寧ろ見すぼらしい着物を身に付けて、無骨な木沓を履いて、羊の守りや、臺所の仕事などをする。然し、彼女の顔と態度には、神の如き、愛、純眞、崇高が輝いてゐる。レムブラントは、整はない姿、不細工な顔の女達をかいた。だが彼等には、淨き、大なる、深き心が息づいてゐる。フインセント●フアン●ホッホやセザンヌは、不恰好な顔と、窮屈に身體を屈めた老婆をかいた。さうして夫れには純潔、素朴なものが現れてゐる。ラフアエルやティチアンなどは、之れ程美しい女達が、實際の世にあるかと思ふ程美しき人々をかいた。さうして彼等にも、神々しきもの、氣高きものが輝いてゐる。

この世に於て、私達は、皆、樣々の意味で不如意勝ちである。「美しき人」たることも、樣々の事情に阻まれ勝ちであらう。だが、言ふまでもなく、譬へ美の一面をでも、一足をでも、その實現の方向に進めねばならない。如何なる「外の事」の爲にでもなく、唯だ、人間の正しき意味の爲に。

□

私も、生活の爲に働く婦人達を勇ましく思ふことには人後には落ちない。さうしてそれが、女の爲に、自由、解放、向上を求めることゝ共に、彼女達の貴き努力なることを知る。彼女達の爲に「女」である爲に「女」の受取り得るものを、さうして彼女自身と彼女の隣人を害することなしに、彼女の保ち得るものは、凡て惜しみなく與へるがよい。けれども夫れを受取る爲に、彼女の既に持つてゐる、貴重なる所有が失はれてはならない。冗費は、婦人達と雖も節約しなければならない。だが、節約とは、單に、白粉を廢して米を買占める意味ではない。私は特に、婦人達が、徒らに、古き生活樣式の繋縛を受けて、無意味なる勞働と、時間を浪費する不幸を免れることを望む。彼女が、節約し得たる時間と身心の餘裕を、彼女の化粧と、どうして、安價なる材料を用つて、美しい、氣品の高い着物を調製し得るかを工夫する爲にも、心置きなく使ひ得る樣に。

無論、その餘裕の一半は、知識を深める爲にも使用せられねばならぬ。さうして、夫れによつて、種々なる意味の教養を高めると共に、婦人達が、感覺的にも精神的にも、美しき人たることが、人間性の完成に對して、如何に嚴肅なる意味を含むものであるかを、彼女自ら、明確に覺らねばならない。（十一月十七日、了）

戀愛は運命の重荷

松岡譲

一般に戀愛といふ丈が至上のものかどうか、世の中の大概の問題が分らないやうに、これも矢張り自分には分らない。解らないが、自分の感じから言ふと、至上のやうでもあり、至上でないやうでもある。と言ふよりも、至上と感じる時もあるし、至上と感じない時もあると言ひ代へた方がよいかも知れない。

戀愛至上と感じる時は、滿身これ戀愛といふ境地の自分を見た時である。この時許りは誰しも戀愛を至上と認めるであらう。恐らく認めぬわけには行かないだらう。しかしそれは戀愛で滿腹してゐるその時丈のことである。生きたこの身が一所にいつまでも止まつてゐられるわけのものではないから次の瞬間には、人は又次の境地に移る。その時自分は最早戀愛を至上だとも何とも感じない。

戀愛至上といふことが言ひ得るとすれば、たゞかういふ主觀的の感じの上から言ふことが出來るかも知れない。しかしこれは主義といふものでも何でもない。たゞあく迄も一時的の感じである。時には無精に金が欲しいと思ひ、時には非常に美食がして見たいと思ひ、時には心から狗が可愛くなつたりするのと餘り變らない。勿論程度に深淺强弱の差はあらう。さうして戀愛は多くの場合最も深い最も强い印銘を、人の心に刻みつけて行く。からと言つて至上最高のものだと言ふわけには行くまい。

かういふ主觀的の感じの上から言へば、金權萬能の先生達が無闇に金を愛したり、常に虛榮を念としてゐる人達がたゞ名譽を欲したりして、金權至上を叫び、名譽を生命なりと信じてゐるのとどれ程の差異があらう。同じくそれを自分にとつて絕對であると信じてゐるのに變りはない。變りがないとすれば、あれも至上であり、これも同じく至上である。至上がそんなに澤山あるのは、一つ切りで結構な筈の日本一が澤山ある格で甚だ可笑しい。

戀愛を至上と感じる時もあるし、感じない時もある。主觀的に言ひ得ることはたゞこれ丈である。これでは主義でも何でもない。これを主義に立てれば、そこに無理が入つて來るに違ゐない。

大體から言ふと、主義といふものは變なものだ。大概最後の一つも二つも手前のものにそんな名がつけられてゐる。人間生活の最後のものは、中々一本の「主義」といふ繩ではしめくゝりが付きさうにない。人間生活そのものに直參しやうといふものには、餘り「主義」に用はなささうだ。但し大人の玩具としては至極便利のものではあるらしい。

主義にとらはれるといふことを考へる度に、いつもあの昔の丹霞といふ坊さんの故事を想ひ出す。ある寒い冬の日のとであつた。庵主は外出して下留守である。餘り寒いので丹霞は焚火しやうと思つたが、薪も何もない。そこで佛壇の中から木佛を引きづり出して、庭で燒いて尻あぶりをやつて居た。ところへ庵主が歸へつて見るとこの仕末だから「佛を燒いてどうする氣か」と尋ねた。と丹霞が言ふには「佛を燒いて舍利を取るのだ」と答へた。庵主は「木佛に舍利のある筈はない。馬鹿なことをするにも程がある」と言つて、非常に立腹した。と忽ち庵主の耳や鼻やが落つこちて、顏がかつたい坊のやうにくづれて了つたさうだ。庵主は主義に捉へられてゐた捉へられてゐるものはいつも不幸だ。戀愛は時には至上であり、時には至上でない。それを戀愛至上主義だといふ、故[illegible]。先づ此の庵主にならない用鎮が肝要だ。

が又強いて丹霞を眞似るものがあれば、これも亦主義に捉えられたものである。これも同じく支那の昔の坊さんで倶胝といふ人の話である。「無門關」の名文を其儘引いて見やう。

「倶胝和尚、凡そ詰問あれば唯だ一指を擧す。後に童子あり因に外人問ふ「和尚何の法要をか說く。」童子も亦指頭を竪つ胝、聞いて遂に刄を以て其指を斷つ。童子負痛號哭して去る胝、復た之を召す。童子首を廻らす。胝、却つて指を竪起す童子忽然として領悟す。胝、將に順世せんとす。衆に謂つて曰く「吾れ天龍一指頭の禪を得て一生受用不盡」と。言ひ訖つて滅を示す。」

これは有名な「倶胝竪指」といふ無門關の第三則であるが、自分の心の入つて居ない物眞似では、終にはこの童子のやうに指を切られて泣かねばならない時が來るかも知れない。

一體自分は何々主義なるものを好まない。戀愛至上主義なんぞも、勿論好まない。けれども熱烈に戀してゐる相手と結びつくことは、極めて自然のことで、此意味に於いて、自分は滿天下の男女がすべて戀愛によつて結合することを、又結合すべきことを望むものである。が戀愛には多くの場合、當事者同志の間は別として、第三者との間に問題が起りたがるものであ

る。其場合はどうするか。と言へばそれはそれぞ〜の場合に於いて臨機に處する外に途はあるまい。勿論他を害ふことなしに、戀愛が完全に成立すればそれに越したことはない。しかしさうした場合は却へつて異例であらう。

人を害ふことなしに、自分の戀愛を完うしたいものだと誰しも思ふだらう。思ひつゝもそれは中々出來難い。この世の中は不調和に滿ちてゐるのだから。己を通せば、他が傷く。他を通せば己が斃れる外はない。そのいづれを擇むかは、當事者の性格や信念によるだらう。

しかし誰しも先づ生きねばならない。己が生きる爲めには不本意乍らも他を顧慮してゐられない時がある。かういふ場合の行動はそれ自身としては善でも惡でもない。たゞそれに連關した一切の責任を負ふ丈の覺悟がなければならない。

自分はいつもかう考へては戀愛を一種の重い荷物だと思つてゐる。人がこの不調和な世界に於いて、熱烈に戀し戀さるるといふことは、取りもなほさずそれ自身一種の運命だと思つてゐる。自分達はその運命の重荷を背負つてゐるのである。仕方のない、自分の力ではどうすることも出來ないものとは思ふが、それを至上だとも最高だとも思つてゐない。與へられた一つの嚴粛な事實であるといふに過ぎない。

純粹な熱烈な戀を見る時、自分はその戀ふる人の上に惠まれた生活が下されるのを望む。さうしてある宗教的の感激をうける。或は宗教的體驗のうちに、戀愛の持つ同じ味が含まれてゐるのかも分らない。自分は兎も角純粹な戀愛といふものゝもつ尊さ、嚴粛さを感ずるものである。しかし人生に於ける尊い嚴粛な事實は、たゞ戀愛のみには限らない。戀愛も多くの嚴粛な事實のうちの一つでしかない。がその一々の事實のうちに本當の意味を認めて行くことが、やがて人生全體を意味あらしめることであらう。かうした一つ〳〵の事實を措いて、人生は外にない。が特にその中の一つ丈を取り上げて、他の一切を捨て去るやうなことは、餘りに偏頗でもあり、又不忠實でもある。強いて戀愛至上を叫びたければ、人生の他の一切の事實も亦同時に各々至上最高であらねばならない。戀愛のみの至上といふが如きことは、結局戀愛を殺すこととならう。何となれば戀愛も亦生活に培れたものであるから。

禪語に滴水滴凍といふ言葉がある。桶の中から一滴づゝしたゝる水が、立ち所に一滴づゝ凍つて行つて、終には水全體が凍るといふ意味であるらしい。自分が今人生の一滴である一つづゝの事實を、あく迄も有意義に見て行きたいといふのは、この一滴づゝを凍らして行くことである。一滴づゝを凍らして、遂に全體を凍らして了う。自分は人生に對して、かうした態度で進んで行きたいものだと思つてゐる。この眼で見れば、至上最高のものは、單に戀愛ばかりではない。

女教員凌辱につき

千葉亀雄

金力によつて、權力によつて、數へきれぬほどの無數の女性が、昔から現代まで、男性によつて Violate されて居る。Violate するとは、その男性が、少しも相手の女性の合意をいたはり、尊敬せずに、いな尊敬するどころか、むしろ其意志を無慘にも踩み躙つて、肉體の神聖を冒瀆することである。妾婦、娼婦、密賣娼、或る場合には、森厳なるべき結婚制度にさへも、この力が利用される。かゝる場合では、金力も、權力も、一つの暴力に過ぎない。然るに長い間の社會組織はさうした暴力の使用者を、さも命ぜられた代表者のやうに考へて、少しも怪しむことをしない。またその相手になる女性達が、その暴力をすなほに享け入れ、遂にはその暴力に麻痺してしまふところの、人格的自覺の稀薄にも、世間は何等の矛盾をも感じない。むしろ斯るものは、男性性慾の緩衝機關としての、止むを得ない自然の人生だとまで黙許して居るやうに見える。

然るにこゝに一人の女性がある。深夜一人で自宅へ歸る時分に、醉拂つた一人の西洋人に襲はれた。彼女は弱い女性に在るだけの力によつて、抵抗を試みたにかゝわらず、遂にいたましい暴行をうけた。かゝる多くの場合には、どこの國でも、婦人は大抵その「名譽」といふもののために公やけにしないのが普通である。然るに彼女は、「私は私一人のことなら構ひませんが、名譽ある外人が、あんな暴行をするのですから私は日本婦人の全體の名譽の爲に訴へた譯で」あるといふ。私なら、「名譽ある外人が、あんな暴行をする」ので訴へるとはいはない。從つて「私は日本婦人の全體の名譽の爲に」などと、それを國家的な問題などまでに延長して、訴へはしないであらう。それは國家の問題としてよりも、個人格の問題としてなほ重大なのである。そこで私なら、婦人の弱さを利用する男性の暴虐に對して、女性たる自分の人格の尊嚴の爲に權利の爲に、訴へるのだといふであらう。それはどうでもよ

い。彼女が今法律に依頼してまで、自分の人格の汚辱を取り戻さうとする强い意志は、彼女がどこまでも、女性に於ける貞操の尊嚴――それは妻としては、夫に對する處女性であるものの尊さを、極力保護しようとする心理の表現でなければならない。尤も、たとへ法律の力で、どんな高價な賠償を彼女が獲たにしても、それは彼女の享けた損害と心のいたみとは、全くちがふもので、それは永久に取り戻せる性質のものではないのであるが。……少くともこの一事は、男性の暴力の前に於ける貞操の忍從を、一つの運命と肯定するところの前にあげたやうな多數の女性達が棲む現實の世界にあつて、たしかに大きな示唆を與へるものでなければならない。

然るにその後の新聞紙は、「被害者の夫が、深夜婦女子を路傍に殘して、一人歸宅したといふ責任があるにも拘はらず、夫とその親戚一同は、被害者のみを責めて、不人情にも旣に離婚問題を云々してゐる」と傳へる。それはどういふ事であらう。

多くの無數の暴力の行使がさう大目に見のがされ、また多くの女性の、かゝる暴力の前の忍從が少しも怪しまずに通過されて居る世の中に、いたましい不可抗力の犧牲となり、なほそれに反抗してやまない彼女のみが、何故、唯一の所依たる夫と、その親戚からまで汚女視されて、浮ぶことの出來ない社會の底に沈まねばならぬのであるか。

凡そ世の中での一番いたましい事は、自分が少しも責任のない禍を受けるよりいたましいことは少ない。隣家の火事で類燒されるとか、何とか、それはどうとも仕ようのない不可抗力である。彼女の慘事もまた一つの不可抗力である。造物主が女性を男性より力弱く生んだのは、男性に都合をよくする爲であるか、それはどうでも好い。思ひ掛けない男性の暴力の下に、弱い女性が打負けることは、生物學の自然として全く止むを得ない現實であらう。そして女性が男性の暴力に征伏する場合が、女性の何よりも尊といものとする節操の征伏である時が一番いたましい。けれども凡ては女性の意志の少しも加はらない不可抗力である。ましてやその女性が、最後までも反抗しつゞけたといふならば、それ以上に肉體上や道德上の責任と批難を彼女に負はせ得るものはどこにもない。單に責任を負はせられぬばかりではない。その女性こそは、多くの女性の享け取る中の、最も悲運な禍を受け取つた、悲しくえらばれた一人と云はねばならない。そしてその女性が自分の人格の尊嚴に對し、自分の貞操の神聖を感ずる程度が深ければ深いほど、なほ一層その悲痛と苦悶は大きく深いものになるであらう。殊に貞操といふやうな相對的なものの損害は、理知でいくらそれを不可抗力であつたと肯定しても、

自他の感情の上に掩ひかゝる暗さと淋しさをどうともすることが出來ない。さうした女性に當面した場合に、心の底からその痛ましい境遇を理解し、その女性の、いわれのないさうした悲痛を慰さめ、且つその苦悶を捨てさせる人こそ、もしその女性が妻ならば、それはその夫たるべきものの、深く强い愛でなければならない。然るに神戸の場合では、その夫なり、家族なりが、この哀れな女性を憎惡し、忌み、井戸へ拋り込まれた者に、なほその上から石を拋げ込まうとするのである。

彼等がそんな方針を採り上げようとする心理は、もとよりわからぬことではない。それは彼女が不可抗力と考へるものを、彼等が不可抗力だと考へぬ爲である。卽ちその不可抗力でないものを直ぐ不可抗力と考へて了つたところに、彼女の何等かのルウズな道德觀念、もしくは貞操觀念があるのだと彼等は考へるであらう。または不可抗力なら不可抗力でもよい。何にせよそんな汚辱を受けた婦人が、それを一つの不可抗な運命とあきらめて、何等の不滿もなく、社會の底に沈んで行く事は、理窟なしに、昔からの日本婦人の人生だつたとも彼等は解釋するであらう。更にまた、それは不可抗力としてもよい。貞操と處女性が暴力で破壊されたことは、女性そのものの精神的自殺であるばかりでなく、肉體的にも亦た死滅を意味する。だから昔の日本婦人は、一たび辱しめられゝば、その理由が何であるにせよ自殺して男性に謝罪した。自分のいたらなさが、かうした悲惱を敢てしたといふのである。今彼女が肉體的に死滅しなくとも、社會的に葬むられてよい根據がそこにあるのだと彼等はまた考へるのであらう。少なくとも舊日本を流れた道德は、いつもかゝる場合の女性に對して、そのいづれかの採決を容赦無く促がした。彼等もまたそれによつて彼女の自決を促がさうとして居るのである。けれども注意せねばならぬことは、さういふ倫理は、萬事を死をもつて解決した舊い時代のものであり、生の重大と價値を少しでも理解し得ない時代であり、また人間自己の合理性な生活を重んずるよりも、むしろ、他人との體面の交渉によつて生きた時代の倫理であつた事である。またすべてを非人間的な、世間の義理によつて生きた時代の倫理でもあつた事である。

女性をして、貞操をまもること死の如くあれと敎へる事はもとより正しい。それほど貞操は尊といものなのである。その尊とい處女性を、怪我にでも汚された事は、彼女にとつて死ぬよりも苦しい事に相違ない。しかし死ぬよりも苦しいといふ事と、それだから死なねばならぬといふ事は全く意味が違ふ。自分に少しの責任もなくて、死ぬほどの苛責を受けた

ものだから、夫たり、その親戚たる人々は、なほます〳〵彼女の生を愉快なものに取戻さねばならぬといふのが寧ろ私の結論である。また正しく人生を見詰めるものならば、彼女の場合の不可抗力は、全く彼女の力め得る最後のものであつた事を潔よく認めて、彼女自身に懐く苦痛の上に、更に社會からの侮辱を加へることを正しいとは認めぬであらう。かくして人は、唯だ彼女に、貞操からも、道徳からも心理的にも少しも非難されるところのない、一人の氣の毒な女性だけを唯そこに發見するであらう。

たま〳〵現れたのが彼女だけである。そして彼女が標的となつた。しかし我等のやうな新聞記者の當面には、彼女を通じて、同じやうな無辜の悲痛に悩むところの、同じ運命に逢つた無數の女性がかくれて居る。そしてそれ等の人々は、大抵酷い歪んだ道徳觀の監視の下に、諦らめて社會の底に沈んで了つて居る。單に往來で、折惡く狂犬に嚙まれたといつたやうな、そんな全く氣の毒な單な事情の爲めにである。その多くの無辜の人々の爲にも、一人の山本はな子は、決して此の錯誤した社會道徳の下に埋沒せしめられてはならない。

もし夫れ生物學上の見地はわからぬ。たゞ、肉體を通じた夫婦の氣まづさをどうするかと云ふ。…… しかしそれが何であらう。この世界に、かつては過去の肉と心を、幾百の人に捧げた娼婦を妻とする人々さへもがないといふのか。もつと純に、嘗て、熱愛しあつた夫を失つたところの、寡婦をめとる人がこの世の中に無いといふのか。さういふ事が異議なしに許されるならば、山本はな子の問題の如きは殆んど問題にさへならない。罰せらるべきものは、自ら意識して汚した貞操である。彼女は汚された。しかし彼女は決して汚れない。

戀愛の理想價値について

石原純

私たち人間の生命はひとりその理想價値によりて高められなくてはなりません。私たちはこの理想價値を聖と美と眞とに求めます。

聖なるものは私たちの生命を淨めあらゆる汚れを取り除いてこれを永遠に導きます。

美なるものは私たちの生命を快くしこれを慰め生々としたあらゆる活きの力を之に與へます。

眞なるものは私たちの生命を聽からしめあらゆるものの本當の姿を私たちのまへに映さしめます。

聖と美と眞と、私たちはもとよりそれらをたゞ理想に於てもち得るばかりではありますけれども、しかも私たちが之等の理想の可能を信じ之を體驗せんと努むることが、私たちの生命向上の源泉でなければならないことは明らかです。

私はいま之等の關係についてこゝに述べようとするのではありません。謂はゆる戀愛なるものの本質が斯やうな理想價値として美の一部に屬することを示し、そしてそれが他の究竟的理想價値と決して矛盾しない完全なる調和を形づくり得ることを指摘したいと思ふだけであります。

聖と美と眞との理想は神の國に於て實現せらるべきものであり、そこにはひとり完全なる調和が見られはしますが、矛盾は決して存在し得ないのです。すべての矛盾は私たちがそこに到達し得ないことに於てその原因をもたなくてはなりません。

自己意志の存在しない自然は卽ち神の意志のその儘のあらはれとして美の表現の一つでなければなりません。私たちはそこに神の或る斷面を見ることが出來るのです。（自然科學がかやうな自然のうちに眞を求めてゐるのもこの故であります。）之に反して自己意志の與へられた人間に於ては神のより深い意志として解せらるべきたくさんの缺陷をもつて居り、人間みづからはそのなかに×××美をもとめ、また聖と眞との理想境を彷彿して神の國を建設すべくつくられてゐます。私たちは私たちの所有してゐる本能的感情のなかに何れが最も美の理想に近いものであるかを××して之に赴かなければなりません。

私はこゝで云はうとする問題に入るために、先づ愛が美の理想の一つの形に屬することを擧げたいと思ひます。恐らくはこのことを疑ふものは私たち人間の誰にもあり得ないことであらうと信ぜられます。愛は絕對的究竟的價値判斷の意味に於て美であり、人間お互の現實行爲に關する相對的價値判斷の意味に於て善であるのです。

愛のこゝろのあらはれは併しいろいろな形に於てなされます。その對象の異なると共にそれはおのづから異つて來なければなりません。神に於ける聖なる內容をつくる愛はみづからその愛を他に及ぼすだけであつて、之に對する何等かの報酬をその對象に希求することはありません。かやうな行爲はそれ自ら旣に聖であり美であるのです。私たちが自然に對して感ずる愛はこれと同樣な意味で成り立つことが出來ます。無心な子どもを見るやうな場合にも私たちは同樣な感じを得られるのです。けれども私たちが他の人間に對する場合に於ては、それが自分と同等のものであることを認むる點に於てそしてまた個性的相違のあるたくさんの人間が存在し、一つの社會をつくつてゆくと云ふ關係に於て、お互の交涉に關する多くの他の要素が之に這入りこんで、前の場合とはすつかり異つた形をもつてあらはれます。若し私たち人間同志の愛が自然に對すると同樣に成り立つべきものであるとするならば、卽ち何等の報酬若くはもつと廣い意味で反響を希求することなしに存立すべきであるとするならば、それは少くとも對立的人格を無視したものでなければなりません。人格的交

渉としての人間相互の愛がその本質的關係に於て既に前者と異ならなくてはならない所以はこゝにあると私は思ひます。

かやうな意味で人間相互の愛は、その對象者の愛のこゝろによりて酬いられることによりて成り立つと云はなければなりません。そしてこの酬いを希求することは決して卑しむべき若くは殊更に避くべきものではなくて、却つて人間相愛の理想に協ふ處なのです。もとより眞實の愛はその酬いを求めることなしにおのづから酬いらるべきものではありませうが、愛に對するに憎惡をもつてせられる場合には、何等かの點に於てその愛が完全でなく、又は誤れる方法を之に含むことが反省せられなくてはなりません。この場合に愛の酬いを求め得るやうに之を訂すことは正當なことであります。對象者の人格の備はらない點に之を見出すとしたなら、自分が出來るだけ之を導くことに努むべきは勿論でありませう。けれども私たちの各はやはり缺陷をもちまた限りある能力をもつてゐるものです。自己に對する反省が必要であると共に、又一方に自分の努力がその目的感化を遂し得ない場合に之を悲んでしかも暫らくその愛を見捨てることは亦止むを得ないことでもあります。

人間相愛が男女兩性の間にあらはれ、そしてそれが特種の强度に於て對象者の全人格を必然的に包容する場合にこれを戀愛と名づけたいと私は思ひます。男女の間の愛であつてもそれが謂ふまでもなく單に友情的であることの出來るのは勿論であり、また私たちは人間相愛の理想に於てすべてのものの間に之を求めなくてはなりません。併し又一方に戀愛が××を伴ひ若くは之を目的としなくては成立し得ないと云ふ理由を私は見出し得られません。×××戀愛に關する動作としての單なる一つのあらはれに過ぎないのであつて、その外の戀愛行爲としての抱擁接吻若くは精神的交情と相等しいものでなければなりません。只×××他と區別される所以はそれが新らしい生命を創造し得る點にあるので、之に伴ふ肉體的快樂と感情的錯綜とは戀愛に關する限りに於て全然獨自的のものではありますまい。

ともかくも戀愛は性愛的本能に刺戟されて愛の本質的價値を最も强く最も深く體驗せしむる點に於て、あらゆる愛のう

ちに輝かしい焦點を形づくるものであります。そして私たちの生命を美しく飾り、またその力を育くむことの出來るものです。若し一般の愛を美なるものとしてゆるすならば、上の意味に於て戀愛は特に私たち人間に與へられたその最も著しいものとして讃美せられなければなりますまい。誰がそれを卑しむべきものとして斥け得るでせうか。私は戀愛そのものに至上の價値をおくことに躊躇しないものです。

戀愛は併し二人の異性の間に成り立つものです。異性の間にその愛がかやうに高調し得る所以は兩性存在の深い意味のある處であり從つて亦その特質的行爲たる×××關聯しないものではありません。×××人間の呪はしい行爲の一つであるとして自ら悲み、これが爲めに人間が神の樂園から追はるべきものであるとする正當な理由を私は遂に見ることが出來ません。××は寧ろ神から與へられた人間の一つの大きな愉悅です。それによりて私たちの生命は至大の歡喜を喚ぶことが出來るでもありませう。それが僞らない素朴な純眞な心に自然の姿としてあらはれることは謂ふまでもありません。これを卑しむのは神に對する冒瀆であり、自己に對する不純でなければなりません。況んやそこに私たちは神それみづからの旨を承けて新らしき生命の創造に與かるに於ておやです。私はそこに人間の行爲のうちの最も神聖視さるべきものを見ずにはゐられません。

性交を卑しむべき事がらとしてではなく、却つて最も神聖なるものとして解することに於て、私はその解釋の正しさを信ずるものです。只その神聖なるが故に之を濫りにしてはならないのです。恰も聖なる神を拜するに當りて先づ一切を潔めなければならないと等しく、性交にたづさはる前に、之を至當な結果としてゆるさるべき至純なる戀愛を準備しなければなりません。自己の利益のために神の禮拜を行つてはならないごとく、戀愛を動機としないで性交を行ふことは深く誡つたものであります。それがたとへどんな兩性の間になされやうとも、神のまへに正しいものとせられるわけにはゆきません。

戀愛は異性相互の感情に外ならないのです。この感情を由來する自然的な事由に依ることなしに、之を求めることは、謂はゆる木によりて魚を求めるのに等しい愚擧です。社會的の規約としての法律や道徳が之を強ひることも抑へることも出來ないのは當然です。之等の規約は寧ろ人間の理想に順從するやうにつくられてゆかなければならないものであつて、それらは私たちの獨自な正當な思想的行爲のうへに何等の權威ももち得ないものであります。

酒に醉ふことのわるいのは之がために私たちが思慮深さを失ふことによりてその人格的内容を價値乏しきものに晦澁せしめるからであります。藝術は美であり、戀愛は亦美でありますけれども、私たちは之に溺れて思慮ぶかさを缺いてはなりません。美を體驗することによりてその儘に悦樂の境にみづからを委ねて終るのは之に溺れたものの有樣であります。藝術の美に接して徒らに陶醉のこゝろを湧かせただけに止まるならば、藝術の深い意味はそこには少しもあらはれ得ないのです。私たちは何故にその個々の藝術作品が美であり得たかを反省し、自己の生命に對する交渉を審かにして之を育くむことに資しなくてはなりません。それと同樣に戀愛を體驗してたゞにその感情に浸ることをもつて終つては決してその本質的價値に到達するわけにはゆきません。多くの道義者らが誤まつて戀愛を斥ける所以は屢ゝかやうな結果のみを見て自己の思慮をそれ以上に深めることを知らないからです。私たちは何故にその個々の戀愛が成り立ち得たかを反省することによりて個性的生命の價値に對する奥深い省察を贏ち得て更に之を育くみ養ふことが出來るのでもありませう。それは丁度美味ある食物がその消化によりて肉體を養ひ得る如くであります。私たちはこゝに戀愛の異常なる價値を見出さなくてはなりません。そして之を知らない人たちに對しては、共に戀愛を語り、共に人間理想の道途に携はり得ないものとして憐れまずにはゐられません。

戀愛がその正しい效果を遂げ得ない場合に、若くは之が持續し得ないで失はれやうとする場合に、深刻な傷ましさを體驗することは悲しむべき處であります。しかも私たちはそれらの場合に深い反省によりて、寧ろより多くのものを數へら

れることを思うたなら、徒らに人生の難路を呪うて却つて平坦なる路のみをもとめて高きに上らうとするやうなものでありませう。ましてそれらの事がらが伴ふことをもつて戀愛そのものの價値を疑ふやうなことがあつてはなりません。あらゆる人生の惡はみな私たちの生命向上のために用意せられた處のものです。

戀愛に關して、また特に之に繋がるいろいろな具體的の事象に關しては、こゝに云ひ及ぼさうとするために餘りに多いことを感じます。私はたゞ玆では純眞なる戀愛そのものに至上の價値が歸せられることを述べるに止めます。それは私たちの理想の一つに屬すべきことを私は信ずるからです。

湧き溢るゝ戀愛の源泉によらないで、私たちはよくその愛を衆人に及ぼし得るでありませうか。あらゆる友情的の愛は一つの戀愛の焦點を確持することによりてその正しい且つ美くしい効果を保つことが出來るでもありませう。若し夫れ戀愛を無視ししかも濫りに性交を弄ぶごときに至りては餘りにも人生に對する眞摯さを缺くものです。多くの人たちはその本然の心に反りてみづからを省察しなければなりますまい。

戀愛至上かも知れない

佐藤春夫

智惠と友情と戀と
この三つのものを
世間ぢや寶だと言ひふらす
僕もせいぜい捜しては見たさ
たうとうお目にはかからない。

と、まあ、大たいこんな意味の詩が、ハイネにあるさうだ。人生に對しては相濟まぬ言ひ草になるかも知れないが、この詩はひよつとすると本當かも知れない。全くさうかも知れない。思ふに、戀愛などといふものは先づ幽靈の一種見たやうなもので、せいぜい捜すとあるのか無いのかわからないので、それを本當に見たやうなことを言ふのはつまりせいぜい見究めなかつたといふ證據になるだけかも知れない。ただちよつとした指示の上へ何か自分で築き上げるのだ。夢だ。夢に浮かされるのだ。或はうなされるのだ。いづれは正氣の沙汰ではないのだ。その正氣の沙汰でないところが言はゞ身上であらう。さうして在りもしない幽靈が出るほどそこの枯野原が氣味の惡いところであつたやうに、正體の疑はしい「戀愛」などといふもの乃至言葉が何かしら慰めとして存在してゐるほど、それほど、われわれの人生といふものが慰めを要するものである事、この事だけは實に確だ。問題の眼目は寧ろここにあるのではないだらうか。

要するにまことの戀愛などといふものは人類の大きな傳說の一つだと、僕は思ふ。さうして、今ひよくり、ありふれた一つの寓話を思ひ出した。その寓話といふのは古い小學校の讀本にあるので、おやぢが死に際に息子たちに言ひ置きをするのだ――この地所には黃金の壺を私が埋めて置いた。それ故に、努力をしてさがす者はその在りかをつきとめて巨萬の富を得るであらう、と。そこで息子たちは精一ぱい搜す。或る者はあきらめて搜すことをやめる。最後まで何度でも何度でも搜したものは、その土地には一向、黃金の壺がなかつたことを知ると同時に、その原野がいつしか立派な開墾地になつてゐることに氣がつく。――僕は思ふ。實際「至上なる戀愛」の傳說はこの黃金の壺をうめた土地の話にそつくりである。

成るほど黃金の壺はない。けれどもどうしてもそれがないといふところまで突きとめた時には、彼の胸は開墾された土地になつてゐるであらう。さうして巨萬の富は自づから別に得られる。

世人の言ひふらす人生の寶のやうな戀愛は無いのかも知れぬ――いや、無いのである。が、その無いところがやがて至上な所以かも知れない。といふと逆說的に聞えるかも知れないが、僕にはそんなつもりは少しもない。疑はしきものを絕對に信ずる事、無きものに對する無限の憧憬、これらのローマン的精神。さうしてその疑はしいものを無條件に信じて無限に追及することたる戀愛にかけては、この客觀的には最もばかげ切つた事のためにたとひどんな人間でもその人間なりには精一ぱいの努力をするところ――つまりそれぞれの人間がゐるつぼのなかへ投げ込まれるのだ。この意味では戀愛至上などといふ說も成り立つであらう。ともかくも戀愛といふ心理作用は人生（人間本性の活動）の重大なまた象徵的な事件ではある。

ここで注目すべき事には、たとひ戀愛の不可思議なるつぼでも鐵や鉛を金にしはしないことだ。寧ろ、鉛は戀愛的活動

で大にその鉛たるところを發揮してくる。眞劍になればなるほど地金が出て來る。或る人の說に依ると、一種の人間は戀愛によつて征服慾に燃え切るし、亦、別種の人間は戀愛によつて一から十まで相手の人間に自分の持つてゐるすべてを捧げつくす氣持になる。戀愛の二大タイプだ。ハインリッヒ・フオン・クライストの描いてゐる戀愛は前者の適例だし、ダンテのビアトリスに對する心持は後者の典型だといふ。なるほどこの二つのタイプのあることは十分疑ひない。が、僕が思ふに、たとひどの人間に於ても各この二つのタイプが先づ兼備されてゐて互に內面に於て相剋した末に、それが熱し切つた上ではその何れかに突き拔けて來ることを見落してはなるまい。自我擴大と自我拋棄と（いづれもつき拔けると自づから天空があり、一歩踏みそこねれば何れにも深淵がある）この內的葛藤。これが戀愛の人格的るつぼである所以である。

（ここまで來て、しばらく何度も何度も考へて見てゐると、僕にも人なみに一通の戀愛觀があることに氣がついた。さうしてそれをこゝに述べるには、第一に與へられた紙數が足りないし、第二には、時間が足りないことを知る。少くとも百枚分書くことがあると考へる。そこで私は一つ奪奮それをともかくも書いてみる氣になつた——いづれ極く近いうちに、機會を捉へて。それ故に、この稿では詳しく言はない事にする）

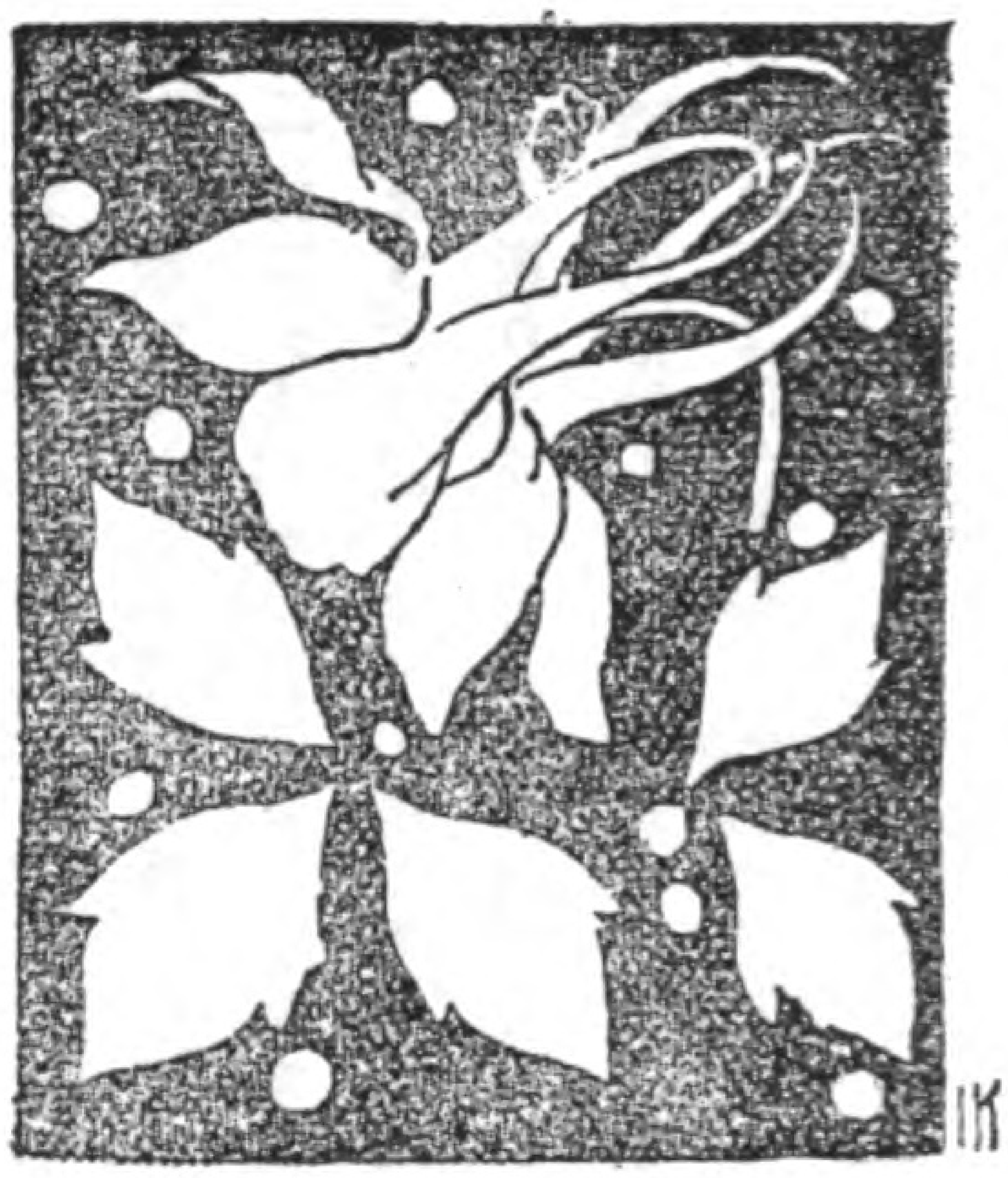
ところで、僕はブラウニングのやうな戀愛の果報者が Love is best と叫んだからと言つてびつくり恐れ入るわけにはゆかないのが殘念だ。それは Happy is best といふやうなものだ。いかさま尤も千萬である。だが僕は、相手がブランニングのやうな大詩人であるのも忘れて、「いい籤を引き當てたと思つて勝手な熱をホザキなさんな！」とでもヤケを言つて見たくなるのは我ながら悲しい事だ。といふのは、僕は僕の經驗からして、戀愛といふものを不幸なものだと思ひ込んでしま

つてゐる。さうして戀愛そのものはどうも悲劇的本質をよほど具備したものと考へられさへする――これには少しばかり理窟もあるが小面倒だから今は言ふまい。ただ少年少女に告ぐ、戀愛とはくれぐれも面白をかしいものではない。やつて見給へ。――で、戀愛は不幸なと、きまつたもの、さうして不幸が人生の最上のもの、とかう別段に超人でも修道上でも嘘つきでもないただの僕が言はなけやならないはめにされるのは、何が何でもあまりむごたらしくはないだらうか、諸君。ところが、それにも拘はらず、Love is worst とも言ひ切らずに、戀愛至上といふ言葉を聞くと、三十分ぐらゐは考へ込んで、何だかそんなもかなあ?!　といふやうな氣持もまんざらしないではない。そこがそれ、僕のお人よしで詩人に出來てゐるところだらうか。それとも人間といふものの氣の毒なところであらうか。乃至はえらいところでもあらうか。要するに僕にはもう一度考へ直さなければわかり兼ねる。

されぱただ、僕は一度でも、戀愛のおかげでサンザッパラの目に遭つて身の破滅を來たしたやうな男が、無理心中の血へどと一緒に Love is best といふ言葉のかたまりを吐き出すところが聞きたいものだ。さうすれや一層よほど贊成できるだらう。またそんな男にして初めて戀愛を至上の至下のといふ資格も出來るのだ。――尤もそんな男が小説などへ出て來るのではない、本當にあつてほしいのだ。内面的體驗も結構だが持つてまはつた誇張でコネ固めた張子細工のやうな小説などでそんな男に出逢つたら、尙のこと腹が立ちさうだ。從つてその資格のない僕が戀愛を至上とも何とも言ひかねる。一たい何事もよく突きつめて置きもしないで、ちやうどゼラチンが空氣の加減で硬ばつてゐるやうなあやふやな、ちよつとした變化や動搖にでもヘシヤゲテしまふやうな腰拔けの主義などを平日振りまはしてエラがることを僕は近ごろ恥づる。それ故に、女房のおかげで毎日うまい夕食を召上る先生たちが、その砂糖加減に慣れた舌の尖で、――犠牲とはどんな苦いアヂの素だか舐めて見たこともない舌の尖で、思ひつき聞きつかぢりの利いた風な戀愛觀を深刻がつたり悲壯がつたり、然も大にウケてゐるなどは、ねえ、諸君、これが亦流行の面白味ではあるだらうが、よくよく考へて見るのに平常使

ひ慣れない言葉で勝手はわからぬながらちやんちやら可笑しいなどといふのはここの心持か知ら。人生の冒瀆にならなけやいいがと案じられる。子供らしい事をくれぐれも言ふが、戀愛といふものは頭腦でするものぢやない。心臟でするのだ。文章といふものは筆と腕で書くのぢやない、身をもつて書くのだ。さうして、思想は決して人生の裝飾物ではないのだ。僕に背後に犧牲を支拂はれてゐない文字にはもう一切感心しないことにしてゐる。しかし再び考へて見るのに要するに他人のことだ。どんなお人柄がどんな都合の解釋でダンテのやうな見解を把持しようが、ショペンハウエルに共鳴して見ようが、オツト・ワイニンゲルに贊成しようが、トルストイの結婚論に歸依しようが、ファウストに於けるゲエテに一致しようが、乃至はストリンドベルヒが一夜あけたらプラトオを鵜呑みにしてしまつてゐたからと言つて、それは諸君の御隨意である——と、いふよりは仕方がない。と、いふのは何を何と主張しようにも僕にはそれが不明なのだ。只今よく考へ中ではあるがどうもこれらの答案はどの番號のも一代かかるらしい。さうしてそれがやがて、時には僕の憤怨ともなり、時には生甲斐ともなり、時にはただぼんやりとうんざりともする。

つぎはぎの文章で、矢鱈とタンカを切つてゐて、そのくせ自分の考はすこしも出してゐないのが自分でイヤだが、今は間に合はない。『僕の戀愛觀』を本當に書くまで待つて下さい。尤もこれとても何も主張したり、解決したりするのぢやない。せいぜい不都合な僕の人生に對して詰問するぐらゐのものだらうが。



旅立に際して我國の女性に一言

佐藤紅綠

女性を改造するには先づ男性を改造しなければならない。それは私の宿論であります。私は女性は凡て受動的であるとか、又た男性の啓發に依らねば何事もなし得ぬものだとか、さういふ考を起點として言ふのではありません。日本の先輩が造つた世界に生れ、在來の型に育てられた女性は、いか様に覺醒しても到底男性の無智と壓迫と無禮と嘲笑から免れる事が出來ません。そのために或る婦人は自暴氣味となり、或る婦人は屈從してしまひ或る婦人は無理想となり或る婦人は引込思案になります。そして見るもの聞くもの毎に壓迫を感ずる處から銘々に不健全な趣味的生活に身を投ずるものが極めて多いのです。

私は三種の婦人を知つて居ます、私は屢々良家の夫人や令孃から又た工場の窓から、怪しき町の隅からいろ／＼な相談を受けます、そのたびに私は現代の缺陥に脅かされます、どんなに泣いても喚いても、又私がどんなに筆を禿びらして小說に訴へても迚も此の恐ろしい潮の渦巻には敵しきれません。

三種の婦人の中一つは全然婦人といふ考を捨てゝ半ば男の様になり、其の尊くも美くしい女性を自ら埋沒しようと努めて居る人々です。家を捨て良人を捨て我が子を捨て父母を捨て、そして世間が嘲笑すればする程一種の矜恃を感じ、奇抜な事をして人を驚かしたと得意がつて居るのです、併し私は其の婦人に接する毎に、其人はいかに否定しながらも婦人としての美くしさと優しさと親しさを認めないわけには行きません。私は本當に心の底から惜しくて堪りません。

次の種類に屬する婦人は何事も在來の因襲に甘んじて奴隷

的であり無自覺である婦人です、これは非常に多數です。特に今日の若き婦人よりも四十歳以上の婦人に多い樣です、此の人達は道徳や貞操や家風や行儀を八釜しく言ふ事猛烈を極めます。だが全然間違つた道徳觀です、甚だしきは此婦人達が道徳なりと主張して居るものは悉く不道徳である事に氣が付かないのもあります。家の名譽のためには娘を犧牲にします。親の利害のために娘は戀を捨てます、女には絕對に自由を許さなかつた昔の城廓に立籠つて安心して居ます。私は多くの娘さん達が私に訴へ來る事情を聞く度に其の非は每も親の方にある事を認めます、これは何故でせう。

第三に位する種類は多くは知識階級に屬する婦人で、第一の樣に自暴的に反抗の氣勢を擧ぐる事も出來ず、左りとて舊い因襲に屈從する事も出來ず、頭を縮め足を縮めて只だ肉體だけが生きて居る婦人です、これは現代の大多數です、これが長く續けば日本の婦人は悉く神經衰弱患者になります。

一方に於て科學は非常な力を以て自然を改造せんとしつゝあります。米國を除くの他世界の經濟的に營養不良とならうとして居ります、日本は男性のみならず女性も共に何とかして國家の活路を求め、精神と物質の幸福を增進する樣に努めなければならなくなりました。

輕はづみな時代は過ぎました、私は日本の多くの婦人と共に實際的な時潮に入りたいと思ひます。

然るに今日の潮流は次第々々に日本を殖民地風に應化しつつあります。男性に於ける赤化運動の如く、女性に於ける米國風の流行は相共に最も危險極まるものです。

日本婦人にはもう少し確乎（しつかり）した自信があつて欲しい、そして日本からの美くしい潮流を逆に對岸に注ぎ込みたい。其れは未だなか〳〵距離があるでせう、日本の婦人が今日の儘では！

私が歐米を視察せんとするは實に簡單であり且つ平凡な目的からです。

「彼女等は人間としていかに生活しつゝあるか、妻としていかに生活しつゝあるか、母として娘として…………而して國民として」

女性の改造は單に日本ばかりの叫び聲でありません。獨逸が戰爭後第一に國策として討議した議題はこれです。

「婦人をどうするか」

いかに是れが大なる叫びでしたらう、この言葉はいろ〳〵な意味に解釋されます、

而も其れはやがて世界を通じての叫び聲です。

「婦人をどうするか」

私は此の問題を胸に藏して一年間の旅行を終りたいと思ひます。

議會初見記

小見山富惠

二月三日正午いよ／＼本會議に入る衆議員を傍聽すべく、私は社命を帶びて日比谷へ急いだ。院の近傍から入口にかけて數人の老人が、胸に小さなボール箱をブラ下げて、頻りと議席宿所便覽表を商つてゐるのが、何故か先づ私の網膜を射た。

入口の粗末な記者控室の建物とその混雜、恰度午前中の豫算分科會の散會時で、何々新聞と染め抜の法被を着た給仕や小使達が、宛然燕のやうに入り亂れて飛び交ふその中に、記者のマークをつけた人々も忙がしげに、右往左往してゐる。傍聽人はもう充滿詰めかけて院外に溢れゐた。何々議員から、せびつた傍聽券の手に入るのを持ち兼れてゐる。殊に農村振興に關する案の上程日だけに引きづろやうな小倉袴にゴム靴といふ異樣な扮裝の一團が彼此の隅、此處の隅にと躊躇しては、ナタ豆煙管でスパ／＼やりながら談合してゐるのが目を惹く。十坪ばかりの受付の中は、全く取引所の立會場の樣な騷ぎで人の渦を捲いてゐる。私は曾て見た大阪北濱の取引所そつくりのこの光景を見て一驚した。

初々しい女學生の一團や、婦人聯盟脫退組の顏も四五人ほど見えた。私は案外早く傍聽券が手に入つたので、參政權同盟の花形S子さんに斷つて一足お先へ失禮した。

初めての野次喜多見物だから見るもの一として強い刺戟を與へないものはない。階上の傍聽席は既にビツシリとスシ詰に詰つて、前列の記者席も皆出揃つて、見渡すところ空席は一つもないらしい。只婦人席のみがまだまばらなので、私は恰度演壇を眞下に見る一番前列に腰を下した。

總て午後一時開會の振鈴が鳴り渡ると、各派の面々が悠々と自席に流れ込む、私は便覽表と首引きを始めるが、一目にはなか／＼判らない。ただ大體に於て堂々と中央に幅廣く陣取つた、衆議院卽政友會といつたやうな形の兩端に、ほんの申譯け的に、くつついてゐる憲政、革新、庚申、無所屬、の區劃が判る位のものである。各自の氏名札が立てゝはあるがよく見えない。でも知つた顏の、尾崎、島田、犬養、の老將を始め、松本、星島氏などの顏が向側にチラホラ見える、眞下の憲政會は一つ一つの氏名札さへ讀める。新聞のスケツチでお馴染の濱口幸雄氏もゐる。高く野次ざんぼうの裡に超然と、而かも寸分の隙もなささうな、永井柳太郎氏の顏が上段の方に、ズ抜けて蠻聲を張り擧げる高田耕平氏と並んで見える。

殆んど出揃つた頃、粕谷副議長の顏は見えないが、微かな聲が響いて、哄笑裡に多數の起立者があつたが、私にはよく聽き取れなかつた。それから政友會の春日俊文氏登壇して昨二日の豫算總會に於ける、永井柳太郎氏の首相に對する質問言辭は穩やかでない點に疑

恣の國民が煽動するものであると誹謗するや憲政會側から怒罵憤激が散彈のやうにパラパラッと飛ぶ、政友會は賑やかな拍手を以つて無性に喜ぶ。傍聽席よりは、禿頭、白髪、半白、黒、と、とりまぜたこの大供連がこんなことに、本氣に目を剝き、沫を濺いで喧嘩するのが、なかしいので笑聲が涌く……。

烈風に煽られる炬火のやうに今や小作爭議は、都市勞動爭議をそつちのけに、日本全土を焦土化せんとする勢ひを以つて延焼し初めて來た。農村問題は、上下の通り言葉となつた。今日この重大な問題が政、憲の白き手の〇〇〇に依つて上程されるのである。

日に焦けた顔、節くれ立つた大きな手の團體が片唾を呑んで、靜聽してゐる。先づ政友會の三土忠造氏登壇、憲政會の野次痛罵を、柳に風と受け流して、滔々と提案の理由を說明する。

政府の行政整理は、部分的枝葉の整理であつて、我々は之れが徹底的改革を斷行して、事務の能率を増進し、時代に順應せしめたいとて、どういふ意味の時代順應か知らないが頻りと時代順應を繰り返して、乙に澄し込むので、私は腹こそはゆくて、覺えず失笑して終つた。

『又我官吏が正義の念に乏しく、自己の所信を率直に主張するの氣慨が無い、これはその原因を現在の行政制度及び任用令に發してゐるが故にこれが刷新を期して云々』といふ、なる程その原因は制度に禍根を持つものであることに違ひはないが、それは行政制度ではなくて經濟制度であることに氣がつかぬのは矢張り裕福な議員さんと見える。自分の信ずることを率直に言つては、一寸危い今日の一切の制度の下では、あながち氣魄のない者は官吏ばかりではあるまいと思ふけれど——。

それより税制整理案に移り、本案は原内閣時代、その計畫を樹て、二箇年間かゝつて調査したが遂に結了に至らず……といふや『恥知らず!』『厚顔無恥!』と憲政側が呶鳴れば『默れ!』と政友側が叱呼する、何んのことはない壯士の擊劍のかけ聲そのまゝである。

政府は、政費の節減によつて稍緊縮し得たが、地方財政は返つて膨張しつゝあるため、各府縣はその税源に苦るしんでゐる。就中農村の疲弊に鑑み、附加税の制限を主張し、地租はこれを地方に委讓すべきである。と、革新倶樂部や、憲政會の財源案を痛罵して『之れ恰も座して、棚より牡丹餅の落るを待つに等しい』と農民贔振りを發揮すれば再び騷然喧囂を極む。

革新倶樂部は果して地租の委讓と、營業税撤廢の確信を有せらるゝやと突けば又も激昂應報する。『我々は確信を以つて、この根本的整理地租の委讓を含む税制整理を提出するものであると絶叫して降壇續いて、革新倶樂部の湯淺凡平氏、寂びしき拍手に送られて登壇、議場漸く緊張の度を高め來る。

○

湯淺氏、やなら軍縮建議案を引張り出して、陸縮結果の建議案四十萬圓なるにその半額位に滿足してゐる政友會の柔弱な態度を難じ、果して、これが建議の實行に確信ありや否やと詰し、行政整理の建議は已に前議會に於て政府はこれを無視したではないか。然るに何故政府をして、本案を實行せしめんとすることは

どうも、私は疑はざるを得ない。といへば『疑ふのは君一人だよ』『何をいつてるんだい』などと茶々を入れる。

地租を地方に委讓する結果、五百萬の失權者が出ではしないか、だから政友會はいゝ加減に覺醒して　普通選擧實施運動の前に兜を脫いで降服するがよい、とやれば『馬鹿云ふな―』『シッ！〳〵！！』の聲湧く。

どうも政友會の建議案は、その主旨が不確實であり、又實行方法も適當でないとて、三土忠造氏の答辯を求める。

○

憲政の淸水留三郎氏政友の虛を衝いて立つ

若し政友會にして、地租委讓に對し一片の誠意だにあらば何故法律案となさなかつたか又營業稅の改正に政友會が提案しないのは、その意圖ある處を解するに苦しむ……。斯くて各政黨の猛者連は、交々起つて反對黨に挑戰し、應戰し、議場は拙い演說練習會のやうな觀がある。一人として、吾が肺肝を抉り、吾が心臟を絞るものはない。

なる程、富と權力と、才能とを有するこれ等四百八十幾頭顱が年に一度の智慧比べや、改選期の防備や選擧民への土產演說に、奮戰する位ひは、退屈醒ましによいかも知れないけれども、今この必然の力に動く大衆には、そんな議論をしてゐる間を待つだけの餘裕すら無いのであることに氣付くものは一人もありさうにもない。

○

憲政會の下岡忠治氏は、建議案說明のため登壇し、『政友會內閣の放漫策のために經濟界の變調を來し、爲めに今日の農村窮乏をもたらしめたものであると、政友會を睥睨しつゝ農村振興策に論及して、更らに再び、政友會が農民負擔の輕減について、政府のこの意志あるを壓迫して置きながら、建議案を提出することは、これ全く國民を欺瞞するものである、若し眞に誠意があるならば何故法律案を提出しなかつたかと、淸水氏と同じやうなことを繰返して出品の自慢ごつこをする。

政友會の面々、默つて居らず一同口々に彌次り倒す。憲政會と睨み合つてイキり立つので騷々しいこと又取引所の如くである。次いで、農民負擔の輕減について、米價の調節、低利資金の融通、產業組合の改善、農業敎育の振興、小作制度の確立、土地改良、副業の獎勵等、相次いで論述し、農村問題の徹底的改策を確立して、その應急策と根本策とを考慮實行すべきを述べて降壇。

○

それから政友會の小川平吉氏提案の說明のため登壇同じく農村振興問題を論じ、下岡氏の地租問題に對する論難を辯じ、農村問題を黨爭の具とするは、我等の本意でないと、尤もらしいことをいふ。それより農村の今日の疲弊と不安と、行詰りは、單なる經濟的方面のみではなく精神的方面、卽ち風紀の荒廢その極に達してゐる。故に娛樂機關をも設置して、精神的安慰と喜びとを與へなければならぬ。（あゝ併し折角のその娛樂機關も眞實の水呑百姓では心から享樂することが出來るだらうか今日の不安な土地の上にあつては到底眞の享樂は出來得ない。一切の文化は都會人の專有であり、更らに高價なる文化は、一部〇〇〇の享樂に用ゐられるばかりであることを思へば。）斯くて憲政會の下岡氏に應報し、政府に迫る。

ここにまた、無所屬村の田淵豐吉氏、否問ありとてやをら身を挺して登壇、蛮聲を振り絞つて議場を唸らせ、傍聽席を壓倒せしむ。渡鮮の際の滑稽談まで、持ち出して饒り立てゝ

議長より注意を喰ふ。農村問題の範圍から說き起して、朝鮮の農村問題の急を呼び、朝鮮に於ける火藥の取締の餘りに嚴重なるを難じ、煙草、酒の問題から、轉じて英、米、佛、獨の產業立國論に及び、農村振興は單に地方農村問題でなく我國全體の問題であると絕叫し、次いで、自作農と小作農との關係、物價と貿易との關係を述べ、農村問題と勞働問題としての農村救濟策のために、消費稅の廢止を力說して遂に普選を卽時斷行せば、本問題は自ら解決すべしと日長にやつて退ける。

○

植原悅二郎氏(革)自席より、今日の農村問題は工業組織の變遷に起因するものであるが故に、農民も同じく、工場勞働者の如く收支生活の支持の出來得るやう、その經濟策を樹てることが必要であるが、又玆に先程小川氏の云はれた如く人口問題がある。この年々增殖する人口は海外に向つて發展せしめるより他はない、從つて此處に、私の昨年提案した國籍法改正の問題が起つて來るが、政友會は是れに同意をせらるゝかどうかと結べば、小川氏自席より答辯す。

國籍法については今答辯の限りでない、移殖問題は適當なる方法を以て奬勵したいと述ぶ。(外交の失墜と、產兒制限の否認とで、一體吾々は「無產階級の大衆は」どうすればいゝのだらう?) 斯くて、兩案は十八名の委員附託となつて、次の日程に入らんとする時、突然庚申の南鼎三氏議事の進行について發言の許可を求めて登壇、議長の病氣缺席と、粕谷副議長一人が數時間ブツ通しに議事の進行を司ることは、生理上から見ても惡いとて、滿場を狂笑させて、政友會の痛い腹を一寸刺す。

○

これからいよ〳〵上奏問題に入る。前川虎造氏(革新)日程を變更して、決議案を上程し、他の日程を繰り下げんことを動議して可決した。で、公表案說明のため、清瀨一郞氏登壇して、辛辣に政府の態度を詰り、速かに本問題の內容を國民に公表すべしと叫んで降壇すれば、政友會の小久保喜七氏、政府の肩を持つて、嘗つて大隈內閣當時の詔勅問題を引證し、かゝる問題には反對すると述ぶ。

次いで中野正剛氏(革新)は、小久保氏の論は時代錯誤なりと痛擊を加へ、今日の政治が遂ひに民衆を離れて、(民衆の意は那邊を指示するものか多分現在のブルジョアデモクラシーから政治の權力が貴福の專制に向はんとするといふ意味なのであらう) 貴族院の專[illegible]や樞密院の一部に掌握されて、これに一切政治が自由に驅使されるとは、實に憲政の一轉であり、危機であると、自己階級擁護論[illegible]し立て、樞密院官制、貴族院改正を叫び、上[illegible]問題公表決議案に讚成論をして壇を降れば、[illegible]貧しげな、然し犯し難い氣稟を整へた、[illegible]如き加藤首相起つて、極く簡單に政府は[illegible]問の內容は絕對に發表することは出來ぬ[illegible]政府はこの決議案には同意し兼ねる旨答[illegible]て引退つた。時に五時五十分。政友の高見[illegible]通氏の討論終結の動議が出で、結局採決投[illegible]となつたが例に依つて例の如く多數黨の御[illegible]張通り討論終結、斯くて正に午後六時五分、お手前味噌並べの日比谷座は幕を閉ぢた。

○

生れて初めて見た、今日の議會の有様は、稍緊張したといへ、それは錯惑なこの人々の上にもどうする事も出來ない○○の○○が[illegible]刺戟を與へたものであつて未だ大勢は極めて安泰無事であつた。驚くべき風雲が足下に[illegible]くなどとは、信ぜられないほど、それ程に悠々閑々たるものであつた。此後幾度この衆議院にこの弛緩した議員諸氏が集つて勝手な夢[illegible]續することであらうか。希くば颶風よ此[illegible]かりは、心して吹けと祈りながら筆を擱[illegible]

婦人と過激社會運動取締法案

山川菊榮

○

婦人と過激社會運動取締法案！ 一體この間に何の關係があるのだらう？ そして婦人がなぜこの法案に反對しなければならないのだらう？ と不審に耐へない感じを抱く婦人も、讀者諸姉の中には無いとも限らない。殊に、自分自身、參政權を要求し、婦人に關する既成の法律の部分的改善のために努力して居る、所謂婦人運動者仲間にも、さうした暢氣千萬な連中が無いとも云へない。否、彼等がこの重大な社會運動全體の危機をよそにして、ブルジョア代議士の選擧運動に熱中して居るところを見ると、彼等の全てがさうであると斷定しても抗議をもち込まれる氣遣ひはないらしい。

一體婦人がかうした重大な政治問題に對して、かうまで無關心であるのはどうしたことか。それは云ふまでもなく、炊事と子守等より外に興味を引く問題はないやうに仕込まれ、社會全體を支配する大きな公共的問題に對して全然無理解に育てられて來た結果である。然し婦人がこの無自覺無關心な狀態から目覺めて、直接間接自分等の生活を支配する社會上、政治上の諸般の出來事に注意し、自分等の解放を防げる力と戰ふやうにならない限り、現在の屈從を脫する道はないのである。この意味に於て、今や全日本の勞働運動及び社會運動の鬪士の激烈な反對運動の對象となつてゐる過激社會運動取締法案は、婦人とどんな關係があるか、婦人はこれに對してどんな態度を採るべきであらうか、といふことに對して吾々無産階級の婦人は明白な理解をもたねばならぬ。

○

所謂過激法案は、昨年貴族院に提出されて原案に多少の修正を加へられた上通過し、衆議院では、閉會間際の議場の大混亂にまぎれて握りつぶされ、新内閣によつて今年度まで持ち込された法案である。其内容は、最初の原案は「過激なる思想を宣傳し、又は宣傳せんとしたる者を懲役七年以下に處

する」といふを手始めに細微な項目に亙つて、事實上、あらゆる新思想の傳達交換の方法を禁じ、政府の意思に反する一切の團體的行動を信じ難い程の峻嚴苛烈さを以て禁壓しようとしたものであつた。勿論この法律の眞の目的は徹底的な社會運動者を一網打盡的に葬むり去ることに在るのは明白であつたが、同時に、當局の利益と意向次第では、當の目標以外の何人にも此法令を適用し、又は適用するといふ脅威の下に、あらゆる新思想、あらゆる進步主義の芽を摘み去るといふ第二の、然し相當に重要な目的も含まれてゐない譯ではなかつた。世間の保守主義者はあらゆる進步主義を總て過激視し、危險視してゐるので、いつなん時、どんな思想でも見解でも、現在の狀態に對する批評を加へたと云ふ理由だけで、「過激思想宣傳」の烙印をおされまいとも限らない。故に此法案はあらゆる思想發達の機會を禁壓する暗黑時代への逆轉を意味するものである。

論者はまた、此法案は普通に所謂過激思想卽ち共產主義や社會主義の思想や運動に關する取締を目的とするものであつて、これに關係せぬ言論や行動の自由を束縛するものでないのかも知れない。けれども全人類に共通の刻下の最大の問題が政治問題、社會問題である以上、苟も其分の問題の關する限りに於ては、最も主要は思想の體系と運動の潮流とを代表する社會主義、共產主義に觸れぬ譯には行かない。直接政治組織や、經濟組織の問題と交涉のないやうに思はれてゐる敎育、藝術、科學などの問題でも、これを徹底的に批判して其進步向上を期するには、やはり其等の土臺骨となつてゐる社會全體の構造といふのを考究する必要が起つて來る。其他物價問題といひ、住宅問題といひ、賣淫問題といひ、社會諸般の大小のあらゆる事件や問題は、社會全體の仕組と切放して考へることも不可能なら、解決することは猶更ら不可能である。況んや日に勢を增大する全世界の社會運動、勞働運動を無視することが不可能である上は、その基調たる〇〇〇〇を理解する必要があり、更にそれら一切の無產階級運動の趨く所を代表してゐる勞農ロシア——共產主義の理想に隨つて新らしい社會を建設し、經營しかけてゐる世界最初の無產階級の國家——を解するには、是非とも、この思想に觸れずにはゐられない。殊にロシアは日本とは目と鼻の隣り同士で、彼我の利害關係は密接であり、早晩通商も開かれるといふ今の場合、猶更のことである。かうして見ると、〇〇〇〇や〇〇〇〇の思想に觸れることが御法度ならば、日本人は時々刻々地球上で行はれてゐる政治上經濟の變化、人類の生活の問題に對して、見ざる聞かざる言はざるの態度を强ひられることゝなる。これは日本といふ國が地球の表面から遊離して空中に

でもブラ下つてしまふか、日本人といふ種族が人類の仲間を脫退してしまふほか、出來ない相談である。

○

論者によると、イヤ誰でもが共產主義を云々するが惡い譯ではない、がそれを確信して主張する側に立つ考の言論は壓迫せねばならないのだといふ。××××××××××××××××××××××、ブルジョア階級平素の揚言を裏切るものである。かうした×××××××××の結果は、有產階級、權力階級の立場から見た言論の自由だけが認められて、××××の立場からは、一切の批評の自由が奪はれる。勿論今日でもそれは現に己に、餘りに明白な事實ではあるが、政府はさうした手前勝手な言論禁壓の道具として、在來散々に×××××して來た出版法や新聞法の制裁に甘んぜず、在來罰金乃至數ヶ月の錮禁で處分して來たものに、七ヶ年の懲役を課さうとして過激法案を提出したのである。

現在までの所、社會主義者の刊行物は何の理由も示さずに「不穩文書」として發賣頒布を禁止することが出來る。社會主義雜誌の讀者は、たゞそれだけの理由でどんな職業からでも放逐させられる。社會主義者の演說會はたゞ演說者が姓名を名乘つたゞけで中止解散することも出來、社會主義者を自宅の寢床から引立てゝ行つて浮浪罪に問ふことも出來、警官に連れられて警察署に任意出頭した者が、その附近を徘徊した廉で道路妨害罪に問はれたこともある。かやうに日本の法律は社會の現狀に對して批評的態度に出る者に對しては、明白に特別の取扱をして居るが、過激法案は猶その上に、一層峻嚴な思想抑壓を企てゝ、社會運動者の人權を合法的に一掃し去らうとしてゐるのである。

昨年「過激思想」の內容について明示を求められた時、司法次官の發表した說明の中には「女子を私有すべからずといふ如き、我國の社會組織の根柢と相容れざる主義」といふのがある。これによると「女子の私有」は「我國の社會組織の根柢」であり、婦人は獨立の意思なく人格なき物品以外の何物であることをも許されぬ。婦人が經濟的獨立を要求し、敎育の機會均等を要求し、法律上の平等を要求し、選擧權を要求することは、すべて「女子私有」の思想に背反し、「物品」なる狀態を破壞するものであるから「過激なる思想を宣傳し又はせんとした」廉によつて、七ヶ年以下の懲役に附せられ得るのである。かやうな狀態の下に、日本には婦人運動が發達するであらうか。婦人の自覺を刺戟することが可能であらうか。

婦人問題は一般社會問題と分離した特殊問題でなくて、彼

雜な社會問題全體の一部分であり、一方面であるにすぎない。隨つて婦人問題を論ずれば勢ひ社會組織の根柢に觸れぬ譯には行かず、一般的な無產階級運動の利害は直ちに婦人解放の問題全體を左右するほど、兩者の關係は密接なものなのである。總ての法律がその國に棲息する男女に等しく影響を與へるやうに、過激法案もまた男子の社會運動者と等しく、女子の社會運動者の運命を脅かしてゐるのである。そして無產階級運動の暴壓によつて、婦人全體の向上解放の道を閉塞しようとしてゐるのである。今や全日本の勞働團體及び思想團體は一致して、いかなる手段を以てしても、この暴虐極まる恐怖政治の到來を防止しようとしてゐる。勿論是等の團體の中に、極めて少數の婦人も參加して男子と共に運動してゐることは事實であるが、なほ一般婦人も亦、自己の運命に關係すること斯くの如くに深くして重大な法案の提出及び通過に對して、大々的に反抗の聲を擧げなければならない。

過激法案が運動を深刻化するが故に、成るべき社會的變革を早めるであらうといふ豫想の下に、これを歡迎しようとする人々もあるとのことである。然し或はさういふ結果になり得たところで、それは過激法案の直接の結果ではなく、これに對して無產階級が無關心な受身の態度である限りはさういふ變化は起り得ず、さうした暴壓的手段が××××××××××一層鮮明ならしめ、その××××××××しその團結を益々鞏固にし得た場合の間接の結果にすぎない。近い例が、赤旗事件や×××の後の無茶苦茶な迫害は、日本の××××××××する代りに沈滯せしめ、階級意識を振興させる代りに、社會主義者に對する無理解な恐怖心を煽るより以上の貢獻をしたであらうか。吾々が暗黑な反動時代に恐れて運動を棄て去るやうな卑怯者であつてならぬことは明白であるが、さればとて吾々は決して反動時代を歡迎すべきではない。力及はずして屈服することを餘儀なくされた場合は、反動時代にも棲息せねばなるまいが、××必要のあることは、この××も他の××も同じことである。玆に於てか今やブルジョア政府の攻擊の前に惡戰苦鬪しつゝあるわが××××××を固めるために、同じくその前途を脅かされてゐる婦人の協力を切に希望する次第である。

資本家擁護と節約宣傳

厨川蝶

一時支那傘が非常な勢で賣れた事がありました。丈夫で見掛けが良く、然かも内地の番傘より餘程廉いのが原因であつたやうです。然し例に依つてすぐに内地の粗惡な模造品を同一の名稱と價格で賣り擴めた爲め、本物の賣れ行も惡くなつたとの事です。又近頃編物の流行につれて毛絲が盛に需用されますが、是も内地製の二オンス四十八錢位の品は、米國から輸入されてゐる二オンス五十錢位の品と較べますと、染色光澤共に到底及びも附かないのです。それに内地の毛絲は編んで行く中にすつかり光澤が失せて了ひ、強い日光に當るとか、洗濯するとかすれば、すぐに褪色したり、ひどく縮んだりして了ひますのに、米國の製品には、その缺點がありません。然かも高率の關税や運賃を加算しても、なほ僅かに七八錢の相違があるだけです。又大戰前獨逸から色鉛筆が盛んに輸入せられましたが、蕊の質が良く、色合ひも鮮明で、その空箱が「筆入れ」にも代用される位、可成り美術的に出來て居りました。内地製の鉛筆に比して多少値は高くても、實質上とても内地の粗末なボール箱に納められた、色の不快な、其上削る時にぼき〳〵折れるやうなものとは比較にならない程優れてゐました。それで私共では、いつも特に獨逸製のを選んで子供等に使用される事にしてゐました。ところが恰度其頃私の子供が通つてゐた東京の某小學校の校長からの「お達し」で「學用品には一際舶來品を使つてはならない」と差止められました。これは餘談ですが、其小學校の校長は所謂武士道の遵奉者であり、「日本刀を振りかざして、外敵に當れ」などと子供等に敎訓してゐた先生であつた事は勿論であります。かうした攘夷的愛國心から出た「お達し」で、可哀さうに子供たちは、いくら削つてもぼろ〳〵心が折れる、使ひ難い、然かも比較的に値の高い粗惡な色鉛筆を使ふべく餘儀なくされました。これは單に經濟上の不利ばかりでなく、粗末な安つぽい物を兒童に持たせる事に依つて、品物を愛し尊重する心を失はしめ、其上、物に倦き易くなると云ふ惡い習性を養ふ事になるのではないかと心配してをります。

元來堅牢と美觀と低廉との特色を併有する物品は、いつの時代でも亦、何所に於ても、均しく衆人に歡迎される筈です。

それは私共の日常生活を、より質實に、より安易に且つ美的に改善し得るからであります。

以上の傘や毛絲や鉛筆は、ほんの一例に過ぎないので、內國製品に優る輸入外國品の例は他に枚擧に暇ないほど、多いのです。現に最近、大阪府商務課で調べました貿易統計によれば、此れ迄我國の特産品として、外國に輸出せられてゐた品物が、內地の物價が高い爲めに、原價に運賃關税を加算してなほ優に日本製品と競爭が出來ると云ふので、逆に外國から輸入されてゐると云ふ有樣です。試に、大正十一年上半期のこの種輸入品と、輸入額とを見ますと、

	圓
木炭（支那關東州海峽植民地）	四三、六五八
紙製雨傘（支那）	五一八、〇〇〇
扇子（支那）	九、六五七
桐材木履（支那）	二、〇〇七、五七七
干柿（支那關東州佛蘭西）	九四、三六五
栗（支那）	二一〇、八五七
麥稈帽子（米國）	一、一三六
漆（支那、佛領印度）	六七六、八八七
陶磁器（支、佛、英獨、北米）	二九二、九〇一
野蠶絲（支那、關東州）	三、二七三、七二二
メリヤス肌衣（絹）（英、米）	一〇六、四四八
硝子製品（獨、北米、英佛、支、白）	一三九、一五八
木材（米、加奈陀支、關東州）	三、四七七、六一四
木製品（紫檀黑檀）（支那）	一七五、三九〇

なほ此他に大阪方面へは、支那から白菜、山芋、干芋、蓮根など野菜の輸入があり、鰻の蒲燒の鑵詰、海月の鹽漬、味噌迄も輸入され、箒なども六萬本近く來たとの事、それより驚くのは、灘の本場を傍に控へた大阪へ、靑島から淸酒が來て壜詰で一升七十錢と云ふ廉價であつたさうです。なほ右の表にある木材の如きも、現に私の經驗によれば、米松などは、內地の同等の木材を使用するに比して、殆んど價格は內地木材の半額で然かも品質耐久力共に少しも遜色がないのでした

斯く日常品が廉價で澤山輸入される事は、我國現今の生活難を緩和する上に於て非常に有効であらうと考へられますのに、何故か政府は是等に對して高率の關税を課し、民衆をして「舶來品は高價いもの」との觀念を抱かせ、一方に節約を宣傳しながら、他方、是が非でも、內地の高價にして粗惡な製品を强ひて購求せしめようとする方針らしいのです。內地品よりも安價な右の輸入品にも亦勿論高率の關税が課せられてゐるのは申迄もありません。所謂保護關税とか云ふものが。

私は爰に一つの疑問を生ずる事を遺憾と存じます、政府當路者は、內地の大商工業者、換言すれば、資本家階級を保護する爲め、勤勉にして着實な、諸外國商工業者の競爭販賣から殆んど絶對的安全な位置に置き、內地製の粗惡にして不當

に高價な物品を國民に、無理おしつけに買はせようとする方針でせうか?。否、吾が親愛な國家の爲政者達は、少數、資本家を保護する事を以て、國民の大部分を占める中產階級以下の民衆の利益と幸福とを無視するやうな惡政策を採る事はないでせうと、私は信じたいのであります。

固より輸入關稅は我國にとつては一つの大きな財源であり又外國製品の輸入超過は、正貨の流出である事は申す迄もありません。且つ他國の餘澤品を多く取り入れる事により、國民に奢侈の惡風を募らせ、或は國家の富を破壞する原因ともならうかとの爲政者の危惧、卽ち愛國的熱情の發露の證左とも言はれない事はないでせう。然しながら我國の現狀は、少數の有產者を除く多數の民衆が、物價暴騰の爲め、贅澤どころの騷ぎではない、三度の食事を二度に控へ、尙ほ且つ、人間生活の必要資料をすら得難いと云ふ狀態に在るを何と見るべきでせう。

斯る現象は少くとも、第一に政府當局が戰後の財政施設を過つた爲め、產業の萎微を招致した結果と、其二に、例の「保護關稅」が人類共同の幸福を無視蹂躙し、利己に汲々たる少數特權者の爲めに惡用された結果だと私は思考致します。

或る有名な經濟學者が「アイルランドの最大不幸は日常生活が單純である爲めで、彼等をして最も多く生產せしめ、最も多く消費せしめ、交易を盛んに活氣あるものとしなければ彼等の不幸は到底救はれない。交易の存しない所には、勞働に對する刺戟がない」と言つた事が御座います。成る程我國の現狀に照して見ますと、高率の關稅がある爲めに、外國品との競爭を度外視する事が出來、然かも内地製品はまた、内地人同志の競爭販賣の爲めに、價格の底下する事がないやうに、各組合の協定價格と云ふずるい方法を以て、法外の高價販賣を默許せられてゐます。故に少數の資本家のみは、益々暴富を積み、多數の民衆は、是と正反對に益々窮迫し、極度に消費量を減じてゐる有樣。

從つて勞働に對する刺戟もなく、民衆の意氣は沮喪し、果ては、愛國的熱情さへも衰退を來たす、と云つて憂いてゐる人さへある位です。爲政者の最も恐れる「思想惡化」も又斯樣した「正しからざる社會狀態」に一つの大原因がある事は云ふ迄もありません。

近頃の節約宣傳も、贅澤常習者たる有產階級の人達にこそ幾分か效能があるとしても、今日の生活に必要な消費すら滿足に出來ない無產階級の人々には、如何の好影響を齎らしませうか。現在以上の節約を其人々に强る事は、人間並以下の生活へ多數民衆を、突き落して了ふ事でなくて何で御座いませう。

いま、日本の資本家の工場製品は、生產價格の幾倍を以て問屋に卸されます。(原料品の價格と、生產に要する賃銀と勞銀とに比較して、資本家の純利得が如何に過大なるものであるかは、追つて、委しく發表する時機がある事と存じます)

問屋は又、營業費と幾割かの利益を加算して小賣業者の手に渡します。小賣業者はまた、最近の調査に依りますと、例の協定價格と云ふものに依つて、十五割からの手數料を貪つてゐるのさへあります。生活の必要品は、是だけの道程を經てやつと、初めて、我々消費者の手に入るので御座います。

然かも彼等資本家階級は、生產能力の過剩に依つて、市價が低落する恐れがあれば、早速、操業短縮を協定して、市價を釣上げ、自分の事業會社の利益を謀るのです。現に戰後久しきに亙つて之を繼續する爲めに、生產費は嵩み、海外輸出は阻害せられ、外國商品の輸入を促進し、却つて、自らの事業を窮境に陥れた、自縄自縛の滑稽さへもあります。(某製糖會社の如きは、昨年末に至り、精糖の限產を決定して、大勢に逆行して迄も利益を多く收めんとした事實があります。)此等內地大商工業者の莫大な暴利を取締る事を忘れ(勿論代議士が會社の社長や重役であり、政府の某に大官等が政商の緣故である爲めに、特にお忘れになるのだとは思はれませんが)其上、外國よりの輸入品を防遏しながら、只、漫然と節約を宣傳するが如きは、殆んど無意味ではないでせうか。

それでなくとも、政府當局の物價調節策は枝葉末節にのみ囚はれ、少しも其根本に觸れてゐないと云ふのが定評です。現に戰後不況の時代が來て、歐米の物價は各々戰前の狀態に復歸しようとしますのに、日本はひとり、膨脹せる通貨を抱へて、生活難に苦しんでゐる狀態です。「十八億と云ふ金を貯へて、これが輸出を禁じてゐる如き、何とも解し難き政策である。これ思ふに物價が下れば資本家が困るだらうといふ遠慮からか、或は資本家の運動によるか、孰れにしても不合理極まる話だ」と政界の某氏は云つて居ります。

然るに、私共がいま、生活難救濟の一方法として、假りにも、舶來品の使用を慫慂する樣な事をでも申しますならば、所謂有產階級の人達は口を揃へて、すぐに非國民だとか、愛國心がないとか(さすがに資本家の敵だとは云ひかねて)あらゆる惡聲を放つでせう。然し、國を愛する至情は、又、民衆を愛する心でなければ嘘です。內地の物價が餘りに高い爲めに大多數の國民の生活が脅威され、國民全體としての活氣が失はれると云ふ危險狀態に迄至つた場合に想到しますなら、現狀を、どうして是認する事が出來ませう。國に盡す事は、民力の充實を期する事です。民力を衰退させて迄もなほ、利己を謀らむとする內國の大商工業者の中にこそ「非國民」の汚名を被らすべき者共があるでせう。

又今日、生活難に苦しむ多數民衆は愛國心の名のもとに、安價で質のよい輸入品使用を防げられるのみか、國稅地方稅を合して、年額十三億七千七百萬圓と云ふ莫大の負擔を課せられ、なほ其上にも、十指を屈してなほ足らぬ迄の稅種を賦課し、實に誅求苛斂至らざるなく、國民は其負擔の重さに堪へざる狀態にあるのです。然かも其半面に於て、我國は、今日なほ國力不相應の軍備を擁し、租稅、雜收入の殆んど全部

を軍費に費消してゐる事實があるのです。いまこの無用の長物である大軍備を極度に制限するだけでも、我々は毎年凡そ一億四五千萬圓の冗費を節約し得るのです。

然るに節約宣傳の本家でありながら現在政府は、陸軍に於て僅に二千四百萬圓。海軍に於て四千六七百萬圓と云ふ各一割位に過ぎない節約振りで、範を世間に示したつもりなのです。勿論無智な私ども婦女子が、國家の財政を議するなど、僭越だとの譏もありませうが、以上軍縮の手温るさに加へて又現在、二十六億に上る內國公債の利子所得稅免除をなし、約一千萬圓の收入を放棄して顧みないと云ふ大きなお手落ちさへも目につきます。(然かも、內國債の九割までは資本家階級の財嚢の中にある實狀ださうです。本年一月二十日、大朝社說參照。)「或る勢力に壓迫されてゐる政府!」「資本家に媚びつゝある政府!」と云つて某々政客の皮肉が強く私の胸に響きます。

斯樣に我國の稅制が如何に彼階級の公平を保證して居らぬかと云ふ事は、又近頃頻々として創設さるゝ脫稅目的の保全會社の數でも證據立てられるのです。資本家階級の保全會社なるものには、近畿ばかりでも七十一社、(公稱資本金三億千四百萬圓)東京地方裁判所管內で、百社以上あるさうです。すべて斯樣な現象は、明かに有產階級が當然負擔すべき所を、所謂政商結託で以てずるくも無產階級に轉嫁してゐるものであると、人々は憤慨してゐるのです。

然し私は「有產階級にのみ都合よき政府」「利己にのみ汲々たる有產階級」なぞと云ふ非立憲、非人道的な者どもが、我愛する日本國にある可き筈はないと考へたのです。然るに島田三郎氏は　『從來政治家資本家等所謂治者階級特權階級にある少數者は多數國民の利害休戚を度外視して自己の幸福榮達の爲め目前の塵を拂ふに汲々として來た治世の要道は最大多數者に最大幸福を享受せしむることに在る現在社會各般の行き詰りはこの原理を忘却した處に原因してゐる。』　と明言されました。それから又私は、或る家庭の善良な主婦の口からさへ「代議士なんて歲費は僅かですけれど、議員である爲めに入る內密の收入は大したものですつてね。それだからこそ、あんなに選擧の費用を借金までして狂奔するんですわ。なんの、あの人達に、國家や民衆の爲めになんぞ………ね、御覽遊ばせ、あの人達は晝は、議會で居眠りをしたり、喧嘩をしたり、下手な俳句を作つたり、多數に雷同して、贊成!とか何とか、云つて居れば濟むでせう。夜は待合で藝者を招んでお酒でも飲んでゐて、それで議員だつて納まつてゐられるのですもの。私たちが議會に出た方がきつと、もつと〱いゝ政治が出來ますよ。」との冷評をさへ聞きました。

「この政府、この社會の爲めにこそ、我々は幸福であり得る」と多數民衆が、爲政者に感謝し、謳歌し得る狀態を招來すべく努力するこそ人々の任務であり、また現在恵まれた有產階級の志ざさねばならぬ仕事でありませう。勿論それ位の事は

聰明なそれら特權階級の人々が先刻御承知の筈なのです。

然かも何人の罪か。多數國民は、彼の善良な主婦の口を借りて表白されたと同樣の不平不滿を抱いてをります。と同時に、民衆の今日の生活はまた極度に脅かされ、窮迫の餘、かの資本家階級の所謂愛國者より、種々の罵聲を浴びせられながらも、生活の必要の爲めには、其需用品が内國產たると、外國產たるとを辨別してゐるやうな、悠長な餘裕を持ちません。輸入超過も何もお構ひなく、飛び附くやうにして、安價にして、良質な外國品の方へと走るのは當然のことです。それに何の無理がありませう。如何にしてそれらの人々の生活を安かれとこそ願へ！。もし忠良な爲政者たちならば、彼の私利私慾に目のない一部資本家階級のやうな無理解な罵倒はしないでせうと存じます。

私はこゝで、爲政者に向つて言ひたいのです。先づ內地に於ては組合の協定價格といふ不合理なものを全廢せしめて、商工業者の自由競爭に委せ、又外國品に對しては特に日常必需品及原料品の輸入に對し關稅撤廢を斷行する事。陸海軍備を更にまだ〳〵極度まで縮少し。但つ稅制を整理して、地租營業稅を輕減し、特に貧者階級より搾取しつゝある間接稅を減免する事。金の輸出を解禁する事。

今期の議會に於て荒井農相は『物價調節策の效果が擧がらないか、どうかは見方によることで現に物價は一般に一割以上二割方下落して居る、然しこれは全部物價調節策のためとは云はぬが兎に角下落はして居るのである、又生活必需品の關稅免除等の物價調節策を今後も實行するかどうするかとの質問であるが必要があれば之を實行したい方針である但し現在に於ては其必要は認めて居ない』と明言し、僅か一割か二割物價下落で、もう澤山だ。是以上に、生活必需品の關稅免除迄して、內地の物價を調節する必要は認めない。と「資本家擁護第一」の信條からして、多數民衆に對する無誠意を暴露してゐられるのです。

私は現今の爲政者たちに、かの仁德帝の大御心を仰ぎ奉る志があるならば、せめて、そこまで行つて欲しいと思ひます。それでなくば、全國民の窮乏は、到底救はれません。日常必需品の關稅撤廢に依つて、輸入超過を恐るゝなら、先づ以て何故彼等資本家階級の二言目には口にする愛國心に訴へて、安價にして優良な物品の生產を強要しないのです？。安價にして優良な生產品は、諸外國の民衆も又、是を購入するに吝かではない筈です。輸入超過を恐るゝ消極的態度から、種々の弊害を醸すよりは、むしろ、輸出超過を招來すべく、精神物質兩方面共に、もつと積極的の努力をなすべきでせう。

然し日常必需品の關稅撤廢は獨り我國のみの問題ではありません。人類の幸福の爲めには更に諸外國も亦此の課稅制度を廢めて欲しいと考へます。政治家達は、不徹底な、節約宣傳などに狂奔されるより、斯うした根本的の、人類の幸福の

爲めの仕事に盡力され度いものだと思ふのです。

最後に書加へ度い事は、「物價が高いのは何も、政府や有產階級の知つた事ではない、國民一般がまだ好景氣時代の贅澤癖が抜けないからだ、それに勞働者の賃銀が無暗に高いのが大原因でもある」とは彼等特權階級者たちが好んで口にする所であります。現に鎌田文相も、本年正月の「關西婦人」誌上に於て、

「最近に至つて米國は一六〇英國は一八〇まで低下したが、日本は尙二六〇の高率を維持して居る。從つて勞働者の賃銀俸給も此割合の高率であるため、製產品が高くつくので、內地の需要は充たされるとしても日本よりも物價の割合が安く從つて製產費の低廉な英米の製品と海外に於てとても競爭する事が出來ず、工業は漸次沈退し、失業者も增して行くばかりである」

と、勞銀高を生活不安の大原因に數へて居られます。是は大變な見當違ひではありますまいか、現にある貿易業者は申ました。「日本品が海外に於て英米の商品、乃至支那あたりの商品と、とても競爭が出來ないのは、第一に內地の資本家たちに商業道德がないからです。現に私の所に來る品でも、見本と現品とでは格段の相違があり、然かも、荷造りが不親切粗雜な爲めに、破損してゐるものが澤山あつて、其等の點だけでも、着實な諸外國商工業者の手から來たものとは、比較になりません。勢ひ初め安價で釣られた日本製品より、少々仕入價は高くとも又私共の利益は少くとも、外國品を取扱つてゐる方が店に信用が附きます」と、外國品との競爭は文相の云はれるやうに唯だ單に、安い、高いとばかりの問題ではないさうです。又島田三郎氏も「一般の購買力は著しく衰退してゐるにも拘らず、物價は下らない。物價が下らないから、安い外國品はドシ／＼輸入され、その他日本固有の物品が、日本よりも賃銀の高い米國からも來る」と物價が高い事と、勞銀が高い事とは、必しも正比例しない事を、言明してゐられます。犬養木堂氏もまた、

「產業立國は生產增加のみでなく勞銀の低廉によつて生產增加をはる如き舊制度は我々同志の採らざる處である生活の安定と生產增加とは相俟たなくてはならぬ卽ち衆民階級をして精神物質の兩方面より向上進展せしめ貧富智愚の不平等を出來るだけ減却する方針でなくてはならぬ、」

と云つて、彼の資本家の御意に入りさうな、勞銀低下說に反對してゐられる事であります。

勿論公平無私の立場から考へます時、尊き人間の勞力に比して、現在の賃銀は、寧ろ餘りに過少であるとこそ云はねばなりますまい。然かも勞働者たちが膏血を搾つて拵へた製品は其高價なる事に依つて、勞働者それ自身は決して、利益も幸福も享受する事は出來ず、反て、それが爲めに其日常生活は脅かされてゐるのです。(たま／＼彼等勞働者が「バット」を「敷

島田に更へたとか、美味しい上等の酒を飲んだのが潜上の沙汰だとか云つて、少し人並の事をすれば、一々に批難されるのです。彼等勞働者は、高價な毛皮のオバーコートを纒ひ、ハバナの葉卷をくゆらし、幾十年を穴倉に貯へたボルドウの芳醇を口にする資本家階級とは、同列の人間ではないのでせうか。）殊にまた正直に働く者ほど反て多く苦しんでゐると云ふ奇怪な現象があります。そして不勞利得に依つて暴富を致す資本家階級こそは船來の贅澤品を、關稅等を眼中に置かずに、存分に使用してゐる事で御座います。大阪商務課で調べた大正十年度の贅澤品の輸入は、實に莫大の額に上ります。

化粧品	百七十三萬圓
寫眞機	百七十四萬圓
煙草	二百八十四萬圓
洋酒	二百　十一萬圓
寶石	二百四十五萬圓
其他	

特權階級者は是をしも、生活不安に脅威されつゝある多數民衆の需用品なりと見て、姑の小言のやうな節約宣傳なぞをするので御座いませうか。（了）

新刊紹介

◎愛爾蘭戯曲集（第一卷）松村みね子女史譯、四六版四百三十餘頁（定價二圓五十錢、東京芝公園九號地玄文社發行）

◎詩集生命の戰士　田中清一氏著、（定價壹圓八十錢、東京本郷東片町一〇五南天堂書房發行）

◎北村十吉　中戸川吉二氏著、四六版六百餘頁中川一政氏裝幀（定價貳圓八十錢、東京牛込神樂阪二ノ二叢文閣發行）

◎無智なる者、（戯曲集）藤田草之助氏著、（定價貳圓、大阪日本橋筋二ノ五一星月堂發行）

◎敵を愛せ　野口米次郎氏著、（定價壹圓五十錢、東京芝公園九號地玄文社發行）

◎信仰の悲劇　ロマン・ローラン作、新城和一氏譯、（定價貳圓八十錢、東京日本橋本銀町二ノ八冬夏社發行）



女政客の横行
岡山の女房騒動
ロオマ法王聽換使問題
ヨッフエの來朝

室伏高信

○

男が女性化して女が男性化する。男と女とを區別した神の攝理もこの頃はだん／＼無視されてきたかに見える。嘗つては野心ある男が政治の華やかさに憧れた時代があつた。その男たちの間では政治が流行後れとなつてからももう數年になる。男が女性化して政治から離れてきた。男の間では政治は唯老人の手によつて玩弄される破壞を意味する壓迫の機關と化した。然も尚この世の中で政治の死せる舞臺のうへで最後の華かな踊りを試みようとする一團の人達が殘されてゐた。男が女性化してきた瞬間に女が男性化してきた。何が流行するかは三越の支配人と新聞の三面記者だけが知つてゐる。市松模樣の流行する年は不景氣の年だと云ふが、政治が不景氣の時に女政客が流行する。女政客の輩出は今日の流行である。政治に行く男は時代後れである。政治に行く女は流行の女である。女政客が神に惠ぐまれる時代は今まなのである。

神に惠ぐまれようとする女は掌をかへしさへすればいゝ。

今日革新俱樂部へ行け。明日は新聞に寫眞が出て雜誌に論文が出る。流行を求めるものは革新俱樂部の門を叩け。三越よりも革新俱樂部は安價であるからである。

一般の女が政治に冷淡だと云つて非難する人がある。一方には女壯士、女政客が輩出しながらも他方には一般の女が政治に冷淡だといつて非難する人があります。今日女政客がもて囃されるのも女政客が少けないからであるでせう。一般にしていへば女が政治に冷淡だと云ふことは事實であるに相違ありますまい。しかもこの現象を非難する人が正しいか。されるる女が誤まつてゐるか。男でも女でも今の政治に興味を感んずることができるでありませうか。興味のないのは愚ろかなためであらうか。若しくは賢明なためであらうか。興味のあるとないとは知識の程度の問題ではありますまい。生活のかゝはりの問題でありませう。愚ろかな人も賢明な人も私たち自身の生活と深いかゝはりのあることに興味を見出さずしてゐることはできるものでないからである。また私たちと何のかゝはりもないことに興味をもちたくてももてるものではないからである。政治に興味を失つてゐるのは女だけがさうであるのではなく男も女も一樣にさうであるのです。女の罪でもなく男の罪でもない。政治の罪であるのです。生まじい政治に通がつたり、政治家の端くれとつき合つたりする女こそ却つて世の中から置き殘された人たちではないだらうか。何故なら今のやうな政治に幾らかでも興味のもたれる人はその人が矢張り今の政治、今の政治家連と何處かに心の通つてゐるところがあるからだと思ひます。男でも女でも、虛榮のためでなくて、安價賣名のためにでなくて、今の政治に興味のもてるだけの人は、その人が今の政治の程度、今の政治家の程度であることを示してゐるのです。いやそれ以下なのです。頭の乾ききつた代議士連の尻馬に乘つて有頂天になつてゐる女壯士、女政客連のみじめさを見よ。頭が新らしいから政治に興味がると云ふやうな愚ろかな議論である。頭が古いから政治に興味があるのだ。頭が古ければ古るいほど政治に興味を見出すことができるのだ。古るきものをして古るき舞臺に踊らしめよ。

○

岡山縣の女房騷動は、恐らく米騷動あつて以來の、最も眞劍な女の運動である。彼女等はブルジョア政治屋の鼻息を窺つてゐる「新らしい女」ではない。彼女等は帝國ホテルで焙り肉を味はひながら職業政治屋の指揮に從つて婦人參政權問題を遊戲と賣名の具に供しようとするほどの怜悧な近代婦人ではない。彼女等の頭は新らしくもなく古るくもない。彼女

等は原始人である。新と舊とを超越した原始人である。智慧の實を喰はない人間である。彼女等は婦人參政權の何ものであるかをも知らないであらう。知らずして知つたふりをもしないであらう。「新らしい女」があつて若し彼女等に婦人參政權を說いたとしたら彼女等は直に答へるであらう。私たちに先づ一升の米を與へよと。それゆゑに彼女等の聲は眞實の聲である。マアクスがいふたから彼女等が眞似るのではない。生きんとする魂の呼び求めが彼女等を呼び求めてゐるのである。新聞に寫眞が出るために運動するのではない。戰はねばならぬ心の動きを抑へることができないがために戰ふのである。

岡山縣藤田村は大阪の大富豪藤田なる人の所有地である。この村に住む幾千の男女はこの所有地に働く農夫たちである彼等は一種の小作人だといはれてゐる。しかも決して小作人であるのではない。小作人なら自分の手で作つた作物の收穫物は自分の手で處分することができる。藤田村の農夫たちは富豪藤田なる人の農奴である。農奴の制度はアレキサンダアの改革でこの世界から消え去つたと思つたら大きな間違であるのです。岡山縣の一角、富豪藤田なる人の所有地には今も尙ほ數千の農奴が存在してゐるのです。私が今ま岡山縣の女房騷動と云つてゐるのはこの卑しい農奴、然り、この卑しい農奴の妻女たちの運動をいうてゐるのです。卑しい地位の人だけが來るべき時代の力となることのできるものであることを私たちはこの一つの事實からも敎へられてゐるのを見よ。

藤田村の農奴等は久しい間その生活と忍辱と地主の鞭との苦るしみに堪へかねてきた。そして今まから三年前に遂に地主に向つて戰を宣するの止むないこととなつたのです。戰と云つても彼等の戰の如何に同情すべき戰であるかを思へ。彼等のもち出した幾つかの條件も要するにせめて普通の小作人になりたいと云ふただけのことであるのです。つまり今日の農奴から普通の小作人にしてくれと云ふことが眼目になつてゐるのです。今の世の中に農奴をもつてゐることが正しいであらうか。農奴の苦るしみから逃れようとする憐れむべき人の心が憎ましいものであるだらうか。小作人の勞働を搾り取つて肥え太つてゐる普通の地主であることさへ心あるものは恥ぢなくてはゐられないであらうのに、今の世に農奴を養ひつゝ傲慢と贅澤の生活をつゞけてゐる人が自ら顧みて恥ぢなきをうるでありませうか。藤田村の爭議が始まつてからもう三年越しになります。貧しき人の訴へは金石を通すでありませう。しかも今の富豪の心には通ずることがないのです。そして今年になつて農奴等の決心がいよ〳〵堅くなつてきた時に、彼等は先づ食を絕たれたのです。藤田村の田園に實つる

幾千石の米はみなそれ等の農奴等の汗と油の結晶であるのです。しかもその汗と油の結晶は、米一粒と雖も彼等のものではないのです。たゞ汗と油だけが彼等のものであるのです。その汗と油とが結晶した瞬間にそれは彼等の手から容赦なく奪ひとられるのです。彼等の耕作した田圃には米がうづ高く積まれてゐます。彼等はそれを目のあたり見てゐるのです。しかもそのうちの米一粒にでも手を觸れた瞬間に彼等は泥棒と云ふ罪名のもとに牢獄へ送られるのです。警官は大阪の大富豪の所有權を擁護するために田圃のそこここに送られてゐます。不幸な農奴等よ、彼等は自らの手で作りあげた米のうづ高く積みあげられてゐるのを目のあたりに見ながら刻一刻と飢ゑてゆかなければならないのです。貧乏の如何にみじめであるかを思へ。この瞬間である。貧乏が人間の魂を征服するのは。貧乏の歴史は魂の征服された歴史であるのです。

貧乏は先づ台所から征服を始めます。故に女は多くの場合に男よりも先きに貧乏に征服されます。多くの勞働爭議の失敗の跡を見ると女が常に先づ貧乏に征服されてゐるのを知ります。先づ妻女がその貧の苦るしみのために軟化してその良夫が勞働爭議から手をひくの止むなきに至ります。その手をひいた瞬間に勞働者は完全に征服されてゐるのです。

岡山の爭議はこの最後の段取になつて偉いヒロイズムを生み出したのです。男が軟化しかゝつた時に女がその生活の苦るしみのどん底において彼女等を呼びもとめてゐる魂の聲に眼をさまさずにはゐられなかつたのです。女の決心は屢々最後の決心である。飢ゑから生れ出た女の決心は屢々最後の決心である。この魂の聲に醒ざめた女が飢と戰ふべく死を決して立つたのです。その決心ほど嚴粛なものはないのです。軟化しかゝつた男等を勵まして岡山縣の一地方における爭議を天下の問題にまで高めたのです。眞實に醒ざめた女、虚榮からでなく空論からでなくて生きんとする心の戰ひにおいて醒ざめた女の力が如何に嚴粛にまで威嚴のあるかを私たちは心から味はうことなくしては岡山の女房騒動の記録を理解することはできないのです。

○

ローマ法王廳と日本と使節を交換しようと云ふことが今度政府の手によつて企てられました。そんな必要があるかどうかは一つの問題でありませう。私たちのやうな無産者から見れば外交使節なぞと云ふ時勢後れのものにはどこにも必要はないのです。だが今日の日本が世界なみに外交使節を各國に出してゐる以上これまた世界なみにローマ法王廳に使節を出したとしても別にとりたてゝ反對するにも及びますまい。白耳義やチエッコ・スロヴアカイや波蘭や西班牙に外交使節を出

すことが必要ならローマ法王廳に使節を出すことは一層必要であるのでせう。無論ローマ法王廳は一つの宗教權力の主體なのです。しかも宗教權力の主體として、善きにせよ惡しきにせよ、一つの國家的の地位に立つてゐます。そこが屢々外交上の關係の源泉ともなり仲介ともなることは今日の事實であるのです。だから世界並みに外交舞臺のうへで下手な踊りを踊りたいなら日本だつて使節をこゝと交換するのが常識であるのです。この分りきつた問題か何故に今日の政界で大問題となるのでせうか。宗教が死滅してゐるからだと私は直に答へます。

佛教徒が反對しました。佛教徒は何故にローマ法王廳への遣使に反對しなければならないであらうか。彼等によると日本の國體に背くからだとのことです。何故に日本の國體に背くであらうか。ローマ舊教は教會を至上權と認めるから日本の天皇主權の觀念のもとでは許るすことはできないからだと云ふのです。馬鹿々々しいにも程があります。馬鹿々々しいと云ふよりは佛教徒の腐敗した心根を思へ。佛教は神を至高のものとはせぬや。然らば佛教は宗教ではあらぬ。

今日の佛教は宗教ではない。一つの御用宣傳團である。政府のための御用宣傳團である。それは最早や内務省から雇はれてゐる御用浪花節語りと何の撰む處もないものである。

宗教に團體があるかを考へてもらひたい。日蓮に大師號をもらひたいために大運動を起した今の宗教家を侯爵にし、伯爵にし、子爵にせよ。そして佛の名において日本の國體を擁護せしめよ。日本の國體は萬々歳である。宗教の墮落を云々するに及ばぬ。宗教は死んでゐるのである。

○

ヨツフエが日本にきました。ヨツフエは今のロシヤのボルシエヴヰキ政府のもとでは有力な外交家の一人であるのです。セミヨノフの樣な馬賊に等しい賣國奴を一生懸命に保護してまで何とかして共産ロシヤを亡ぼしてしまはうとした努力がみな水の泡と消えてしまつた時に日本も最早や共産ロシヤの力を認めなければならないこととなりました。この時にヨツフエが非公式ではあるがロシヤを代表して日本にきました。四ケ年有餘の間、國と國と相對しながら、殆んど敵と敵との關係できた日本とロシヤとが幾分かづつ接近しなくてはならない時機がだん／＼と近づいてきたのです。そしてそれは同時に共産主義プロレタリヤの力がブルジョア國家と對立するまでになつたことを示してゐるのです。私たちはこの意味で世界のプロレタリヤのためにも、日露國民のためにも、ヨツフエ君の來朝を喜び迎へたいと叫びます。



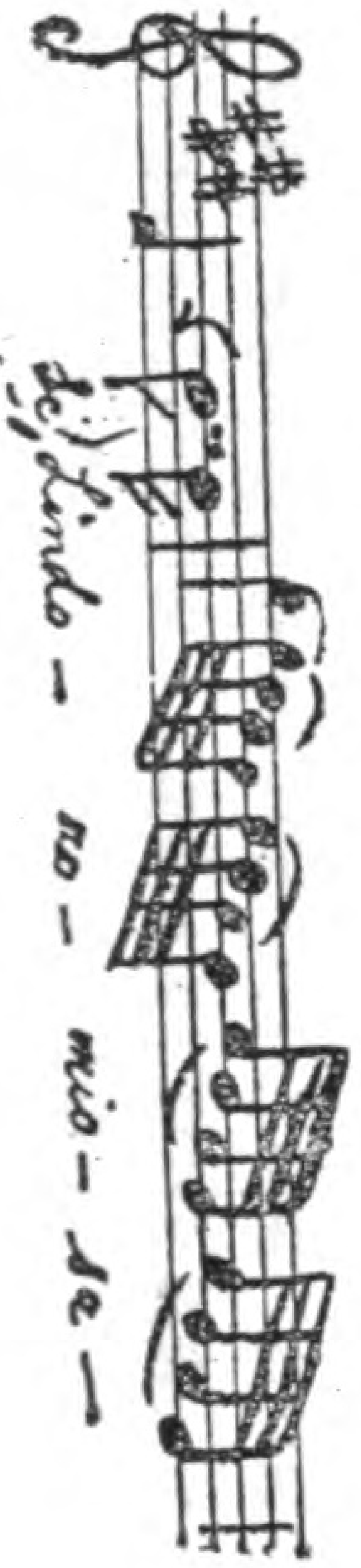
聲樂の道（三）

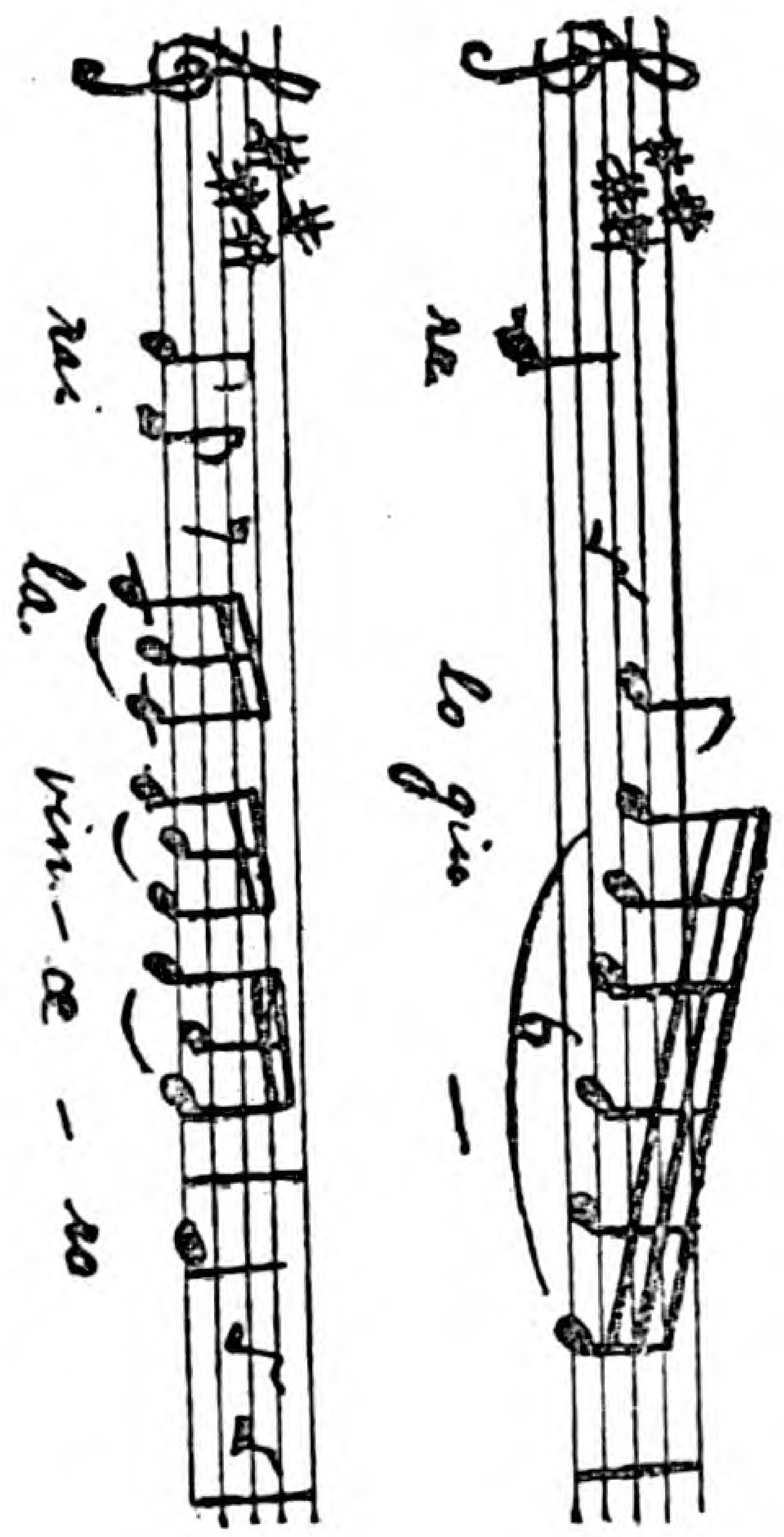
柳　兼子

十一　コロラテユーア

讀者の中には恐らくは Rossini の歌劇中のアリアをおきゝになつた方が多くおありの事と思ひます。ロッシニー作の歌曲は殆　全部と云つてもよい程、細い急速度の音譜の繋りによつて華やかにかざられてあります。左の例を御覧なさい。

ロッシニーセビラの理髪師より

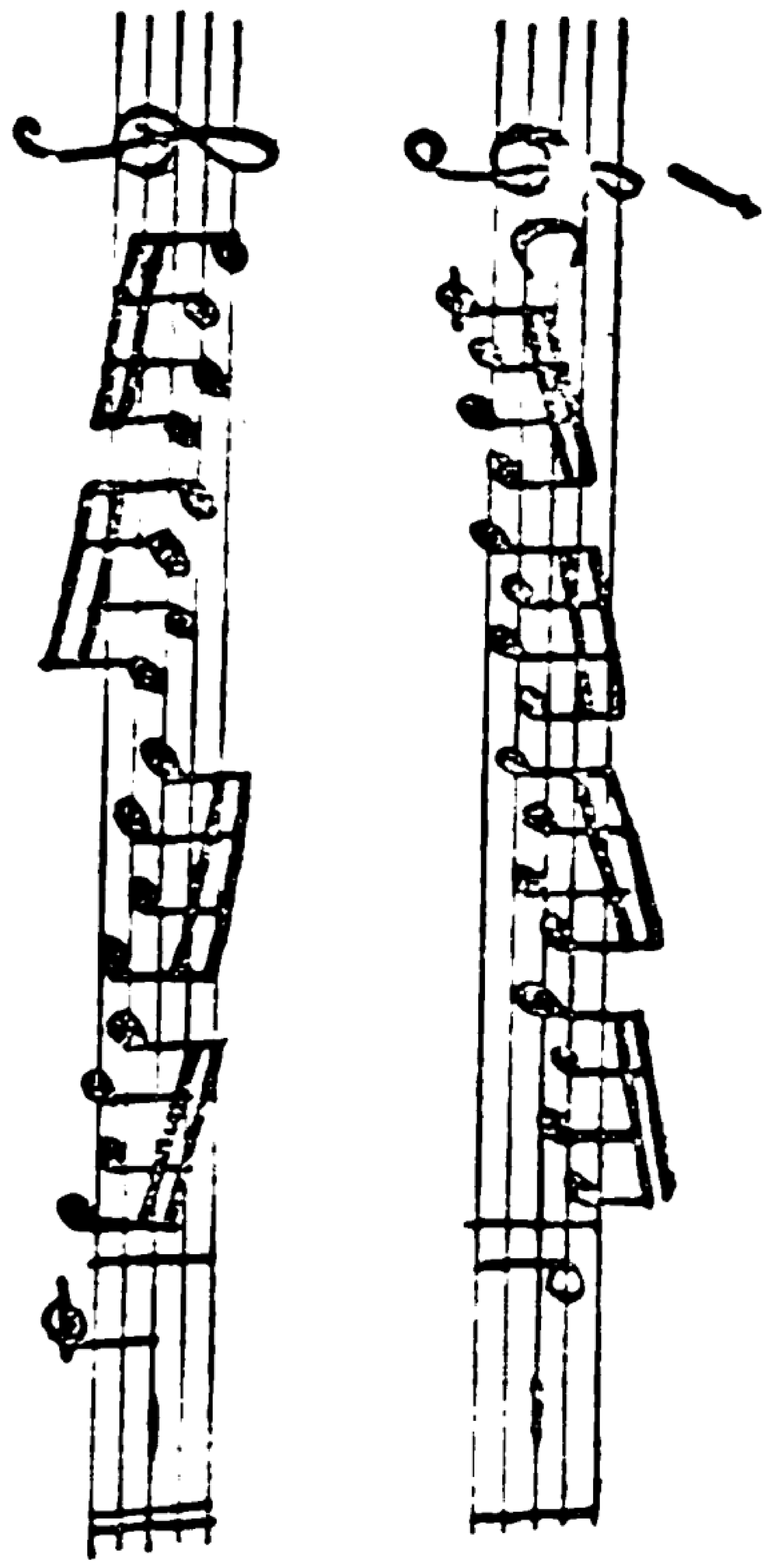


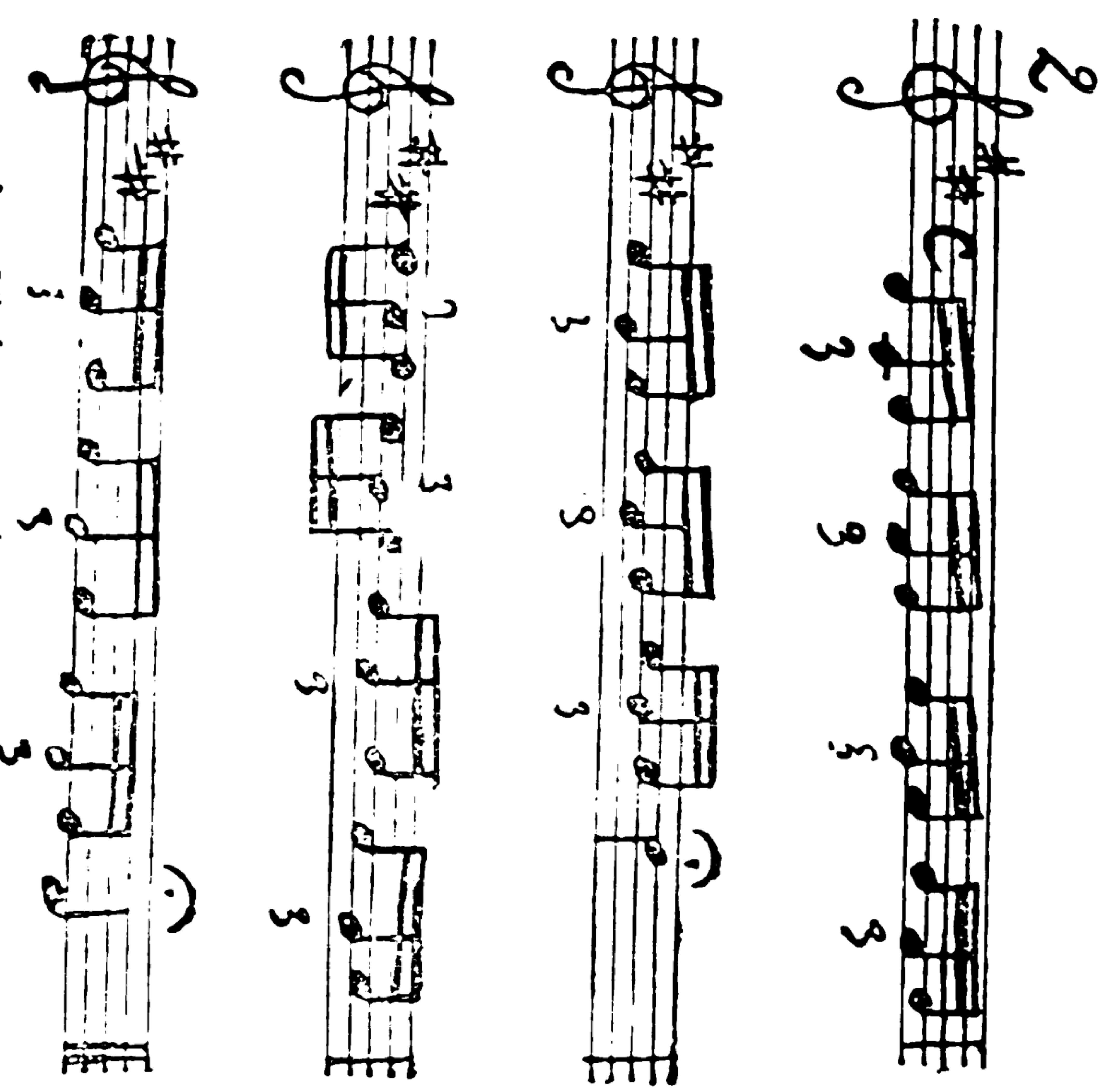


吾々の耳に最も馴れて居るだらうと思ひまして、Rossini作「Il Barbiere di Leviglia」中の"Una voce poca fa"の中から例を引きました。かう云ふ急速度の音譜を、輕快に見事

に唱ひ廻してゆくのをコロラテユーアと呼びます。Thamas作「Mignon」中の"Je sui Titania"の曲だの Verdi 作「La Traviata」中の"Sempre libera"の曲だの Donizetti の Lucia di Lammoor 中の"Jl dolce suono"の歌曲中にかういふ調子を屢々お聞きになるでせう。

之の練習には普通長音階の練習が相應に積んだ時に引き續いて入つて行くのが順序で御在います。單調な普通の緩速度の音階練習に於て音程も、正確に音の階段も、むらなく唱ひこなし得る樣になつた人でも、急速度に唱ふ場合になりますと、中々自由に咽喉がまはるものでは御在いません。そこで急速度の練習にかゝると同時に、咽喉の筋肉がよく動く樣になる爲めの練習を合せてする必要が御在います。

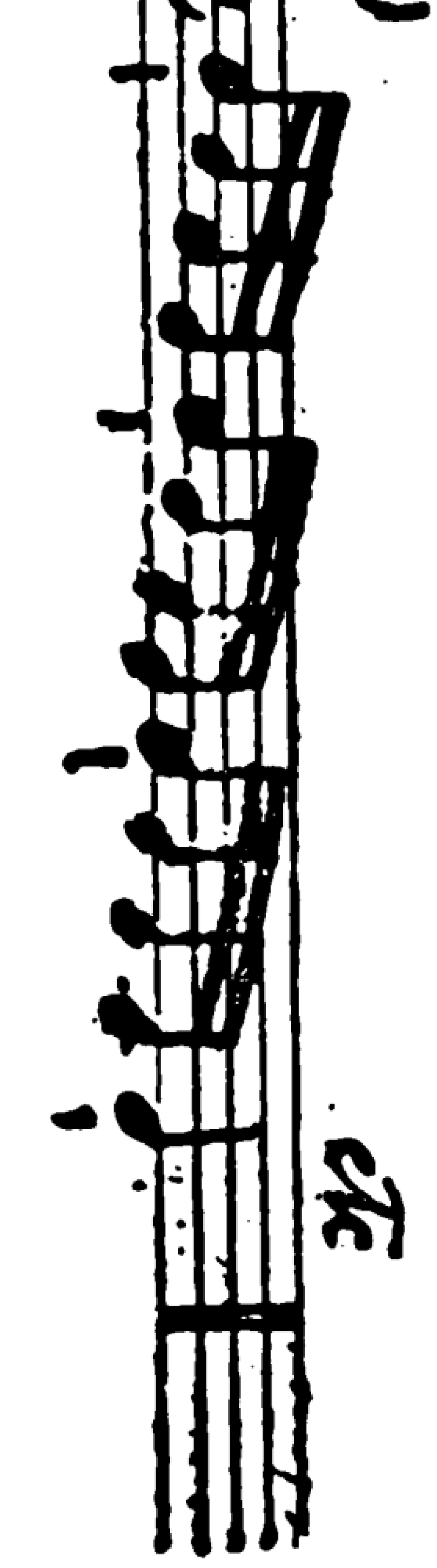




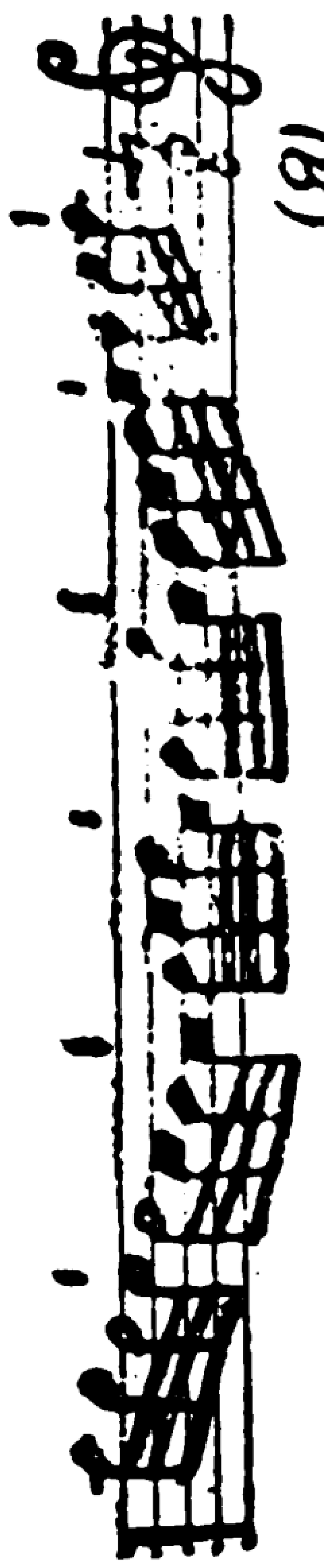
右にあげた樣な曲譜によつて熱心に練習なさい。初めは拍子にアクセントをつけないで各音を皆平均にお唱ひなさい。弱聲、強聲、無聲共に練習なさい。無聲といふと可笑しく聞えますが、これは聲を出さずに、出して居る積りで、曲譜の音程を咽喉だけで唱ひまはして見るので御在います。可成りよい練習になります。聲が疲れた時などかういふ風にしてまでも練習を繋げて行くとほんたうに進歩の助けとなります。

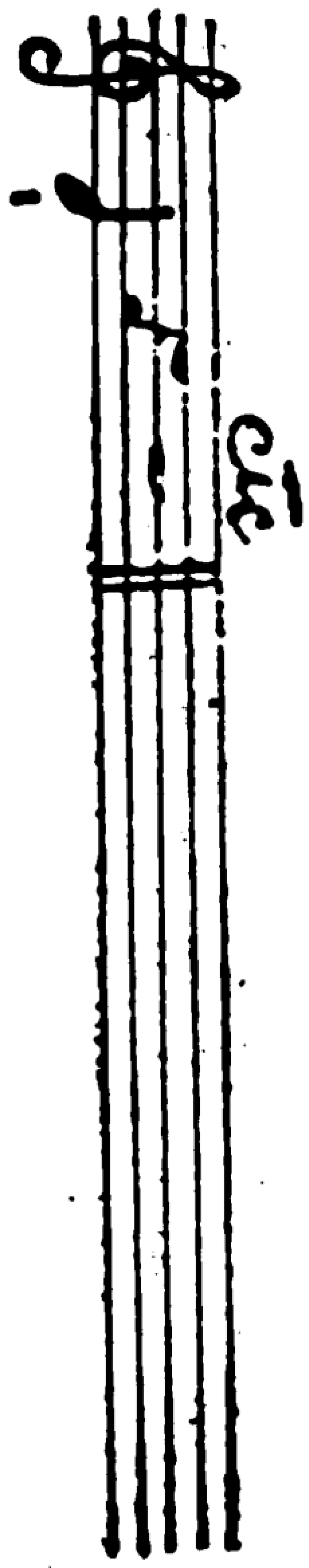
コロラテューアの爲めの練習曲を稽古するには、先づ音程を丁寧によく呑み込み、それから段々と速度を加へていらつしやい。始めから急速度で致しますと音の扱ひが粗雜になり易く、粗雜なりに固まつてしまふといけません。そして音程を正確に相應に速く唱ふ事が出來ましたら、拍子記號によつてアクセントのつくべき音、卽ち下拍部にアクセントを附け間の音を輕やかに正確にころがして御覧なさい。つまり、次の例で云へば－の記號のある處にアクセントをつけるわけになります。

(A)



(B)

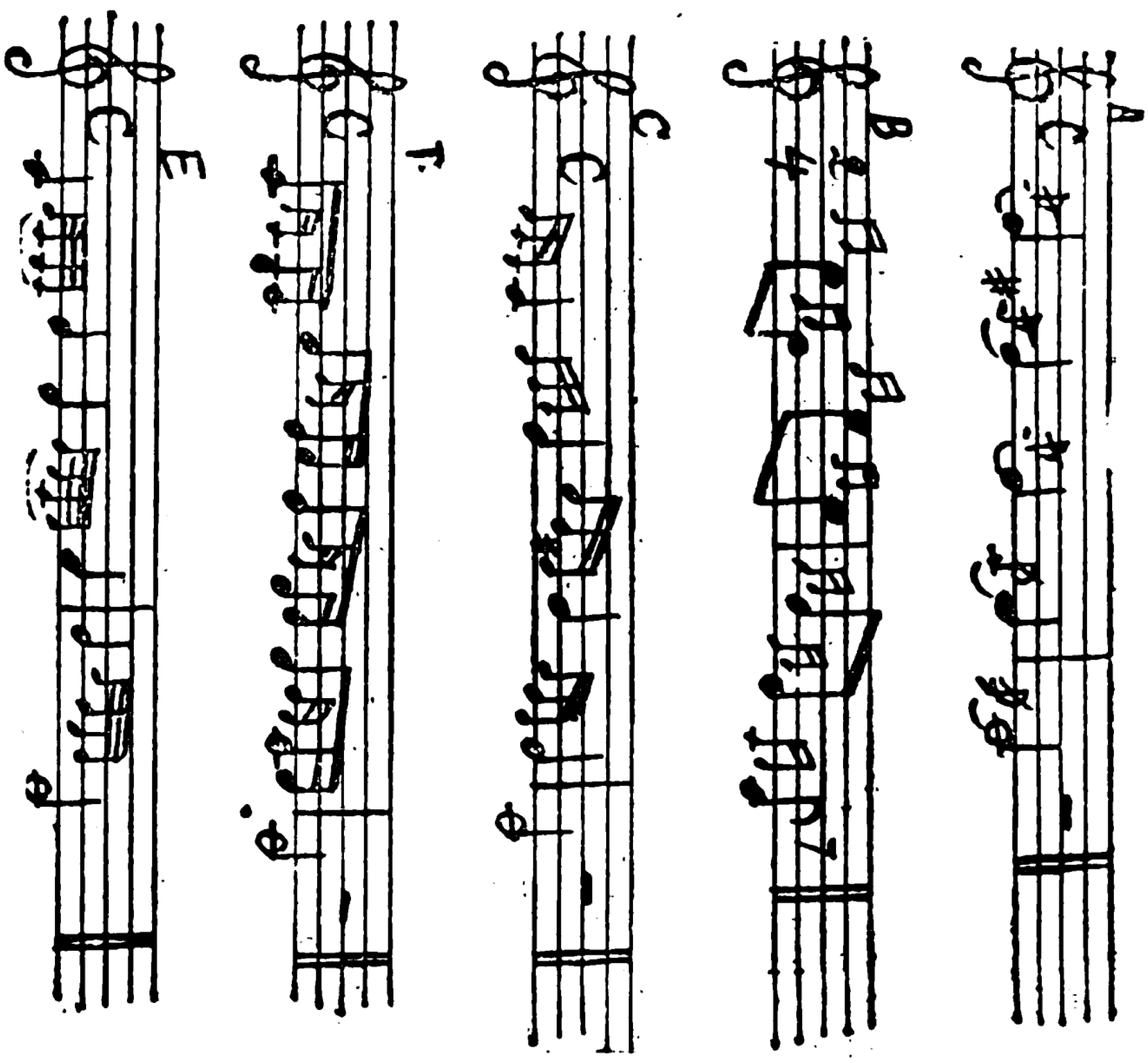




但しこの場合勿論アクセントをつけられた以外の音も一つ一つ確實にきこえなくてはいけません。アクセントをつけると音聲を轉がすことも仕易くなるかはりに、一方アクセントの勢で間の他の音が滑り易くもなりますから、滑らせない樣によく注意なさい。吾々は例へば高度の音から可成り低い音に迄の階段を急速度に下りて來る樣な場合に、一番初めの音と一番終りの音にだけ強くアクセントをつけて中間の音をいゝ加減に誤魔化してしまふ樣なぞんざいなやり方をよく聽く事が御在います。御當人は天晴れ曲譜をやつてのけたつもかもしれませんが、事實曲譜を唱ひこなす充分な力さへ缺いりた意氣地のないわけなので御在います。こんな誤魔化しを得得としてやる事は愼まなければいけません。

終りに一言特にアルトの人に對して申し添へて置き度いのは、アルトの人は此のコロラテューアを猥りに使用してはいけないといふ事で御在います。コロラテューアの方法を會得すると急速度の階調を唱ひこなすのに樂になるので、急速度の音譜が出て來ると兎角この方法を應用したくなるもので御在います。其結果アルトの性格に當てはめられて作られた曲が全然持ち味からはづれて了ふ樣な場合が屢々御在います。アルトはその性質上ソプラノと異つた特質を供へて居るのであるといふ事をよく顧みて、とくにその特質を明瞭に表はして唱はうとするには急速度の階調を唱ふ樣な場合にもよく心して輕快な調子に踏み込まない樣にしなければなりません。

十二　裝飾音の唱ひ方に對する注意



装飾音には右に掲げた様にいろ〳〵の種類が御在います是は譜を一見して解る如く、つまり旋律を構成する音を装飾する爲めに附せられた音で御座います。

A例の如く極短く附けられた音でも、主となる音の方ばかりを響かせて好い加減に取り扱つてはいけません。コルラテユーアの如く極く軽い唱ひ方をするにしても、Aの方の音がちやんと正確に響かなくてはならないので御在います。B例に於ては普通に記された音譜に附屬させて小さく記された二個の装飾音、C例に於ては同様なる三個の装飾音、いづれも二箇の方は二個とも、三個の方は三個ともちやんとお響かせなさい。他の例も皆同様で御在います。

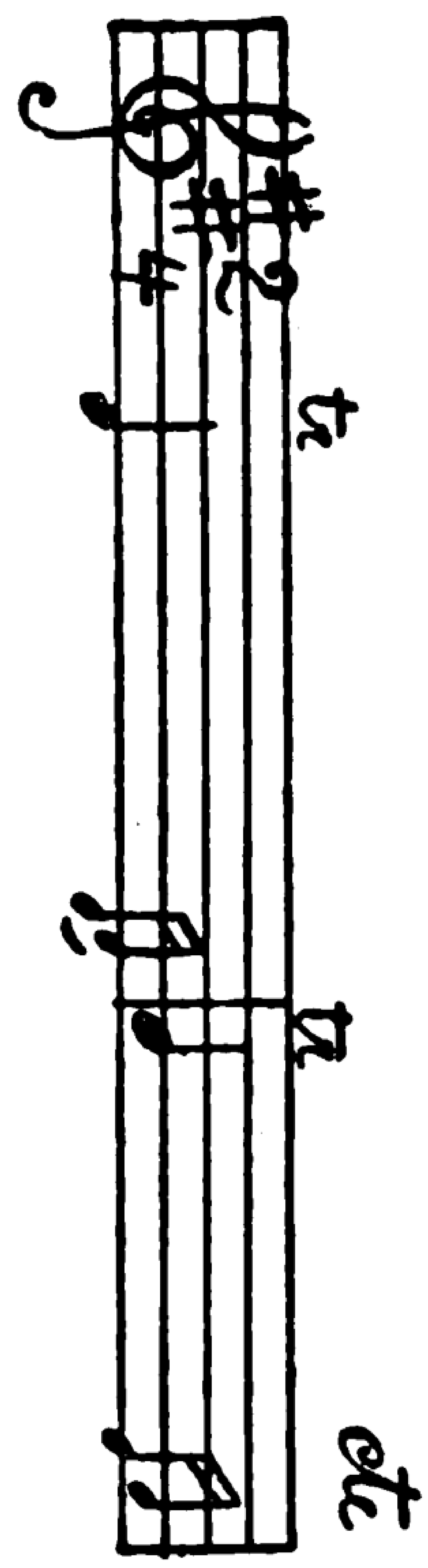
装飾音は或る意味から申せば洒落れて附けられたものなので、その爲か時には不眞面目な洒落れ氣分で不正確に唱ひのめされてしまふ様な例によく出逢ひます。尤もそんなやり方をするのは前にコルラテユーアの處で述べた様に、音譜を誤魔化して唱ひのける様な人に多く見るので御在いますが、本來は洒落れた處には、積極的に曲面上に價値附けられねばならぬ意味が含まれて居る筈なので御在いますから、装飾音の效果が充分に現はれる様に見事に飾つてゆく事を心がけねばいけません。

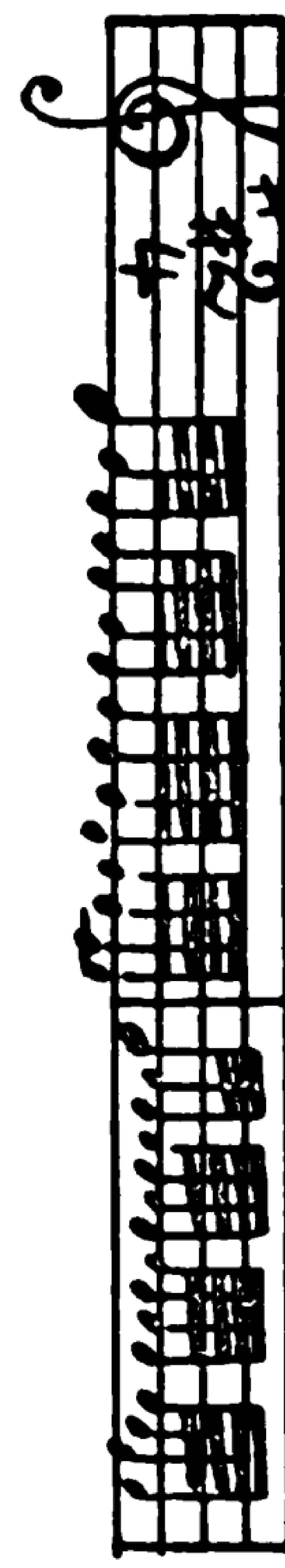
装飾音は右に述べました様にして、譜面通りの速度で練習するので御在いますが、歌曲の中に現はれた場合に場所によつて任意に延ばしたりされる事か御在います。

十三　トリロ　(Trillo)

トリロとは一音若しくは半音の音程間を極めて急速度に連

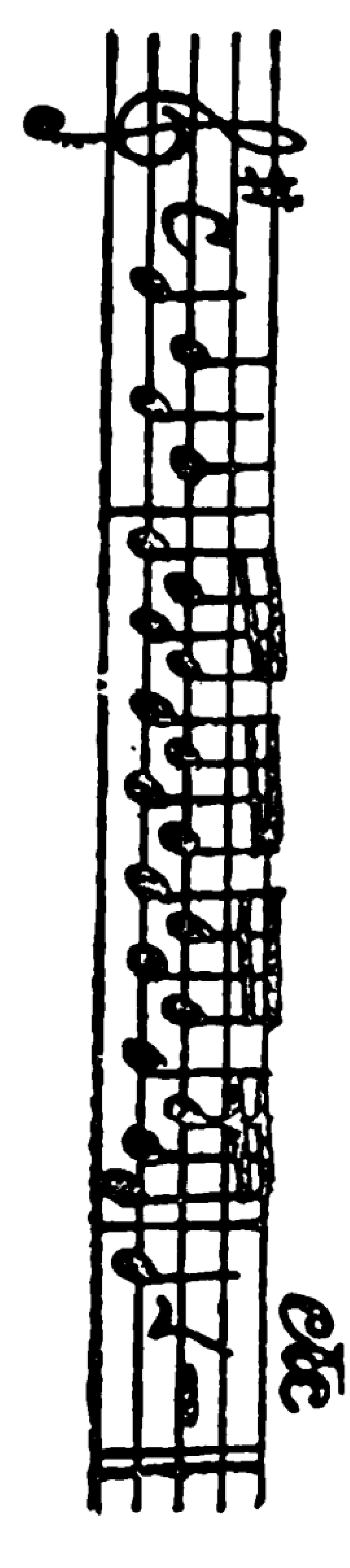
[illegible]的に上下させる方法で御在います。申すまでもなく何誰でも御存じの事と存じます。





トリロの練習法としては、眞中の 'a' とか sol, la あたりの音から、比較的弱聲を用ゐてさせるやり方も多く行はれて居りますが、私はリリ・レーマンが唱へて居る樣に比較的高音即上の 'do' 'mi' 以上の音から、聲も加減せずに猛烈に練習し始める方がずつと效果がある樣に思ひます。兎も角いづれにしてもトリルを旨く唱へる樣にするには、他の技巧練習よりも一層の努力が必要で御在います。

トリロのよく吞み込めない人は、例へば 'do' を基音として 'mi' とのトリロを行ふ場合に聲が上づつてしまつて 'do' が基音なのに拘はらず基音に納つて聽えない事がよく御在います。又之と反對に基音の響きはちやんと感ぜられて聽えますが、一方の音の方がそこまで屆いて居ないで恰度いやなトレモロ位の程度にしか聽えて居ない場合も御在います。こんなのはどちらも音聲を二音間を上下させる咽喉の働きが敏活でないのによるので御在いますから、三度或はそれ以上の音程間を正確に、成るべく速く上下させて咽喉の訓練をなさい。即ち左の樣な音譜によつて練習するので御在います。



これで音譜及び記號上に表はされた技巧の扱ひ方だけは一通り述べました。尙此の他にアルペジオ(Arpeggio)だとか短音階(Moll)調の樣な多少音の配置の異つたもの等も御在いますが、要するに今まで述べて來ました各種技巧の要領を會得すれば特別にとりたてゝ注意を加へる必要もない樣に思ひます。只それ〴〵の練習曲に對しては、いづれも同樣に神經質に練習なさる事が肝要で御在います。

十四　樂曲を唱ふに就いて要する注意

今迄は音譜、記號等に表はれた技巧上の方法に就いて部分的に說いて參りましたが、今度は、それ等を以て成された旋律から段々に廣く曲全體に渡つてのいろ〳〵の注意を彼是となく述べてゆかうと思ひます。見出しには樂曲と書いてあり

ますが、之は單に歌曲を指したのではなくもつと廣い意味にとつて頂き度う御在います。

一つの纏まつた旋律を、あまり小部に分けてクレッシエンドやデクレッシエンドを附けたりするのはよくないといふ事は、前回のクレッシエンドとデクレッシエンドの終りのところに於て述べて置きました。それが何故よくないやり方であるかといふ事は既にお解りになつた事と思ひます。

私は茲に先づ更に音の一つ〳〵が必ずぞんざいに扱はれてはならないといふ事を注意致したう御在います。是は前に申しました事と或は矛盾して居る様に思はれる方がおありかもしれませんが決してさうでは御在いません。前によくない仕方として注意した様に、一音一音にクレシエンドやデクレッシエンドを附けたりする様な技巧を施すといふ意味では御在いません。吾々は、可成りよい聲音でありながら、何となく味もそつけもなく空虚の感じに響く様な唱ひ方を聴く事が御在います。さういふのは、言語の發音の扱ひ方等が關係する場合も御在いますが、一つ音を長く引く時などに、一番あからさまに音聲だけの缺點を示されます。(つまりやさしい言葉で云つたなら身のない聲とでも申しませうか)。たとひどんなに細く弱く引かれる音聲でも、或はデクレッシエンドに消えゆく様な形の音聲でも、充實され緊張されて居る様に願はしいので御在ます。そして緊張を保つたまゝ少しの拔け目もなく、音譜が次へ〳〵と唱ひ繋げられてゆかなくてはならないので御在ます。

かく充實された音聲を以て、流れゆく旋律を唱ひ續けてゆくと同時に、吾々は眼を更に廣く曲全體の上に向け、曲全體を唱ふ爲に、旋律の群を如何に扱かつてゆくべきかといふ事に心を附ける必要が御在います。卽ち樂曲に對して、例へば始め軟かに靜かに出て行つて中程を豐かに、そして又終りを靜かにくゝるとか、又曲の進むにつれて強めに、終りを高潮に結ぶとか、或は並の調子に出て消え入る様に終りを告げさせるとか、曲の相に對して銳い神經を向ける必要が御在います。かういふ事は歌詞の内容につれて解釋し、唱ひまはして行くのが當り前の事であるには違ひ御座いませんが練習用等に作られた曲の如き單に旋律のみで詞の無い曲でも、必ず譜の上に曲全體の相とも申すべきものは現れて居り、又自らなる調子があるもので御在います。(器樂の場合を考へたら明瞭に點頭かれる事で御在いませう)。かういふ相を個々の解釋によつて如何に音聲の上に唱ひ生かしてゆくかといふ事は歌手の缺くべからざる枝倆の一つで御在います。充實された個々の樂節が寄つても、それだけでは必ずしも曲全體が充實されて響いては來るといふわけには參りません。一曲としては各樂節は

お互によき聯絡を以て統一されて居なければなりません。恰度、たとひ音一つ〳〵や、旋律が餘り小部分に分けられてクレッシエンドやデクレッシエンドを附けられたりして大事にされる事が、却つて樂節の感じによくない結果を作るのと同じく、お互に聯絡すべき樂節が、各々かゝはりなく獨立して居たなら、曲全體の感じに統一がなく散漫になりやすう御在います。よし散漫にならない迄も單調に陷りやすく、同時に曲の刺戟が薄くなります。

一曲としてかういふ風に統一的に唱ひ現はすべき事はよく心得て置かなければなりませんが、更に又一つの曲が一番、二番、三番と繰りかへされる樣な時には、一番、二番、三番を通じて統一した現はし方をなすべき場合にもよく出逢ふ事を知つて置く必要が御在います。勿論、民謠等によく出て參りますが五番以上十番も繰り返される樣な歌はさうは行かない場合も御在いますが、Schubert の Wiegenlied や Stille Nacht heilige Nacht 等の歌を見ても解る樣に、二番は一番よりも弱く三番は二番よりも更に弱く唱ふとか、二番をやゝ無雜作に三番を又靜かな調子に納めるとかいふ仕方にした方が、三番とも同じに繰り返へされるよりもどれだけ價値づけられて聽かれるで御在いませう。（この章次回に續く）

お斷り。

Staccato の例が逆さまに入つて居りました事はどなたも御氣附きの事と存じます。

クレッシエンド、デクレッシエンドの惡い例を示した圖が大變曖昧に刷られて居りましたので、圖例の意味をなさなかつた事を殘念に存じますが、改めて訂正せずとも御解りの事と存じます。

今回の最後の章を一氣に述べてしまひたいので御在いますが、今回は長く筆を續ける事が出來ませんので殘念乍ら途中で切る事に致しました。右お斷りまでに。

たらしてしまふ凄い色魔などが活躍して、全篇血なまぐさい殺人やねば土のやうな情慾の匂ひで充ちた恐怖すべき大作。しかもそれを裏づけて大ゾラの深甚な人道觀念はまるで潮のやうに凄じく漲るのである。この作者の三十に餘る長篇の中で一ばん人間的な魅力を持つたのは何と言つてもこの『獸人』だ。

愈二月十日發賣

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　**改造社**



長編小説

炎の路（五）

―エセル・デル原作―

三上於菟吉

二　暗い影

マスグレーヴ夫人の許を訪ねてから早くも三週間はムリエルの上に經つた。まだ身のまはりの闇は去り切らぬ氣がしたものゝ、しかし今は何となく明るさも感じられて來た。彼女は夫人の許を何度も訪ねた。そしてそのたびにますます心が和らいで行くのを覺えるのだつた。バセット夫人はマスグレーヴ家訪問に就いてあらはには故障を言はうとはしなかつたがしかし心底ではそれを嫌がり拔いてゐることはムリエルにもちやんと解つた。

ムリエルはニックとの遠乘を殆んど毎朝繼續した。が、彼はこの早朝の出逢ひだけで滿足してほかの時間に遣つて來ようとはしなかつたから煩さくなぞは感じる要がなかつた。けれどもそれと同時に健康が恢復するに連れて一種言ふべからざる寂寞孤獨の感が彼女を襲つた。彼女は松林にハンモックを釣つて、小猿を相手に戯れて無聊を慰める外はないのだつた。つい側には夏小屋があつたが誰れも棲んではゐなかつた。で、この邸を訪ねて來た人が言ふべからざる香しい松の匂ひに誘はれて庭の奥を覗き込んだところで、その小屋のうしろの彼女のハンモックを見付けることは出來ないに違ひなかつた。

一日社交社交で忙しいバセット夫人も勿論彼女を探しに來

る筈もない。ムリエルにすればこんな美しい場所へこの邸の人達が散歩に來ようとさへしないのが不思議だつた。

軀が丈夫になるに連れて、結婚が近づくといふことに對する子供らしい恐怖はだん〴〵に彼女の心から淡れた。ニックとの毎朝の遠乘はいつとはなしに二人の仲を馴れ馴染ませただが、內面的な問題にはお互に觸れないことにしてゐた。あの指輪はいつも彼女の指にあつた。いつだつたか彼女は口に出して恥かし氣に思ひ出したやうに禮を言つたことがある。けれども例の彫刻された古諺に就いては何ごとも口にしなかつた。

ニックはニックで毎日マスグレーヴ夫人を訪ねては女性特有の智慧を借りた。彼は彼女の洞察と直覺とを大へん信用してゐたので何でも言ふことを聽いた。彼女は急いてはならぬ――落着いてゐなければ事が破れると口癖のやうに忠告するのだつた。

『何でもいそいでは駄目よ。』とダイジイ・マスグレーヴは言ふのだつた。『結婚前も結婚後も同じ事だわ。あの娘はあんな打擊を受けたばかりで、まだその打擊からすつかり恢復してゐないのだから――あの娘はまだあなたを愛してはゐないか知れないけど、もう少しで愛すやうになつてゐるわ。だけどあなたが事をいそげば、あれで柄ばかり大きいくせに子供だから脅へ上つてしまふわ。』

ニックは尤もだと思つた。兎に角もう地步はしめたのだ。急くことはない。やがて一切の願望は到達されるであらう……
……。

もう式を揚ぐべき日も目睫の間に迫つた。彼は準備に身を入れはじめた。こと〴〵しいお祝ひめいたことは避けようと思つた。ダイジイ・マスグレーヴとその良人とには當然列席して貰はねばならぬ。バセット夫人のことを考へると、ニックは顏をしかめずにはゐられなかつたが、しかしその人も重要人物のひとりには違ひない。

彼は式が濟んだならすぐにシムラを去つてネパールの方に行かうと考へた。あの驚くべき地方は彼に取つてははじめてのところではなかつた。彼はあのさま〴〵な珍しい風物を戀びとに見せたいと思つた。新婚旅行は必ずや、若い二つの魂を完全に結び合せるであらう。彼は何よりも先づ怖るべきものは一つもないといふ事を彼女に敎へねばならぬ。そして最後に是までの辛抱の償ひとして(愛)を勝ち得ねばならぬ。さう思ふたびに彼の血潮は高鳴るのであつた。もう一度彼女とた〻二人山々に取り圍まれて限りのない靜寂の中に坐したならばその時にはもう彼女の(愛)は彼のものになるであらう。もう一切の惡は二人の間に忍びこむ筈がない。さう考へて、

その日のために彼は現在の情熱を、慾望を、焦燥を抑制するのだつた。

が、それは恰度ダイジィの良人が久しぶりで此の土地を見舞つた日のことであつた。ニックはしばらくで顏を合せた若夫婦と愛子とのまどゐの邪魔をするのも心ない業と考へたので、今日はひとつムリエルのところへ午後の訪問を試みて遣らう――今朝いつもの遠乘はしたけれど、その時に別に豫告もして置かなかつたからだしぬけに行つたらさぞ驚くだらう――驚かしてやりたいなぞと考へて、もう少しで寓を出ようとした。

ところが――あとで考へてニックは慥かに惡魔に邪魔をされたのだと思つたが、出かけやうとした刹那にふと忘れてゐた手紙を思ひ出した。どうしても返事をやらなければならないところがあつた。それで彼はまた卓の前に坐つて、やつぱし行かない方がいゝ、突然闖入してもしやお冠をまげられては大變だといふ風にわれとわが身を思ひ諦らめさせながら何本かの手紙を認ためはじめたのである。

一方ムリエルは、その時刻に例のハンモックに身を委ねて、讀むでもない書物を膝にうつとりとしてゐたのであつた。それは何となく眠くなるやうな午後だつた。山々は光霧に包まれ、あたりはしいんと靜まり返つてゐた、頭の上では松風が微かにひゞいてゐた。が、下には動くものとてはなかつた。ただ友達の小猿が赤い松毬をごろ／＼ところがしては遊んでゐるだけであつた。

氣も心ものんびりしたこんな四圍に包まれてムリエルはだんだん眠氣を催して來た。今朝彼女はニックと少し乘馬り過ぎたのだつた。その疲れもいくらか出てゐた。バセット夫人は例の（社交界）に出て行つたらしい。ムリエルはます／＼眠くなつた。たうとう彼女は和らかな腕に片頰をもたせてうとうとと眠りはじめた。靜かな流れに舟を浮べてゞもゐるやうな爽やかさを覺えながら――

ふと、彼女は急に目が覺めた。殆んど飛び上る程びつくりした。だれかゞ軀に觸つたやうな氣がして、そんなことがある筈はないと知りながら驚かされたのである。あたりを眺め廻すと言ふまでもなく誰れもゐはしなかつた。が、あまり離れないところで人聲がして、茶碗の觸れ合ふ響がしてゐるのは事實であつた。

だれかお客があるに違ひない！　バセット夫人が友だちを連れて歸つて來たのであらう。ムリエルは顏をしかめた。若しこちらから立ち上つて姿を見せないかぎりいつまでも俘囚のやうにつくなんでゐなければならないのである。後ろは裏小屋の垣になつてゐて逃げ場はない。どこへか行くにはバゞ

ンガローの下の小徑を通る外はないのである。姿を見せるのは好もしくないが、しかしどうにも仕方がない。彼女はこのシムラに知り人が少なかつた。バセット夫人と話をしてゐる人の聲にも殆んど聽き覺えがない。ひとりは男であつた。力の強い、響きのいゝ聲である。もうひとりは女で、夜そこらを泣いて歩く猫のやうに甲高だつた。その女の聲を聽いてゐるうちに、ムリエルはあゝいふ女と顔を合せなければならないなら、いつまでも此處に小さくなつてゐた方が増しだと考へはじめた。

ムリエルは半ばヤケになつて書物を開いた。勿論バセット夫人は彼女が此處にゐるのを知る筈がない。その内にはみんな立ち去るであらう。彼女はしようことなしに讀書をはじめた。

が、突然彼女の耳を打つた言葉が全身をハッと緊張させた。

『勿論あの場合はだれだつてあゝする外はなかつたでせう。』とその聲は言ふのだつた。「私があの場合に立てばやつぱりああしますよ。』

バセット夫人は、和らかい、しかし鋭どい調子で答へた。

『それは紳士の方々がよく周圍の事情を考へた後で求婚するのに何の惡いこともありませんわ。だけどあの人は少しやり過ぎたのよ。』ちつと無理强ひに、强制執行をした氣味ですわ。たゞもうあの娘のお父さまからあの娘の一生を委ねられたとばかり考へてしまつたのです。あの娘の方はまだ何の考へもありませんしねえ……私、隨分いろ〳〵言つて聽かせたのですけど……まだどんなものがほんたうの愛だといふことを知る年齡ぢやあないんですから――つまり双方のために悲しいことになるでせうよ。』

そして彼女は柔しい太息をつくのだつた。ムリエルの膝から書物は辷り落ちた。彼女はまるで蛇のとぐろを巻いてゐるのを見付けでもしたやうな眼付で夏小屋の方をぢつとみつめた。

ちよいとした沈默が來た。今度は男の聲で言つた――

『ほんたうにあなたも御心配なすつたでせう。だが、私は今度といふ今度はニツク・ラトクリツフを見上げましたよ。自分の一生を賭けて責任を取らうとするとは感心です。そんな犧牲的精神のある男とは思ひもかけませんでした。』

『私は二人が結婚してしまふまでは安心がならないんですよ。』とバセット夫人は言つた。

『あなたはお信じになれないらしいが、』と響きの強い聲が應じた。『しかしわれ〳〵青年は不幸な境遇の娘とひと度約婚した以上必ず敢行しますよ。こゝまで來れば彼の心に一生を賭した犧牲的な氣持が湧くに違ひありませんから――彼も亦

それに相當した酬ひを受けることが出來るでせう。」
　その時例の雌猫のやうな聲がきこえた。
「だけどねえ、私にはニックが結婚するなんてどうも信じられないわ。ごらんなさい。あの人はいつもあんなに陽氣ぢやありませんか。そしていつだつてダイジイ・マスグレーヴと一緒にゐるのです。少くとも毎日あの女を訪ねるんですわ。そしてあの女の方でもあの人の外は門前拂ひをくはしてゐます。ずゐ分妙な話ぢやあないの。」
「そんなことを仰有るものぢやありませんわ。」とバセット夫人は言つた。「毎日訪ねるといふ程でもないでせう。」
「それにしても、まアさう言つてもいゝ位ですわ。私、ちやんとギボン・スミスさんから聽いてゐるの。あの方は噓を言ふやうな人ぢやありませんわ。あの女から今度のエンゲージのことも聽きましたの。あの女に言はせればニックはどうかしてしまつたのだつて——たゞ騎士らしくふるまひ度いためにあんなことをしたのだが、結局ニックの一生は滅茶々々だつて言つてゐましたわ。將校といふものが結婚すればもう大てい相場がきまつてしまひますものねえ。お茶をもう一ぱい頂戴な。お宅のお茶はいつもほんたうに結構で——この松林の中でいたゞくとなほのことおいしうムいますわ。」
　茶碗に觸れる音がした。そして寧ろ笑ましげなバセット夫人の聲がつづいた。
「實を言へば私はニック・ラトクリッフ大尉があのムリエルと結婚する決心をしたと聽いた時、眞當にホッといたしましたの。あの娘はあんな氣立のいゝ娘なだけに私には氣になつてしかたなかつたのです。私はあの事件のあとではあの娘をどなたにもお逢はせしないやうにしてゐました。と言ふのも、會話の序でにあの頃の話が出てあの娘の心を傷けてはと思ひましてね——考へて見ればあの娘はニックと三晩も山の中にゐたのですもの——これだけのことでも娘の一生には傷ですものね。それだからニックとさへ結婚してしまへば——」と言ひかけて彼女は例の甘い太息をして、「でも皆さん、どうぞ大ていなことは見のがしてやつて下さいましな。人間にはみんな弱點があるものですから——。」
　そして人々の會話はまた今夜の（社交の）相談になつて、やがて立ち上るらしい氣配がした。バセット夫人の愛想のいい言葉も聽えずなつた。
　夏小屋は靜まり返つた。香ばしい匂ひをまき散らす松の木の下にはひとりの娘が横になつたまゝ、いつまでも〳〵身じろぎもしないでゐるのだつた。

二三　煖かいたより

ニック・ラトクリッフはムリエルの許への訪問を思ひ止つて、机に向つて手紙の整理をしてゐたが、幾通かの返事を書いてしまふと、何だか咽喉が乾いて來たやうな氣がして立ち上つた。そしてつまらなく午後を費してしまつたものだと不滿だつた。彼はやつぱりマスグレーヴ家へ行つて見よう。主人のウィルとはクラスメートで何の遠慮もないわけだ。寧ろ歡迎の意を表しに行かなければならない關係にある――さう考へて部屋を出ようとした時、折も折當のウィルからの手紙が屆いた。かう書いてある――

古き友よ。君が死の顎から華々しく凱旋して以來僕は君の手を握らない。物足りないことだ。素晴しい事だつたなあ。さて、早速今晩食事をしに來てくれる譯には行くまいか。妻も待つてゐる。醫者はダイジイも赤んぼも英吉利へ歸らなければならぬと言つてゐる。呪はしい命令だが仕方がない。

ウィル。

手紙を讀み了つてニックは可哀さうな夫婦だと思つた。產後どうも日立ちの惡いダイジイは印度にゐたら元の體になりさうもない、それは醫者が言ふまでもない事だ。妻は良人を殘して去らねばならぬ。良人は妻の後に殘らねばならぬ――もしこんなことが自分とムリエルとの仲に起つたなら？ 一度あの娘を自分のものにした以上、とても一刻も手元を離すことは出來ない。こんな思ひをして結婚した後では、離れて棲むやうなことは死んでも出來ぬ――マスグレーヴ夫婦は可哀想だ。

ニックは曆のところへ行つて數へて見た。ムリエルとの結婚はもう六日の後に迫つてゐた。殆んど發作的な笑みが彼の脣を歪めた。もう六日で彼女は自分のものだ――自分のものだ！ どんな力も、どんな防害も二人を割くことは出來ない。まだ邪魔物が殘つてゐたら靴の底で踏みにぢるばかりだ。だが、もう何の邪魔物も殘つてゐる筈はない。完全に彼女は自分のものだ！ 辛抱の甲斐も六日の後には完全に見ることが出來よう！

歡びに步みも輕くマスグレーヴ家を指して出て行つたが、門を出て十步も行かないうちに、ニックはむかふからバセツト夫人の家の召使ひがやつて來るのに出逢つた。そして小さな封書を渡した。ムリエルからに違ひない。ニックの全身の血管は熱い血で荒々しく漲り溢れた。これが彼女からのはじめてのたよりであつた。

「すぐにお目にかゝりたう厶います。M。」

たつたこれだけであつた。彼は使の土人を去らせて自分の

部屋に歸つた。そしてウイル・マスグレーヴの許へ今夕遲くなるだらうと言ひわけの手紙を書いた。

ニックはテーブルの前に突立つて考へ込んだ。何事か起つたに違ひない？　この突然のたよりは助けを呼ぶ叫びのやうに思はれた。何となく凶事が待つてゐるやうな氣がされた。彼は勇氣は有り餘つてゐる。どんな不幸に出逢はうとも顫へるやうなことはない筈だ。しかしこの時だけは平生の覺悟も搖いだ。

何分か經つた。氣がつくとまだ彼女のたよりを握つたまゝであつた。急に、情熱的に彼はその紙片を唇に押し當てた。そしてあの晩あんなに冷え凍えた彼女の小さな手を、自分の手で溫ためてやつたことを思ひ出した。勇氣が幾分か心に歸つて來た。彼女はほんのつまらぬことを自分に告げようとしてゐるのかも知れぬ。明日の遠乘が出來ない事情でも出來て斷りを言ひたいといふのかも知れぬ。兎に角求められた以上すぐに飛んで行かねばならない――そして彼女の心を一切の煩ひから解かねばならない。

ニックは家を出た。はじめての招きに、少しでも彼女を待たせるやうなことがあつてはならないのである。

一四　別れ

ニックがはいつて行つた時客間には誰もゐなかつた。窓は夕方の庭に面して開いてゐた。丘の下の方からは遙かに舞蹈樂が漂つて來た。松林は黑く默々として立つてゐた。

彼は窓から山々の方へ目を走しらせて佇んでゐた。月はまだ水平線の下にあつた。が、星はもういちぢるしく輝やきそめてゐた。ふと微かな足音が聽えた。振り返るとムリエルがはひつて來て後手にドアをしめたところだつた。顏を眺めた刹那ムリエルは病氣なのではあるまいかと彼は思つた。唇に艶がなく、重たげな黑髮のためにたゞさへ蒼ざめた頰はひとしほ青かつた。

彼は步み寄つて彼の手を握つた。兩手は氷のやうに冷えてゐて握り返さうともしない。ヂツと此方を瞻める大きな眼には何の表情も見えなかつた。微笑を與へもせねば白齒も見せなんだ。ニックはハツとした。

「どうしたのです？」と彼は相手を引き寄せて顏をみつめて言つた。

彼女はニックの心中の驚きと疑念とを察したやうに微かに笑つた。

「どうもしはしないの――阿片なんかにはあの晩から――あの晩から觸りもしないわ。」と彼女は言ひかけた。

ニックは遮つた。

「そんならよろしい。ぢやあどうしたのです――何か間違ひ

でも出來たのですか？」

　ムリエルは答へずにさも疲れたやうに椅子に坐つた。ニックは立つたまゝで答へを待つてゐた。しかし空しく時秒は廻り移つた。やがて大へん不確かな語韻で彼女は言つた。

「是非今夜來ていたゞかなければならないと思つて――もし他にお約束でもあつてはと心配してゐましたわ。」

　こんな詰らない挨拶に何故彼女はひまを取つたのだらう――ニックはその言葉の背後に何物から隱されてあるのを感じた。

「君の爲めならどんな先約もぶち壞はすさ――で、一體どんな話があるのです？」

　彼女はチラリと彼を仰いだ。

「屹度あなたはびつくりなさるかも知れないけど――」と彼女は低く言つた。

　ニックは肩をゆすつた。

「つまらない事を考へてはいけませんよ。何が心配なの？言つて御覽。」

「私、ほんたうに莫迦な女だわ。」と彼女は言つた。「ねえ、私、今日になつてこれまでの自分があんまり莫迦だつたと考へついて、ようく〲思案して見ましたの。で、いろ〱考へると、私にはあなたと結婚なんかとても出來ないと解つたのよ……あなたは勿論――」と言ひかけて彼女は寂しげに笑つて、

「あなたは勿論何とか言つて下さらうとなさるに違ひないけど、そんなことは止して頂戴。私もう解つてゐますから――」

「有難う。」とニックは言つた。その聲音には恰度巻き過ごされた螺旋が巻き切れたやうな洞ろなものがあつた。

　彼女は彼の手が此の言葉と同時に引きねぢられるのを見た。危險に對する豫感が彼女を戰慄させた。彼女は飛び上つた。たとひ印度虎が窓から忍び込んだとしてもこれ程びつくりはせなんだであらう。

　ニックは大股に歩み寄つて、彼女の鼻の先に顔を突きつけた。その顔は、情熱と、野性と、無慈悲とで引き歪んで、まるで惡魔のそれのやうに思はれた。ムリエルは極度の怖れに息を切らして、その場を逃げ出さうともがいた。

「ニック！　氣が違つたの？」と彼女は喘やいた。

「えゝ氣が違ひました。」とニックは獸じみた呻きで言つた

「君が僕から逃げようとすれば――もう僕は――」

「だつて――だつて――私には解らないわ――私あんたが怖いわ。」

　彼女は大きな眼でみつめた。

　それは子供のやうな、どうしていゝか解らぬもの〱やうな、世にも哀れな叫びだつた。若し逃げ去らうとしたなら――突

き退けようとしたなら、彼の裏なる獸は一時に狂ひだしたらう――これまで何週間か抑制された慾望は檻を破つて相手に嚙み付かうと試みただらう。けれども哀しげな、途方に暮れたやうな叫びは却つて彼の激情を靜めた。彼は急に彼女に背後を向けて、呻くやうに、咽び泣くやうに唸りながら兩手で顏を蔽してしまつた。

しばしが程彼は身動きもしなかつた。呼吸すらしてゐないやうに見えた。ムリエルは暖爐のところに身をすくめて、息をはづませて眺めてゐた。

急に彼は音も立てずに部屋を横切つて開けひらかれた窓のところへ行つた。遙かなあたりから『青きダニューブ』の旋律が流れて來た。あの甘たるい惱ましげな音樂を通じて何年も何年もの間、無數の戀する男女は踊り、囁やき、太息をつきつゞけてゐるのである。ムリエルは耳を塞いでしまひたくなつた。あの樂の音を聽きつゞけてゐたら氣が狂ひはしまいかと思はれるのだつた。

ニックも同じやうな感じに打たれたのであらう。しかし彼はぢつと佇んだまゝ兩手を窓枠にかけて闇に見入つてゐた。

ムリエルはその後姿をみつめつゞけた。彼は彼女が後にゐることさへ忘れたものゝやうに見えた。狂はしいワルツの曲は止まなかつた。ふとニックはしづかに窓を閉した。そして此方に振り返つた。彼が一歩々々近づく毎に彼女の全神經は言ひがたい戰慄にわなゝいた。

『もう魔物は行つてしまひましたよ。安心なさい。』と彼はしづかに言つた。

そしてニックは彼女をソファに導いて掛けさせた。ムリエルは恐怖が靜まると同時に何ともは言れない感じに打たれて、急に顏をクッションに埋めて荒々しく咽び泣きはじめた。ニックは柔しく背を撫でた。

『もう哭くことはありません。先刻君が何か言ひかけた時僕は遮ぎつてしまつた。君は僕を捨てようとしてゐる――で一體どういふわけでそんなことを考へたのです。』

ムリエルはニックを見上げた。相手の顏には寧ろ老人のそれのやうな親切な表情があつた。

『さあ、お話しなさい。君は僕に飽きたのですか?』

『私、何事にも飽きましたの――疲れましたの。』と彼女はしづかに彼の手を肩から辷り落すやうにして答へた。『何事にももう――どうぞお願ひですから私をひとりで死なせて頂戴。』

『言ひたいことはそれだけなのだね。』と彼はソファの横木に腰を下して、クッションに手を突いて言つた。『いろ／＼な事を君に言つて聽かせようとすれば僕にも出來るが、君は何しろ雛鳥です。だが、一體いつから君は僕を憎みはじめたので

す？」

　彼の氣安けな柔しい語調を聽いて、彼女は自分が彼に取つて極くつまらないものに過ぎないために相手がこんなに平氣なのだと思ひ過まつた。

「憎みなんかしませんわ。そんなつまらないことからではないんです。」と彼女も一生懸命落着を見せて言つた。

「僕に飽きたのぢやないんですか？」

「いゝえ。」

「ぢやあ僕が假りに明日死ぬとしたら、君はいくらか氣の毒に思つてくれますか？」

「どうしてそんなことをお訊きになるの？　勿論哀しく思ひますわ。」

「どうしてと言つて、人はみんな死ぬべきものです。君は君の葬式に踊るわけには行かない。」

「あなたのお言葉は解らないわ。」とムリエルは言つた。

「僕の言はうとしてゐるのはかうです――君が死んで墓に埋つてしまへば、その墓に誰れがどんなに涙をそゝがうと、君はそれを見ることは出來ない。」

　ムリエルは癇癪が起つたやうな容子をした。こんな下らない事が現在何の意味を持つのであらう。ニックはつゞけた――

「君が僕に飽き飽きしないとする――こんな話が君に煩さい感じを與へるのは知つてゐます。まア辛抱なさい、もうぢき話はおしまひですから――それで君は僕が若くつて死んだのを氣の毒に思つて泣いて吳れる。事實僕はサタンのやうに醜くいが確かに若いは若い。ときに惡魔と言へば、君は僕を惡魔の親類だといふ風に考へて、それで結婚が厭になつたのでせう？　え？」

　突然問ひかけられてムリエルはチラとニックを眺めた。彼はもう怖るべきものではなくなつて、學校のいたづらつ兒のやうな容子をしてゐた。

「いゝえ、そんなことは考へませんわ。」と彼女は言つた。

「だが、僕にはちやんと判るやうな氣がしますよ。」とニックは氣輕るに言つた。「どんな事があつたのだかまで知つてゐますよ。こんな工合でしたらう。」と言つて、彼はバセット夫人ソックリな、疲れ果てたやうな微笑を顏に浮べて柔しげな澄し返つた口調ではじめた。「ねえ、ムリエル、お聽きなさい。私、ニック・ラトクリッフは結婚なんか出來る男とは思ひませんわ。あれは蝶々見たいな陽氣な男です。いつかもギボン・スミスのおくさんがあの人を怖しい浮氣者だつて言つてゐましたわ。それに大へんお酒も飲むのですつて。まあ話半分ならいいけれどねえ……兎に角大變憤りつぽいことは事實ですわ。」

それに就いてもいろ〳〵實例がありますの――私、ほんたうにあんたがかはいさうだわ。」

ムリエルはヒステリカルに笑ひつゞけてゐた。實に夫人そつくりな話しぶりだつた。誇張の影さへもない、正眞正銘の夫人の語調だつた。しかしニックは笑はなかつた。冗談めいた假面の奥から、鋭どく〳〵彼は凝視してゐた。ムリエルもいく分それに氣が注いたのであらう――呟くやうに彼女は言つた。

「いゝえ、ニック、あの女はそんな事は言ひませんわ。またあの女が何と言つたつてそんな事に私はかまやしません。」

「若しさうでないとすれば、それ以外にはたゞ一つの問題が殘つてゐるだけだ。それは小さな誇りといふものです――勿論、世間には君に泥を投げるものもあらう。君は僕と結婚する位なら死んだ方がいゝと思ふかも知れない。ねえ。だが、若し僕が君を自由の身にすることを拒絶したらどうです？」

彼女は眞紅になつた――。

「何と仰有るの！　どうしてそん事が！　そんな權利はありませんわ。」

「さうですかね？」とニックは怪しい微笑を浮べて言つた。

「僕は持つてゐると思ふが。」

彼はぢつとムリエルを見下した。その瞳には毒を含んでゐるやうな輝やきがあつた。

「僕は持つてゐると思ふが――だがそんな問題を議論したところで仕方がない。で君はどうする積なのです？」

「私は自分の行きたいところへ行きますわ。もうこんな所はいやになりました。故郷へ歸ります。」

「こんな所がいやだつて……この土地の人殘らずがいやになつたのですか？」

「えゝ、大がい。」とムリエルは答へた。彼女は自由のために戰ふ積りだつたが、その戰は豫期したよりも困難であつた。

「でも、マスグレーヴ夫人は取除けでせう？　あの人は恰度故郷へ歸るところです。何なら一緒に行くがいゝです。」

ムリエルは急に明るい希望を起した。

「あの女だけお歸りになりますの？」

「僕は歸りません。僕はカトマンドウへ新婚旅行に立ちます。」

ムリエルの眼から望みの光が消えた。

「もう冗談は止めにして頂戴。私辛抱がなりませんわ。」

「冗談だつて！」とニックは言つて、彼女の手を取つた。その指先には指輪がきらめいてゐた。

「どうぞそれを脱つて頂戴。」とムリエルは言つた。

「いや、それはいけない。はめてゐて下さいとは言はないが

せめて保存して置いて下さい。束縛どしてゞはなく、ある約束の記念として預つて置いて下さい。」と彼奴は呟くやうに言つた。

「約束ですつて？」と彼は答へた。

「えゝ。」と彼は答へた。「ひとつ君に約束をして置いて貰はなければなりません。」

「どんなでせう？」と彼女は戰慄を感じながら言つた。

「お笑ひになるかも知れないが、若し君が僕と結婚したくなつたらいつでも歸つて來てくれるといふことです——勇ましく歸つて來てくれるといふことです。」

「まア……そんな約束が出來ませうか！　そんな事はある筈がありませんわ——私、決して心を變へはしませんわ。」とムリエルは頑なに言つた。

「そんな事はどうでもいゝです。兎に角約束さへして下されば——。」

ニックに把られてゐた手をムリエルは靜かに引き退けた。

「でも、そんな約束はしても仕方がありませんわ。」

「そんならすぐに結婚なさい。」とニックは迫るやうに言つた。

ムリエルは立ち上つた。ニックは繰り返した。

「どつちかハッキリして下さい。」

「よう厶いますわ。約束しますわ。でもニック、私、決して考へは變へはいことよ。」

彼はぢつと娘の目をみつめた。

「それで君のお役目は濟みました。今度は僕が約束する番です——ムリエル、僕は君が僕のところへ歸つて來るまで、決して結婚はしませんよ。」

さう言つて彼はムリエルの手を取つておごそかに接吻したそして顏を上げた時にはいつもの快活なほゝゑみが口元に漂つてゐた。

「ぢやあこれでひとまづお別れしませう、英吉利へお歸んなさい。そして學校へ行つて、もう一度若くなる稽古をなさい。」

これが最後の言葉であつた。そして一瞬間答へを待つもののやうに佇んでゐた。が、次の刹那には踵を旋らして出て行つてしまつた。

彼女は彼が口笛でワルツの曲を吹き鳴しながら遠ざかるのを聽いた。

彼女は今やひとりであつた——彼女は佇みつくしてゐた。

（つゞく）

婦人生理學講座

（五）

内分泌と生殖腺（下の二）

永井潜

スタイナハは、動物實驗に於て確實なる成績を握つた後に外科醫者なるリヒテンステルンと協力して進んで人間に於て之を施こしたのである。勿論全く暗示の働くことを避けつゝ之を實行した。そして豫期せる如く、好結果を擧げ得たと報告して居る。其の一例を擧げて見ると、七十一歳の地位高き男子で、左の睾丸に潰瘍を生じ、其の爲めに體溫が四十度に高まつた。そこで早速手術によつて其の左の睾丸を取り去つたのであるが、其の序を以て、患者には毫も知れない樣に右の睾丸の輸精管の結紮を行つたのであつた。間もなく傷が癒えて、三週間で退院した。此の患者は、入院當時、老衰の兆が著しく顯はれて居た。卽ち全身の血管の壁が硬張つて、其の爲に血管内の血液と細胞との間の物質の取り遣りが困難になり、榮養の障碍を起し、少し運動すれば呼吸が困難になり、且つ腦髓の働が鈍つて、動もすれば眩暈の爲に惱まされた。殊に最近八年以來、性慾は全く缺けて居たのであるが、斯の患者が、手術を受けてから九ヶ月後に、心身の狀態に就いて僞ない告白を書いて居るものによつて見ると、患者は『傷が治つて或る場所に轉地を試みた所が、其所で不思議にも性慾に關する夢を見た。夫れ以來孤獨の生活に甘んずることが出來ない樣な心持になつた。手術前には、精神狀態は、一般老人に見る樣に頗る沈鬱であつたのが、大に爽快になつて來て、享樂を欲望する樣になつた。人々は、どうしても自分を見て十歳位若い樣に思ふ位である。又た以前には少し運動しても直ぐ眩暈や或は呼吸困難の爲に苦んだのであるが、今では一時引き續けて歩んでも、少しも呼吸困難は起らない。眩暈もこの九ヶ月間に唯一回起つたのみである。又た毛髮が

盛んに新生するやうになり若物の樣に性の滿足を感ずる樣になつた」と云つて居るのである。

人間の若返りに關する斯樣な例證は、一昨年公にせられたスタイナハの報告書には、三例擧げられて居るのみであるが、其後此の若返り法が有名になつてから、幾つかの追加が與へられて居る。殊に人間に於て睾丸を去勢した爲に起つた心身の變化が、睾丸を移植することによつて、立派に治ほることは、リヒテンスルンの次の報告を見ても、頗る興味を喚び起すものがある。二十九歳の一兵士が兩方の睾丸に怪我をした爲に、止むなく手術によつて之を取り去らなければならなくなつた。手術後三週間半にして、立派に、一般去勢者の兆候が顯はれて來た。卽ち到る所の皮下に脂肪が貯まり、髭が拔け落ち、全身に毛が薄くなり、精神は鈍麻して茫然自失の狀態を示し、顏貌は老人の樣になり、性慾は全然消滅し、〇〇は少しも起らなくなつた、手術後一ケ月半にして、好機會があつて、他人の健全な睾丸を取つて此の兵士の腹壁の筋肉中に移植を試むることが出來たが、其の效果は實に驚くべきものがあつて、移植後七日にして始めて輕度の〇〇を見た。十日目には、既に一旦失はれた性慾が再び頭を擡げた。さうして精神が頗る元氣づき、性に關する夢を見、且つ強き〇〇を生ずるに至つた。三週間後には、立派に〇〇が出來る樣になり、移植後十五ケ月の後結婚して、未來幸福なる家庭の主人となつたと云はれて居る。

「更に進みては、已述の如く、睾丸の間細胞と卵巢の間細胞とが各特殊の内分泌物を出だし、夫々男らしさ女らしさの性質を心身に喚び起すことの考を基礎として、同性愛を示す男子の睾丸には、普通の男子の睾丸と異なり、卵巢に於て見らるゝ樣な細胞が發育し、又た同性愛に陷れる女子の卵巢内には、睾丸におるべき筈の間細胞が發育することを斷定し、隨つて同性愛の療法としては、外科手術によつて其の人の生殖腺を除き去り、夫れに代ふるに普通の生殖腺を移植することを試みて、確實に奏效することの報告も少なからず出て居る。

斯く、スタイナハを始め一派の學者は、間細胞の内分泌に非常に重を置いて居るのであるが、之に關しては反對の意見を有する人も多くある。就中所謂若返り法なるものに關しては、一時非常に注意を牽いたのであるが、惜い哉、其の效果

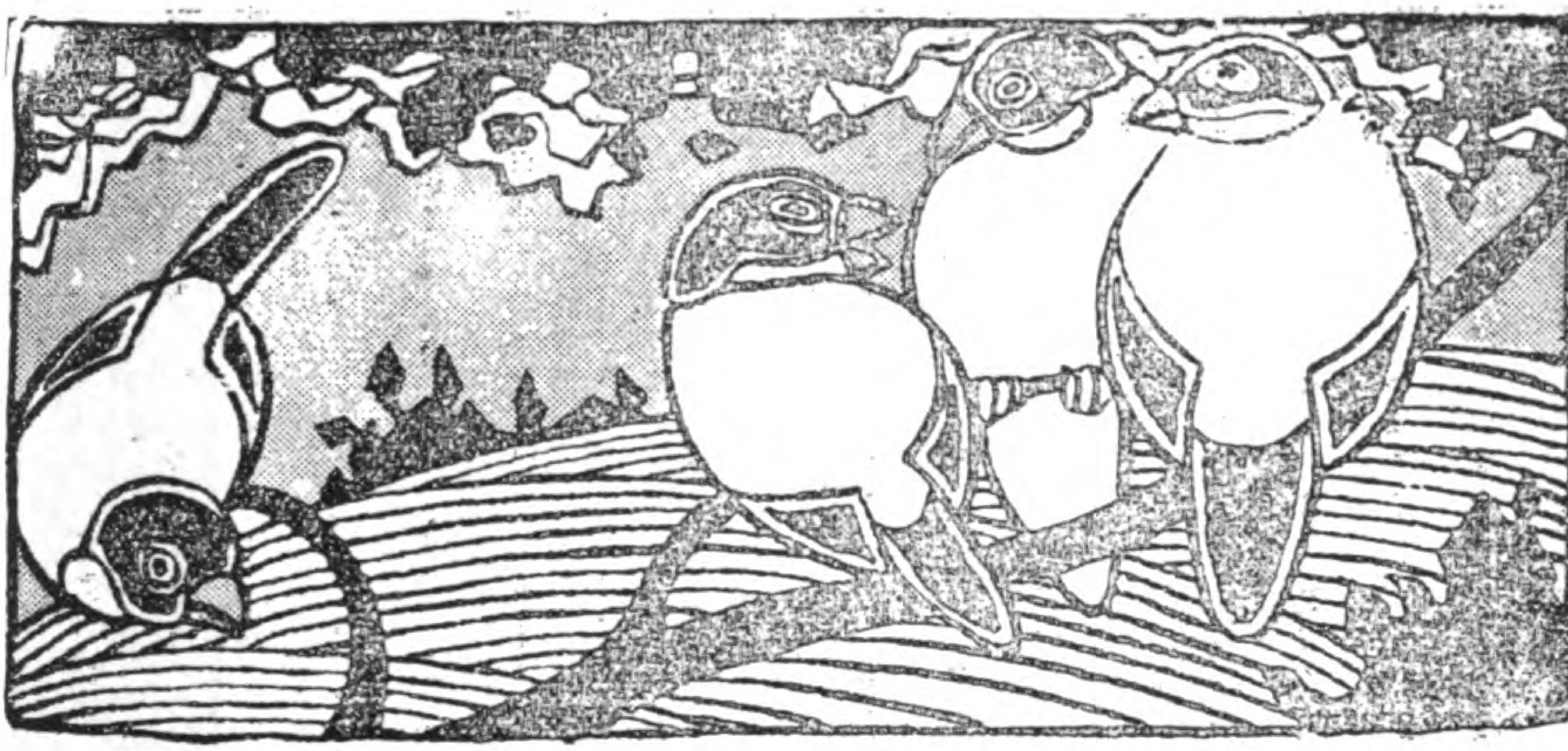
は、スタイナハ一派の人々の云ふ如く、しかく確實ではないと云ふことが輿論の聲となつて、今や再びブラウンセカール氏若返り法の轍を踏まんとして居る。知名の獨逸病理學者であるアショフ及び其の門下の如きは、スタイナハ若返り法の根柢をなせる間細胞の内分泌に關してさへ、否定的の態度を取つて居る。併し間細胞が内分泌を行ふものであるとの考は上述した樣に、幾多の根據の下に成り立つて居るもので、遽に之を否定することは出來ぬであらう。最近リップシュッツは次の樣な新らしい實驗的事實によつて、之を肯定すべき一證跡を追加して居る。即ち生れ立ての動物に、睪丸を全然去勢すれば、第二次性徴は起つて來ないのは勿論であるが、睪丸の一部分を切り除く場合、果して其の幾分を殘留せば、猶ほよく第二次性徴を喚び起すに足るかの關係を調らべて見ると睪丸の自然の大さの僅かに百三十分の一を殘して置けばよいことが見られた。而して此の僅少なる殘留睪丸を、後になつて顯微鏡で檢査して見ると、細精管は殆んど全く萎縮して仕舞つて、專ら間細胞のみから成り立つて居り、而かも其の間細胞は、著しく增殖して居て、其の分量は殆んど自然の儘の睪丸の中にある分量と大差なかつたと云ふことが見られた。是れ即ち間細胞が主として内分泌を行ひ、第二次性徴を喚び起す證據である。斯くて間細胞が大切なる内分泌作用を行ふことは今日の所先づ動かないことゝした所で、直ちに夫れを應用して、果して老衰を若返へらしめ得るか否かは、全く別個の問題である。

よく泳ぐ者はよく水に溺れると云ふが、生殖腺内分泌の研究に沒頭して、之に關して多大の功績を擧げたブラウンセカール氏やスタイナハ氏等は、生殖腺内分泌物に溺れた嫌がないでもない。吾等は勿論、生殖腺内分泌物の心身に及ぼす深甚なる影響を、驚異の眼を以て見ることなしには居られない。併しながら内分泌によつて心身に重大なる働を爲すものは、獨り生殖腺のみには限らない。體内にある幾多の内分泌腺は何れも皆な左樣である。甲狀腺。上皮小體。胸腺。腦下垂體。松菓腺。副腎、何れも生殖腺と相並んで身體の構成及び機能の上に重要なる任務を營爲して居る。而して又、是れ等諸種の內分泌腺は、決して單獨に行動して居るものでなく、相互の間に密接なる交渉を保ちつゝあることを忘れてはならない。

狀腺・腦下垂體・副腎皮質が病的になつて、其の機能を廢止すると、生殖腺の發育が阻止せられ、其の機能が衰へる。又た之に伴つて往々智力障碍を見るのである。又生殖腺の機能の亢進した場合には、甲狀腺の如き著しく大きくなる。特に婦人の場合に左樣であつて、月經時・懷妊時・其の他性的興奮のある場合には、甲狀腺が大きくなり、喉頭部の兩側に隆起を見るに至るのは、決して珍らしからぬことである。又た甲狀腺の機能が病的に過度に亢進せるバゼドウ氏病患者では、屢屢性慾の異常なる亢進を見るものである。由是觀之、甲狀腺・腦下垂體・副腎皮質の三者は、生殖腺の發育を促進すべき位置にあることが分かる。之に反して、胸腺及び松菓腺の兩者は、生殖腺の發育を抑制すべき任務を帶びて居るもので、十二三歳頃になつて、胸腺が退行し小さくなると、始めて生殖腺が俄然長き眠を破つて活躍を起し、性的生活の革新期に入るのである。而して是れ卽ち青春期である。之に反して、胸腺が病的になつて、生理的には退行すべき年齡期に入つても退行せずに居ると、所謂胸腺持久なる狀態で、斯る場合、其の人は、年を重ぬるも、子供の蕾は堅く閉されて、生殖腺は發育せず、性的生活の花は何時迄も開かない。又た少年期に松菓腺が病にかゝつて、其の働を失ふと、殊に男子に於て其の生殖腺は年に似合はず過度に發育し、其の結果心身共に早熟する。以上の事實は、何れも生殖腺と云ふ太陽を中心として、各種の內分泌が、或は促進的或は抑制的の運行をつゞけて居ることを示すもので、生殖腺の內分泌が如何に重要であるかを語ると同時に、心身の一般機能の調節を計る上に於て、單に生殖腺のみに着目したゞけでは未だ十分でないことを示すものである。魔女の厨に於て煉らるべき長生不老の靈藥は、單調なる生殖腺の內分泌物丈けでは足りない。其所に探り求めねばならぬなほ多くの謎が隱れてあるのである。

以上は性徵發露の問題に關して、如何に重要なる意義を、生殖腺の內分泌作用が有つて居るかに就いて、其の大要を述べたのであるが、特に婦人生殖腺の內分泌に至つては、後段に於て改めて敍說することゝする。

文藝



師表

一

水上瀧太郎

何時もは其處で食事をするのがおきまりなのだが、其の日は銀行俱樂部に行く事になつて居たので、子爵は午砲の鳴渡るのを聞くと、あわてゝ妾宅を出た。此の頃手に入れた或る劇場附の女優を圍つてから間も無いので、新しい物好きの癖として、子爵は夢中になつてゐた

玄關の障子のかげにかくれるやうに坐つて、女中が老子爵の足に靴を穿かせるのを待つてゐたお妾は、仰々しい毛皮の襟のついた厚ぼつたい外套に着ぶくれた後姿が格子を出ようとする時、

『では又。』

呼止めるやうに聲をかけた、子爵は一寸振かへつたが、皺だらけの滿面に喜悦の微笑を堪へてうなづいた。

袋地の入口の往來には、はげしい爆音をたてゝ、眞新しい自動車が主人を待つてゐた。十間足らずのところだが、如何に達者をほこつても八十近い老人の足は遲かつた。女中に附添はれて、とほ〳〵歩いて來るのを、運轉手は運轉臺

で、助手は兵隊のやうな姿勢で昇降口の扉に手をかけながら、いづれももどかしく思ひながら待つてゐた。

天氣の續いた初冬の往來は白く乾いてゐた。正午頃にはよくあるならひで、暫時人足が途絶えてゐたが、其の時近所の小學校の門内から、土曜日の早退けで勇み立つた子供達が、なだれを打つて馳出して來た。素晴しく立派な黒塗の自動車は、立派な物に對して無邪氣な尊敬と熱情を持つ子供の心を引いた。男の子は先を爭つて馳寄つて、四方から車を取圍んだ。子爵は其の間に割つて入つて、老齢と厚着の爲めに愈々運動の鈍い體を、助手に助けられて漸く乘込んだ。

直ぐに自動車は、一際烈しい音をさせて動き出した。車内の老人が誰であるかは知らないのだが、兎に角偉い人に違ひ無いと思ふので、子供達は崇拜の眼を光らせて見守つた。車内の子爵も其の樣子に氣が付いて、大した滿足を感じながら微笑を浮べた顔を窓の硝子に近く差寄せた。その時佇立してゐる子供の中でも、殊に小柄なのが一人、叮寧に帽子をとつて挨拶した。

子爵はそれを見逃さなかつたが、自分に對して禮をしたのか如何か、一寸の間迷つた。しかし世間にかくれも無い自分と知つて、小學校の生徒が敬禮したのであらうと思ふと、心の底から嬉しさがこみ上げて來た。山高帽子に手をかけて、挨拶を返してやらうと思つた。けれども、自動車は既に速力を出してゐて、子爵が帽子に手をかけた時は、もう子供の姿は車の後になつて見えなかつた。

町角を曲つて自動車が見えなくなる迄、小學生は尊敬と羨望に魂を奪はれたやうなうつろな心持で佇んでゐた。

「東條さん、君あのおぢいさん知つてんの。」

中では年かさの、みなりのよくない子供が、青鼻をすゝりながら訊いた。訊かれたのは、今の今、子爵に對して帽子をとつて、叮寧に禮をした子供で、これは眞新しい紺飛白の羽織と着物の對のを着て、小倉の袴も折目の正しいのを穿いた何處から見ても良家の子に違ひ無かつた。彼は得意さうに頷いた。

「誰？、あの人誰？」

訊く方は好奇心に眼をまんまるくして、訊かないでは置かないといふ風だつた。

「尾形さんて人。子爵だよ。」

小柄な子は、みんなに取圍まれた位地にある自分をもてあましたやうな樣子で、心持顏を紅らめて答へた。

「大臣かい。」

「馬鹿ア。實業家ぢやあないか。」

外の子供が横合ひから口を出したのを、其の隣にゐる腕白さうなのがたしなめるやうに答へた。子供達の中にも、明治から大正にわたつて、並ぶ者もない實業界の元勲の名前丈は知つてゐる者が多かつた。目の當りさういふ偉い人を見たのだと知つて、ちひさい心は興奮してゐた。

「東條さんは尾形さん知つてるの。」

「あゝ、僕のお父さんが知つてるの、もう先、園遊會に行つた事もあるよ。」

宏大な子爵の邸で古稀の祝のあつた時、此の子供は父親に連れられて行つた事があつた。彼は賑かだつた其の日の光景さへ、友達に誇り度い氣持でおもひ返へしてゐた。

「へえゝ、君のお父さん何してんだい。」

「矢張り實業家だらう。さうだらう。」

口々に先を爭ふ質問を浴びせられて、小柄な子供は羞しさうに面を染めて頷いた。

「さうかい、偉い人なんかい。」

「偉いともさ。東條さんち隨分立派だよ。」

「こんだ遊びに行つていゝかい。」

父が相當な社會的の地位を占めてゐるといふ事は、子供心にも力強い自信を持つてゐた。みんなに羨まれる家の子だといふ事を、彼は得意でもあつたし、羞しくもあつた。おもはず歩調が早くなつた。

ぶぶぶぶぶぶう……後の方から鋭い速力で走つて來た、一臺の自動車は、子供の群を脅かして、見る見るうちに遠くに行つた。その爲めにちりぢりになつた子供達は、

「左樣なら。」

「左樣なら。」

「失敬。」

「失敬。」

てんでに挨拶して、四方の小路に別れ〳〵に歸つて行つた。

東條の父親――東條平造は尾形子爵に取立てられた實業家だつた。古い法學士で、學校を出ると直ぐに子爵の創立經營してゐる銀行に入つて、十年一日の如く實直に勤めた。學校時代から別段人に目立つ特徴の無い男で、地味にこつ〳〵勉強しながら、席順は何時も中位だつたが、銀行でも、同期に卒業した同僚より敏腕でも無く、從て出世も早い方では無かつた。ところが恰度二十年ばかり前に、尾形同族會が設立されて、子爵一家の財務の支配人が必要になつた時、人選を託された銀行の專務取締役は、間違ひの無い人間をといふ第一の資格を重んじて、東條を推薦した。

それ以來彼の立身の途は拓けた。適材を適所に置いたのである。同族會の主事として、一族の財政を監理する事から、家庭のいざこざを始末するの迄、一切彼の役廻りだつた。明治維新以來我國の實業界の第一人者として、人も許し自分も勿論確信してゐる子爵は、世間の廣い事に於ても他に比ぶ可き人物が無かつた。會社銀行の創立に、子爵の名が並んでゐる

ゐると居ないでは、たいした相違があつた。頼まれゝばいやとは云はず、自分の勢力の愈々旺んなのを何よりの滿足に思ふので、何時の間にか諸方の重役の肩書が五十幾つかに及んだ事もあつた。中にはぼろ會社もなくはないので、子爵の名前に安心して引かゝつて、ひどい目にあふ人間も數を知らず、子爵自身さへ迷惑をかふむる事もあつた。さういふ事の一切も、東條の獻身的の忠勤によつて、左迄の破綻も見ずに今日に及んだ。

子爵は有名なる好色者だつた。澤山ある子供も大概は腹が違ふ位で、かりそめに相手をさせた女の數は數へ切れなかつた。さういふ不しだらの後始末も、東條にとつてはゆるがせならぬ仕事だつた。

何時の頃からか、子爵は單に實業界の元老として丈では滿足しなくなつてゐた。國民の師表として、新時代の青年に精神的感化をも與へ度いと云ふ一種の名譽心に驅られてゐた。神道と佛教と耶蘇教とを打つて一丸にして、國民の倫理道德を善導しようなどと眞面目になつて考へた事もあつた。薩摩琵琶と浪花節を利用して、同じ目的を達しようと思ひ、先づ天聽に達して、その上でやれば仕事は樂だと考へて、熱心に事を運んだ事もあつた。何事も國家の爲めといふのが彼の標語であつたから、國家の爲めだと持ちかけられゝば、ホテルの重役にもなり、劇場の重役にもなつた。さういふ徑路をとつて、彼は實業界の尾形から、日本の尾形になり得た事を確く信じて居た。だから、若い時からの隨性と天性の助平根性で、やめようと努力してもやめられない不身持を、世間に知られる事は何よりも怖かつた。昔は爲方が無い、しかし現在いゝ年をして、おまけに國民全體の師表と仰がれてゐる自分が、さういふ事を世間に知られてはならないと思ふのであつた。さういふ事をしてはならないとは決して考へなかつた。知られてこそ若い者に惡い影響があるかもしれないが、知られなければ何の差支へもないと思つてゐた。數々の不行跡の後始末は、自ら重大な任務として東條の責任を重くしたのである。

多勢の子供が、いい所は似ないで、惡い癖ばかりがおやぶ似だつた。學校を卒業する前には小間使を犯し、學校を卒業

して金廻りがよくなると藝者を弄ぶのが、傳統的に長男から次男三男へと續いた。其の始末も東條がしなければならなかつた。家庭の不取締を祕しかくし度い子爵は、自分自身を省る事には寛大な癖に、息子達の不品行は許して置かなかつた。長男の如きは、一時は勘當同樣の身になつた程である。さういふ事件を新聞に出される事も、子爵のひどく恐れる所だつた。筆でこそ正義を說いてゐるけれど、利慾の前には常に目の無い新聞社を買牧する事も、勿論東條の取計ひであつた。つゞめていへば、東條平造の一生は、聲望並び無き尾形子爵一族の暗黑面を蔽ひかくす爲めの努力に捧げ盡されたのに外ならないのである。

そのかはり東條は、今ではおしもおされもしない地位と財產とを得た。子爵が先年銀行の頭取を辭して、相談役といふ名目にあつた時、後任頭取には東條が推薦された。その外にも子爵の代表といふ顏で數多の會社の重役にもなつた。默つてゐても、他人が益々上に持上げて吳れるのであつた。

一切の事を、全く子爵のおかげだと思つて、彼は衷心感謝してゐた。子爵があつてこその自分だと思つてゐた。子爵が居なくても、自分の力量で相當の出世をしたに違ひ無いなどとは考へた事も無かつた。今でも、子爵の身に萬一の事でもあれば、此の自分は如何なるだらうと考へる位である。

彼は其の感謝に燃える心から、誰にも彼にも、一切見さかひ無く、子爵の德をたゝへた。それが又東條の謙讓の美德として、世間が彼をほめるたねになつた。

家庭に於ても、妻にも子にも子爵のおかげを說いてやまなかつた。應接間にも書齋にも、子爵の肖像を描いた油繪や、寫眞を掲げてゐた。つい二三年前になくなつた東條の母親は、一人息子の大恩人として、毎朝その額の前に手を合せて拜んだ。床の掛物や額にも、折にふれては書いて貰つた子爵の書が絕えず見られた。多くは論語の中の文句だつた。

論語は子爵の愛誦の書である。或る學者に通俗向の解說をさせたのを、自分の名前で印刷に附して、日頃出入の實業家

誌社から賣出さした。ポケット入の其の本は、爾來子爵の懐から離れなくなつた。毎日一度此の本を讀めば、人の心は清く、行ひは正しくなる。若し國民全體が讀めば、此の國を舉げて君子となる。そんな事を子爵は始終口にしてゐた。平生恩顧を受ける者は、論語を知らないでは子爵の面前に出られないやうな氣がして、かげでは兎や角いひながら、誰しも讀むには讀んだのである。子爵の演說には必ず論語が種本になつた。今は東條が主宰する銀行でも、月に二度づつ、論語の會があつて、子爵自身がその書についての感想を述べるのを、かしこまつて聞かなければならなかつた。月給取の根性としては、その講釋を聞かなければ出世させて貰へないやうに思はれ、それを聞けば間違ひなく出世させて貰へるやうな氣がするのであつた。勿論東條は率先して論語の信者になつた。子供達に訓戒を與へる時も、自然とその中の文句が口に出るのであつた。

さういふ父を父として、子供達は幼少の時から、尾形子爵より偉い人は無いと思はせられてゐた。長男の一郎は、父は自分のあととりとして、矢張り實業家に仕立て度かつたが、性來病弱で高等學校の試驗を受ける氣力も無く、中學を卒業すると私立大學の文科の豫科に入つてしまつた。人一倍子煩惱の東條ではあるが、子供が可愛ければ可愛いゝだけ、文學者や文士などになられては堪らないと思つて、殆んど高壓的に志望をひるがへさせようと努めたが、息子はどうしても聽きかなかつた。實業家になるのなら、親の光丈でも間違ひ無く出世出來ると懇々と說いても見たが無駄だつた。出世なんかし度くないと、息子は強情にいひ張つた。弱り切つた父親は、日頃崇拜する子爵の說をきかうと、怖る〳〵顛末を話した。すると子爵は意外にも、文學志望は最も結構だと云つた。其の時の子爵の言葉を東條は今も忘れない。

「今日本で何よりも要求して居るのは偉大なる文學者である。沙翁のやうな、ダンテのやうな、又我朝では馬琴のやうな文學者が、大正の今日に生れる事は最も望ましい、文學志望は結構である。どし〳〵奬勵しなければならない。但し近頃流行るやうな他愛の無い戀愛小說や、人の心を憂鬱にしたり、悲しませたりする害のあるものはいけない。健全なる國民

精神の指導となる可き文學でなければならない。その一事さへ忘れなければ、文學志望は邦家の爲めに何よりも悦ばしい。」

さういふ意味の事だつた。さうして、子爵自身の口から、本人に激勵の言葉を贈り度いから、一度邸へ寄越して貰ひ度いと云ふのだつた。東條は感激して、息子の志望を許し、いやがる本人を引連れて參邸した。子爵は悉く滿足して、若い者の心得と、文學の尊重すべき事を、父子の前で說いたのである。

それ程にして文學科に通ふ事を許された肝心の息子は、日一日と東條が希ふ方向とは別の方に向つて進んで行くらしかつた。そればかりで無く、子供の時から、天皇陛下の外には此の人程の偉人は無いと話してきかせた尾形子爵を、息子が次第に尊敬しないらしい樣子を見せて來たのは、東條にとつての何よりの心配だつた。さういふ精神では、將來ろくな者にはなれないと思はれるのであつた。彼はやつきになつて子爵が今日の日本の事業界に盡した功績を說き、又老齡の今日も尙國民の師表として、思想の善導に日も足りない事を話してきかせたが、あせればあせる程息子は冷嘲を以て迎へるのであつた。

「口では論語を說いたつて、自分の品行がよくなければ駄目ぢやありませんか。」

しまひには明白に反抗的な言葉さへ口にした。東條は非常なる憂感に聲が詰つて何も云ふ事が出來なかつた。彼は息子がどんな事を平生考へてゐるのか見當もつかなくなつた。さうして日ましに我子の將來が心配になつた。

しかし外の子供達には十分いゝ敎へが受入れられてゐると思つてゐた。次男は、子爵が後援してゐる中學に通はせてあつた。修身には論語をくだいて話すといふ位で、全く子爵の思ひのまゝの色彩を帶びてゐる學校だつた。卒業式とか校友會とかの日には、必ず子爵が演壇に立つて訓話をした。長女も次女も學習院に通つてゐたが、これは子爵の孫に當る娘達の學友のやうな形になつてゐた。一番下の三男の三郎は未だ小學校の二年生に過ぎなかつた。子爵が妾宅から出て來て自動車に乘るところを、何の氣も無く見て、叮寧に帽子をとつたのは此の三郎だつた。

三郎は、子供心に深くも尊敬してゐる尾形子爵を學校の近所で見かけ、しかも自分が禮儀正しく帽子をとつて挨拶したのが嬉しくて堪らなかつた。彼は遠くも無い我家の門前で、級友と別れる時も、その級友よりも自分の方が一段上の人間のやうな氣持がした。

彼はその興奮した心持で母を求めたが、折惡く母親は留守だつた。二人の姉は土曜日毎に洋琴の稽古に廻るので、未だ學校から歸つてゐなかつた。結局晝の食卓には、男の兄弟三人が顔を合せたばかりだ、三郎にとつては頗る物足りなかつた。それでも默つて晩迄とつて置く事は出來なかつた。

「僕ね、今日學校のそばで子爵に逢つたよ。」

「子爵？子爵つて誰の事だい。」

上の兄には憚りがあつて、二郎に話かけたのだつたが、横合ひから一郎が素早く質問した。何となくとがめるやうな調子を含んでゐた。

「尾形さんの事。」

「馬鹿。尾形さんなら尾形さんていいやあいゝぢやあないか、子爵なんて云ふ奴があるもんか。」

御飯が濟んで、お茶を飲んでゐた兄は、不愉快な顔をして睨んだが、ぐつと仰いで飲み干すと、いきなり立上つてその部屋を出て行つた。緣側から庭下駄を穿いて、口笛を吹きながら、だら〳〵低くなつてゐる芝生を、池の方に歩いてゆく後姿を見送つて、二人の弟は安心した。

「兄さんは尾形さんの事を子爵つていふと何時でも怒るんだよ。」

二郎は兄の耳をはゞかる樣子で、聲をひそませて云つた。

「どうして？子爵つて云つちやあいけないの。」

「いけなかないさ。だけど兄さんは尾形さんが嫌いなんだろ。」

「どうして？」

「どうしてつて、兄さんは變物だからなあ。」

二郎は昂然として云ひ放つた。學校の成績のいゝ弟は、學校の成績のよくない、文學なんぞに凝つてゐる兄を少なからず輕蔑してゐるので、此の時も自ら嘲笑するやうな態度を見せた。

三郎は、何故兄が子爵を嫌ふのか皆目わからなかつたから、二郎の一言で安心した。矢張り二郎さんの方がえらいなあと感心した。

食事が濟むと、二人は芝生でボオルを投げ合つた。

しかし、又晩の食卓についた時は、三郎は其の日の晝の得意な心持をおもひかへした。目の前に兄のゐるのが氣になつて爲方が無かつた、けれど、その兄よりも一層信頼してゐる兩親が控へてゐるので、暫時躊躇した後で、ながしめに兄の方を見てから、たうとう口を切つた。

「お父さん、今日學校のそばで尾形子爵に逢ひましたよ。」

「ふうむ。何處で。」

「學校の門から一寸來たところで。」

三郎はもう兄が怖い顔をして睨んでゐる事なんか恐れてゐなかつた。父も母も、自分の話に熱心に耳を傾ける樣子を見せてゐるのに誘はれて全く得意だつた。

「立派な自動車がとまつてゐたんです。子爵の自動車又新しいのに變つたんですねえ。」

素晴しく立派な黒塗の自動車は、今もありありと目に見えるのであつた。

「どんな人が乘るんだらうと思つてたら、横町から出て來たのが、尾形子爵なんだもの、驚いちやつた。」

「へえ、横町から出てゐらつしやつたの。」

隣に坐つてゐる母親は、ませた口をきく末子の顔をのぞき込んで、目も口も笑つてゐた。

「えゝ細い横町。」

「ふうむ。何處にいらつしやつたのかなあ。ひるは倶樂部でお目にかゝつたが。」

父親は一寸首を捻つたが別段氣には止めてゐなかつた。

「お母さん、さぶちやんはねえ、子爵におじぎしたんですつて。」

それが弟の大きな功名でゞもあるかのやうに感じてゐる二郎は、默つて聞いてゐる丈では氣が濟まなかつた。

「さう、それは感心ねえ。あなたおじぎしたの。」

母親は嬉しさがこみあげて來て、三郎の耳の近く迄顔を寄せて云つた。

「僕ついおじぎしちやつた。」

あんまり感心されてゐると知つて、かへつて羞しくなつて、三郎は心にもなくとぼけた返事をした。父も母も姉達も聲を揃へて笑つた。たつた一人、一郎だけが、弟のほめられてゐる事にも不愉快を感じるらしく、不機嫌な顔つきをしてゐたが、殆んど誰も氣が付かなかつた。

食卓は常にも増して賑かに樂しかつた。

二

子爵は毎日妾宅に通つた。以前は妾宅――今のお妾とは違つて、新橋の藝者を落籍して圍つてゐた――に泊つたり、徐

合に泊る事も多かつたが、近年は國民道德の指導者を以て任じてゐるので、夜は必ず我家に眠る事にしてゐた。だから今度の女優のところへも、晝間の二三時間通ふだけだつた。學校の筋向の袋地の入口には、毎日黒塗の自動車が主人を待つてゐた。

學校の生徒も、段々不思議に思ひ始めた。誰の自動車ともわからないうちは左程でも無かつたが、子供の耳にも響いてゐる尾形子爵の自動車だと一人知り二人知り、間も無くかくれもない事になつてしまふと、子供に特有の英雄崇拜に好奇心が加つて、あだには見過せなくなつたのである。就中東條三郎は、心の底に潜在する不安に、何故ともなくびくびくしてゐた。

「お母さん、今日も子爵の自動車が學校の前にゐました。」

彼は父親には知らせないで、母親と自分と二人きりの時に限つて、さゝやくのであつた。

「まあ、ほんとに？」

母親は何か心に疑の起る時の癖で、額に立皺を刻みながら、之も聲をひそませた。同じ事を三日ばかり續けて聞かされたのであつた

「あなたの間違ひぢやあないのかい。隨分御忙しい方だけれど、あの邊に毎日御用のある筈がないからねえ。」

「うゝむ、ほんと。だつて日向さんが運轉手に訊いたんですもの。」

「なんて？」

「此の自動車尾形子爵のですかつて。さうしたら助手の人が、何故そんな事を訊くんだいつて笑つてゐたけれど、矢張りさうだつて云つたんだもの。」

「左樣ですか。それぢやあさうかもしれないねえ。」

半分は信用しない顔付で母親がそれつきり取合はなくなつたので、三郎はひどく不滿足だつた。どうしても尾形子爵に違ひ無い事を確めてやらなくてはならないと思つた。

その翌日、學校の歸りに、いつもの通り級友と連立つて來ると、自動車は今日も同じ場所に、退屈さうな運轉手と助手とを乘せて待つてゐた。

「やあ又ゐらあ。」

すつかり馴染になつてしまつた子供達は一齊に駈出して行つた。

「おいおい、そんなところに乘つかつちやあいけないよ。」

助手は子供達のいたづらを叱りながら、顔は暢氣に笑つてゐた。

「僕乘せてくんないか。」

「いけないよ。」

「いゝぢやないか。ちよつと乘せてくれよ。」

遠慮の無い町つ子は、踏段に足をかけて、扉の取手に手をかけた。

「こらッ、いたづらをしてはいかん。」

默つて新聞を讀んでゐた運轉手が、突然大きな聲で呶鳴つた。

「なんでえ、あたいだつて今に華族になつて自動車に乘つてやるぞ。」

鼻垂らしは、憎まれ口をきゝながら、扉にかけた手を放した。

「何つてやんでえ。貴樣なんか華族になれるもんか。自動車に乘りやあ運轉手位なもんだ。」

もう一人の車宿の子は、相手の肩を突飛ばして云つた。運轉手と助手は顔を見合せて苦笑つた。

「あのねえ、尾形さんは毎日何しに來るの。」

別の一人が無邪氣に質問した。

「御用があつていらつしやるんだよ。」

助手は又運轉手と顔を見合せて、にや〳〵しながら應じた。

「何の御用？」

「何の御用つて、いろんな御用があらあな。」

「嘘をつけ。お妾んとこへ來るんぢやあないか。」

車宿の子はませた口をきいて、勝ほこつた色を見せた。

「さうだらう、あすこの突當りの須賀田さんてのお妾のうちなんだらう。」

「馬鹿。子供の癖にそんな事を云ふと先生にいひつけてやるぞ。」

助手は又しても運轉手の方を見て笑ひながら、口先ばかり怒つた風をして呶鳴つた。

「お妾なんだよ、知つてらあ。」

「畜生、子供らしくねえ奴だなあ。」

おどかしに立上つて、車から下りて來たので、子供は草履を引擦つて逃げ出した。

ばら〳〵に別れて歸る子供の中で、三郎は最も肩身の狹いおもひをして、すた〳〵我家に歸つた。ほんとのやうにも思はれ、嘘のやうにも思はれるが、車屋の子の言葉は、彼に暗い疑惑を與へた。平常自分の一家が尊敬してゐる人に、そんな事があつたら如何しようと思つた。子供の心にも、お妾といふものは、ひどく惡いものに考へられた。

彼は母親に訴へて見ようかと思つたが、羞しくて止めてしまつた。

「今日も子爵の自動車がゐました。」

何氣ないふりをしてさう云つたが、母親は別段氣にも止めないで、

「へえ、今日も。」

と返事をしたばかりだつた。

誰から誰に傳はつたのか、小學校の生徒の間に、尾形子爵は、お妾のところに、毎日自動車で通ふのだと云ふ噂が廣まつた。三郎は、自分の父と子爵の關係から、みんなが自分を馬鹿にしはしまいかと思つて、すくなからず怖れてゐた。

「東條のお父さんはねえ、尾形子爵のお妾の世話もするんだとよ。」

果してはしたない町つ子は、憎らしく唇をつき出して嘲弄し始めた。

「さうかい、ほんとかい。をかしいな。」

「さうかい、ほんとかい。をかしいな。」

二三人聲を揃へてはやしながら、手拍子をうつて繰返した。

「嘘だい。嘘だい。」

三郎は咽喉が詰つて聲が樂には出なかつた。思はずしらず、涙がいつぱい眼に溜つて來た。

口惜しさのあまり、三郎は母に訴へた。

「みんながね、子爵はお妾んとこに行くんだつていふんだけど………」

何と云つていゝかわからないで、彼は涙ぐんで母の顏を見守つた。

「そんな事をいふものではありません。」

母親は何時に似ない怖い顏をして云つたが、それつきり堅く唇を結んでしまつた。お妾なんて言葉を口にした爲めに、

母の機嫌が惡くなつたのだと思ふと、三郎の心は一層悲しくなつた。

其晩、食事が濟んで子供達が勉强部屋に引取つてから、丹念に夕刊を讀んでゐる平造の書齋に、夫人はこつそり入つて行つた。どういふものか、廊下の足音を忍ぶ心持があつた。

「あなた。」

夫人は火鉢をへだてゝ夫と向合つて、さも一大事のやうに切出した。

「變な事を伺ふやうですが、此の頃は子爵の御身持はいゝんでせうか。」

「何故？」

夫は新聞を机の上に置いて向直つた。殆んど病的に、男性の不品行に對して假借しない妻が、何か又噂でも聞き込んでヒステリツクに憤慨してゐるのだらうと思つたのである。

「何故つて、三郎が變な事を云つてるんですよ。」

今はそんな事はないだらうが、以前は確かに東條は子爵の妾の世話迄もしたに違ひなく、それが此の夫人をどの位不愉快にさせたかわからなかつたから、又むかしに立かへつて、面白くない問題に觸れるのは、夫人にとつて決して嬉しい事ではなかつた。

「此の頃度々學校のそばで子爵の自動車を見かけるつて三郎が話してゐましたらう。あれが妾宅へお通ひになるんだつて云ふんですがねえ………」

「誰がそんな事をいふんだ。」

「學校の子供達がいふと見えて、三郎がさう申すんです。」

其處で、子供の口から聞いた話と、それに對する夫人自身の意見を、細々と辯じ立てた。

「まさかとは思ふんですが、子供の教育上面白く御座いませんから………」

まるで夫に落度でもあるやうに、しまひには自分の言葉に興奮して夫人の唇は震へた。

「ふうむ、そんな事を云つてゐるのか。しかしまさかと思ふね。七十のお祝の時に、あれ程誓はれたのだから。」

「それでは兎に角、貴方は御存じない事なんですね。」

「あたりまへさ。」

「でも……。」

夫人は夫の知らない事ならば、果して眞實としても、まだしも結構だと思つた。

平造は半信半疑だつた。それが當時のあたりまへだつたに違ひ無いが、子爵の不身持の後始末には閉口した。生れつき臆病で、おまけに處世の第一義としても行ひを愼しまなければならないと思つてゐたから、彼は曾て浮氣をした事が無い。金さへたまれば藝者の世話をするとか、妾を置くとかいふ事を、寧ろ自慢にする實業家の仲間では、名だたる石部金吉で通して來たので、極端に崇拜してゐる子爵に、其の惡癖さへ無ければどの位いゝだらうと、絶えず心中で考へてゐた。

恰度子爵が七十の壽莚を開いた時、大がかりな催しの後で、直參の連中だけが慰勞の爲に招待された。上機嫌の子爵は其の日は特に最上席に据ゑた平造の前で、今後一切女道樂はしないと宣言した。

「六千萬人の孫どもに申譯が無し、第一東條さんにもあんまり世話をかけ過ぎたから。」

子爵は肥つた體を搖立てて笑つた。國民の師表たる自覺が、其の時は眞實さう思はせたのであつた。一座の者は口を揃へて子爵の人格を讃美した。何をしても、何處からも苦情の出ない身分で、色を愼むといふ事は、此の連中の驚異であつた。本人が七十歳のよほ〳〵であらうと無からうと、そんな事には關係なく感激した。就中感謝の念をも持つて頭を下げたのは東條だつた。席上、子爵が暢氣ないたづら氣分で揮毫した、「戒之在色」といふのは、今も彼の書齋の額になつてゐる。

少なくとも子爵も本氣だつたには違ひ無い。その證據には、當時ある所に圍つてあつた妾には莫大も無い手切金がはりの持參金を持たせて、子爵の邸に出入りする骨董屋の女房にしてしまつた。勿論東條がおもてむき双方に話をして、一切の型をつけたのである。爾來、自邸に綺麗な小間使を置いて寵愛する事丈は別として、世間の眼に觸れる女道樂は無くなつた。子爵は誰にも氣兼をしずに、只管論語を宣傳した。

さういふ風な經緯があるので、東條は近頃は全く子爵を信じてゐたが、子爵の方ではその經緯の爲めに、最早や東條を煩はす事はいやだつた。其の上、むかしとは違つて、東條も今では一流の實業家であるから、まさかに妾の世話は頼めなかつた。ふとしたはずみで、自分が大株主で重役にもなつてゐる日本劇場附の女優の中に、日本人には珍しく五尺三寸近くもある大柄な肉體を發見して、好奇心が止度無く動いた時、劇場の支配人に耳うちして萬事の取持ちをさせたが、數年間の誓を破る自分の行爲に對しては、多少忸怩たるものがあつた。子爵は堅く口どめをし、殊に東條に對して、心中密かに烟つたく思つたのである。

平造は七十の壽筵の時の子爵の姿迄を想ひ浮べながら、當面の問題としては、先づ興奮してゐる妻をなだめなければならなかつた。

『何しろ子爵もお年齡だから、まさかそんな事もあるまい。子供達には噂だけでもさういふ事は云はせないように教へて置かなければならない。』

『ほんとにさうでせうねえ。けれども、よしんば噂だけにしても、教育上面白く御座いませんからねえ。』

夫人は稍しばらくして、嘆息するやうに呟いた。

三

子爵の妾宅通ひは相も變らなかつた。學校へゆきゝする子供達も、最初のうちこそ珍しがつて、自動車の廻りを取巻いて運轉手や助手と友達のやうな口をきくのを樂しみにしてゐたが、段々其の興味もなくなつてしまつた。

三郎も今では、父や母にむかつて、子爵の自動車を見た事をほこらなくなつた。彼は自分の父の主君のやうに教へられてゐる子爵が、お妾の家に行くといふ事で、自分迄もすつかり恥しめられたやうな氣持がして悄氣てしまつた。

『東條さんのお父さんはお妾の周旋もするんだとさ。』

友達が今にもさう云ひ出しさうで、何時も心は怯へてゐた。殊に子爵の自動車が主人を待つてゐる時は、其の横を通るのがいやで堪らなかつた。なるべく級友と一緒で無く、わざと遲れて通る事もあつた。

『此の頃は子爵の自動車はお見かけしないの。』

母親の方が氣にして、密かに訊く事もあつたが、

『僕、よく知らない。時々は見るけれど。』

あいまいな返事をして座をはづすのであつた。

或る雨の日、三郎は足駄の鼻緒が切れたので、片方の足を引摺りながら、誰よりも遲れて學校の門を出た。重たい鞄を肩にかけた上からマントを着て、傘をさしてゐるので、泥濘の道を片足引摺つて歩くのは隨分不自由だつた。何となく我家の遠い氣持がして、三郎は心寂しかつた。それでも今日は例の處に自動車がとまつてゐないので、それ丈は嬉しかつた。

袋地の入口の、其の自動車のとまる場所は、重い轍に自然と凹んで、池のやうな水溜りになつて居た。三郎はその水溜りをよけもしずに、わざとばちやばちや渉つて行つた。

その時袋地の奧から、何か話しながら二人の女が出て來た。

『あら、あんな水溜りを。』

女中らしい赤い頰邊の女が、仰山な聲で、三郎を指さして笑つた。

『可愛らしい坊ちやんだわ。』

おそろしく脊の高い、おまけにゆつたりと肥つた若い女が、恰度振返つた三郎の顏を見ながら女中の方に云つた。

『おやおや、あなた鼻緒が切れちやつたのね。いけないわねえ。』

ちよつちよつと輕く舌うちしながら眉をひそめたが、

『一寸お待ちなさいな。すげてあげるわ。』

さう云ふと、右手の傘を女中に渡して、袂から半巾を取出した。それを裂いてすげて吳れるのだと、三郎にも直ぐに感じられた。彼は顏が眞赤になつてうつむいてしまつた。

『坊ちやん、お待ちなさいつたら。』

女中もともどもに呼止めたが、三郎はふり向きもしないで、片足を引擦つたまゝ駈出した。後の方で二人の女の笑ふ聲が、耳の底迄じいんと響いて來た。三郎は泣き度くなつた。

たしかにあれは、子爵のお妾に違ひ無いと思つた。そんなお妾なんかに言葉をかけられたのが羞しかつた。平常自分が肩身の狹いおもひをするのも、あいつのおかげなんだと思つた、そのくせ、大柄な女に似ない目つきの優しい顏と、甘つたるく響いた聲が忘れられなかつた。どうしても、彼が想像してゐたやうなわる者とは思はれなかつた。その時以來三郎は、お妾よりも子爵の方が、自分の肩身を狹くする人間なんだと思ひ始めた。（大正十二年一月二十一日）



握飯になる話

久米正雄

由ちやんは、氣の弱い子でした。活潑だけれど、氣の弱い子でした。身體も、これと云つて、別に惡いところがある譯でなく、頰ぺたなぞは、生々と林檎色をしてゐて、見るからに可愛いゝ少年でしたけれど、氣性が、弱い、と云ふよりは、優しい子でした。

尤も氣が弱いと云つても、由ちやんのは、女々しいとか、愚圖だとか云ふのではありません。それから又、人見知りをして、いやにはにかんでばかり居る、と云ふのとも違ひます。由ちやんのは、たゞ、他人の氣を害ねるとか、悲しみを與へるとか、惡戯をしてからかふとか、さう云ふ事に對して、大變臆病なのでした。寬ちやん龍ちやんや澳ちやんや、近所の腕白つ子どもが集まつて、啞の二郎ちやんを苛めたり、乞食の蓬萊婆さんに、お金をやると云つて、手を出させて置いては、礫や木の葉を載つけたり、又はその手のひらをぴしやりと叩いて、赤んべいをしたりする時は、いつも由ちやんは後の方に居て、兩手で顏を蔽ふやうにして、ひとり後を向いて居ました。時々は堪らなくなつて、家へ逃げて歸ることがありましたが、又、そんな

にして逃げ歸つたりすると、一緒に遊んでゐた仲間に、何だか惡いやうな氣がして、たゞなるたけ、人の氣づかぬやうに小さい心を痛めながら、眼をうるませて居るのが常でした。

家でも又、兄さんや妹なんぞが、お母さんに叱られでもすると、叱られてゐる當人よりも、傍に見てゐる由ちやんの方が先に泣き出して了つて「お母ちやん、勘忍してお呉れよう！」と叫ぶので、お母さんも度々困らせられ、由ちやんの居る前では、餘り他の兄妹たちを、嚴しく叱る事が出來ませんでした。

或日、由ちやんは毎もの腕白仲間と一緒に、近所の、普請場の板圍ひの中で、遊んで居りました。其處は恰度、前にあつた古い家を取退けて、新らしい家を建てようとしてゐたので、いろ〳〵な材木や何かゞ隅に積み重ねてあるきり、まだ大工や佐官も入らず、近所の子供たちの、いゝ遊び場所になつて居りました。そして其處は、横町の往來の方を、板塀で圍つて在つたので、其中でどんな惡戯をして遊ばうと、子供たちの勝手なのでした。

今日も、皆が集まつたところで、惡戯遊びの相談が、餓鬼大將の寛ちやんの口から云ひ出されました。それは、寛ちやんの持つてゐる、大きい蟇口の端に、長い紐をつけて置いて、其蟇口を直ぐ前の、往來へわざと落して置き、通りがかりの人が、それを見付けて拾はうとすると、其時、此方の普請場の塀の中に隱れてゐる誰かゞ、紐をする〳〵と手繰つて、財布を此方へ引寄せ、拾はうとする人を、慌てさせたり落膽させたりして、塀の中から皆が、わつと笑ふと言ふ計畫でした。

由ちやんは、それを聞いて、困つた事になつたと思つて居りました。が、併し、强ひて逆らふ事は、他の子たちが頻りに面白がつて、其寛ちやんの思ひつきを、みんな贊成して居るので、迚も出來ませんでした。で、仕方がないから、皆と一緒に塀の此方に居て、默つて見て居るふりをする事にしました。

其計畫は、直ぐ實行される事になりました。寛ちやんの、叔父さんとかに貰つた、大きな赤い皮の財布は、中に一錢き

りしか入つて居ませんでしたが、メンコやバイが詰つて居るので、往來の眞ん中へ落して置くと、百圓も入つて居るやうに見えました。そして其端につけた絲を、ずつと塀の中まで導くと其絲は目につかないやうに、砂を掛けて置いたので、どこから見ても其財布は、眞もの〻落し物とほか、見えませんでした。

皆んなは誰が通り掛つて、嬉しさうに財布を拾ひか〻るかと、塀の中で息を殺しながら、待ち構へて居ました。絲を引張る役目は、勿論寛ちやんが一番先に務める事になりました。

一番初めに引か〻つたのは、五丁目の角の、酒屋の小僧さんでした。小僧さんは、自轉車にゆつくりと乘りながら、歌劇のカルメンの口笛を吹いて、通りか〻りましたが、直ぐ目の前に、赤皮の太つた財布が、銀色の金具を日にぴか〳〵させて、どつしり落ちてゐるのを見付けると、自轉車をぐらりと横に曲げ、素早く其財布の前へ下りました。そして何だかもう一度見定めるやうに、財布をぢつと窺くやうにしました。

塀の中では、みんな一生懸命覗いてゐましたが、くすりと、誰か笑ひ聲を洩しました。けれども又誰かゞ、聞えない位の聲で、シッと云つたので、皆は又一生懸命に、笑を忍んで待つて居ました。

由ちやんも、一つの塀の節穴から、其時まで窺いて居ましたが、心の中では、小僧さんが早く悪戯だと氣付いて、拾ふのを止めればい〻と、そつと念じて居りました。で、誰かゞくすりと笑つた時、それを小僧さんが聞き咎めればい〻と、思つた位でしたが、小僧さんの方では、迚もそれどころではありませんでした。

小僧さんは、愈々それが、眞物の、大きな財布だと解ると、世にも妙なほど、眞剣な目の色をしました。そして、今度は、四邊に人は居まいかと、往來の前後を、さりげなく振り返つて眺めました。恰度、誰も其横町を通りか〻つて居る人はありませんでした。で、小僧さんは思ひ切つて、もう一度四邊を見廻した後で、腰をかゞめて拾ひ取らうとしました。と、その蛙のやうに膨らんだ財布は、思ひがけなくずる〳〵と、手を伸ばした先の方へ、動いて行くではありません

か。小僧さんの慌てやうつたら、ありませんでした。

　由ちやんは、其眞劍な、そして吃驚した樣子も、もう見るに忍びませんでした。それで、急いで節穴から、身を引いた時、塀の此方側では一齊に、堪へに堪へてゐた笑ひ聲が、どつと擧りました。

　由ちやんは嘸、あの酒屋の小僧さんが、眞つ赤な顏をして、急いで自轉車に乘つて、逃げて行つたらうと、可笑しいやうな氣と、可哀さうな氣とが一緒に浮んで來て、譯の分らない涙が出てなりませんでした。

「うまく行つたネ。」

　毎も寬ちやんに、お追從ばかり云ふ正ちやんと云ふ子が、大人のやうな口ぶりで、笑ひながら云ひました。

「うん。あの見付けた時の、嬉しさうな顏つたら無かつたネ。そして、そつと誰も見てゐるものはないかと思つて、彼方此方見廻したぜ。あれ、きつと拾つたら、交番へなんぞ持つて行かないで、自分の物にしようつて氣だつたんだぜ。」

　龍ちやんも言つた。

「だから、いゝ氣味だつたネ。あの小僧、角の吝嗇酒屋に使はれてゐるんだから、毎もあの位の目に會はしてやつた方がいゝんだよ。」

　湊ちやんも云つた。

「どうだい。面白いだらう。」發頭人の寬ちやんが、得意になつて云つた。そして皆を見渡したが、何となく浮かない顏をして、下を向いて居る由ちやんを見ると、不意にかう云ひ出しました。「由ちやん。君は面白かアなかつたのかい。」

「いゝえ。」由ちやんは、寬ちやんの方を眞面に見返しながら、逆らはない微笑を浮べて、かう答へました。「面白いけど、可哀さうなんだもの。」

「生意氣云つてらア。面白けれやア、皆と一緒に、笑つたらいゝぢやないか。可哀さうだなんて、生意氣云つてらア。そ

んな生意氣云ふんなら、今度は、君にあの絲を引張らせるぜ。」

「さうだ〳〵。今度は由ちやんに引張らせて、見物しようや。」

「それがいゝ、それがいゝ。」

皆は口を揃へて云ひ出しました。

「厭だよ、僕、厭だよ。……」

由ちやんは困つた事になつたと思つて、頰ぺたを眞赤にして、皆に云ひ逆らつて見ましたが無駄でした。

「いけないよ。由ちやん。皆んな一度づつ、順番に絲を引張るんだから。今度は君だよ。」

寛ちやんは餓鬼大將の權威を以て、猶もかう言ひ渡しました。

「なァに君、」と、龍ちやんも傍から云ひました。「鳥渡絲を引張れやァ、それでいゝぢやないか。皆がするんだから、君もおやりよ。」

さう云はれると、由ちやんも仕方がないと諦めました。

「ぢや君、僕、引かう。たゞ、引けばいゝんだね。」

「あゝいゝともさ。向ふが拾つちまはない中なら。——拾つちまはれると、財布を返して呉れないかも知れないから、いけないけれど。——」

「そんなら僕、」と、由ちやんは、ふと或る事を思ひつきながら云ひました。「寛ちやんの財布を、落して置くのは厭だァ。だつて、引張そくなつて、拾はれつちまふと困るもの。だから、代りのものを、僕、拵へて落して置かァ。それでもいゝでせう。」

「代りのものつて、何だい。」

「さうだね。……あの、僕、財布の代りに、お辨當みたいなものを、落して置かァ。彼處に落ちてゐる竹の皮の中へ、鉋屑を入れて、うまく包んでさへ置けば、きつと人はお饅頭か、お握りかと思ふでせう。僕、お金を落して置くのは、何だか厭だから。……」

「うむ。それぢやァ、それでもいゝよ。だから、きつと君が、今度は引張つて見せるんだぜ。」

「あゝ。――」

それから由ちやんは、仕方なしに、併し又いざとなつたら、幾らか拾ひ手にも恥を與へずに濟むであらうと思つて、急いで其支度を初めました。

竹の皮包は、よく見れば直ぐ解るが、鳥渡見事な、眞物のやうに直ぐ出來上りました。

「うん、成程、財布もいゝけど、これも面白いね。これで食べ意地の張つた人を欺すんだね。」

龍ちやんが、かう云つて、由ちやんの企を賛成して呉れたので、由ちやんはたゞ點頭いて、それを往來の眞ん中へ、うまく落して置く事にしました。そして其端へ、例の麻絲をつけて置いて、引張るやうにして置いた事は云ふ迄もありません。

かうして由ちやんは、其絲を小さい手へ握りながら、皆と一緒に塀の蔭へ隠れて、拾ふ人の通りかゝるのを、今か今かと待つ事になりました。

由ちやんは心の中で、どうか、そんな落し物などに氣のつかない人か、氣がついても、目も呉れない人か、又は直ぐ此方の計畫を見破つて、足蹴にでもして行つて呉れる人かが、通りかゝつて呉れればいゝと、日頃お母さまが信仰してゐる基督の神さまにかけて、一生懸命祈つて居りました。

と、暫らくして、向ふの通りの方から、一人の乞食のやうな爺さんが、とぼ〳〵と歩いて來ました。帽子も被らずに、銀色のもぢや〳〵した頭の毛と、同じやうにもぢや〳〵した髯を、顔一ぱいに生やして、眠さうな、だらりと垂れた瞼を

した、人の好さゝうな老よりで、鼠色の襤褸な半纏と、同じ色の股引とを穿いてゐました。由ちやんは、初め乞食かと思ひましたが、どうも乞食ではなささうでした。着てゐる襤褸も、ぼろ〳〵と垂れ下つては居るが、何だか汚なくはないやうでした。

其中に、其老人は、だん〳〵塀の前の、竹の皮包みが置いてある、其場所のところまで來かゝりました。由ちやんは果して、此の老人に、竹の皮包みが、どう言ふ效果を與へるかと、心配におど〳〵胸を痛めながら、息をつめて待つて居ました。皆も、由ちやんとは違つた心持で、此の乞食爺――他の人にはさう思はれました。――が、どんな容子をするかと、これも息を潜めて待つてゐました。

併し爺さんは、由ちやんの希望に反して、果して、其竹の皮包みを見付けると、喜ばしげに立佇りました。そして兩手を開いて、喜びと驚きとに、たるんだ瞼をはつきり見開き、黄色い顏色を輝かして、思はず獨語を云ひ初めました。

「ほう！これはいゝものが落ちて居たぞ。きつと握り飯だな。難有い。田舍から出て來て、今日で、俺は二日と云ふもの一粒の飯も食はないで、孫の家を尋ね歩いてゐるんだ。握り飯なら難有い。天道樣のお助けだ。」

誰かゞ、塀の中で、又くすりと笑ひました。が、由ちやんは笑ふどころではありませんでした。泣き出したい位でした。

そして、爺さんの喜びやうが、餘り大變なので、早く其竹の皮包みを引張り寄せて了はうかと、思ひ惱んでゐました。早く引張り寄せたら、爺さんも直ぐ惡戲と氣付いて、餘り喜びの期待が大きくない中に、早く落膽して了つて、其落膽の度合が、幾らか少いだらう、……さうも思ひました。が、又、其喜びやうが、餘り大きいものだから、由ちやんは少し氣を呑まれたやうに、直ぐ引寄せるのも氣の毒なやうに思はれて、いつそ此儘爺さんが竹の皮包みを、拾ひ上げて中を見る迄放つて置かうかとも考へました。それで、今引かうか、引くまいか、と、いろ〳〵思ひ餘つて居る中に、爺さんの方では遠慮なく、殆んど眼にも止らぬ位の素早さで、もう其竹の皮包みを、拾ひ上げて了つてゐました。

由ちやんはもうどうする事も出來ませんでした。たゞ、息を詰めて、竹の皮包みを拾ひ上げた爺さんが、中を開けて見て、

どんなに落膽するかを、心を痛めて見てゐる外ありませんでした。そして心の中で、ふいと、あの自分の入れた鉋屑が、何か神樣のお力で、眞との御飯か何かに變つてゐて吳れゝばいゝと、一瞬間祈るやうな心持になりました。それと云ふのも、餘り其お爺さんの、包みを拾ひ上げた樣子が、嬉しさうに見えたからです。

塀の中の他の仲間も、由ちやんとは違つて、これは又どんなに失望するかと、面白がつて待つてゐました。塀の穴からそつと窺いてゐる七八つの眼は、今、ぢつと其お爺さんの包みを開かうとする手許に、集まりました。

爺さんは併し、そんな事とは露知らずに、落着いて、猶も嬉しさうな獨語を云ひながら、竹の皮の紐を解いて行きました。そして紐をゆつくり解き終つて、中をぱつと開きました。此方の仲間の間からは、前からもう待つてゐたやうに、誰かくすりと笑ひました。が、併し、どうでせう！其爺さんが開けて、今兩手に持つてゐる竹の皮の中には、炊きたてのやうに濛々と、暖い湯氣の立つてゐるお握飯が、恰度いつか駒込の火事の時、由ちやんのお友達が貰つたやうな、心もち三角張つた大きさで、三つも包んであるぢやありませんか。

塀の此方では、くすと笑ふ聲とは違つて、思はずあつと云ふ驚きの聲が、皆の間に上りました。

爺さんはそんな事には少しも氣がつかず、猶も、『難有い、難有い！』と獨語を云ひながら、其竹の皮包みを三度ほど押し頂いて、其一つを取ると、思ひ切つて大きな口を開けながら、一口一ぱいに頰ばりました。そして口をもぐ〱させながら、頰張つた口でよくは解らないが、猶「難有い、難有い！」と云ひ續けて、ゆつくり、とぼ〱と、向うへ平氣で步いて行きました。

塀の此方では、さすがの寬ちやんも龍ちやんも、何が來ても驚いた事のないと自分で云つてゐる淸ちやんも、すつかり驚いて了つて、どつと聲を擧げて笑ふどころか、一言も言葉を發する事が出來ずに、たゞ、驚いてぽかんとした顏を、お互に見合せるばかりでした。

由ちやんは、殊に蒼白い、吃驚した顔をしてゐました。が、由ちやんの目の縁のあたりは、興奮したと見えて、冴え〴〵とした赤みが、ぽつと浮んでゐました。

「どうしたんだらう。鉋屑がほんとのお握飯になつた。」

寛ちやんがかう云ひ出したのは、皆の驚きが靜まつて、暫らくしてからでした。

「あのお爺さん、魔法使ひかしら。」

漢ちやんもやうやく口を開きました。

「早く追ひかけて行つて見よう。」

龍ちやんが直ぐさう思ひつきました。

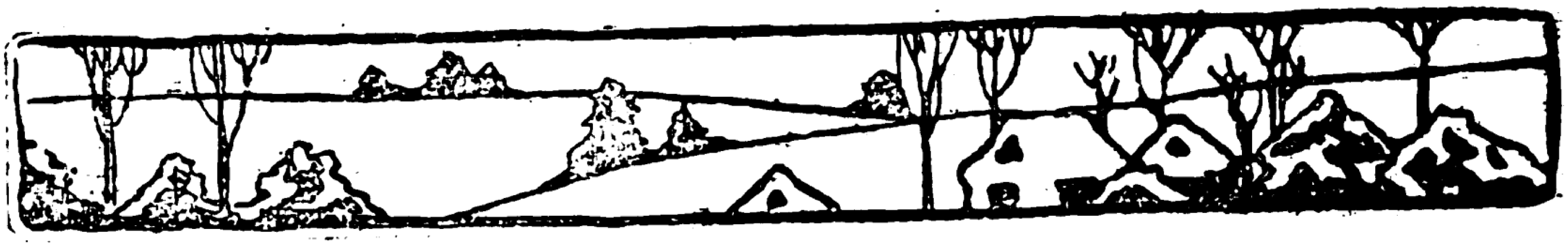
そして皆は一緒に、其板塀の中を急いで飛び出して、往來へ出て見ました。

と、お爺さんはもう、一丁ばかり先の、眞つ直なお邸町の横町を、黒い後姿となつて、ゆつくりと、併したゆみなく歩いて行くのが、春の日の光を浴びて、はつきり見えました。

そして其頭のあたりから、何か金色の圓光のやうなものが、ぼんやり一尺四方位さして、黒いお邸の塀や、青い生籬のあたりを、明るく輝かしてゐるやうに、由ちやんには見えました。

皆は、それつきりもうそんな悪戯をしないやうになりました。酒屋の小僧さんも、もうどんな口笛を吹いて、其横町を通らうと、笑はれるやうな事はありませんでした。

本郷五丁目附木店の、恰度女子美術の裏手に當る、幅二間ほどしかない、靜な横町での出來事です。行つて御覧なさい。近頃はもう、其處には赤皮の財布なんぞは落ちてゐないで、柔い霜どけ路の上には、ほか〳〵と暖い春の日が當つて居るきりですから。　（をはり）



十字架

中原綾子

あるときは破れよとしもかき鳴らす寂しき胸のしろがねの琴
石もまた悲しきときは泣くべきと掌に置きものをこそ思へ
大方のよろこびごとに似ざれども自らつくるたぐひなき幸
その如き人間の世の苦しみを女は知らぬものと思ふや
自らによしとほめられいたはられあれど心の慰さみがたし
いと高き塔なりされど傾きぬこの日の後のおぼつかなさよ
わが心さびしきときは赴きて深くも覗くなつかしき淵
惑へるは思ひつめたるいにしへのわれよりさらに哀れなるかな
願はくば生けるかぎりのわれをしてつらぬかしめよ一の信念
十字架の裂くる奇蹟もあらずして酷たらしくも死にし基督



黑谷夜話

中里介山

六

同じ日に天野の四郎は小笠を廻しながら西の樓へ入つて來た。漂然と入つて來て傲然として一間に打ち通つて、先づ宮城の消息をたづねた。

『宮城は』

『只今お風呂に召してゐらつしやいます』

『あゝ、おれも風呂に入りたい』

天野は旅をして此處へ着いたばかりである。風呂と聞いてこたへられなくなつて、汗ばんだ身體をゆすつて見せたのも無理がない。併し、年增の附の女は

『では、直にお召しなさいまし』

とは云はなかつた。いつもならばさう云ふべき所をさう云はないで

『も少しお待ち下さいませ、宮城樣がもうお上りになります』

と云つたのが、何分、天野の四郎の氣に入らなかつたやうだ。氣に入らないばかりでなく早くも邪推を起してしまつた。この男は氣を廻すことに可なり鋭敏で

さうして、大きければ大きいやうに、小さければ小さいなりに、それに復讐の念が伴ふのを常とする。

「風呂が明かなければ水を浴びる」

と立ち上がつた。それをまた推量した女は自分ながらまづい事を云つてしまつたと狼狽したが追付かないで、

「それではお加減を見て参りませう」

先を越して立たうとするのを天野はまたしても抑へてしまつた。

「それには及ばない」

斯うなると天野の執拗癖が嵩じる。たか野を抑へて、自分はさつさと立つて風呂場へ入つた。彼は風呂場の杉戸を遠慮なく押し明けて見ると、その脱衣場に脱ぎ捨てゝあるのは意外にも伽羅を焚きこめた宮城の衣裳ではなくて、念入りに風雨に曝された墨染の法衣が殘骸のやうに置き捨てられてある。

「はて」

と天野は内戸を開かうとして篤と其の曝された墨染の法衣を見直してゐる。人違ひだ、風呂に入つてゐると報告したのは女の感ちがひで、事實は此の墨染の殘骸の主が入つてゐるのだ。その儀ならば何も荒らかに此の内戸を開く必要はない、故らに御機嫌を惡くする理由もなかつたのだと、天野は何となく拍子拔してゐると、

「ねえ、御出家さん」

と中で聞えるのは、舌たるい女の聲であつた。その舌たるい女の聲は正しく宮城の聲に相違ないから、天野は再び惑亂した。脱ぎ捨てゝあるのは墨染の殘骸で、中の主は艷麗な遊女の聲である。さすがの天野も、縁下にはその戸を開きわづらうてゐると

「はい」

と返事をしたのが神妙な男の聲で、これぞまさしく愛染の殘骸の主に相違ない、室津で妖艶第一とうたはれてゐる遊女が、法衣の主と一緒に睦まじく沐浴をしてゐるのを計らず定と留めた天野の四郎は苦笑ひをするのを禁ずることが出來なかつた。併し、これが苦笑ひでまだ幸であつた。若し、こゝに脱ぎ捨てられたのが、鄙ぶりの小袖や笄簪の類であつたなら、天野の瞋火はむら／＼と燃え上がつたらうに、幸にして風雨に曝らされた三衣の褊といふものが、天野の瞋恚を單に苦笑ひにとゞめてしまつたのだけれども、彼は拍子放してそのまゝに立ち去つてしまうほどに單純な男ではなかつた。戸へ片手をかけたまゝで耳をすまして中なる會話を聞きとめやうとしてゐる。それは何の雜作もない事であつた。天野は忍ぶことに妙を得てゐる、最初に此處へ來た時からが本能的に中の人には氣のつかれない忍び足で來てゐるのであつたから、中では悠々と取り合せの奇妙な二人が何物にもみだされないで話をつゞけてゐる。

「昔、光明皇后と仰がるやんごとなき御方は斯うして一々旅の者の垢を洗つておやりになつたさうですね」

これは宮城の聲である。

「左樣です、千人の旅人の垢を落しておやりになつた最後のものが藥師如來の化身であつたといふことを申します」

「千人の肉體に觸れて行きますうちには、肌の軟らかい人もありましたらうと思ひます」

「はい」

「斯ういふ話を聞いて居りますが、あなたは御存知ありませんか」

「仰有つて見て下さい」

「よしませう、多分、あなたは御存知の筈ですから、その話はやめとしまして、わたしもまた、これとは違つた意味で千人の供養をして見たいと思ひますけれど、それはいゝ事でせうか、惡い事でせうか、一つ、あなたに伺つて見たいと思ふのです」

「供養は結構な事に違ひありません、一人にしても結構です、況んや千人に於てをやです、殊勝な事に存じます」

「けれども、供養といふことの意味が本當にはわかつてゐないので困ります、あなた、一つそれを説明して下さいまし」

「別に六つかしい説明もございますまい、佛法僧の三つに向つて財と行とを捧げ己が善根を攝養することです。これを敬供養と行供養と利供養との三つに分けてゐるやうです、なほ委しく云ひますと、敬供養とは、堂塔伽藍を莊嚴にすること行供養とは經を讀み佛に禮すること、利供養とは飲食衣服を供することゝいふやうな意味になるのです、あながち佛法僧の三つに限るべきではありますまい、誰に向つても善事を行ひ、己が善根を修するのが卽ち供養と申して宜しいと思ひます、渴いてゐる人には水、餓ゑてゐる人には食、凍へてゐる人には衣服、名聞の心を外にしてそれを施すのが卽ち供養と思召して宜しうございませう」

「求められるものは皆んな無條件で施すのが本當の供養なんでせう」

「まあ、さう云つたものでせう、いや本當はさうでなければなりません、薩埵王子は自分の身を割いて鷹に與へておやりになりました、生命までも施して悔いないのが本當の供養と思ひます」

「あれは忌、これは辛いと思つては供養にはなりますまい、好きなものだけに施すならば、それは供養ではなくて道樂といふものだと思ひます」

「さうです、自分の欲しいと思ふ心を捨離して人に與へるのが供養の心でなければなりません、求められた時には最も大切なもの、己が生命をも施して悔いないのが聖道です」

「わかりました、それで、わたくしは今日を供養の手はじめに、千人のうちの最初の人として、あなたを拜みたいと思いますが、如何でせう、あなたは、何かわたくしにお求めになるものはございませんか」

「どう致しまして、拙僧があなたから受けた供養は過分です、この上、あなたに所望すべきものは何もありません」

「いゝえ、さうではございません、わたくしが、供養として、あなたに捧げたい一番大切なものが一つ殘されてあると思ひますが、あなたはそれをお心づきになりませんか」

「受くべきものと受くべからざるものとがあります、わたくしは、あなたの好意としての、すべてのもてなしを快く受けてゐるつもりですが」

「いゝえ、わたくしはまだ、あなたに好意を示しては居りません、お布施も捧げては居りません」

「それでは、此の上に何を、拙僧に下さらうとおつしやるのですか」

「あなたに解脱を捧げたいと思ひます……可笑しいでせう」

「解脱……」

「えゝ、逆引導になりますか知ら、それでも、今のわたしの身で、あなたに差上げたいもの、千人の供養の第一人目のものとして、あなたに受けていたゞかねばならぬものは、この解脱の道だけです」

「異樣な事を仰有います、かりにも出家である、わたくしの身が、正眞の女人であるあなたから解脱の道を聞かねばならないのですか」

「さう仰有ればさうなるかも知れません、わたくしは、あなたを實際はお氣の毒な方だと見て居るのです、平氣をよそほつておゐでになるあなたの五體がふるへてゐるのが何の爲ですか、あなたは此處を逃け出したいと思つてゐらつしやるのに、強ひておそれを見せまいとして、さいぜんから苦しんでおゐでになるのがよくわかります、わたくしの眼から、かうして、あなたのお振舞を見てゐますとお氣の毒にも足が板については居りません、すつきりと悟つたお方の擧動はさうしたものではありません、失禮ですが、あなたは、わたくしがさうしようと思へばどうにでもなります、わたしに睨まれてゐることも立つことも出來ないで、問はれる通りに返事をしてゐらつしやる、あなたを、わたくしには此の上なく可愛ゆい

お方だと思つてゐます」
「あなたにも、やつぱりさう見えますか知ら」
「あなたにもではありません、恐らく、わたくしだからさう見えるのでせう」
「さう見えるのが當り前かも知れません、事實、わたくしは從容自在なることを得てはゐないのです、すべての誘惑に對して苦んでゐます」
「求めて得られない解脱の爲に求める心がいよ〳〵重荷となつて動きの取れない修行者を哀れと思つては惡いのですか」
「わたくしは謙つてお聞き申すことを知つてゐます、法水は增長の谷にとゞまらぬことを知つてゐるつもりですから、その道をお示し下さるならば、たとへ酒肆淫房の間なりとも辭することなく……わたくしは只管の解脱の道を求めたいのです。昔、書寫山の性空上人が此の室津の遊女に接得されたといふ話も聞いてゐます、無論、わたくしは性空上人ほどの法器と自惚れはして居りませんけれどもあなたが若しこの時の花染とやら云ふ遊女の道力を持つておゐでなら謹んで、解脱の道を承りたいものです」
「さう固く出られては困ります、その固い心を砕いてしまうのが即ち解脱でせうと思ひます、あなたには發心以前の龍樹菩薩の大膽がありません、千人を助ける人は千人を殺す人でなければなりますまい、臆病なあなたには千人は愚か、一人も殺すだけの力のないのがお氣の毒です」
「云うだけの事を仰有つて下さい、あなたの云うことは當しく詭辯といふものですけれども、それをも、わたくしは喜んでお聞き申してゐます」
「お聞き下さるなら喜んでお話を致します、人を活かさうとするには人を殺してごらんにならなければウソです」
「それは、どういふ譯です」

「まま人に殺された上でなければ人を救ふことは出來ないものです」

「それも、よく說明して下さい」

「六つかしいことは存じませんが、あなたに聞いていたゞきたいのはわたしは今、多くの男性を活かすことも殺すことも心得てゐるつもりです、自慢ではありませんが、權勢の人も勇氣の人も、わたしが一たび斫うと思へば大抵は思ふやうになつてしまひます、その柔らかいわたしの肌には鐵の骨を溶かすの力があります、この細いわたしの腕で、いくつもの館をくつがへす事も出來るのです、あなたは、どうして、纖弱なわたしがこれだけの力を持つてゐるかを、不思議な事にお考へにはなりませんか」

「それは魔力といふもので、惡魔の力です、佛の種子を斷たんとする地獄の使がさせる業で、女人の成佛し難いのもその業力にあるのです、決して誇るべき力ではありません。呪うべきものゝ至極です」

「よし誇るべきものでないにしても、呪うべきものであるにしても、力であることはお認めになつてゐらつしやるでせう、可哀相にあなたは多年の佛道に入りながら他人は愚か自分一人さへ救ふことが出來ないでおゐでなのに、惡魔であらうが地獄の使であらうが、わたくしの力は千人の男に向つて活殺自在です、羨やましく思ひませんか」

「力そのものだけならば隨分羨ましいと思ひませうけれど、力の性質が違ふから、わたくしに取つて無關心です、地獄の力と向上の力とは違ひます、たとへば車を坂に落すのは小兒の力でも出來ますが、引上げるのは大人の力でも覺束ないことです、わたくしは今微力ながら車を引き上げようとしてかゝつてゐるのです、あなたは車を坂落しにしてそれが徹塵に碎けるのを見て喜んでおゐでのやうですが、その力は貴ぶべき力ではありません」

「貴ぶべきものであつてもなくても、わたしはそれを云つてゐるのではありません、何にしてもわたしにそれだけの力があつて、あなたには何の力もないのがお氣の毒ですから、その力の因緣をあなたに數へて上げたいと思ふのです」

「どうぞ教へて下さい」
「わたしも昔は處女でありました、處女の時を失はない間は、あなたの現在と同じやうに苦んで居りまして、處女の許を奪はれてわたしは却つて活きました、處女としての、わたしが殺されたから現在の女としてのわたしが生れたのを今になつて染み〲と考へると可笑しくなるばかりです、けれども、その時は泣きました、死を決しました、本當に死んでしまつたのです、全く殺されてしまつたのです、それでもまたあの時殺されなければ、現在のわたくしに此の力がありません」
「あなたの仰有ることは、どうも獨り合點のやうで、十分に呑み込めません、殺されて活きたといふ實際を明白にお示し下さることは出來ますまいか」
「明白に申上げませうとも、わたしは或る一人の强盜の爲に辱かしめられました、それが爲に處女のほこりといふものが微塵に碎かれたのです」
「成程」
「伴の者は谷底へ投げ込まれたから生死のほどはわからないのです、その强盜の爲にむざ〱と汚されたわたしは、やはり其の强盜の手によつて此の室津へ賣られることになつたのです」
「それは怖ろしい事です、なぜ、あなたは其の時、或は只今でも其の毒手をのがれようとはなさらぬのです、奪はれて賣られた今の境涯を寧ろ幸福としてやるやうなあなたの態度がわかりません」
「その時は怨みました、その者を殺して自分も死なねばならぬと思ひました、けれども、程なく、わたしはその人を好きになつてしまつたのは淺ましいでせう、そこが女と云はれても仕方が無いのです、仕方がありませんけれど、お蔭で、わたしは今のやうに生き返つてゐます」
「それを本當の意味で生き返つたと思つておゐでなさるのですか」

「本當かウソかは知りませんが、あの事が無ければ處女といふ殼の中で、わたしはみの蟲のやうな一生を終へてしまつたのでせう、それをあの事のお蔭で自由な廣々とした天地が開けました」

「あゝ、自由な天地、成程」

「おわかりになりましたか、あなたもさうして窮屈に愛欲に旅から旅を渡つてお歩きなさるだけで幾年修行をなさつても到底ものにならないのは、それは精進といふ殼をかぶつてゐるからです、その精進といふ殼を脱ぎ捨てなければ暢々した天地に身を置くことは出來ますまい、恰度、わたしが處女といふ殼にくるまつて後生大事に固まつてゐたのを非人情に突切られたやうに、あなたといふものがあんまりしほらしいものですから、取抱へてその解脱を敎へて上げようと思ひ、わざとお呼び留め申して見ました、これが、わたしの好奇といふのかも知れません、或はこれが却つて善知識の引導といふものかも知れません」

「甘んじて、わたくしは、あなたの好奇(ものずき)のお相手になつて居りました、あなたの引導の道筋はよくわかりました、不幸にしてたゞそれが詭辯といふ僞りの論法から出立してゐるので、全部が巧妙ないつはりだといふことの外にはこたへがないだけです、併し、たゞ一つ、あなたの云つたことで眞實があります、それは拙僧が解脱を得てゐないといふことです、窮屈に愛欲に旅から旅を歩いてゐても到底ものになつてゐないといふことです、この事だけは、あなたの見たのが正しい、あとのは皆んな詭辯です、わたしは、あなたの引導では成佛することが出來きません」

「わたしの引導では成佛が出來なければ、ドコへ行つても成佛は出來ませんよ」

「兎に角、あなたの好奇のお相手になるだけはなり、有難い御說敎を承るだけは承りましたから、これでお暇を致しませう、わたしの今度の旅は京都の黒谷へ行くつもりなのです、黒谷の法然上人が、わたくしに何か敎へて呉れるだらうとそれを頼みにして參ります」

「その戸は開きません、樞が下りてゐますから、いゝえ、その戸を開ける事を知つてゐるのはわたしだけです。」

「開けてお出し下さい、どうぞ」

「あなたの迷ひが開けた時に其の戸が自然と開くのです」

「では已むを得ません、わたくしは此の戸を破つて出るかも知れません」

「いゝえ、あなたの精進の報が破れた時でなければ其の戸は破れない筈になつてゐるのです」

「無二無三にわたくしは此處を出なければなりません」

「それでは御自分の器量一ぱいに押してごらんなさい、こはしてごらんなさい、わたしは、ゆる〳〵と此處で見物をさせていたゞきますから、明かないやうにしてあるのですもの、千人の人の垢を雪ぐ爲のわたしの內道場は外道の眼で覗られることを嫌つてゐます」

「左程、開かないやうにこしらへてある處へ、わたしを弄び物として入れるやうにこしらへたことがわかりました、宜しい、わたくしは此處に凝として開くまで待つて居ませう」

「おとなしく、わたしの開けて上げるのを待つてゐるより外には道のないことがわかりましたか」

「………」

風呂の中の問答はこれで一段落となつた。あとは沈默だけで上湯のこぼれる音もしない。やゝあつて僧の苦しさうに呻く聲が聞えた時に開かないと云れた戸がガラリと開いた、朦々たる湯氣が外へ流れると共に脫兎の如く逃げ出して法衣を抱へたのは彼の僧であつた。あつと狼狽して戸口を見つめたのは遊女の宮城であつた。戸を押開いて戸口に立つてゐるのは天野の四郎である。

偲ぶよすがに

土肥温泉なる夫のもとへ

若山喜志子

汝がたより胸に熱をおほえしとのらせる文のいとねんごろに

まがなしきこれの妹背のさきはひを神しろしめせとひたに乞ひのむ

晴れし日の天城の嶺ろにゐる雲の向伏す心われはもちつつ

おほどかにあれとしせちにねがへども嶺ろには雲もよるにあらずや

つるばみの去年の古葉の散りがてにのこれるみればなつかしきかな

ただの日は照る日にむなぐさめし今日は雪ふり風も寒くて

おもふことひたすらなれば篠の葉にたまれる雪のたへがたきかな

たゞむきの寒さ今日かなくれなゐの袖口かたくまきてみれども

向ふ路の伊豆の峠のかなしけれ雪ふればただに見むすべもなく

目にも見ず耳にもきかず今日いく日伊豆の峠に君をしやりて

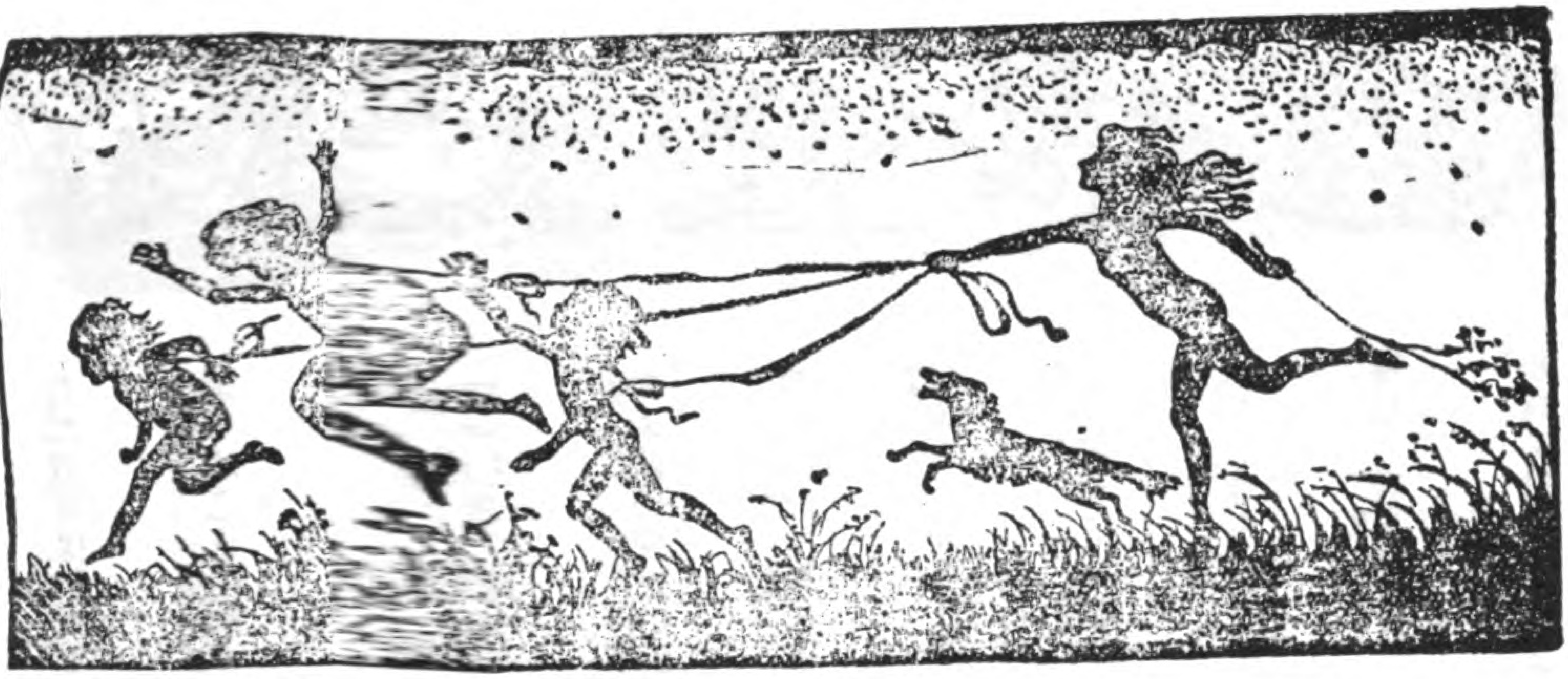
雪ふるとよろこぶ子等の赤けの頬はまろやかにしていよゝかがやく

二つ三つとり忘れたるねえぶるのにほへる木にも雪はふりつつ

ふりしきる雪のさ中の香貫山けぢめもあらず眞白妙なり

稚松の香貫の山にふりおける雪おもしろき今日にもあるかな

小夜ふけの雪解の雫ひそ〳〵と人の戀ほしき音にぞありける



魚眠洞小品

室生犀星

花咲爺

冬のはじめに私はよく枯枝をながめてゐると、枯淡な明るい感じにとらはれる。支那の染附の山水花鳥を具さに眺めてゐるやうな感じがする。——むかし灰を撒いて枯枝に花を歸り咲きさせた一人の爺さんの物語が、まことに調和よく私の考へを圍める。ことに灰を撒くといふことが、さういふ色合ひの花を偲ばせるに十分ではないか。斑點に富んだ冬の日だまりに交叉された枯枝の下に、白髯童顔の翁が靜かに籠を抱いて、そして徐ろに灰を撒くといふことが、幽遠な寂しい冬の日が生んだ古い童話には違ひないが、それもただちに私どもにさへ、さう有りさうな話のやうな氣がしてくるではないか。

支那には山中に遁して仙丹を煉つた仙人が多かつた。漢の劉向の列仙傳ばかりでもその數七十一人を錄してあるし、晉の葛洪の神仙傳中には總て九十二人の仙人がゐた。それから唐の沈份の續神仙傳や、宋の會慥の集仙傳、明の王世貞の列仙全傳などにも、まだ名の知れぬつつましい仙人が錄されてゐる。——王世貞の列仙全傳に

は四百九十七人の仙人傳が錄されてゐる。こんなに澤山の仙人のゐたところは世界中にはない。いつたい西洋には仙人といふものがあまりゐない。

どの仙人でも一度は死し、そして山中に隱れ住んだり雲霧に乘じて現はれるのが多い。しかしその初期には必らず一樣に山洞に住んで仙藥を練るとしるされてゐる。あるひはその仙藥が半ば食物であり半ば醫藥に類してゐるが爲めであらう。――それ故仙丹を練ることを知らないものは、いまだ悟道に達しないものとしてあるらしい。そして彼等は死んだ鶴を生かし枯枝に花蕾を咲かしめることは、わが花咲爺と宛然よく似てゐる。私の考へをもつてすれば彼等もひとしく花咲爺の如く小汚ない仙人であつたことであらうと信じられる。

女の仙人の內で、太陰女といふのがゐた。年二百歲のときに仙術を得たと記されてあつたが、その時になほ肌膚滑らかに十六七歲の處女のやうだつたと言はれてゐる。――それから太玄女などといふ女仙人は、年を經るにしたがつて花のしだいに匂ひ深く開いてゆくやうに、美しさが年ごとに增して行つたさうである。もとより髮は漆黑潤澤であつたことは言ふまでもない。ふしぎなことには若い時分に夫を失つてから或る術者に會つて、早夭の相があると解かれ、遂にその術者に從つて仙術を習腹した。その後何時仙丹を練つたか絕えて知るものがなく、そして何時死んだか分らなかつた。

しかし澤山の溪谷に髮を洗ひ、肌を水に映してゐたことは、誰が傳へるといふこともなく傳へられてゐた。それゆゑ太玄女はまだ澤山の溪谷に生きてゐると言はれてゐる。――その眞僞はともかく均しくわが花咲爺の類ひでなくて何であらうぞ。

不思議に一本の枯枝を眺めてゐると、白髮童顏の仙人を想ひ出されるではないか。その幹黑く紫色を含んで、枯淡言ふばかりなきところに私は列仙傳中のたはない物語りをさへ愛誦するのである。さういふ不思議な物語りを證據立てるやうなものに、槎牙たる枯枝が想起されるのである。――

お近さん

錢屋五兵衛の愛妾であつたお近さんといふ女は、いまもなほ加賀宮の腰の海岸に九十幾歳の壽齢をかさね、砂丘のかけにある尼寺に生きてゐる。二代の五兵衛の愛妾であつたらしい。――自分はいまから十年前にその尼寺の二階に住んでゐたことがある。そのときは既に隠居をして寺は密準といふ尼さんに譲つてゐた。夏も涼しい尼寺の茶の間に、いつも棕梠の蠅叩きを右の手にもつて、茶と蠅取りとに永い日を暮らしてゐた。自分はあのくらゐ人間が柔順で眞に子供らしくなつてゐるのを見たことがなかつた。

錢屋のことに關しては一つも氣憶えてゐないらしかつた。つとめて考へ出すといふことをしない老尼は、いつも大阪每日新聞の記者あたりが訪ねてきても、いつもほかんと要領を得ない返辭をしてゐた。實際老尼はもはや何ごとも忘却してしまつてゐるらしくも見えた。――實際、彼女が蠅を叩きながら、こはい煙草を指さきで煙管につめ、そして唯ぼんやりと日脚をながめてゐる生活は、むかしのことを皆忘れさせてしまつたらしい。もし此人がむかしの錢屋のことを喋り出したとしたら、活きた史實も一段に卑しくなるだらうが、幸ひ彼女は誰が尋ねても知らないと言ひ忘れてしまひましたと言つてゐたことが、どれだけ奥床しかつたかも知れない。――

それに彼女は何一つ錢屋を記念すべき物を所持してゐない。あれだけの豪奢を極めた家に圍はれてゐて、一つの器物さへ持つてゐないことも床しい限りである。前田から沒取された錢屋には彼女の手に殘るものとてなかつたであらうが、身をもつてこの砂丘のかげに逃れたことや、そこに庵を結んで剃髪したことも、美しい夢模様をながめるやうな氣にならせる。

前田が錢屋を利用できるだけしてしまつてから、その有金をすつかり奪ひ取つた後、公儀の名を立てつけに、錢屋一家を鏖殺してしまつたことも明らかである。加賀に生れた平民であるもので心魂のあるものは、前田を不愉快に思はぬもの

はない。――錢屋が持つてゐた古九谷の名什逸器もやんごとなき前田の手によつて、いまもなほ秘藏されてゐるさうである。――それは初代五兵衞があるとき番頭手代を集めて、そして二十人前の膳立てをしてから自分も二十人前揃への器物を持てるやうになつたと話したさうである。冬は松風寒い海濱に饅頭を鬻いでゐたかれとしての、ほこらしげな消えも絶える物語りである。

隱居であるお近さんの若いときは、桃割れに結つた脊丈のたかいすらりとした美しい娘であるらしかつた。その童顏をながめてゐても、肌膚のゆたかにこまかいところなぞ、往年の若い娘として懷中におさめかねる美しい乳房の持主であつたことが首肯かれるのである。何よりも物優しげな香がこもつてゐるところに、疑ふことのできない「小さい扇子を有つたお近さん。」が偲ぶことができるのである。

この海岸の尼寺は、宮の腰と云ふ町から二丁ばかり隔れた一軒家で、隣接してゐないだけでも物寂しい尼寺である。香經と野菜とに據る暮らしは晩雨戸を閉してしまふと、砂丘を越えた波荒い日本海や荒涼とした北加賀の野も、雨戸一枚によつて遮ぎられるのである。そこにはれいのお近さんと、つぎの庵主と、美しい若い尼さんとが障子にうつる灯かげで、何かひそひそ話してゐるほかは、何一つ物音とてもないのである。――わけてこのごろのやうに日脚短かいときは、どのやうに心悲しい晩方であることか？　さう私は考へ沈むのである。二階からすぐ近くの川べりに立つ蘆を分けてゆく小さい白い帆舟が暢氣にすべつてゆくと、そのあとから氣みじかに暮れ迫つて、色縮んでゆく暮色はなほ私の眼底を離れなかつた。――そこに机を置いてゐた私は有名と詩文の崇拜者で、そして光秀のやうに世にあやかりたい逞獲しくも雄々しい男であつた。それだのに今は何といふ世にも己れにも有名にも最早氣と心を染めなくなつたことであらう。鷺の脚のやうな台洋燈の下で私の考へた人生はまことに仕幸で、そしてまことに美しい夢模樣であつたのに――それであるのに私は何といふ物堅い文筆に世を送り心ひもじくなつたことであらうぞ――。きのふ一文を賣り今日なほ一文をつづつてゐることの

哀しさ。——。

いつか私はまた尼寺を尋ねて見て、そして彼の人達ちが達者であつたら、そこの障子にあたる朝日と、暮れちぢみ震ふ晩方の光線とを見て來よう。そしてお近さんが經る年ごとに蟲のやうに背中をかがめてゐたら、やはり茶と餅とに永い日をおくつてゐたら、私はしづかに微笑つてお近さんの汲んでくれる番茶を心ゆたかにその傍で味つて見たいと思ふのである。そのとき若し年寄りをいつはることをせずに言へたなら、かれらを喜ばせることを何か一つ目立たぬやうに言つてみたいと考へるのである。それさへ何時行けるか分らない手頼りない私の望みであるのである。

笹鳴

枇杷の花がけさ目に立つほど散つてゐる。紙片のやうに色つやがわるく寂しい。——青々貞一の掛物を取り出して見る。淡い水仙が紙幅をさびしくしてゐる。冬近くなると毎時この軸を眺める。ふと趙孟堅の水仙の巻を見たくなつて蒐集をひらく。青い透明な水仙の葉が恬刺と亂れてゐて、花は白い的礫たる點綴を凝らしてゐる。

うらす日の射す町へ出て陶器をあさりたい心が、久濶ぶりで起つた。壺皿鉢香合、それから印材も見たかつた。どこかで見た黒膽の龜の子の把手のついたのを思ひ出した。冬近いこのごろは陶器とかかはりがあるやうな氣がする——それも小春日和といふ空を眺めるやうな温かさで、それが冷たくて暖かい陶磁器のあぢはひに似てゐる。晩秋初冬はどうも染附の品のある呉須藍の淡彩を思ひ出させる。靜かでまじりもののない呉須藍の清い美しさが、目に沁みて映つてくる。

田端仲臺寺の境内に、間もなく私は杖を引いて、無緣地藏を眺めてゐた。地藏尊といふものは女子供の拜むものである。それゆゑか此處の無緣地藏はみな柔らかい美しい顏が多かつた。長みのあるのや短かいのや、それらの顏容はみなふつくりしてゐる。坐つてゐるものも、あぐらのものも、それから立膝をしてゐるのや、あごつきをしてゐるのや、さまざまな形

憩をしてゐる。無緣のために手ごろな小山に立てられてある。石にはみな暗みある微塵な苔が生え、蒼古として窪みは自らな柔らかい皺をつくつてゐた。年號は元祿などが古い方であつて、新しくても寛政年間ぐらゐである。その數は二十基くらゐであつたが、巣鴨の何とかいふ植木屋の外は、みな持主とてもない地藏尊である。

むかしは大概女子供の墓は地藏に形取つたもので、そしてその時代の流行で墓石の三角や四角や或ひは全然地藏尊だけ彫りぬいたものもあるさうである。——私はその蒼い石とその彫りに見惚れてゐたときに、帽子のへりのところに微かな音を感じた。曇天ではあるが雨ではない。帽子を取つたときに、へりのところから辷り落ちたなまり色の肌をした寂しい零餘子の實を見た。なほ一歩あとへ退つたときに、黄葉がちなぬかごの莖がよれよれになり、蒞々たる陰氣な實を結んでゐるのを見つけた。手にふれると毛桃の枝にからんだそれらの莖から、ふいに地面にその實がそら明りをはらんで落ちころがり茶の株に辷り込むのを見た。茶の木は、本堂への二た側の敷石をはさんで、二壺に植ゑられ白い閑素な臆病さうな花がさかりだつた。私は實に久振りでその冷たい冬來の花にも指をふれて見た。

葉鷄頭が本堂わきに簇れて冴え、落葉はとなりの大隨寺から吹かれるのであらう、あたり一面に強烈な黄色の斑點をひいてゐた。それらの光景は單に季節そのものの感じではなく、べつに私の心に或る底のゆがんだがさがさな壺底をさし覗いてみる氣もちを與へた。暗色を含んだ土工合の柔らかい陶土の一片が、寂寥として手中にあるやうな氣がしたのである。しかもそれは一見眞新らしくて、よく見ると古さの沁み出るやうな壺底である。何處かで見たことがあつて求められなかつた壺のやうな氣もした。

家へかへると、枇杷の花の散るのが朝にも増して夥しかつた。踏石の上や、寒竹の窪みに溜つたり或ひは青木の葉の上にも白かつた。此間枇杷の花を挿して見たが、ほつほつの豆のやうに寂しい蕾はその葉やその樹の生ひ立ちと同じいやうに或る陰氣さを含んでゐたので、きふに取り棄てたことを思ひ出した。實際こんなに控へ目で考へ深いやうな花はない。

冬咲くものは烈しい紅色のものでなければ、たいがいは茶や山茶花のやうに寂しい。さうでなければ冬ばらや梅擬のやうにかつと一時に思ひ上つたやうな花が多い。そして寒氣に震ひ立つやうな潔よい花だ。——その枇杷の木にチャチャと鶺鴒が枝移りして啼いてゐる。

白鶴道人

庵（いほり）といふものは文字からして風雅な、或る閑やかな氣もちを含んでゐるものである。塵埃裡に居を結ぶも、郊外の淸風に垣根を繞ふも、庵にはかはりはない。しかし庵室といふものは季節ならば秋といふ感じが深い、それに何となくうそ寒い日に珊々たる竹のそよぎを打眺めるやうな興趣が、自ら寒いかんじのする風流と相伴つてゐなければならない。

梁の武帝の時に、白鶴道人といふ方士が居た。平常、舒州の潜山の風景を愛し、閑暇さへあれば山巒狭流の間を歩いてゐた。そして庵を結ぶ土地を捜してゐたのである。

同じところに又浮屠の寶誌といふ山仙の士が居た。かれも潜山の勝景に日夜錫を曳いてゐるうち、よく白鶴道人とめぐり會つた。かれらは何時の間にか立話しをするほど、馴染顔になつてゐた。

「あなたはどうして毎日同じいところを歩いてゐられるのだ。」

白鶴道人は、うすぐらい清水鑑の湛ふ洞窟の前に立つて、同じい岩洞に出會つた寶誌に尋ねた。

「わたしのあなたにお尋ねしようとしてゐることも、やはり貴問と同じです。」

寶誌は、岩洞の扉のやうになつてゐる入口に、己が字を著したところを指さして見せたのである。

「ではあなたも潜山の奇絶な風景を愛せられるのか。」

「潜山を外にして私の居を廬るところはすくないのです。」

寶誌は、白鶴道人といまさらのやうに顔を見合せた。かれらの孰れかが去らなければならなかつた。——しかし二人は、どちらも此風景をそとにして己が身を置くところがないやうに感じられた。

「しかし貴君と私とのどちらがさきに潜山に滞つたのであらうか。」

「それは知らない、私は貴君を見た日が、貴君も私を見た最初の日であつたことだけは知つてゐる。」

二人は、默つて困つた顔をした。をりをり頭をかすめる山霧は岩洞のあたりを罩め、二人をして潜山の奇勝をなほ好望するやうにした。かれらは斯う話しただけ、決して己が仙洞を譲り合ふことをしなかつた。

「洞窟は一つで、仙士は二人だ。」

白鶴道人は、別れる時にかう寶誌に言つて、洞を出た。

「しかし孰方かがその一つの居を得るであらう。」

寶誌も負けずに愛錫を曳いて、流れを越えた。

次の日もかれらは同じい仙洞の前に、同じい時刻に開く奇體な二つの菌のやうに、相踞つて互ひに微笑を交してゐた。

「老子はいまも生きて居られると云ふが、貴君の考へはどうぢや。」

白鶴道人は、寶誌の問ひに直ぐ答へようとせずに、ながれに羽ばたく白い鶴の、その鮮鋭な雲のやうな影を見てゐた。

「貴君が亡くならなければ、老子も生きて居られるだらう。」

寶誌は、白鶴道人の言葉に子供のやうに喜んで、手を打つた。

「いや全くだ。貴君はわたしの考へをそつくり言ひ現はして呉れたも同様だ。」

第三の日に、やはり同じい時刻に、白鶴道人は寶誌の姿を洞のほとりで眺めた。道人はいつもよりずつとさきに來たつもりであるのに、松柏の立木の間にそれの姿をみたときには、或る冷平(ひいやり)とした小さい驚きをかんじたほどだつた。

そのとき寶誌は、子供らしく微笑つてかう言つた。
「わたしは貴君よりずつとさきに此方へ着くつもりでやつて來たのに、貴君はもうちやんと着いてゐられた。」
白鶴道人は、併し言葉なく默つてゐたが、ふと思ひついて言つた。
「人間の心といふものは、相感じ合ふときは、二人ゐても一つになつてしまふものではないか。同じことを考へてゐるときが人と人との間によくおたがひに起つてゐるのではなからうか。」
「それに違ひない、貴君とわたしとがこの洞をゆづらないのも、その一つの心からに違ひない。」
寶誌は、わけなく慾のあるところを合した。道人はふと指を折つて、考へながら何かをかぞへた。
「この仙洞へ來てからわたしだちは何年になるだらう。」
寶誌は、同じやうに考へ深い顔つきになつて、
「もう九年になるのだ。一日もかかしたことがない。」
かれらは顔を見合して暎然とした。そして暫らく默つてゐた。
「しかしどちらかが先きに死ぬとしたら、あとに殘つたものが仙洞を得るにちがひない。」
寶誌は寂しさうにさう言つて、道人の答へを俟つた。
「それよりも一人はここに埋めなければならない。そしてこそ二人がやつと仙洞を得るのであらう。」
かれらは飽迄おたがひの心をゆるめやうとは、しなかつた。そしていづれが仙洞を得るとしても、それに對しては攻しい心がなかつたらしい。なぜだと言へば、二人のうち一人は死ななければならなかつたから——。
斯うして月日を送つてゐるうち、或る日、白鶴道人は、寶誌を招いてへいぜいからの自分の考へてゐたことを、しづかに話しながらそれぞれの實行を物語つた。

「あそこに一羽の鶴が居る。」

白鶴道人は、淵のそばに白いかけを落した鶴を指さしながら、

「あれを放して見よう、そしてあの鶴の下りたところと、そして貴君の錫を飛ばしてそれの落ちたところとを、お互の庵としようではないか。」

「鶴と錫と——錫は動かない。」

寶誌は、吃つてかう言つた。

「いや鶴の脚に結んで、それが中空で解けるやうにしたらどうだ。」

「それならよい。」

二人は、鶴を捕まへ、錫を結びつけた。そして空へ舞ひ上つたのちに、結びが解けるやうな仕掛けにしておいたのである。しかし寶誌はかう言つて懸念さうな顔をして見せたのである。

「どちらも此處へ落ちなかつたとしたらどうなるだらう。」

「さうなれば誰の仙洞でもないのだ。」

二人は、默つてしまつた。——鶴は放たれた。白い鶴はくの字がたに舞ひあがると、しだいに小さくなつて、雲裡の間にすがたを隱した。二人は目をそらへ向けた。

間もなく鶴は潛山の麓に下り、さうして錫はそれから所へだてた洞の上に落ちた。しかしそのどちらも仙洞に落ちることはなかつた。かれらはもはや諍ふことなく、おのおの定められた處に、宿命に近い庵を結ばなければならなかつた。

「しかし此仙洞は誰の手に落ちるのだらうか。」

寶誌は、名殘り惜しくさう言つて、仙洞をながめた。

「いや此仙洞は誰のものでもない。われ〳〵二人のものだ。」

白鶴道人は、その後やはり昔日のやうに、この仙洞を尋ねた。寶誌も同じく錫を引いてゐた。

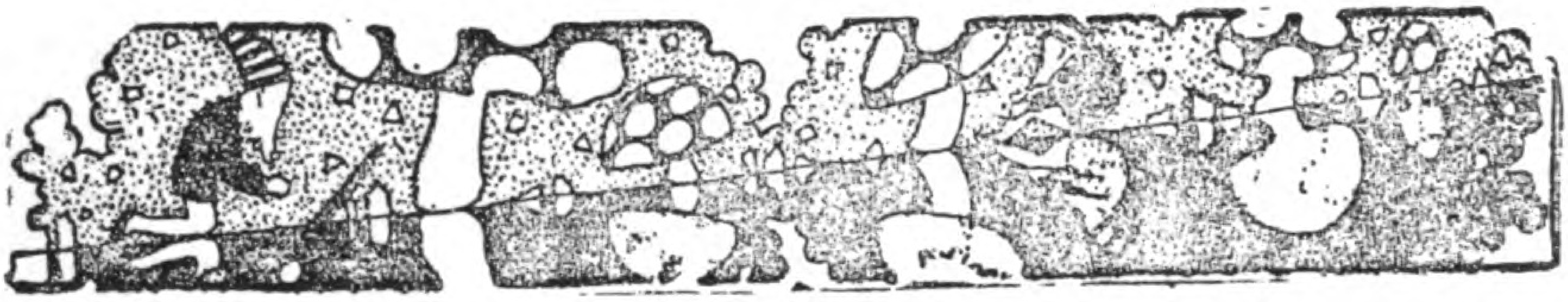
「やはり吾々の住むところは、この洞より外にない。いつそ二人でこの洞の主とならうではないか。」

白鶴道人は、かういふと仙洞を離れようとしなかつた。寶誌は、その企てを喜んで答へた。

「われ〳〵を置いて何人が此地に入り得よう。」

かれらは互ひに九年の後に始めて、おの〳〵庵を結んだ。そしてこの仙洞はかれらの爲めに永い間仙境となつてゐた。

——かういふ挿話でさへも、このやうな古めかしい庵といふ感じに添ふてゐるやうな氣がした。仙人でさへそれである俗人のわれ〳〵がその居を定めようとするのに、骨の折れるのは當り前である。——私はやはり古い家がすきである。新建ちなぞといふものは、感じが粗く、手ざわりが寒い感じがするからである。垣根の破れをつくらふやうな庵がありとするならば、私はそれにさへ古めかしい佗びしいながらも或る興趣をかんじるのである。



ピノチオ（童話）

佐藤春夫

1

むかしむかし或るところに――

「王様？」と諸君は直ぐにさうおつしやるだらう。

ところで、それが大間違ひ。むかしむかし或るところに、ほんのちよつとした丸太の木の片があつただけのことだ。それとても格別何もすばらしいものぢやない。ほんのケチな木の片で、樵夫場から拾ひ出したばかりのものだつた、――諸君が部屋を温めるために火を燃さうと思つてストーブにくべたり、或は竈のなかへほり込んだりするやうな奴だ。

そも〱事の起りは、どういふのだか僕も根つから知らない。が何にしろ、或るすつきりした日のこと、或るお爺さんの樵夫がその木小舎のなかで此奴を見つけ出したのだ。このお爺さんの名前はアントニオと言つたが、鼻のさきがいつでもぴか〱してゐて、それがちようど熟したさくらんぼうそつくりだといふところから、皆はこの樵夫の爺さんのことをさくらんぼうの親方と呼びならしてゐた。

さて、そのさくらんぼうの親方は、この木の片を見つけ出すとすぐに有頂天になつてしまつた。満足至極といふ調子で揉手をしながら、口のなかでこんなように呟いた「これは〱。いい時にいいものが手に入つたわい。どうれ、こいつを一つ椅子の脚にしてくれよう。」

言ひも終らないうちにはや、お爺さんは仕事に取りかかつてゐた。まづ皮を剝いで身を削らうといふので、砥ぎ澄した斧を早速に振り上げてゐたのだ。ところでお爺さんが、あはやその木へ斧を打ち込まうとしたその途端に、その手を宙のところでハタと留めてしまつた。だつて、折も折、ちやうどその折お爺さんの耳にそれは〱ちつぽけな、かぼそい、哀れつぽい聲でかう言つて訴へるのが聞えるぢやないか。――「ひどい目に遇はしちやいやだ！」

さあ、さくらんぼうの親方の驚きかたといつたら！それはまあ諸君も察してやつたがいい。お爺さんはあわてて、きよと〱した眼で部屋ぢゆうを見廻してみた――その小つぽけな聲がいつたい何處から出て來たのか見究めたかつたものだから。が、お爺さんには誰ひとり見あたらない。ベンチの下も覗いてみた。そこにも誰もゐない。いつもは閉め切つてある戸棚のうち、木屑や鉋屑入れの籠のなか、そんなところまで一つ一つ覗き込んでみた。しまひには戸を開けて家の外までも見廻してみた。が、これはまた一たいどうした事だらう、お爺さんには誰ひとり見つけ出すことは出來なかつた。

「なあるほど」と親方は、ふいに笑ひ出しながらかう言つて頭を掻いた。「氣の迷ひさ。つひあんな聲がしたやうな氣がしただけだ。さあさ、仕事だ仕事だ。」

お爺さんは斧をとり上げると、今度は木の片へ小つぴどい一撃を加へた。

「痛い！　傷がついた！」――小さな聲はかう叫んだ、さも痛くつてたまらないといふ風で。

さくらんぼうの親方は今度こそはもう口が利けなかつた。眼玉はおほかた顔から外へとび出してしまふし、口はあんぐり開いたきりで、そこからだらりとだらしなく舌が頤の上へ吐き出されてゐる有様と來ては、口から水の出る噴水の蛇髪妖女の首　よくこんなのがある。

やつと口が利けて來ると親方は氣味の惡さで慄へたり吃つたりしながら、早速また喋り出した、

「それにしても、あの（痛ッ！）と言つたのは、あれやどこから聞えて來たのだ？。いつたいこ

の部屋には生き物なんてゐやしない。赤ん坊ではあるまいしまさかこんな木の片が泣いたり喚いたりしようなんて？　とても私にや本當には出來ない。此奴は竈にくべる生の木で、そこらにざらにある奴で、皆が豆の鍋を煮たりするのと何の變りもない奴だ。してみるとだ？　このなかに誰かが忍込んででもゐるとする？　いいとも、その時はその時のことだ、長居をするだけ手前の得にやならないんだぞ。ぢたばたするな、片付けてやるから。』こんなふうに言ひながらお爺さんは、可哀さうな木の片をば兩手でひつ掴んだかと思ふと、力任せに壁へたたきつけた。

さうして置いて親方は、何か泣言でも聞えはしないかと耳を澄ました。二分ばかり待つた。寂としてゐる。五分待つた。何の事もない。十分。やはり何の事もない。



『なあるほど』と、親方は無理矢理に笑ひを絞り出して頭を掻きながら言つた。『氣の迷ひさ、（痛ッ！）と言つた聲がしたやうな氣がしただけなのだ。さあさ、仕事だ仕事だ。』

さうしてお爺さんは、何しろまだ幾らか恐ろしい氣がしてゐたので元氣をつけて鼻唄をうなり出した。

それと同時に、斧の仕事はもう止しにして、木の上つ面をすべつこく綺麗にしようと思つて鉋を取り上げた。ところで、親方が鉋を一かけ掛けた時のことだが、又しても例の小聲が、けれども今度はくつくつと笑ひを怺へかねてゐる調子で言つた『お止しよ！　お爺さんは僕の體の皮を剝いでゐるんだぜ。』

可哀相に今度は、さくらんぼうの親方は鐵砲が當つたやうに引つくり返つてしまつた。やうやうのことで眼をあけた時、お爺さんは自分が地びたへ尻餅をついてゐることに始めて氣がついた。そ

の顔はこの上もない愕きを表はしてゐた。さうして鼻のさきは――例のふだんはいつも紫いろをしてゐる鼻のさきは、あまりびつくりしたせいで變色して眞青になつてゐた。

2

折からこの時、コッコッと戸口を敲く音か聞えた。

「お這入り。」樵夫の親方は、立上る力さへもなく、さう答へた。

ゲペットといふ元氣のいいお爺さんが、そこへはひつて來た。

「お早う、アントニオ親方」と、ゲペットは言つた「おや、地びたへなんか坐つたりして、親方いつたい何をしてござるのだ？」

「わたしかね、なあに蟻の奴にその蟻のＡＢＣを敎へてやつてゐた最中さ。ところで兄弟、何の御用で見えたのかね。」



「ちよつくらお願があつてね、アントニオ親方。」

「さあさ、何時なりと。どんな御用でも！」樵夫は答へながら、膝つこぶしに力を入れて、やつこらさと立ち上つた。

「實は今朝ほどわたしはちよいとしたことを思ひついたのだがね。」

「ははう。」

「木で可愛いい操人形を拵へて見たくなつたのさ。わたしの言ふのは、それや奇態な操人形なので、ダンスをしたり、歩き廻つたり、飛んだり跳ねたりする奴なのだが、そいつを連れてわたしは少しばかりのパンを稼ぎながら世界中を歩き廻つて來たくなつた。」

「それにしちや、ゲペットさん、私が何のお役に立つのだらうね？」

「人形を拵へるについちや木の片が欲しいので。何でもいい手ごろの木片があれや分けてもらへない



ものかし

アントニオ親方は機嫌よく木の片をとり上げた。それはたつた今しがた當の親方をあんなにびつくりさせたばかりの奴だつた。ところが、親方がそれをゲペットに手渡さうとしかけた時の事だつた。木の片の方ではぴよこんと一跳ね跳ね上つたかと思ふと親方の手から荒々しくすべり出ると、忽ち落つこちてゲペットの向脛へいやといふほど打つつかつた。

「あッ痛た！　贈りものを下さるといふのにこれやまたひどい御叮寧なことぢやないかね！　アントニオ親方、ほんとにわたしや跛になつたかと思つたぜ。」

「いや。全くこれやあ、わたしのせいぢやないのだて。」

「わたしの足をめがけて木をほりつけたのはてつきりお前さんさ。」

「いいや、わたしぢやないのだて。間違ひは何事もこの木がもとなのだ。」

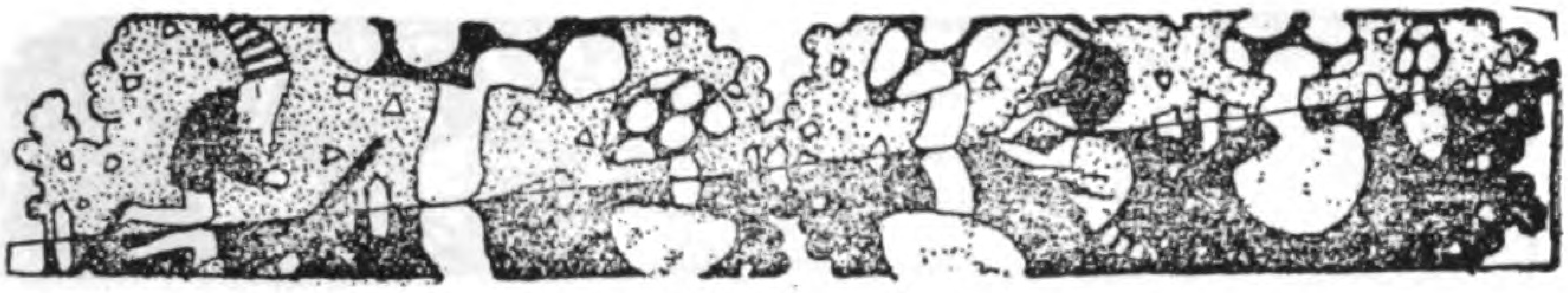
「はてね？」

「全くさ！」

そこでゲペットはその木の片をとり上げた。さてアントニオ親方にお禮を言つてから跛を引き引き自分の家の方へ歸つて行つた。

3

ゲペットの家といふのは土間になつた部屋がたつた一つきりであつた。明りを採り入れる窓の眞上はすぐよその二階の階子段になつてゐる。部屋のなかにある道具はといふと、これはまたもうこれ以上はとても簡略には出來まい――捻れた椅子が一つに、ゴツ／＼の寢臺が一ツ、それに使ひ古しのテーブルが一ツ。さて部屋の一隅には竈があつて、そこには威勢よく薪が燃え立つてゐる。ところでこの火と見えたのは實は畫で、そいつの上には鍋が煮え立つてゐる。が、無論のことやつぱ



りこれも畫なので、でも、鍋のまはりにはモヤ〳〵とした湯氣まで描き添へてあるのだものまるで眞物そつくりなのだ。

部屋に歸つて來るとすぐさま、ゲペットは操人形をこしらへにかかつた。「はてな？ こいつには何といふ名をつけてやったものだらうか？」と、彼はひとり言を言つた。「ピノチオがいい。さうだ、ピノチオ！ ピノチオといふ名が福の神だて。わたしの知つてゐる家で家内中ピノオチといふのがあつた。お父つあんがピノチオで、お母さんがピノオチで、子供までがやつぱりみんなピノチオ、――ピノチオのお孃さんにピノチオの坊ちやん、さう呼ばれてゐたつけ。誰も彼も揃つてピノチオ。さうしてみんながみんな仕合せに暮してゐたつけが、あれや全く運のいい家だつた。」

操人形の名前がきまつたものだから、彼はせつせと仕事に身を入れ始めた。瞬くうちに額が出來て、髮が出來て、それから兩方の眼玉が出來上つた。その眼玉の出來上つた時のことだつた。其奴が暫の間あたりをぐる〳〵と見廻してゐたが、しまひにはぢつと瞳を凝らして自分の顏がまともに見据ゑられてゐた時には、考へてもごらんなさい、ゲペットはまあどんなに驚いた事だつたらう！ ゲペットはその二つの木の眼玉に自分が見詰められてゐることに氣がつくと、その頭にむかつてかう言つて呼びかけた。



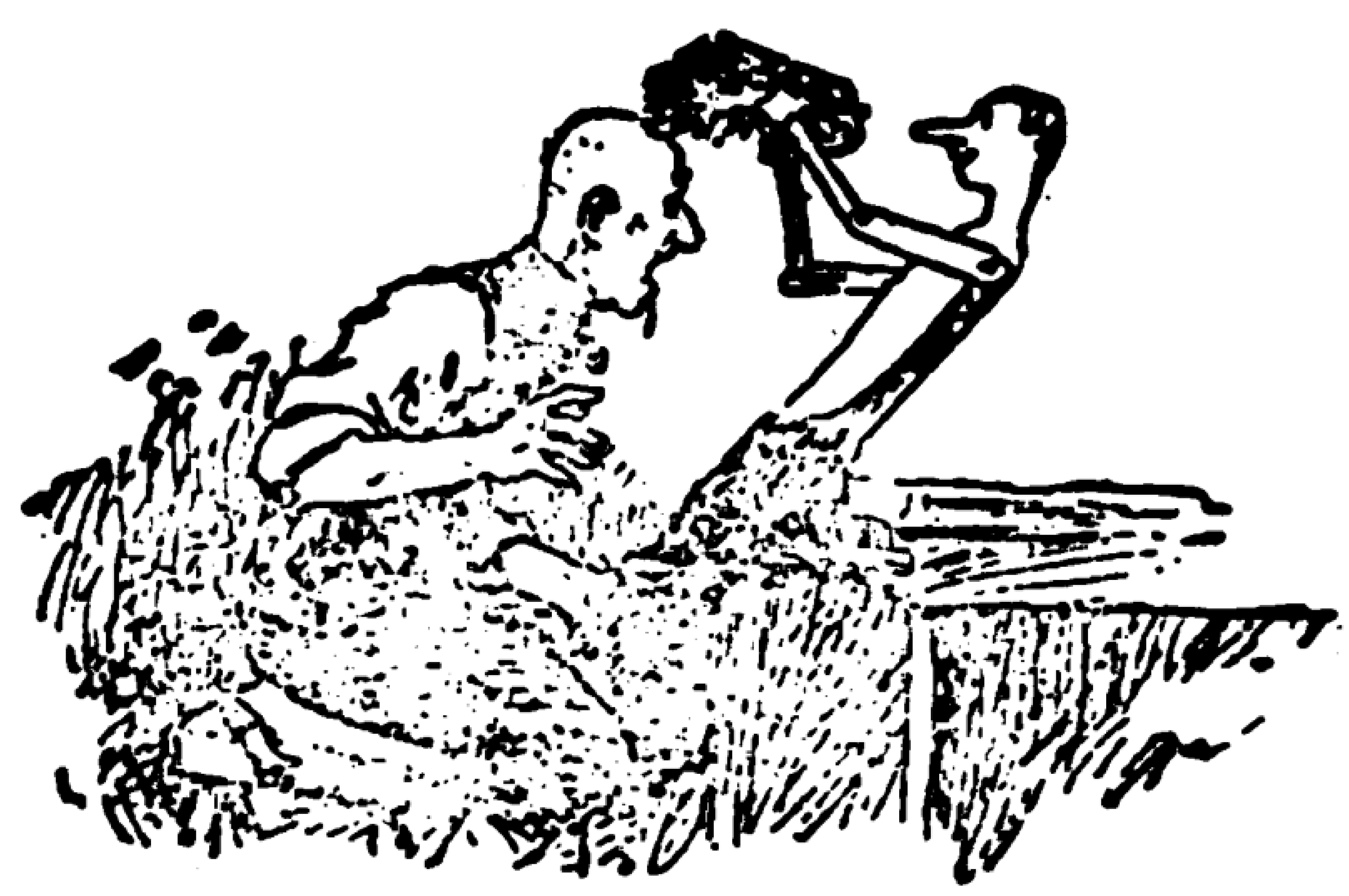
「これ、木の眼玉や！ 何だつてさうさうじろ〳〵ひとの顏を見るのだね？」

が、別に返事もなかつた。

眼を仕上げたから彼は鼻にとりかかつた。すると今度は鼻が伸びはじめたのだ。伸びるわ。伸び

るわ。伸びるわ。それこそ實に大きな、途方もなく偉大な鼻が出來上つてしまつた。全く一時はどこまで伸びることやらとゲペットは一方ならず心配したものだつた。大骨折りをしてそれの伸びるのを止めさせようと懸命になつたが、この無遠慮千萬な鼻の奴と言つたら、チョン切ればチョン切るほど一そう圖に乘つて増長してくる始末だつた。

鼻の次には口をこしらへた。口はまた口で、出來上りかけたかと思ふともう早速、歌つたり笑つたりしだした。「笑ふんぢやない！」とゲペットはヂリ／＼しながら言つた。が、そんなことぐらゐ、まるで壁に向つて話しかけるも同然だつた。「笑ふなと言ふのに、これ！」もう一度彼は今度は聲を荒まして叱りつけた。するとこの先生たちまち澁面をつくつてふくれ返つてしまつた。



ゲペットはしかし、かうした無作法をも見て見ぬふりをして、やはり仕事をつゞけて行つた。口の次には顋、その次には頸それから、肩、胴、腕、手、と、かう順々に拵へて上げて行つた。

やうやうのことで操人形の手が出來上らうとした時のことだ。ゲペットは誰かに鬘の毛を引つぱられたやうな氣がした。そこで彼は素早く身を廻して振り返つてみたが、さて、その時に諸君、ゲペットは一たい何を見たと諸君はお思ひです？——操人形の手にはゲペット自身の黄色い鬘が持上げられててゐた！

「ピノチオや！　早く私の鬘をお返し、さ！」とこのお爺さんは言つた。ピノチオは、けれども、それを返すどころか、その代りに自分の頭の上へ被せてしまつた。すつぽりと冠り込んでピノチオは半分見えなくなつてしまつた。

この聞き分け無さには、さすがのゲペットもひどく悄氣込んだ樣子だつた。――こんなことはこの年までつひぞ有つたことの無いゲペットだのに。ピノチオの方へ眼をくれながらゲペットは言つた。『困つた奴だ！　お前はまだ半分しか出來上つてもゐないくせにもう今から自分のお父さんを馬鹿にしてかかつてゐる。ああ、困つた奴だ。』さう言つて彼は涙を拭いた。

ところでもう仕上るところと言つては脛と足だけになつてゐる。それらは、まだ滿足に出來上りもしないうちからもう氣の毒にもゲペットを蹴るといふ始末。『ああ、これや私が惡かつたのだ』とゲペットはひとり言を云つた『これや第一番に考へて置かなけやならない事だつたのだ。もう今になつちや後の祭だ！』それでもゲペットは操人形を抱き上げて地びたへおろした、歩かせようと思つて。



はじめのうち、ピノチオは兩足がまだ寢呆けてでもゐるやうで動かすことが出來ない有樣であつた。ゲペットは部屋のなかを幾度かぐるぐると手を引いて見せて、どんなふうに足を代りばんこに動かすものかといふ事を敎へた。脚がしつかりして來たとなるとピノチオは步き始め、やがて部屋のなかを馳けまはつた。戸が開いてゐたのを見つけたピノチオは街へ飛び出したかと思つたら、そのまま、とつとと馳けだした。

氣の毒なのはゲペット爺さんで勢一ぱいに追つ馳けはした、が、どうしてどうして捉るものか。ピノチオは兎のやうに跳ねるんだもの。二つの木の足で、ピノチオは固い路の上を、小さな木履が二十足分も馳け廻るやうな騷々しさで馳けて行く。

「取捉へてくれ！　取捉へてくれ！」とゲペット爺さんはわめいた。けれども路を行く人たちは、

木の操人形がまるで兎ほどに走るのを見ると、それを見物しようと思つて立停つたままただもう笑ふ事。笑ふ事。笑ふ事。それやもう皆がこの始末を見てどんなに可笑がつたか、これはとてもお話のしようはない。

おしまひに、それでも運のいい事には、ひとりの軍人が現れた。この軍人は騒ぎをききつけて、てつきり仔馬か何かが飼主のところから逃げ出したものと目星をつけて飛び出して來たのだ。彼は往來の眞眞中へ立ちはだかつて、我こそ脱走者を引捉へてくれようと見榮をきつて待構へた。その樣子を見たピノチオは、直ぐさま覘ひをつけて、その軍人の脚の間をくぐりぬけようとした。が、どつこい、さうは行かない。軍人は姿勢一つ崩しもしないで、操人形の鼻をめがけた。それがまた滑稽を極めた代物で、ちやうど軍人がつまむにはお誂へ向きの寸法に出來上つてゐたのだが、その鼻の尖をやすやすとつまみ上げると、さてゲペットの手へひよいと引渡した。ゲペットは懲しめのためにピノチオの耳を引つぱつてやらなけやと思つた。ところで、引つぱつてやらうにも耳なんてものはありやしない。だつて考へてもごらんなさい。ピノチオをこしらへる時にあまり慌ててゐたものだから、まだ耳までは彫り上げて置かなかつたのだ。

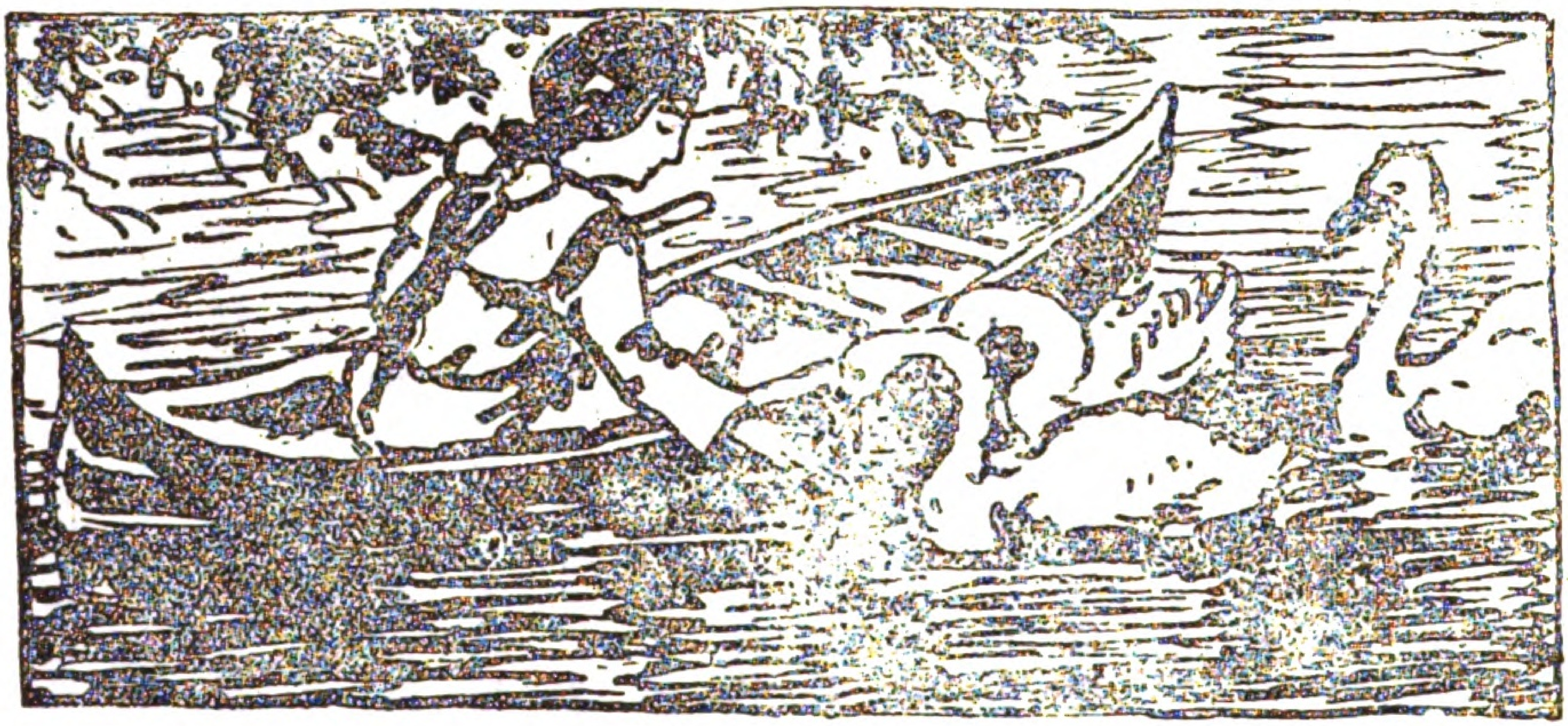


頸根つ子をおさへてピノチオを連れ戻しながら、ゲペットはこんなふうに言ひ渡した、『うちへ歸りさへすれやその分には置かないから』で

嚇かされたものだから、ピノチオは地面の上へつゝんのめつてしまつて、もう歩かないと駄々をこねだした。そのうちにはまた、物見高い連中や閑人が、二人を取巻いて人だかりを始めた。最初に誰かが何かを言つたものだから、他の者がこれにつけ加へた「可愛さうな人形ぢやありませんか」と、その人は言つた「家へ歸りたがらないのも尤もでさ。ゼペットがどんな目に逢はせるか知れたものぢやありませんからね。」するとまた別の人間が意地の悪い口を利く、「ゼペットといふ人は見かけは親切者らしいが、あれで子供にかけちや暴君なのだ。もしやあの人形をあのままあの人の手に任せて置けや、可愛さうに、きつとさんざんに打ち砕いてしまひまさあね」

寄つてたかつてあまりわい〳〵言つたものだから、軍人は、たうとうピノチオは逃がしてやつて、その代りにこの氣の毒なゼペット爺さんの方を牢屋へ引つ立てて行くやうなことになつた。爺さんはあまりのことに最初のうちは申し開きの言葉さへ思ひ浮ばなかつた。ただ滅茶苦茶に泣いた。さうしてやつと監獄へ來た時になつてから泣きぢやくりしながら言つた「不孝な息子だ！　よい人形にしてやりたいと思へばこそ嚴しくもするのだのに！　かへすがへすも最初にもつとよく考へて置けやよかつたのだ。」

さてこれからどうなることか、何しろよほど奇態なお話なのだから、諸君はとても本當にしさうにもない、でも、僕は追ひ追ひとお話するにはするけれど。



洋傘と襟巻

里見弴

神田駿河臺の糶呉服、川口屋の番頭宇川兵助は、やつと三十になつたばかりで、本來ならば、まだ〳〵外廻りを勤めなければならない年頃だつたが、さうだからと云つて、番頭としての資格に缺けるところがあつたわけではない。もともと彼は、甲府在の百姓の子に生れたのだが、父親と云ふのが、小才の利く男で、いつの程にか甲斐絹の賣買を覺え、僅な資本で仕入れては汽車も手荷物で出せるくらゐの荷を背負つて、野良で鍛へ込んだ體力にまかせて、東京の邊鄙を〳〵と拾つて歩き、賣り盡すとすぐ田舍へ歸つて來る、と云ふやうな元始的な商賣から始めて、つひ十年ほど前には、糶呉服ながら、今川小路に一戸を構へて、一萬までの仕入なら、問屋でもなんとか融通してくれるほどの顏になつてゐた。

十三の年齡に、兵助は、肇て東京へのお供が叶つて、その頃にはまだ、木賃に毛の生えたほどの商人宿に寢泊りしてゐた。朝早くから夕方まで、暑さ寒さの嫌ひなく、幅代と云ふものを拂つて借る荷車の後押をさせられて、まづ北へ向つて振り出せば、千駄木、動坂あたりから、巣鴨、大塚窪町、關口臺町、早稲田、西大久保、淀橋、

歸りがけが新宿、四谷、麹町へんは素通りに代官町をぬけ、一ッ橋を渡つて神田へはいる、と云ふやうな大遠足によることもあり、うまく一軒のうちで商賣があつて、二時間三時間つぶれゝば、それだけ小さな輪を描いて戻つて來るのだが、どつちみち十三歳の子供にとつて、それは愉快な生活ではあり得なかつた。小さな荷車一臺くらゐの荷は、大低のうちの玄關に入れられたし、それに父親も、そばで見習はせる氣もあつたので、兵助は、おもてゞポカンと待たされるやうなこともなかつた代り、肉の入つたふくら脛の上に尻を載せて、紺の前掛の耳でもいぢくりながら、親父の背後に大人しく控へてゐなければならなかつた。それ何を出せ、かにを出せ、と云ひつけられて、それがどの包にあるかすぐ解るやうになつて來ると、窮屈もだん／＼薄らぎ、十四十五十六となると、お得意からの注文ものなどは、ひとりで背負つて出かけて、親父の口眞似で、品ものについてなんのかのと喋りたてたりするのが面白くなつて來た。十八の年齢から、東京のお得意は、全部讓つて貰うて、仕入から何から一切獨立でやることになつた。親父は、だん／＼便利がよくなつて、どんな山の手の邊鄙からでも、下町へ買物に出かける人が多くなり、行商の先が見えだして來たので、今度は、大磯、鎌倉、逗子、片瀬と云ふあたりの、小金をつくつた土地ッ子の家庭に目をつけて、自分はそつちへ廻つて行つたのだ。そんな風に、商賣は二つに分れたが、經濟はいつまでも親爺の懷にあつた。つまり彼は、無給にも等しい勞銀で働いてゐる番頭だつた。

二十一歳が來て、丈の低い兵助は、輜重兵にとられ、もう二三ヶ月で勤めあげると云ふ時になつて、向脛を馬に蹴られて、生れもつかない跛になつて了つた。その三年の留守中が、丁度親爺には全盛期だつた。なんでも仕入れてさへ置けばすぐあとから／＼値が上る、と云ふ好景氣の潮先に乘つて、樂に儲けたが、それだけ散じるにも氣安く、年にも恥ぢず妾を置き、千三つ同樣の人間におだてられて、機織工場を買ひ取つたのが間違ひのもとで、見るまに素ッ裸にされた揚句、田舍に歸るとすぐ患ひついて、絲織きの川口屋からの仕送りでどうやら暮してゐたが、一人息子の兵助の大怪我に遅れること三月ほどで息を引きとつた。

同業で、而も十分經驗もあるところから、兵助を引きとることは、川口屋にとつても寧ろ好都合なくらゐだつた。親爺やうに目はしは利かない代り、若いに似合はず至つて律儀で、少しも生意氣なところがないのが、昔者の川口屋には、ことのほか氣に入つた。年をとつて子供はなし、場合によつては養子にして、あとを繼がせてもいゝくらゐの氣だつたが、そんなこともはつきりとはきめないうちに、兵助を引き取つて二年目に、卒中でポックリ逝つて了つた。あとには、商賣のことなどまるつきりわからない、氣のいゝ婆さんが殘つた。さうなつてみると、兵助は、こゝのうちでは番頭と云ふじやう、主人も同然だつた。殊にそれ以來十年近くも經つて、彼よりも舊くからゐた一人の番頭が、別に店をもつて了つた今日では、全く事實上の主人だつた。さうして家事、營業の一切を預つてゐる上に、足が惡いので、纒つた仕入でもする時よりほかには、めつたにおもてに出なかつた。得意先などはなほさら、帳簿の上で知つてゐるだけで、どこへも一度も顔出したことはなかつた。外廻りには、巳之吉、常造の二人、ほかに箱車を挽く中僧、小僧が三人ゐた。

赤坂表町の家作持、齋藤の主人は五十臺、細君は四十いくつ、それに女を頭に男女男女の七人きやうだいだつたが早い子持で、みんなもうそんなに世話の燒けない年頃になつてゐた。晩飯の時などは、隨分賑やかだつたが、然し靜な、と云ふ感じの、至つて上品な家庭だつた。女中は、小間遣、仲働兼子供係り、御飯焚、人數のわりに小ぢんまりと住んでゐたから、その三人で十分に事足りた。

小間遣のお駒は、越後者で、七難かくすと云ふ色白ではあつたが、しッぺい眉で、目尻も下り加減だし、鼻も高くはなく、上唇のさきがちよつとまくれ上つた工合まで、面白いとか、ひようげてゐるとか云ふ意味でなら、――皮肉でなく、可なりのねうちがあるだけに、所謂いゝ女と云ふ言葉からは、だいぶん遠い顔だちだつた。農ではあるが、さして貧しい生れ

ではなかつたし、それに生得からして、無邪氣な、顔つきと同樣に、少しひよけたところなどもあつて、主家の娘たちとでも云ひ合へば、ブン／＼怒つたりするのだけれど、それで誰からも憎がられない性分だつた。年齢は十九だが、そんな風だから、二つぐらゐは若くみえた。

田舍には、祖母さん初め、まだ四十を一つ二つ出たばかりなのに、子供たちが可哀想だからと云つて、鰥ぐらしをしてゐる父親、弟、妹たちもあるのだが、東京は賑やかでいゝ、もうどんなことがあつたつて、あんな山の中へは歸つて行かない、などと口癖のやうに云つてゐた。そのくせ、少くも月に一度は、必ず父親へ手紙を書いてゐたが………。

死んだ川口屋は、この齋藤家の夫婦が、新婚後まだ間のない頃からの御出入だつた。今もつて、夫婦を初め子供たちの着類萬端、いゝものもざつとしたものも、染から仕立から何から何まで、一切川口屋の御用だつた。先代の葬式の時なども、立派な花を供へたりしたほどの贔負だつた。

そんなわけだから、齋藤家と川口屋との間には、月に十何遍、ひどい時には日に何遍と、電話がつながれた。その都度でて口を利き合ふのが、十中の八九まではお駒と兵助だつた。

「あんなものを屆けてよこすから、あたしの註文の仕方が惡いんだつて、奥樣に叱られちやつたわ」

「ですけれどあなた、ニコ／＼絣なんて、とてもお宅あたりのお子供衆に着せて置けるやうな品ぢやァありませんよ。みつともない、あんな………。それより………」

「いゝえ、いけなきやァいけないで返すばかりだから、なんでもこつちでさう云つたものを屆けてくれなきやァ困るわよ。いやだわ、いつだつて叱られるのはあたしなんですもの。」

「それァ申譯ござんせん。ですけれどね、みすく\……………」

「いゝえ、みすく\でもなんでも、こつちからさう云つてあげたものを………」

「へいく\、畏りました、今度からは………」

用事以外の冗口を利き合ふやうになつたのは、そんな機緣からだつた。――電話の度毎に、冗口がふえて行つた。

「もうお晝食すんで？」

「えゝ、もう夙に頂きました。あなたは未だなんですか」

「まだなのよ。だからお腹がペコく\」

「もうぢき二時ですよ」

「あのね、……もしく\、あのね、お酒飲のお客樣が來てゐて、お晝食からお酒が出ちやつたの。あなたお酒のむ？」

「いゝえ、お猪口一杯頂いてもすぐ眞ッ赤になります」

「さう。………今日はね、お晝食の副食物、あたしの大好なもの。だから、なほ早く食べたいの」

「へえ、ぢァ電話を切つて、早くおあがんなすつたらいゝでせう」

「電話を切つたつて、まだこれから御飯が出かゝつてるところだから駄目よ。……なんの副食物だか、當つたらえらいわ」

「さうですね………」

「早くく\」

「待つてくださいよ。かうつと………」

「とても當りやァしないから云ふわ。菠薐草…………」

「はゝァおしたしですか」

「いゝえ、煮たの。あたしお松さんに頼んで、………お松さんて、お臺所をする人よ、お松さんに頼んで、内證で櫻蝦をちつとつまんどいて貰つたの。あなた、櫻蝦つて知つてる？ 知らないでせう？ 今度それを入れて煮て食べてごらんなさいよ。おだしが出て、それアおいしくなるから………。ぢアね。お二階でお手がなつてるから切つてよ。さよなら……」

「へえ、ぢアさようなら……」

さうかと思ふとまた、

「昨日うちの常造がお伺ひしましたらうかしら」

「いゝえ、奥様のお羽織を小僧さんが屆けてよこしたつきり……」

「さうですか……」

そこに、（あいつまた嘘をつきアがつて……）と云つた調子が聞きとれた。

「どうかしたんですか」

「いゝえ、別に……」

「あら、隠すんですか」

「隠すことも何もありやアしませんが、……どうもかう氣候がポカ／＼して來ると、みんないやに腰がういちまつて困ります」

「一體常さんは、口ばかりうまくつて、頼んどいたことを、あとから／＼と忘れちまつて駄目よ」

「どうも申譯ございません」

「あなたは、いつもうちにゐるッきりなの」

「へえ、へゝゝゝへ」

（まア可厭だ、何が可笑しいんだらう）と思つたが、

「あなたの名前、兵助さんつて云ふんですつてね」

「誰に聞きました？」

「誰にも聞かなくたつて分るわよ。随分面白い名前だわね。……ぢア、明日のお午までに間違ひなく……」

と云つた具合で、だん／＼に電話が、餘計なお喋りで永びくやうになつて行つた。或る時、年長の仲働が、それを云つてお駒を揶つたが、蕊からの腹立顔で、

「可厭よ、おみよさん、誰があんなお爺さんなんぞ……」

と、一言のもとに云ひ捨て了つた。店の主人でないことは、いつ誰から訊いたともなく知つてゐただけに、一番々頭だとすると、永年辛抱よく勤めあげた、――どう少くつもつても四十以上の男らしく考へられた。四十以上と云へば、彼女にとつては、どうしても年寄の感じだつた。それはまたその筈で、故郷の父親の年齢だ。それ故にこそ、絶對に安心して、巫山戯たいやうな、甘へたいやうな、困らせてやりたいやうな、いろ／＼な氣持に、すぐ氣樂にはいれたのだが、さうだからと云つて、お駒のやうな人づれのしてゐない娘にとつては、それがそのまゝ「戀」でなかつたとは、誰にも云ふわけにはゆかないのだ。現在の父親でさへも、年頃の娘と二人きりの家庭などでは、戀ならぬ戀の空氣が、快い曖昧や甘味をもつて、微に漂つてゐることがあるではないか……。

その點で、然し、兵助はだいぶん違つた氣持にゐた。童貞と云ふわけでもないが、辛抱人で、その年になるまで一度も放蕩の味を知らずに來たおかげに、人生に對して、綺麗な、若々しい理想をもつてゐる、やがてそれが彼に花咲いて來ることが信じられた。いゝお嫁さんを貰つて、平和な家庭をつくる、と云ふのも、勿論そのうちの重大な一つだつた。電話の聲だけで、若い、無邪氣な、そして器量よしの娘を眼前に思ひ描き、いつとはなしにそれが間違のない事實らしくなつて

行つたのも、さう云ふ兵助としては至極自然なことだつた。そのうへ、いつぞや夜更ての湯歸りに、むッつり者の小僧に訊いたところに依れば、年頃なり、性分なり、悉く想像どほりのやうに思はれた。それより以前に、電話に御飯焚か誰かゞ出た時、「ちよつと待つてください、今お駒さんと變りますから……」と云つたことがあるので知つてゐたから、あとは容貌だけが、果して想像のやうかどうかの問題だつた。けれども、それを重大な問題とすることは、なんとなく恥しかつた。我ながら可厭なことだつた。そのくせ氣にはなるだけに、いかに相手がむッつりやの子供でも、それに就いては何も訊かずに了つた。

一番しめてやらうくらゐの氣でかゝつたのが、いつか本氣で惚れ込んだりする道樂者とは大違ひながら、然し階梯は同じことで、「いゝお嫁さん」の資格のあるなしを第一の問題にしてゐた兵助も、だん／＼に、そんな思案を離れての戀になつて行つた。だが、五分か十分電話で口を聞き合ふと云ふだけのことが、無上の樂みとなり、夜寢床へはひつてからも、行末のことをいろ／＼考へるにつけ、いつそ胸が苦しいほどだつた。

氣持の上に、さう云ふ相違はあつたけれど、お互に見も知らぬ仲ながら、用件以外のお喋りを樂み、一度ごとに隔がとれて行くのを喜んでゐた點に變りはなかつた。すべてが無邪氣と云ふ一語に覆はれて、兵助は、父親扱ひにされてゐる自分だらうとは、夢にも思ひよらなかつた。一番々頭の兵助、――さう云ふ男の、吃々とした、いかにも律儀らしい言葉から、やつと二十になつたばかりの、眞面目に自分を戀してゐる若者などが、お駒の胸に映つて來よう筈もないのだつた。

さう云ふ關係のまゝ、生れて初て兵助が、お駒の聲を聞いてから一年半ほどが過ぎて、初夏が來た。兵助は、永いこと躊躇し、思ひ迷つた揚句に、同郷の男が始めた洋傘屋に、祝がてら出かけて行つて、若い娘に似つかはしいやうな、少しばかりは縫模樣もある水淺葱の日傘を貰つて、小包にして送つて貰ふやうに賴んだ。何よりも彼は、だしぬけにそれがお駒のもとに屆くことを惧れた。理由のない贈物から、へんな誤解が生じて、これまでの無邪氣が失はれて了つたやうなこ

とがあつてはならない。さうかと云つて、それを買つて送り出して了はないうちは、かう〳〵云ふものがおげたいから、とか、氣持よく受けてくれるだらうか、とか、そんな言葉を使はなければならなくなりさうで、どうもそれでは可厭だつた。が、さてその洋傘屋を出ると、すぐにもそれが屆いて、「なによ、こんなもの！　へんなことをする兵助さんねえ、あたし可厭だわ、返すわ」などゝ、豐な頬を眞ッ赤にして、プン〳〵怒つてゐるお駒の容子が目に見えて來て、兵助は、ゆつくり歩いてもゐられないほどに慌て了つた。ぴッしより汗をかいて、不自由な足で、街角の自動電話へ駈けつけた。

「あゝもし〳〵、あなた齋藤さん……」

　せい〳〵云ふ息がまだをさまらないうちに、もうお駒が出て來て了つた。

「兵助さんでせう？」

「へえ、私です。あなたお駒さんですね」

「さうよ。こないだの上布の洗張どうして？」

「もう二三日どうぞ……」

「どうしたの？　大へん息が苦しさうね」

「いゝえ、別に……。あの、あなた……」

「もし〳〵、もし〳〵、どうしたの？」

「あんまりだしぬけですけれど……」

「どうしたのよ。何がだしぬけなのよ」

「あなたにね、洋傘を差上げたいんですが……」

「かうもり？」

「えゝ、洋傘(かうもり)……日傘(パラソル)……」
「あゝ、洋傘(かうもり)? どうしてなの?」
「いゝえ、どうしてつてこともないんですが、始終お世話になりますし……」
「あらいやだ! なんにもお世話なんぞしやアしないわ」
「兎に角まア、今もう小包で送つちまつたんですから、屆きましたら、どうかひとつ……お使ひなすつてくださいましな」
「あら、可訝(をか)しいわね。一體それアどう云ふわけなの」
「わけもなにもありやアしませんが、ただ、私から差上げたいんです。どうかお願ひですから、默つてお受になすつてくださいッ。ほんのお恥しいやうな品ですけれど……」
「だつて、へんねえ……」
「いゝえ、何もその、別に……、その、なんです、ほんの御中元のおしるしです」
「さう、でも、なんだか惡いやうな氣がするわ」
「いゝえ、そんな御心配なさるやうな品ぢやありません、ごくざつとした、普段使ひですから、兎に角屆きましたら、なんにも仰有らずに受けとつてくださいな」
「さう、ぢアあたし、頂戴しますわ」
兵助は、ほつと胸を撫でおろした。
「どうも有難うございます……」
「あら、そつちでお禮を云ふ人があるもんですか。……でも、なんだか、ほんとにお氣の毒だわね」
「いえもうほんの、安ものなんですが、お使ひにでもいらつしやる時にさしてくだされば、ほんとに……」

「さう、いま小包で出したの？　ぢアあたし樂みにして待つてるわ」

「どうも有難うございます。ぢア、自働電話ですから、これで御免ください。さようなら」

「それぢア、屆いて來たら、あたしの方から電話をかけるわ」

「どうぞ願ひます。さようなら」

「さう、ぢアさようなら、どうも有難う……」

「御免くださいまし」

安心して、兵助は、一時にぐツたりと勞れて了つた。電池箱の上に出して置いた發口をしまはうとすると、腹から、熱いいきれが、むうツと顏につきあげて來た……。

それ以來、電話の對話（はなし）は、益々永びき、親しさを增して行つたけれど、いつまで經つても、色氣を含んで來るやうなことはなかつた。一方は、相變らず父親か叔父さんにでも對するやうな氣だつたし、一方はまた、無邪氣な小鳥を飛び立たせまいとするやうな心使ひもあつて、戀心は、飽までも胸の奧底ふかく秘められてゐた。さうして秋がすぎ、冬が來て、もう一度年が重つた。

東京にこれと云つて知合のないお駒には、ついぞ今までにないことで、正月の藪入が樂しみに待たれた。もうその時分の親しさでは、日や時刻をうち合せて、一緒に活動寫眞でも見に行かうと云ふ相談くらゐは、少しも突飛でもなければ、隨（したが）つてこだはつた感情も起させはしなかつた。毎日でも顏を合せてゐる人に遇ひに行くほどの氣樂さだつた。

それは美しく晴れた暖かい日だつた。一緒に淺草へでも行かうと云ふのだつたけれども、電車の道筋がよく解らないお駒のために、表町の邸からほど近い辨慶橋うちの淸水谷公園まで、兵助の方から出向いて、それからつれ立つて出かける約束になつてゐた。狹い公園だから、どこにゐたつてもすぐに知れる、と云ふ話だつたけれど、正面の石橋を渡つてはひつて行くと、右手の松林のなかで、午近い日射を洩れ浴びながら、十四五を頭に子供たちが大勢遊んでゐて、その周りに、子守ッ娘や、近所の人の散歩らしい夫婦づれなどがぶらり〳〵してゐるばかりで、裏山の方などは第一見通しもつかず、感じで云へばしいんかんとしてゐる。人氣なげだつたから、一應あたりを見廻すと、すぐその子供たちの遊んでゐる方へ近づいて行つた。第一番にむかふから來たのは、色の生ッ白い額に深く鳥打帽を被り、眞新しい二重廻しを着た若者で、ぢろぢろこつちを見ながら、跛者のくせに馬鹿に急ぎ足に摺れ違つて行つた。子供たちの周りでも、六七人の大人は見かけたが、一人も故鄕の父親のやうな感じのする男はゐなかつた。みんな若すぎたり年とりすぎたりしてゐた。仕方なしに、裏山の方へあがつて行つてみた。年頃は恰度いゝのだが、みるから人の惡さうな、俥宿の爺とでも云つた身なりの男に行き逢つたばかりで、大久保の碑を一周りして、道はまたもとの廣場に戻つて來た。すると、先刻の跛者がまたむかふからやつて來た。今度もいやにぢろ〳〵と顏を窺き込むので、つんとすまして、そつぽを向いて了つた。

（まだ來てゐないんだ）さう思ふよりほかはなかつたので、石橋に近いベンチに腰を下ろして、往來からはひつて來る人に注意してゐたが、それは、三十分に一人もあるかなしだつた。根氣よく二時間ばかり、そこらぶら〳〵してみたり、くたぶれるとまた腰かけたりして待つたけれど、どうしてもそれらしい人は見えなかつた。その二時間に逢つた限りの人々をひとり〳〵考へだしてみながら、これを最後にと思つて、もう一度裏山を廻つて下りて來ると、先刻は氣がつかなかつた木戸から、池の緣がむかふへ廻れるやうになつてゐた。そこに二三軒のうちが並んでゐたので、もしやそんなところに休

んでゐるのではないかと、注意しながら通つたが、どこにも人の氣勢すらなく、藤棚の下の掛茶屋にも、客らしい姿は見えなかつた。仕方なく、諦めて歸ることにして、池を一周して、表の石橋の方へ來ると、先刻からあつちこつちでもう六七遍も顔を合せた例の跛者の若者が、今まで自分が腰かけてゐたベンチの上に、さも勞れたやうに胡坐をかいて、膝の上に新聞を擴げて讀んでゐた。いつまでうろ〳〵してゐるんだらう、と思はれさうできまりが惡くなつて、小砂利の上に足音を忍ばせて通りすぎようとすると、耳捷くもこつちを振り向いたが、(なんだ、また先刻のやつか)とでも云ふやうな、興もなげな容子で、すぐ新聞に目を落して了つた。

お駒はそのまゝ眞直に主家に歸つて來た。

兵助はそれから三十分ばかり待つてみてから、やつぱり女なんて當にならないもんだ、と可なり不愉快になりながら、新聞を疊んで、ベンチから立ちあがつた。然しまア、あんな可愛い、無邪氣な娘が、俺のやうな片輪にちよつとでも厚意をもつたのからして不思議で、いざとなれば、こんなふうにすツぽかされるくらゐが、分相應なところかも知れない。――そんな風に諦めやうとしたが、可愛い顔をした、無邪氣な小娘と思ひ込んでゐたゞけに、それに騙された口惜しさ、腹立たしさは、考へれば考へるほど、ぢり〳〵と募つて行くばかりたつた。かうなれば、なんだか知らないが、大事さうに風呂敷包を抱へて、可笑しな、瓢輕な面つきをしてゐるくせに、いやにつんとすまし込んだゐた娘でもいゝ。どうやらあれも、人を待つて、待ちくたびれて歸つて了つたやうだが、あゝ云ふのゝ方が却つて情愛は深いかも知れない。――仕舞には、そんなことまで考へて、ひとりつまらなく、赤阪見附の停留場の方へぶら〳〵引き返して行つた。

恰度その時分に、齋藤家の女中部屋では、洋傘の返禮のつもりで、僅かばかりづつ貯金して置いてやつと買ひとゝのへたまがひ駱駝の襟卷を、風呂敷から取り出すが早いか、店の包紙をビリ〳〵に引裂き、なかみをもみくちやにして、疊の

上に叩きつけるなり、お駒がわッと泣きだすのを、仲働のおみよが、そばで、呆氣にとられて眺めてゐた。あまりの聲に、やがてそこには奥さんがはひつて來た。そして、一週間の後には、二人の美しい氣持が、それ〴〵相方へ傳へられ、淸水谷公園でのいき違ひの一件始終も解つた。

洋傘は期せずして結納の手つけのやうな態になつた。まがひ駱駝の襟巻は、それの返しやうに、改めて贈られた。兵助は、打ちひしがれるやうな幻滅に會ふことなしに、やがて彼の理想の一部を實現することが出來た。——二人はその年の三月に芽出度結婚して、川口屋に、夫婦養子の籍を入れた。

校正室から

◆雪のなかから氣高い香りがします、寒梅はつひに一輪ゐほほ笑みを見せました。雪を蹴たてて活動なさる女權組の諸多いことを祈つています。

◆しかし、英國などは婦人參政が獲られてからもやつぱし婦人議員は曉の星のやうです。そしてウエスト・ミンスターの空氣は依然としてヂスレリーやグラッドストン時代と異るところはありません。さうしたらパーリヤメンタリズムは親愛なる我が女性に祝福を捧ぐることが出來ませうか

◆樞密院と内閣の低氣壓は皆樣御存じの通り、面白い角力になりました、栃木、源氏の角力より趣味多いものになりました、皆樣は何ゆゑにかく衝突するかを政界の人に訊して下さい、そして新聞で研究して下さい、そして自分で判斷して下さい。それからヨッフェ氏の來朝が何故に物議を招きつつあるかをも吟味して見て下さい。又、羅馬使節問題で佛教徒が何故に反對するかをも研究して下さい。

◆それから、東京のお湯屋と新聞聯が何故にもめるかをも研究なさい、そして四五歳以下のものがどうしてお芝居に這入れぬか、何故に觀劇税を徴收さるるかをも研究なさいこんな社會問題は直接わたし共に關係する所が大でありますから。

◆それから帝國議會の經常費と臨時費とを合算してそれを七千萬で割つて御覧なさい、それがあなた一人の人頭税です、赤坊一人の人頭税です、あなた方はそれが幾人前納税してゐますか。

◆こんな所から總てを出發なさい、そして總てを趣味で解剖なさい、美術に志す人々もまづ自家のものに出發の一歩を印して下さい、家庭電化も家庭經濟も先づ自分の臺所を見てからにして下さい。

◆下駄屋が繁昌したら將來の日本はどうなりませう、そして日本服、日本食、漢字の將來はどうなりませう、日本の文化は依然として漢字の匂ひから脱却することは出來ますまいか、から云ふことも思索の一部に加へて下さい。そして今後五六年の社會の進歩は到底豫測はつきませぬ、この時皆さんはいかにして兒女の教育をなさいます、母は子におくれ、子は孫に後はるる偉大な速力の文化は修養せない方は總てを追ひ去りにします、そして今後の文化は必ずモット綿密な組織と偉大なる力を以つて追まつ來ます、精神的にも物質的にも之に堪へ得る素養を積むは尋常の工夫では追つきません、皆さんがここに着目されることを望みます。

女性改造定價表

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵稅共
十二册	六圓	郵稅共

註文の注意

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料　一等 百圓　二等 七拾圓

◉本社廣告取次所　日本電報通信社　博報堂　弘盛舍

大正十二年二月十五日印刷納本
大正十二年三月一日發行
（三月號金五十錢）

編輯兼發行者　印刷者　東京市芝區伊皿子町四十番地　平山貫一郎
印刷所　株式會社 博文館印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八番地

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
電話芝（長）一六三八　二八五四　四三〇三
振替東京　八四〇二

島田清次郎著

戯曲 革命前後

定價壹圓六十錢
送料十七錢
四六判上製

豪宕の才筆に鳴る島田氏の傑作「大化維新」の裏に潜める鎌足と遠智姫との殉情的戀愛を題材とし、革命の裡に此種の情劇が芽生ゆる徑路を稠やかに織り出して若き人々の心胸に一つの炬火を投じた。

第八版

小說 勝利を前にして

島田清次郎著（十二版）

定價貳圓四十錢
送料十九錢

東京芝愛宕下町
改造社
振替東京八四二〇

VIRINA REKONSTRUO
(MONATA REVUO PLEJ ALTAKLASA POR VIRINOJ EN JAPANUJO)
UNU EKZ. 50 SEN; JARABONO 6 JEN.
ELDONEJO: KAIZO-SHA, TOKIO, SHIBA-KU, ATAGOSHITA-MACI 1.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可 大正十二年三月一日發行（每月一日一回）大正十二年二月十五日印刷納本 第貳卷第三號

三月號 定價五拾錢（送料二錢）

復刻版　女性改造（じょせいかいぞう）〔戦前編〕
第1回配本（第1巻〜第3巻）

2007年6月25日　発行

揃定価（本体60、000円＋税）

発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1−2−12
☎03（3812）4433
印刷所　三　進　社
製本所　青木製本

ISBN978-4-8350-6071-2（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6068-2）